

2013年度（3月課程修了）

桃山学院大学大学院文学研究科博士論文

論 題	台湾のアジア花嫁——高雄市における生活適応を 中心として
英文タイトル	Asian Brides in Taiwan: The Life Adjustment Process in Kaohsiung.
執 筆 者	09D4101
	徐 幼恩
指 導 教 員	小池 誠
提 出 日	2014年1月10日

目次

序論

第1節	研究の目的と方法	1
第2節	日本のアジア花嫁	3
第3節	台湾におけるアジア花嫁の先行研究	7

第1章 台湾におけるアジア花嫁

第1節	アジア花嫁の歴史	15
第2節	アジア花嫁の社会・経済的背景	25
第3節	高雄市のアジア花嫁	40

第2章 政府の政策と公益団体の支援

第1節	中央政府のアジア花嫁政策	51
第2節	高雄市における政策の実践と新移民センター	63
第3節	高雄市の生活適応クラス	68
第4節	公益団体の支援	75

第3章 アジア花嫁のライフヒストリー

第1節	高雄市の7人のアジア花嫁	81
第2節	結婚が継続しているケース	86
第3節	結婚が破綻したケース	120
第4節	まとめ	149

第4章 アジア花嫁のネットワーク

第1節	アジア花嫁の情報交換の場	154
第2節	ベトナム籍花嫁の社会活動	163
第3節	ベトナム籍花嫁を描いた演劇	175

結論	181
----	-----

第1節	アジア花嫁の生存戦略	183
第2節	アジア花嫁と台湾社会との共生	193
第3節	総括と今後の研究課題	202

参考文献	204
------	-----

付録	216
----	-----

序論

第1節 研究の目的と方法

台湾は1987年から40年も続いた戒厳令の解除により、経済自由化、政治民主化、社会多元化などの重大な変化を遂げ、その後、さらに深い影響を与えたのはグローバル化である。まず1980年代末から外国人労働者¹の雇用が始まり、続いて1990年代以来「移民配偶者」² (Immigrant Spouses)が増加した[Tsay 2004: 173]。グローバル化の進行とともに、台湾では女性の社会進出・高学歴化・晩婚化・非婚化によって、再生産領域を担う女性が不足しつつある。その結果、社会・経済的地位が低い男性は深刻な結婚難に陥って、国境を越えて配偶者を求めざるを得なくなった。他方、台湾と経済格差が著しい東南アジア地域から来た多くの女性は生存戦略や家族戦略の一つとして国際結婚を選択したとされている。こうした国際結婚の増加の速度と割合に関して、台湾はアジアで最も「グローバル化」が進んだ社会といえる[落合 2007: 98]。

台湾人男性と結婚した東南アジア出身の女性は「外籍新娘」(外国籍花嫁)と呼ばれ、中国人女性は「大陸新娘」(大陸花嫁)と呼ばれている。東南アジア出身の花嫁であれ、中国出身の花嫁であれ、すべてアジア花嫁の範疇に含まれるから、本論文では「アジア花嫁」という用語を選択した。国際結婚が台湾の婚姻総数に占める割合は上昇し続け、ピーク時の2003年には31.86%もあり、新婚カップルの3組に1組が国際結婚だった。そのうちの9割以上が台湾人男性とアジア花嫁との組み合わせである。さらに、台湾人男性とアジア花嫁との通婚によって生まれる子供、いわゆる「新台湾の子」も年々増加してきて、ピーク時の2003年には、台湾の全出生数のうち、7.5人に一人が「新台湾の子」という状況であった。こうした「アジア花嫁現象」と共に、言葉の壁、文化摩擦、生活不適應、「新台湾の子」の教育問題、その家族をめぐる問題など、さまざまな社会問題が浮上してきた。とくに、東南アジア出身の女性は言葉の壁、生活習慣・文化の相違によって、台湾生活に馴染めない事例が数多い。言語・文化の相違に起因する社会適応上の課題を解決するために、

¹台湾は1980年代後半から労働集約的産業(製造業、建設業等)を中心に労働力不足が深刻化になった。1989年10月から、重大公共事業を進めるために外国人労働者の受けを開始した。

²台湾男性と結婚した東南アジア出身の女性は外国籍花嫁と呼ばれ、差別的な意味合いがある。「外国籍花嫁」という差別的呼称と区別するために、Tsayは「移民配偶者」という中立的な呼称を選択した。「移民配偶者」は男性でも女性でもある[Tsay 2004: 173]。

政府は東南アジア出身の花嫁を主な対象として、多くの施策を考案した[Tsay 2004、李書華 2006、金戸 2008、ウシンイン 2010]。そのため、本論文はおもに東南アジア出身の女性をめぐる諸問題を取り上げる。

すでに台湾の 5 番目のエスニック・グループ³として定着したアジア花嫁と台湾社会の共生は、近年の台湾社会では最も問われている課題である。アジア花嫁に関する諸問題について、2000 年代前半はアジア花嫁本人の生活適応、識字教育、台湾政府の移民政策、アジア花嫁に対する差別問題などがよく取りあげられていた。2000 年代後半以降はアジア花嫁本人だけではなく、「新台湾の子」も含めて、研究の対象にされ、「新台湾の子」の教育問題、アイデンティティ、学校生活の適応問題などの研究が盛んになった。このようなさまざまな問題に細分化されすぎて、問題の本質が見えにくくなってきた。

アジア花嫁と台湾社会との共生の進む道を考えるためには、アジア花嫁の生活適応全般の現状を避けるわけにはいかない。個人、家族、社会などの面において、アジア花嫁の適応の現状を詳しく調べることによって、彼女らが台湾社会で実際に直面している問題を明らかにすることができる。そして、ホスト社会において周縁化されたアジア花嫁がいかなる生存戦略を使い、さまざまな困難を乗り越えてきたかを議論し、分析する。本論文の主な目的は生存戦略の分析により、アジア花嫁は単なる受身的な被害者ではなく、不利な位置を脱出しようと懸命に頑張っている主体性を持った女性達であると示すことである。

アジア花嫁が直面した問題、彼女らの生存戦略、ホスト社会への適応の過程を考察した結果に基づいて、台湾政府と台湾社会、自治体だけではなく、アジア花嫁の台湾人家族およびアジア花嫁本人に対して、それぞれの問題の解決に向けて提言したいと考えている。台湾社会全体がアジア花嫁を受容できる多文化社会に向かって変わっていくためには、以上のような考察が必要である。

本論文の研究方法は文献調査、聞き取り調査（とくにライフヒストリー）、参与観察⁴とアンケート調査を併用した。アジア花嫁に関する先行研究、歴史、及び台湾政府の政策問

³台湾の 4 大エスニック・グループ（四大族群）とは、閩南人（17 世紀頃、福建南部から台湾に移住した漢民族）と、客家人（閩南人よりやや遅く、広東周辺から移住した漢民族）、先住民（マレー・ポリネシア系の先住民族）、外省人（1949 年蒋介石政権とともに台湾に移住した中国各省の人々）である。外省人に対して、日本統治時代にすでに台湾にいた閩南人と客家人、先住民は本省人と呼ばれる。近年、アジア花嫁と東南アジア諸国から来た外国人労働者は「新移民」や「新住民」と呼ばれて、5 番目のエスニック・グループになった。

⁴調査者自身が調査対象集団の活動に何らかの形で参加し、その活動を観察し、記録する[豊田 1998 : 12]。

題と公益団体の支援などに関して、おもに文献調査で資料の収集・分析をした。聞き取り調査と参与観察による研究が本論文の中心で、筆者が2007年から2012年まで、6年間に渡り台湾の高雄市三民区在住の7人のアジア花嫁を研究対象にし、彼女らの台湾生活の実態の解明に努めた。7人のアジア花嫁のうち、言葉・文化の壁などの大きな困難を抱えている東南アジア出身の6人の女性が本論文の中心である。東南アジア出身の女性との比較のために、中国人女性1人を加えた。そして、より深く生活適応の実態を明らかにするために、インフォーマントはアジア花嫁本人に限らず、彼女らの夫、子供、同僚、知り合い、アジア花嫁の支援をするボランティアらも含めて、聞き取り調査を行った。筆者はインフォーマントとの長い年月の付き合いで信頼関係を築いて、詳細な情報を得て、彼女らのライフヒストリーを作成できるようになった。また、台湾政府が主導している生活適応クラスの現場を訪ねて、関係スタッフと講師らに詳しく話を聞き、アジア花嫁の家庭生活の実態にアプローチした。アジア花嫁が直面した諸問題をより解明するために、質的調査であるアジア花嫁のライフヒストリーだけでなく、量的調査も併用し、高雄市在住のベトナム籍花嫁45人の台湾生活調査アンケートを実施した。しかし、本論文はライフヒストリーの分析を重視して研究を進めたため、本論文ではこのアンケート調査の結果を十分に生かしていない。

第2節 日本のアジア花嫁

アジアで初めて「外国人花嫁」の受入国となったのは日本である。高度経済成長を遂げて先進国の仲間に入った日本では、アジア諸国との経済格差のもとでアジア花嫁現象が出現した。日本のアジア花嫁現象が始まる以前に、結婚業者の斡旋によって短期間で成婚させる国際結婚は、1970年代にすでにオーストラリアや西ドイツ、アメリカなどで始まっていた。アジア諸国の女性を先進国の男性に紹介する国際結婚斡旋のシステムが存在し、MOB（メイル・オーダー・ブライド）と呼ばれた [Mila Glodava and Richard Onizuka 1994]。Del Rosario は欧米人の観点から欧米に存在した MOB と日本の行政主導した国際結婚を比較し、前者を評価し、後者を批判した。MOB の場合では、会員たちは半年から2年までの文通時期を経て、男性は女性の出身国、たとえばフィリピンに行って結婚した。その後、女性は外国人花嫁の身分として、男性とともに帰国した。日本の行政主導した国際結婚の

場合では、男性は集団で女性の出身国に見合いに行き、選択権を持ち、一方、女性は展示品のように相対的に選択権を持っていない[Del Rosario1994: 129-147]。しかも、短期間で結婚相手を決めることが特徴である。

Constable によると、MOB という国際結婚における出会いと交際は一般の結婚と違い、「文通結婚」(correspondence marriage) と呼ぶべきである。「文通結婚」におけるアメリカ男性は離婚経験があり、アメリカ女性に対してフェミニズムを擁護しすぎだと批判した。彼らはアジア女性に惹かれて、伝統的な家庭観の女性を求めている[Constable 2005b: 166-186]。アメリカに移住したベトナム人も同様に、欧米の女性は全く儒教思想の婦徳がないと思い、ベトナムに戻り、夫の話を聞く妻を求める。ただし、皮肉なことに、アメリカに移住したベトナム人男性と結婚したベトナム人女性はジェンダー意識が高い女性である。ベトナムの「結婚市場」において、彼女ら高学歴によって、結婚難に直面した[Hung 2005: 145-165]。日本の国際結婚は欧米の MOB の形式とは違ったが、より豊かな生活や文化を求めるアジア諸国の女性の結婚願望は同じであるし、日本人男性の結婚難も深刻であった。とはいえ 1960 年代までは、日本はアジア花嫁の送り出し国の一つであった。第二次世界大戦後、GHQ に占領されている日本では、アメリカやオーストラリアなどの進駐軍兵士と結婚した日本人女性が「戦争花嫁」と呼ばれた[安富・スタウト 2005]。

1980 年代以降、経済大国となった日本では、アジア人女性を日本人男性の妻として迎える組み合わせが圧倒的多数になった。日本は高度成長期から農村地域の男性の結婚難が問題となっていった。1985 年、山形県西村山郡朝日町の行政主導による国際結婚をきっかけとして、全国農山村などの過疎地はこぞって、アジア花嫁を求めるようになった。過疎の町の結婚難や嫁不足は単なる個人の農家の跡継ぎの問題ではなく、町の生存に関わる死活問題である[宿谷 1988、日暮 1989]。当時のフィリピン女性との国際結婚を推進した元朝日町企画課企画係長菅井和広は次のように語った。朝日町や大蔵村の自治体主導の国際結婚がマスコミで報道されると、全国に同様の課題を持った自治体が、連日視察に訪れるようになった。連動するように、異端とされていた国際結婚が次第に容認され始め、民間経営の結婚相談所で方針転換をはかったところも多数あり、新設業者が増え始め過疎町村に住む独身男性を回り始めた[菅井 2006: 61]。80 年代の日本における農村の結婚難がいかに切迫で深刻な状態だったか想像することができる。

90 年代以降日本人男性の結婚難は農村部だけではなく、都市部にも広がり、アジア花嫁

は増え続ける一方である。しかも、人口規模の原因で、都市部のアジア花嫁の人数は農村部をはるかに上回っている。厚生労働省の2000年人口動態統計の「都道府県別の国際結婚件数」によると、東京、大阪、京都をはじめとしての11都府県からなる三大都市圏における国際結婚は全国の3分の2に相当する67.4%も占めおり、さらに、首都圏だけで全国の半分に近い43.68%も占めている〔石川 2007 : 134〕。首都圏において国際結婚が集中した背景には、上で述べた日本とアジア諸国の経済格差以外に、結婚可能人口の著しい男女のアンバランスという性比不均衡と「物理的・社会的接近」があると思われる〔竹下 2000 : 119-26、石川 2007 : 134〕。「物理的・社会的接近」という要因は、具体的には、日本人が商用・留学・その他の目的で海外に赴き、現地で外国人と結ばれ、一緒に日本に帰国して生活するケースや、留学や仕事のために来日した外国人が日本人と結婚し、そのまま日本で居住するケースなど、将来の配偶者と接近する機会が増大していることを指している〔竹下 2000 : 125〕。また、Ishii はフィリピン女性と日本人男性との国際結婚の結婚経緯に基づき、「出会い型」と「仲介型」に分類した。「出会い型」とは1980年代前半以降、増加したフィリピン人エンターテイナーたちと日本人男性が「オミセ」（遊興飲食店）をはじめとする場所で出会い、恋愛し、結婚に至るケースである。「仲介型」とは上記した地方自治体の仲介による国際結婚のケースである〔Ishii 1996〕。

日本における国際結婚を扱う研究では、日本人女性と外国人男性の国際結婚、欧米系外国人女性と日本人男性の国際結婚、アジア系外国人女性と日本人男性の国際結婚という組み合わせがこれまで研究されてきた。本論文の研究と類似性を持っているのは、アジア系外国人女性と日本人男性の国際結婚である。これが最もよく研究の対象となっている。この分野では、アジア人女性はアジア人「花嫁」や外国人「花嫁」と呼ばれている。宿谷京子〔1988〕『アジアから来た花嫁』、佐藤隆夫〔1989〕『農村と国際結婚』、桑山紀彦〔1995〕『国際結婚とストレス——アジアからの花嫁と変容する日本の家族』などの代表的な研究がある。これに対して、欧米人女性と日本人男性との国際結婚に関する研究では、欧米人女性をアメリカ人「妻」と呼んでいる。「妻」という言葉は婚姻関係において、夫と対等な位置を示す意味がある。つまり、欧米人男性との国際結婚において、日本人女性は対等な立場として扱われている。

アジア人女性に対して使用される「嫁」は結婚したばかりの女性で、「よそ者」の意味を含んでいる〔賽漢卓娜 2011〕。「嫁」は「婿」より下位な位置に置かれている意味がある。

日本人男性との国際結婚において、アジア人女性は下位の位置に置かれている。日本人男性とアジア人女性の国際結婚に関する研究は、「アジア人女性を迎える自分本位的な日本側のありかた、および彼女たちを束縛する各種の社会規範を指摘してきた。異文化結婚による移住を経験するアジア人女性自身の適応、あるいは不適応よりも、受け入れ側の視点に立ち、同化されていく過程を提示している」と指摘された[賽漢卓娜 2011: 35]。こうしたアジア人女性はよく被害者と見なされ、アジア人女性の本人の声と主体性はどこに存在するのか疑問を感じる。アジア人女性に対する先入観は「被害者」だけではなく、「わがまま」、「ずるい」人間であるというイメージも存在している。

一般的に、アジア人女性について「性風俗産業」への集中と「農村花嫁」がマスコミで大きく取り上げられたことから、世間はアジア人女性を二分化してしまう傾向にあると笠間[1996]と Nakamatsu[2003]は二人とも指摘した。彼女たちのことをマスメディアは、「被害者」あるいは「わがまま」、「ずるい人間である」とするステレオタイプが一般大衆に与えているが、それらを研究者も免れることができないようだ。日本人男性と「見合い仲介業者」を通じて結婚したフィリピン出身女性の日本における自助活動に注目した Nakamatsu は、彼女たちの妻として、母として、市民としての側面に向ける必要があると述べている。フィリピン出身女性にとって、帰化しなければ夫の戸籍にも入ることができない現在の国籍・戸籍制度はおかしい。市民権問題が解決したとしても、日常的な蔑視や差別問題はまだ存在していると指摘した[Nakamatsu 2003: 192-196]。

中国人モンゴル族出身の賽漢卓娜は日本の都市近郊農村の男性と結婚した中国人女性に、彼女らを「移動する主体」として把握し、その生活意識および生存戦略を明らかにしてきた。また、「中国人女性という行為者の『移動に伴う経験』に目を向け、そこで着目した場合に見えてくる送り出し社会と受け入れ社会における周辺化のメカニズム、中国人『嫁』の押し付けられる役割への葛藤、日本人家族、地域の対応の変化、女性たちの自らの移動への意味づけ、さらに多文化社会への契機を明かにすることを課題とした」[賽漢卓娜 2011: 173]。台湾男性と結婚したアジア花嫁の主体性を注目している筆者もこの論述に同意する。

単なるアジア人女性の視点だけではなく、日本人男性にも焦点を当て、多文化共生というテーマにした日本とフィリピンの国際結婚の研究がある。『フィリピン-日本国際結婚——移住と多文化共生』[佐竹・ダアノイ 2006]では、在日フィリピン人女性の「ジャパ行

き」、「農村花嫁」という固定したイメージを崩そうとした能動的な活動を描いている。フィリピン女性は日本社会や家庭の中で、周縁的な位置に置かれていても、見事に切り抜ける能力を持った主体である。彼女たちは配偶者や母親として、家族を維持し、高齢化した舅姑の面倒を見る一方、地域の諸行事にも参加し、パート労働者だけではなく、通訳などの専門職者として、地域社会や経済にも貢献してきたのである。そして、日本男性を中心に、周囲の反応、結婚後の適応・変化、夫婦関係、異文化体験なども取り上げられる[佐竹・ダアノイ 2006]。

日本における国際結婚の先行研究では、Nakamatsu と佐竹・ダアノイ、賽漢卓娜の研究以外の文献において、アジア花嫁はしばしば下位な位置にあり、被害者と見なされてきた。また、研究者は受け入れ側の視点に立ち、アジア花嫁を同化する過程を提示し、アジア花嫁本人の主体性や声の欠如という限界があることが浮き彫りにされた。賽漢卓娜は日本の都市近郊農村に嫁いだ中国人女性を移動する主体と見なし、彼女らの生存戦略を研究した。この着目点は本論文のテーマと同様である。本論文も、台湾男性と結婚したアジア花嫁の主体性に着目し、彼女らは単なる受け身の弱者ではなく、ホスト社会で生き残るためにさまざまな生存戦略を使い、困難を克服してきた行為者と見なす。そして、佐竹・ダアノイは、国際結婚当事者であるフィリピン人女性の視点だけではなく、日本人男性の角度から国際結婚の動機と異文化体験を考察し、国際結婚の全貌を明らかにした。本論文もより多面的に国際結婚の全貌を明らかにするために、アジア花嫁本人の語りだけではなく、台湾人夫やその周囲の人も対象に含めて、聞き取り調査を実施してきた。

第3節 台湾におけるアジア花嫁の先行研究

台湾は1990年代以降、急速に経済発展し、アジアの他の地域との格差が拡大した。そのため、日本に次いで、アジア花嫁の主な受入国の一つになった。90年代後半に急増したアジア花嫁現象は台湾社会に変貌をもたらしている。さまざまな方面に影響を与えているアジア花嫁現象の研究は膨大な数に上り、台湾全大学院生論文データベースに「外籍配偶」（外国籍配偶者）というキーワードを入力すれば、3872件の論文が出てくるほどである。ここでは研究対象に基づき、アジア花嫁本人、新台湾の子、台湾人夫、国際結婚仲介業者という4つの分類に分けて紹介する。

1. アジア花嫁本人に関する先行研究

アジア花嫁本人に焦点を当て、台湾生活への適応過程、生活適応問題、中国語習得、結婚生活の満足度、就職事情及び就職に関する法律、離婚後の台湾生活、家庭内暴力問題、文化アイデンティティ、ホスト社会のネットワークなどの諸問題を研究したものがある。

識字教育は常に生活適応と組み合わせて、中国語習得を台湾生活に馴染ませるための第一歩と考えている [邱淑雯 2000、吳美雲(釋自淳)2001、葉淑慧 2004、林鈴鏐 2006]。中国語の話す・聞く・読む・書くの中で、読む・書くが最も困難である。9 割以上のアジア花嫁が台湾に来てから、半年以内で話す・聞く能力は上達したが、読む・書くに関して、長い年数が経っても、上達できない人が過半数以上である [邱淑雯 2000、蕭昭娟 2000、鄭雅雯 2000、呂美紅 2000、顏錦珠 2001、林璣萍 2003、江亮演・陳燕禎・黃稚純 2004、王秀喜 2004]。地方政府が識字教育の政策を実施した際、直面した問題を指摘し、解決方法を提言した。具体的にはアジア花嫁本人は識字の授業に参加意欲が高かったが、台湾人家族の反対や家事、子供の世話など時間の余裕がなくて、学校に來れない事例が多い [蕭昭娟 2000、鄭雅雯 2000、江亮演・陳燕禎・黃稚純 2004、王秀喜 2004]。

政府はアジア花嫁に識字教育への参加を呼びかける際に、同時に台湾人家族に授業参加の協力を求めたほうが良いと黃森泉・張雯雁 [2003] と吳美菁 [2004] と江亮演・陳燕禎・黃稚純 [2004] は提言した。同時に、識字教育の教科書内容を研究した汪素娥は、アジア花嫁への強制的な同化と多文化的要素の欠如と女性差別を批判した [汪素娥 2005]。アジア花嫁は常によき台湾人妻、よき台湾人母親になれと要求され、彼女らの主体性が抹殺されてしまったテキストを改善すべきだと小宮有紀子 [2007] が指摘した。「識字クラス」(識字班) と「生活適応クラス」(生活適應班)⁵ に関して、さまざまな不十分な点を何青蓉 [2003] と王君琳 [2005: 197-198] が指摘したが、結果から見れば、アジア花嫁が中国語の習得だけでなく、母国の同胞とのネットワークを作り、台湾社会に対する認識も深めているので、これらは台湾生活への適応に役に立ったと評価する研究者が多い [例えば、邱淑雯 2000、吳美雲(釋自淳)2001、賴建達 2002、廖雅婷 2003、莊玉秀 2003、陳恕烈 2007]。

生活適応に関して、言葉の壁、食文化や気候の不適応は時間とともにすべて改善してい

⁵ 「識字クラス」(識字班) は教育部 (日本の文部省に相当) の指導の元で、小学校の教室を利用し、アジア花嫁の中国語授業を開講している。これに対して、「生活適応クラス」は内政部の指導の元で、台湾生活に馴染ませるために、中国語の学習だけではなく、地元の生活情報とアジア花嫁にかかわる重要な法令、台湾の風習も授業内容として実施しているクラスである。第 2 章第 3 節で詳しく述べる。

く。アジア花嫁も彼女らなりに工夫をして、台湾人家族の好みに合わせて作った料理の一部を取って、自分のために故郷からもってきた香辛料を入れたりしている。例えば、ベトナム人妻は週末に夫に頼んで、ベトナム料理店へ連れて行ってもらい、ベトナム料理を食べて、郷愁を紛らしている。アジア花嫁の年齢、国籍、教育レベル、言語能力、夫婦の年の差、台湾での居住年数、子供の数、夫の経済力などはアジア花嫁の台湾生活への適応に大きく影響する。つまり、家庭生活および婚姻に対する満足度は生活適応と正比例する[邱淑雯 2000、蕭昭娟 2000、鄭雅雯 2000、夏曉鵬 2002、江亮演・陳燕禎・黃稚純 2004、張雅祝 2005]。

国家的・文化的アイデンティティに関して、アジア花嫁の学歴、年齢、子供の人数、身分証明書の有無、台湾にきた年数、識字クラスの参加不参加などは台湾文化に対するアイデンティティを左右している。学歴が専門学校・大学以上のアジア花嫁はほかの同胞と比べて、台湾アイデンティティが低い。年齢が若いほどアジア花嫁の台湾アイデンティティが高くなる。また、生活適応クラスに参加したことがあり、2人以上の子供がいて、身分証明書を持っており、台湾にきた年数が長いほど、台湾の地元文化に対するアイデンティティを持っている[陳嘉誠 2001、郭銘森 2004、葉佩芸 2007、石承恩 2009]。

就職事情に関して、アジア花嫁と結婚した台湾人夫は全体的に経済的地位が低い家庭の出身が多いし、また、多くのアジア花嫁が母国の家族に経済援助をするために台湾にきたので、台湾での就職がきわめて重要である。台湾政府がアジア花嫁に就労を認めているにもかかわらず、彼女らは言葉、学歴、ホスト社会のネットワークが限られていて、飲食業など賃金が安い職にしか就けない、しかも「外籍新娘」という汚名を受け、職場で不公平な扱いを受けている。台湾人の雇用主は身分証明書をもっていないアジア花嫁に最低賃金より安い給料を支払い、彼女らの国民保険と労災保険を申請しない雇用主もいる。彼女らの就職上の權益を守るために、政府は法令を定めるべきだと尤思貽[2005]と鄭文恵[2006]、李書華[2006]は提言した。5割以上のアジア花嫁は台湾政府が主催した職業訓練、飲食店セミナーを評価している。政府は就職の支援を行う際、一つの窓口を設けて、多文化的な立場からアジア花嫁と接し、アドバイスをするべきである。台湾人雇用主はアジア花嫁に対する偏見をなくし、地元の台湾人労働者と同じように平等な労働環境を与えるべきである。また彼女らを地元の労働環境に適応させるために、地方政府はアジア花嫁と地元の台湾人との交流を促進すべきであると研究者は述べている[林婉如 2004、張雅祝 2005、尤思

貽 2005、李書華 2006、鄭文惠 2006、陳靜容 2006]。

アジア花嫁本人に関する先行研究から、生活適応の最初段階では、中国語習得を台湾生活に馴染ませるための第一歩とみなし、識字教育と生活適応には深い関連があることを明らかにした。そして、アジア花嫁は中国語学習の場を通して、同胞のネットワークに繋がりと、生活適応に良い影響をもたらすことが分かった。さらに、アジア花嫁の家庭生活および婚姻に対する満足度はホスト社会の生活適応と正比例し、家庭生活はホスト社会の生活適応において、きわめて重要な部分を示すことを分かった。国家的・文化的アイデンティティに関して、一般的台湾に来る年数が長いほど、しかも帰化した女性のほうが台湾に対するアイデンティティが高い。ただし、高学歴の女性は台湾に対するアイデンティティは時間とともに、増していないことを明らかにした。そして、就職事情から一般のアジア花嫁は夫の経済的地位が相対的に低くて、母国への送金や家計の支援のため、就職を急ぐケースが多い。ホスト社会におけるアジア花嫁の就職現況を見れば、彼女らは周辺化されたグループの一つという事実が明らかになった。

2. 「新台湾の子」に関する先行研究

「新台湾の子」に関しては、子供自身の学習能力、学校生活の人間関係、外国籍配偶者の子育て事情、外国籍配偶者の家庭環境及び社会行為などの研究がある。アジア花嫁から「新台湾の子」へという研究の焦点が変わったきっかけは、『民生報』をはじめとするマスメディアが「新台湾の子」の発達障害に対する過度な報道だった。『民生報』の記事によると、高雄長庚医学院の児童心理科の周文君主任、産婦人科の許徳耀主任、成功大学医学院の精神科の楊明仁主任らによる合同研究『南台湾の外国籍花嫁の心理的健康及び家庭機能が与えるその子供への影響』（南臺灣外籍新娘心理健康及家庭功能對其子女心理之影響）という報告書は、台湾発の「新台湾の子」の心身発達に対する研究である。「新台湾の子」が発達障害や言語の学習障害をもっている比率が6割もあるという[林秀美 2001]。この報道以降、政府、学者や有識者は新台湾の子の教育に注目し始めた。中国語ができないアジア花嫁は台湾の将来を担う「新台湾の子」を教育する能力を懸念し始めた[夏曉鵬 2005:21、張明慧 2005:207]。まず、外国籍配偶者の子育て事情に関して、先行研究によると、中国語能力が不足しているアジア花嫁にとって、子供の学業指導は最も悩まされる問題の一つである[陳李愛月 2002、陳美惠 2002、林璣萍 2003、陳湘淇 2003、王秀喜 2004、陳姿秀 2007、

謝慶皇 2007、ウシンイン 2010]。

学校生活適応の先駆的な研究⁶によると、家庭の経済的・社会的地位と、母親の言語能力および学歴は正比例している。また、母親が華人出身かどうかにも影響している。全体的に、学習が「弱い立場」(弱勢)にあるのが現状である。ただし、心身障害の割合と、知能指数が非常に高い子の割合の両方が相対的に高く観察すべきだと林璣萍[2003]は指摘した。また、同じ低学年児童を対象にした陳姿秀⁷ [2006]の研究結果は、言語発達が遅れていながら、家庭の経済的・社会的地位も言語発展に影響していることを明らかにした。一方、知能指数と言語能力と学力に関して、台湾の児童と大きな格差が存在していないという研究結果もある[陳湘淇 2003、謝慶皇 2007]。このようにさまざまな分析結果があるが、大半の先行研究は、家庭の経済的・社会的地位が「新台湾の子」の学力を左右していると述べている[林璣萍 2003、陳湘淇 2003、陳姿秀 2006、謝慶皇 2007]。

3. 台湾人夫に関する先行研究

アジア花嫁に関する先行研究大半は、アジア花嫁本人と新台湾の子に注目したものである。ここでは、数少ないが、台湾人夫の視点から、国際結婚の諸側面を分析した先行研究を紹介する。台湾とベトナムの国際結婚における台湾人男性の動機を分析した Wang and Tien は台湾男性の伝統的なジェンダー意識を指摘した。彼らは「男性は一家の大黒柱であるべき、女性は夫に頼って、婦徳を守るべきである」と考え、「台湾人女性が求める生活水準は高すぎ、みんな自立しすぎだ」と語った。「越境結婚は単なる結婚だけではなく、台湾人男性が求めている「男らしさ」(masculinity)の実現にもつながる。つまり、地元の台湾社会では実現不可能な伝統的なジェンダー関係は越境結婚により、実現した[Wang and Tien 2009 : 13-37]。台湾男性とベトナムのメコンデルタ地域の女性との国際結婚を研究した Nguyen and Tran [2010]によると、時代が変わっても、メコンデルタ地域では教育レベルが低くて、古い思想がまだ残っている。台湾男性はこうした古き良き女性を求めていると分析した。このような台湾人男性は、古いジェンダー観念を変えないと、国際結婚の維持が困難である[鐘重發 2003、陳亞甄 2006]。同様に、アメリカに移住したベトナム人男性

⁶高雄市初の「新台湾の子」の学校生活適応の研究であり、調査範囲は全高雄市である。林は小学校低学年の 386 人児童を対象にし、有効回収率は 82. 64%である[林璣萍 2003]。

⁷陳は嘉義・雲林・彰化三縣の低学年の 902 人児童を対象にし、有効回収率は 61. 3%である[陳姿秀 2006]。

も、ジェンダー意識が変化しないと、自立した高学歴のベトナム人女性との結婚では必ず衝突が起これと、ベトナム人学者 Hung が指摘した [Hung 2005]。

温雨蓉は国際結婚における台湾人男性への偏見を払拭しようという出発点から国際結婚の満足度を研究した。この点に関して研究者の共通した結論は以下の通りである。台湾人夫が全員亭主関白である訳ではなく、アジア花嫁はだれもが夫の言いなりに従う受け身の犠牲者である訳でもない。夫の居住地域、職業、教育レベル、夫婦の年齢差は結婚生活に深く影響する。また、台湾の民衆はアジア花嫁への先入観にとらわれずに、異なるエスニック・グループと異文化を受け入れようとすべきだ。マスメディアは国際結婚に関する偏見の報道や記事を過度に報道すべきではない[劉美芳 2001、王秀喜 2004、温雨蓉 2006]。

台湾人夫に関する先行研究では、家父長的な思想が強い台湾人男性という研究結果が出た。そもそも、これらの先行研究は農村や都市の近郊部の国際結婚を対象にする調査であるため、当然このような調査結果が出た。むしろ、夫の居住地域、職業、教育レベルが結婚生活に深く影響すると考えるべきである。

4. 国際結婚仲介業者に関する先行研究

初めて台湾とベトナムの国際結婚に係る国際結婚仲介業者のメカニズムに目をつけ、結婚仲介業者を研究した蔡は「台湾とベトナムにおける国際結婚の人数の急上昇の理由は、両国間のネットワークを巧みに駆使した国際結婚仲介業者の働きのためである」と指摘した。また、仲介業者のメカニズムを分析し、1. ベトナムに進出した台湾商人が駐在員の転職または、付属業務 2. 結婚相談所の転業か付属業務、3. 外国人労働者の人材派遣会社の付属業務、4. ベトナム人女性と結婚した台湾人男性が妻のネットワークを利用した個人経営という 4つの経営スタイルがあると指摘した[蔡雅玉 2000]。

王と張は、さらに両国にいるそれぞれの仲介メカニズムの分業体制を究明し、国を越える結婚仲介業者は数多くの関係者によって、新興産業の国際結婚市場を構築したと述べた。地元の女性と結婚できない台湾人男性の結婚問題を解決し、上昇婚を求めるベトナム人女性に安全で確実な道を提供した分業体制の一面も評価すべきだと王と張は主張した[王宏仁・張書銘 2003]。国際結婚仲介業者のメカニズムの考察を通して、多くの台湾とベトナムの国際結婚の背景の一部を判明することができた。ただし、すべての国際結婚が仲介業者を通じたわけではない。また、このメカニズムは、台湾とベトナムの国際結婚を対象に

する調査である。ただし、このような国際結婚仲介業者は確かに受け入れ側と送り出す側である男女双方に、安全な結婚ルートを提供し、双方の社会に多大な経済効果をもたらしていることが明らかになった。

5. まとめ

台湾人の研究者だけではなく、台湾の驚異的な国際結婚の増加は、日本の研究者も注目している。横田は、台湾とベトナムの国際結婚は両国の間に存在している歴然とした経済格差により、しばしば人類学者の Nicole Constable が言う「グローバル・ハイパガミー」(global hypergamy)だと解釈されるが、台湾人男性は必ずしも経済的・社会的に高い階層に属するとは限らないと指摘する。夫の経済力が弱く、低い階層に属する場合、妻はホスト社会に直面する社会適応の課題と移民に割り当てられた労働と相まって、しばしば出身社会においてよりも厳しい状況に置かれる。結婚移民は一概に「グローバル・ハイパガミー」を達成していると言えるのであろうかと横田が指摘した [横田 2008]。澤田は、台湾の少子化、出生性比と国際結婚と結びついて、台湾男性の結婚難の要因を研究した。台湾の少子化問題は欧米と日本と異なり、父系継承主義（家父長主義的家族規範）の固定観念の元で、出生性比の男児優位性という現象を伴って進行している。少子化と連動する出生力の「男性化」は、女性の晩婚化・非婚化と相まって、結婚市場における男性の過剰性、すなわち台湾男性の結婚難の一因となっていると指摘した [澤田 2008]。

以上述べたアジア花嫁に関するさまざまな分野の先行研究から、アジア花嫁に関する諸問題の解決は近年台湾社会では重要な課題の一つであることが判明した。そして、先行研究の出発点はすべてアジア花嫁本人から、あるいは延長したものとも言える。近年アジア花嫁に関する研究は「新台湾の子」という焦点に変わってきたが、アジア花嫁本人の生活適応は終始重要な研究テーマの一つである [李明堂・黄玉幸 2008、洪正庠 2008 : 6]。

従来の研究はアジア花嫁の比例が高い農山漁村の地域を偏る傾向がある。たとえば、都市部である高雄市のアジア花嫁の生活適応に関する先行研究は陳李愛月 [2002] と王秀喜 [2004] の二人だけである。陳李愛月は前金区、前鎮区、三民区にある生活適応クラスの東南アジア出身の花嫁を対象に、結婚と家庭生活を研究した。なお、生活適応クラスに参加したアジア花嫁は基本的に恵まれているアジア花嫁であるために、生活適応の全貌を明らかにすることが困難である。さらに、アジア花嫁の結婚動機は実家の貧困で、国籍結婚を

選択したと陳李愛月は解釈した。陳李愛月の研究結果は近年多様化した国際結婚の全貌を表していない。一方、王秀喜は旗津区のベトナム籍とインドネシア籍の花嫁を対象に、生活適応と人間関係を研究した。高雄市の離島にある旗津区は昔からずっと主な行政区と違い、発展されていない漁村の部落とされているため、王秀喜の研究は漁村の国際結婚とも言える。また、王の聞き取り調査では、アジア花嫁の台湾人家族（舅姑）が現場にいたので、国際結婚に最も悩まされている姑嫁問題の真相は明らかにされていない[王秀喜 2004：129]。高雄市以外の生活適応に関する先行研究（質的調査）でも、聞き取り調査の回数が少なく、初対面の場合が多くて、問題を深く掘り下げるためには限界が存在している。

以上述べた先行研究の不足を克服するために、筆者は、先行研究ではまだ明らかにされていない都市部の国際結婚に焦点を当て、アジア花嫁本人に限らず、夫と子供、同僚、近所、知り合いなどの多方面からアジア花嫁の生活適応を考察したい。そして、彼女らがいかなる生存戦略を使い、生活適応に直面した諸問題を克服してきたかを明らかにしたい。

第1章 台湾におけるアジア花嫁

本章の第1節では、アジア花嫁の呼称と定義を紹介し、彼女らが台湾社会で受けた偏見の背景を明らかにし、中国と東南アジア出身のアジア花嫁に分けて、それぞれの国際結婚の歴史を紹介する。そして、近年の国際結婚の割合と離婚率、新生児の母親の国籍に関する統計からアジア花嫁の現状を概観する。第2節では「プッシュ・プル理論」をもとにして、アジア花嫁の社会・経済的背景および増加した諸要因を分析する。受け入れる側である台湾のプル要因と送り出す側である中国と東南アジアのプッシュ要因を分析することによって、アジア花嫁の全体像が解明される。第3節では、本節では本論文の主な調査地である高雄市に焦点を当て、高雄市の概況とアジア花嫁の現状、および主な調査地域である三民区におけるアジア花嫁の現況を紹介する。

第1節 アジア花嫁の歴史

アジア花嫁の歴史を顧みる前に、彼女らに対するホスト社会でのさまざまな呼称と定義を紹介し、彼女らが台湾社会で受けた偏見の背景の一部を明らかにする。また、本論文でアジア花嫁という言葉を選択した理由を述べる。

1. アジア花嫁の呼称と定義

台湾では、一般の人々が中国籍配偶者を「中国籍花嫁」(大陸新娘)と呼び、東南アジア出身の外国籍配偶者を「外国籍花嫁」(外籍新娘)と呼ぶ。「外国籍花嫁」の本来の解釈は「台湾人男性と結婚した外国籍の花嫁」のことを意味するが、一般的には「台湾人男性と結婚した東南アジア出身の女性」のことを指して用いられる。これに対して、欧米出身の外国籍配偶者は「西洋人奥様」(洋媳婦)、日本籍の外国籍配偶者は「日本人奥様」(日本媳婦)と呼ばれている。「新娘」とは、夫の家族の一員にまだ成りきれていない新妻を意味している。これに対して、「媳婦」とは身内として受け入れられ、家族の一員と認められたときに使われる言葉である。初めて東南アジア出身の外国籍配偶者が来台してから、すでに30年を超え、初代の中国籍配偶者も20年が経ったにもかかわらず、彼女らは未だに「新娘」という呼称で呼ばれている。言葉の意味を考えると、非常に奇妙なことである。また、

同じ台湾人男性と結婚した外国籍配偶者であるのに、なぜ欧米と日本出身の外国籍配偶者が「媳婦」という身内のカテゴリーに分類されながら、中国・東南アジア出身の外国籍配偶者が「新娘」という余所者のカテゴリーに分類されているのか。台湾は長く「近代化」あるいは、経済活動の発展度という基準でもって異文化を見てきた。開発途上国である東南アジア諸国や中国に対して、文化的に教養がない、物質的に衛生分野が不備だという先入観を持つがゆえ、東南アジア・中国出身の女性にも偏見を持つことになってしまった。そのため、彼女らはよその国から来た部外者とされ、「新娘」と呼ばれる。これに対して、台湾人男性と結婚した欧米・日本の先進国の女性は「媳婦」という肯定的で、受け入れられる気持ちが含まれる言葉で呼ばれる。要するに、「新娘」という言葉は差別的な意味合いを含んでいると判断できる。また、アジア花嫁現象とともに起きたさまざまな社会問題の「問題要因」として扱われがちな中国および東南アジア諸国出身の女性を総称する際、「外籍新娘、大陸新娘」という呼称は使う側にとって、都合のよいものであると同時に、カテゴリー化された中国・東南アジア出身の女性はさらに偏見の目で周囲から見られるようになる[夏曉鵬 2005 : 40、飯田 2009 : 11]。

「外籍新娘」や「大陸新娘」という差別用語を是正するために、夏曉鵬と婦女新知基金会は 2003 年に「私を——と呼んでください。新移民女性に自分のことを言わせよう」(請叫我——, 讓新移民女性說自己徵文活動) 運動を開催した。中国や東南アジア出身の女性たちの投票によって、「新移民女性」という名称が選ばれた。台湾政府も「行政院の女性の権利と利益を促進する委員会」(行政院婦女權益促進委員會)において、「外籍新娘」を「外籍配偶」へ変更し、「大陸新娘」を「大陸配偶」へ変更することを決め、それを議会で承認した。それ以降、政府の公開資料および HP では、「外籍配偶」、「大陸配偶」、「新住民」、「新移民」などの名称が使われ始めた。アジア花嫁に関する先行研究では、最初は「大陸新娘」と「外籍新娘」という呼称が使われていたが、2004 年以降は「外籍配偶」と「大陸配偶」、「新移民」、「新住民」などの呼称が定着しつつある。しかし、台湾に移住したアジア花嫁を受け入れ、尊重しようという趣旨で提案された新しい呼称は台湾の社会にどれほど浸透しているかには疑問が残る。アジア花嫁のエンパワーメントを支援してきた研究者や女性団体の呼びかけと、政府が正式に議会で承認した名称変更にも関わらず、一般の人々は相変わらず彼女らを「外籍新娘」や「大陸新娘」と呼ぶ。一般社会で最も馴染まれ

ているのは多分「外籍的」（東南アジア出身の女性）「越南仔」⁸（ベトナム籍女性）「印尼仔」（インドネシア籍女性）、「大陸妹」⁹「阿陸仔」（中国籍女性）などの軽蔑用語であろう。

彼女らがホスト社会である台湾で受けた偏見という現実とホスト社会で周辺化された事実を伝えるために、本論文は「外籍配偶」「大陸配偶」というニュートラルな称呼を使わず、あえて「アジア花嫁」（亞州新娘）という言葉を選択したのである。初めて「亞州新娘」という言葉を使用した学者は南華大学亜太大学院の邱淑雯副教授である。邱の著書である『性別與移動 日本與台灣的亞州新娘』（ジェンダーと移動 日本と台湾のアジア花嫁）[邱淑雯 2005]では、日本におけるアジアから来た花嫁と台湾における東南アジアから来た花嫁という2つのテーマが書かれているが、「アジア花嫁」という言葉の定義が明記されていない。著書の中に言及されている台湾における東南アジアから来た花嫁と中国から来た花嫁と日本におけるフィリピン花嫁・韓国花嫁など、全てがアジア花嫁の範疇に当てはまるから、「アジア花嫁」という言葉を邱が選択したのではないかと筆者は考えている。本論文が「アジア花嫁」という言葉を選択したもう1つの理由は、東南アジア出身の女性も中国出身の女性も全てアジア花嫁に含まれると考えたからである。

2. アジア花嫁の歴史

上で述べたように、アジア花嫁に関する研究では中国籍配偶者と東南アジア出身の外国籍配偶者の二つに分けられている。中国との特別な政治的・歴史的背景があり、台湾に来了た中国人は「台湾と中国との人民關係条例」（兩岸人民關係條例）を適用され、一般の外国人と異なる待遇を受けていて、入国審査、在留および帰化などの手続きが全て違う。まず、中国籍配偶者の歴史を顧みる。つぎに、東南アジア出身の外国籍配偶者の歴史を明らかにする。最後に、アジア花嫁に関するいくつかの統計からアジア花嫁の現状を紹介する。

① 中国籍配偶者の歴史

1949年、蒋介石が率いる中国国民党は中国大陸における共産党との内戦に敗れ、台湾に逃げ、現在も中華民国の国号¹⁰を使用している。毛沢東が率いる中国共産党は中華人民共

⁸「仔」は台湾語で人を軽蔑する呼称である。

⁹大陸妹は中国人の若い女性に対する軽蔑の用語である。

¹⁰中華民国（台湾）では2013年は中華民国103年である。

和国（通称中国）を建国した。中国国民党政権とともに、中華民国の各省の官僚、軍人、兵士、知識人は台湾に移住し、人数制限で妻子を中国に残してきた者、独身で台湾に来た兵士が数多くいた。当初「反攻大陸」に備えて、結婚が制限されていたので、1956年以前、軍幹部の結婚は満28歳以降と規定されていた。1959年まで士官レベルが、また1961年まで兵士が28才になるまで結婚は認められなかった[安里2008:61]。もともと、彼らは「1年準備、2年反攻、3年掃討、5年成功」の「反攻大陸」のスローガンを信じて、いずれ中国大陆に戻るという思いで、婚期がますます遅れた。また、軍人は社会との接点が乏しく、退役する頃にはすでに婚期を逃していたという一因もある[前掲書:61]。1971年の中華民国の「脱退」と中華人民共和国の国連入り以降、国際的メディアで、中華民国を台湾と通称するようになった[若林2001:79]。1987年に台湾（中華民国）の民主化に伴う中国大陆訪問の解禁のもとに、大陸への親族訪問は解禁された。独身で台湾に来た国民党老兵はやっと故郷に帰って、中国に残した妻子を台湾に連れてきた。いわゆる最初の「台湾と中国の国際結婚」（兩岸婚姻）である。1989年3月に、台湾行政院「中国大陆に関連する事務を管轄する委員会」（大陸工作委員会）は始めて正式な法令で、「中国大陆に残留する台湾出身の元国民党兵士とその配偶者およびその未成年子女」が台湾に帰国することを解禁した。続いて、1990年以後、「戦争捕虜として中国大陆に残留した元国民党兵士、その配偶者およびその未成年子女」と「中国大陆に残留した台湾出身者、その配偶者および未成年子女」が台湾に戻ることも解禁された。それ以外、「華僑」身分として、第三地（多くが香港）から台湾に来た中国籍の人数も日々増加した。また、兩岸の民間の活発な交流と中国に進出した台湾企業の激増とともに、中国籍配偶者の人数も次第に増えてきた。

その中で、偽造結婚の斡旋業者である「人蛇集団」の存在も看過できない。この犯罪集団は売春を目的とする中国人女性を台湾男性と結婚させ、家族の名義で台湾に来させた後、売春させるなどの犯罪を犯した。当時は常に大きな社会ニュースとして報道されたため、一般の台湾人は中国人女性に対して、「偽装結婚、実は売春」（假結婚、真賣淫）という偏見を抱くようになった。台湾に移住しようとする中国人を減らすために、台湾に来る中国籍配偶者の定員枠を設けた¹¹。もう一つの理由は、偽装結婚の犯罪を抑えるためである。こういう背景のもとで、就労目的で、偽造結婚として台湾に来た中国籍配偶者もいた。

以上のように、「兩岸開放」とともに起きた商業トラブルと偽装結婚、婚姻訴訟、密輸問

¹¹ 1949年以前に結婚した中国籍配偶者は枠外である。

題、不法入国など、さまざまな分野の問題を解決するために、台湾政府（中華民国）は 1992 年 7 月に台湾人民と中国人民の往来に関する最も重要な法律である「台湾と中国における人民関係条例」（臺灣地區與大陸地區人民關係條例）を公布した。現在、台湾に移住した中国籍花嫁はほとんど 1992 年以降に結婚した者である。

行政院大陸委員会專案研究報告の「中国籍配偶者の台湾生活の状況と視察」（大陸配偶來台生活狀況案例訪視）によると、1992 年から 1996 年に台湾に移住した中国籍配偶者に関して、下記の特徴がある。

- a. 年齢：台湾に移住した中国籍配偶者の中で、女性が全体の 95.5%を占めている。彼女らの平均年齢は台湾人夫より 11.4 歳年下である。
- b. 教育レベル：台湾と中国の間で結婚した人の教育レベルは中・高卒が多い。中国籍配偶者の平均学歴は台湾人配偶者より高い。
- c. 職業：中国籍配偶者は「無職」¹² と「その他」の仕事が多い。台湾人配偶者は商業従事者と工場労働者、「無職」¹³ が多くて、しかも下層の仕事に従事しているが多い。
- d. 中国籍配偶者女性の出身：中国籍配偶者女性は大半が中国の沿海の省が多くて、都会化が相対的に進んでいない地域である。

中国籍女性が台湾人男性と結婚したきっかけは 4 つのタイプに分析された[王春益 1998、陳小紅 1999、陳淑芬 2003]。第一は親戚の紹介である。二世外省人男性が親族とともに中国を訪問した際、知人の紹介で結婚したケースである。第二は兩岸の交流で、仕事や旅行先で知り合ったケースである。第三は台湾と中国以外の海外の留学先で知り合ったケースである。第四は結婚仲介業者の斡旋で結婚したケースである。このように、中国との交流が活発化するとともに、中国籍配偶者は 1993 年以降年々増加していた。

次は、海基会¹⁴における台湾と中国の国際結婚の公証件数¹⁵の統計から中国籍配偶者の現状を紹介する。

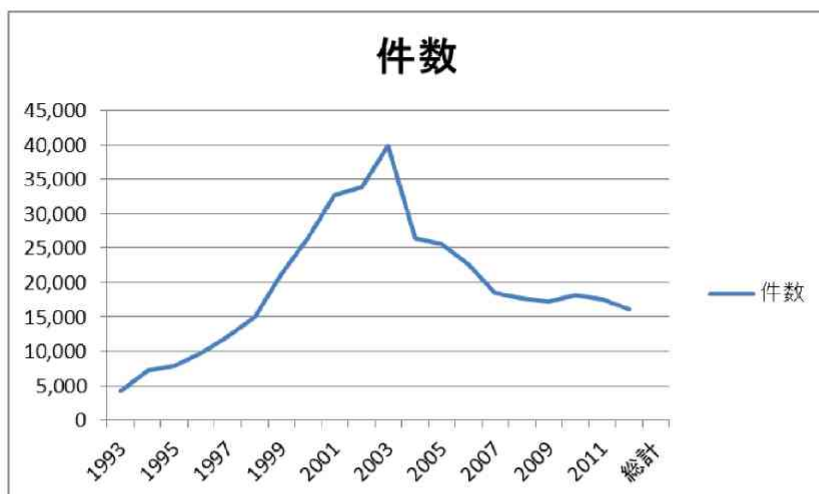
¹² 中国人配偶者の「無職」のなかに兼職とアルバイトも含まれている。

¹³ 台湾人配偶者の「無職」のうちで、退役した国民党老兵が多いとされる。

¹⁴ 「海峡交流基金會」の略称である「海基會」は台湾政府の対中交渉窓口機関である。中国側のカウンターパートは「海峡兩岸關係協會」、「海協會」と略称されている。1987 年に台湾住民の中国訪問が解禁され、台中両国間の民間交流が進展したのに伴い、海基会は 1990 年 11 月 21 日に発足、1991 年 3 月 9 日に財団法人化した。

¹⁵ 1993 年 4 月 27 日海基会・辜振甫董事長と海協會・汪道涵会長による初の両国のトップ会談がシンガポールで実現し（第一次辜汪会談）、兩岸の公文書査証事務を結んだ。その後、台湾に入国申請する際、中国で発行された結婚公証の原本を海基会に提出し、認証を受けることが必要である。

図 1. 海基会における台湾と中国の国際結婚公証件数¹⁶



90年代前半はまだ7000件ぐらいだったが、1999年に2万件を超え、年々増加し、2003年にピーク時を迎え、3万9000件も突破した。中国籍配偶者の流入とともに、偽装結婚などの社会問題が頻繁に起きたため、台湾政府は2003年末から中国籍配偶者に対して、入国面談制度および男性の扶養能力の有無を確かめる審査の強化を実施したので、2004年度以降、台湾と中国の国際結婚の結婚証明書の件数が一気に減少した。

② 東南アジア出身配偶者の歴史

1970年代中期から、台湾の工業化により、農村女性が都市に流失した結果、農村男性は深刻な結婚難に陥った。とくに、客家系¹⁷の農村に住む男性は仲介業者の紹介で、フィリピン人女性やタイ人女性と見合いをし、結婚した。東南アジア出身の配偶者は年代が変わるとともに、異なる名称で呼ばれてきた。1970年代後半から1990年代前半まで「輸入した花嫁」(進口新娘)と呼ばれていた。台湾社会の下層にいて、結婚難に悩んでいた男性はブローカーに結納金を払えば、ブローカーが東南アジア諸国から「輸入した花嫁」と結婚することができた。出稼ぎという名目に騙された多くの女性は、偽装の観光ビザで台湾に

¹⁶ 海基會收受大陸公證書正本分類統計表をもとにして作成

<http://www.sef.org.tw/www/html/stpfmain.htm> (2012.11.12 参照)

¹⁷ 清朝のとき、客家人は福建系本省人より遅く台湾に移住したため、開墾が進んでいなかった内陸部に居住している。大多数の福建系本省人に比較すると、客家人は相対的に弱い立場に置かれて、経済的に恵まれていない。そのため、アジア花嫁ブームは客家系の農村から始まった。しかも、客家村において、最も貧しい台湾中部の客家村から始まった[夏曉鵬 2002: 45]。

来て、農村男性と結婚させられた。その中には風俗業に売り飛ばされる女性もいた。70年代の「輸入した花嫁」は主にタイ、フィリピン、マレーシア人女性であった。彼女らは生活習慣・文化の違い、言葉の壁によってまた農村の力仕事に耐え切れず、逃げ出したケースが多かった。このような事件が頻繁に起きたため、タイ・フィリピン・マレーシア人配偶者は一時期減少した。同時に、この結果は間接的に80年代のインドネシア華人系配偶者の激増を引き起こしたのである¹⁸。農村だけではなく、結婚適齢期を過ぎた国民党の退役軍人も深刻な結婚難に直面していた。台湾に居住する東南アジア出身の華僑や華人はフィリピン、タイ、インドネシアなど東南アジアの女性を国民党老兵に紹介した。農村男性と結婚したアジア花嫁と同様に、出稼ぎという名目に騙された東南アジア出身の女性が多くて、また多くの国民党老兵は女性の事情を全く知らなくて結婚した事例が多い。男女双方とも被害者であるために、アジア花嫁ブームは一時下火になった[Hsia1997]。

1980年代のプラザ合意以降、ドル安、台湾ドル高によって、台湾企業の海外投資は急速に拡大した。一方、政府は不振となってきた農業を振興するために、「農村建設を加速し、農家の所得を増加する」、「農業の構造を改善し、農家の所得を増加する」という措置をとった。しかし、80年代以降、経済と貿易の自由化とともに、国際市場のダイナミックな変化は、国内市場や生産、販売など様々な方面に巨大な影響をもたらしてきた。農業が直面した難問は技術面の問題ではなく、経済面の問題なのである。グローバル化や国際貿易の自由化によって、海外から輸入した農産品の種類や数量は大幅に増えてきた。厳しい競争において、打撃を受けた農業の経営はいっそう困難になってきた。それとともに農村の結婚難の深刻さは当然増す一方であった。「進口新娘」の問題はこの頃初めて新聞記事に登場した¹⁹。1983年9月27日の『聯合報』5版では、「進口新娘は問題多く、立法委員は早速阻止するべきと要求。観光ビザ、経過ビザ、二重国籍を持つ華僑は戸籍の登録が禁止と境管局²⁰は強調」という見出しがあった。記事の内容によると、当時のトラブルは、アジア女性のビザの期限が短く、もし結婚相手が見つからなかったら、強制送還の処分を受けたケースが多い。一旦女性が強制送還されると、男性側が払った結納金も花嫁も、両方とも失うという。また、80年代農村で起きた「進口新娘」ブームでは、男性がブローカーに20

¹⁸ 『中國時報』1995年11月12日17版「深度報導」

¹⁹ 『聯合報』1982年12月4日7版

²⁰ 境管局の正式名称は入出境管理局であり、日本の入国管理局に相当する。2007年移民署が成立する際、警政署に管轄された境管局は国境事務大隊という名称に変更され、移民署に編入された。

万～30 万台湾ドル（120～180 万円）の結納金を渡すと、ブローカーがタイ、インドネシアから「輸入花嫁」と結婚することができる²¹。そのため、台湾人男性とアジア花嫁との国際結婚は常に売買婚だとみなされていた。さらに、1980 年代の末に、観光ビザで台湾に来た東南アジア女性の人身売買事件が何件も起きたから、政府は一時期、東南アジア出身の未婚女性にビザ発給を停止した〔陳美恵 2002 : 24〕。1986 年から 1991 年の間に、台湾の東南アジア市場への投資はタイ、マレーシア、フィリピンに集中している。結婚仲介業者の話と新聞記事によると、この時期、タイ・フィリピン人花嫁が最も多い。この頃、「輸入した花嫁」はすでに母国で結婚している女性か、また就労のために台湾に来て、結婚してからまもなく逃げたケースが多くて、またブローカーに騙された事例が常に報道されていた。そのため、当時から、台湾男性は仲人の紹介で東南アジア諸国に行って、ブローカーが用意した複数の女性と見合いをして、短時間で結婚相手を決めて、現地の役所で結婚登録の手続きをするパターンに変わった。その後の手続きを全部代理人に委託して、台湾人男性は先に 1 人で台湾に戻った。全部の費用は 30 万から 40 万台湾ドル（150 万～200 万）であった。そのため、「進口新娘」の名称以外、「外籍新娘」という呼び方も始まった。一方、短時間で結婚相手を決めた台湾男性は「インスタント花婿」（速成新郎）と呼ばれていた。1991 年以降、台湾企業のインドネシアへの投資の増加とともに、台湾男性と結婚したインドネシア人女性も一気に増えた。台湾人男性が東南アジア諸国に花嫁を求める趨勢と台湾が東南アジアへ投資するトレンドは一致している。しかし、台湾政府が東南アジア出身の花嫁の人数を把握したのは非常に遅く、1994 年になってやっと統計がとられた〔夏曉鵬 2002 : 65〕。次に、1994 年から 2000 年まで、政府が発給した東南アジア各国配偶者のビザ数の統計を紹介する。

1994 年までは内政部の新規結婚登録資料における東南アジア諸国のデータが不明であるが、1994 年以降については外交部が発給した東南アジア配偶者のビザのデータによって、東南アジア出身配偶者の推移を知ることができる。そして、表 1. を見ると、1995 年まで、インドネシア籍配偶者は常に一位であった。最初現地ツアーの参加から、結婚手続きの申請を経て、ビザが下りるまで、わずか 1 か月か 2 か月ぐらいで、女性はすぐに台湾に来ることができた。1993 年から、インドネシア籍配偶者の台湾流入を減少させるために、駐ジャカルタ台湾弁事処で行われる入国面談は一日 10 組に制限されるようになった。その結果、

²¹ 『中國時報』1991 年 3 月 2 日彰化県新聞 4 版

インドネシア籍配偶者は数ヶ月ないし一年かかって、初めてビザを入手した。そこで、台湾人男性はベトナム、カンボジアなどの国で、花嫁候補を探すようになった〔前掲書 2002 : 169〕。また、この時期はちょうど台湾がベトナムに対して投資資金を大幅に増大させた時期でもあった。1994年に台湾がベトナムと「投資保障協定」を結んだ後も、ベトナムに赴いて、花嫁候補を探した台湾人男性は一向に減らなかった。その中に、「ベトナムは儒教文化の影響が強くて、女性は従順で、親孝行をする古き良き時代の女性だ」と台湾人の結婚仲介業者は台湾人男性に強くアピールしたので、ベトナムは東南アジアの諸国において、花嫁を数多く送り出す国となった。1996年以降、ベトナム籍配偶者は常に一位である。その背景には、台湾企業の海外進出以外に、台湾・ベトナムにおける結婚仲介業者の分業体制に深い関連があるとされる。1998年に東南アジア各国配偶者の人数が大幅に減少している理由は、その年は結婚に向いてない「孤鸞年」（その年に結婚した夫婦はのちに離婚する可能性が高いという民間の迷信）だったためである。2000年に入ってから、「進口新娘」という名称はあまり見られなくなり、ほぼ「外籍新娘」という名称が使われている。

表 1. 外交部領事事務局が発給した東南アジア各国配偶者のビザ数²² 単位：人

国	タイ・ミャンマ	マレーシア	フィリピン	インドネシア	シンガポール	ベトナム	合計
1994年	870	55	1,183	2,247	14	530	4,899
1995年	1,301	86	1,757	2,409	52	1,969	7,574
1996年	1,973	73	2,085	2,950	18	4,113	11,212
1997年	2,211	96	2,128	2,464	50	9,060	16,009
1998年	1,173	102	544	2,331	85	4,644	8,879
1999年	1,184	106	603	3,643	12	6,790	12,338
2000年	1,259	65	487	4,381	3	12,327	18,552
合計	9,971	583	8,787	20,425	234	39,433	79,463

3. 数字から見るアジア花嫁の現状

アジア花嫁の歴史を述べた後、台湾近年の国際結婚の割合、離婚率、新生児の母親の国籍に関する統計からアジア花嫁の現状を見る。まず表 2. 台湾の国際結婚の統計を見ると、国際結婚の割合は 2003 年にピークを迎えて、結婚全体の 31% も占めていたことが分かる。外交部は 2004 年外国籍配偶者に対する海外面談および男性の扶養能力の有無を確かめる審査を強化したので、東南アジア出身の外国籍配偶者は 2005 年以降大分減ってきた。国際

²²王宏仁・張書銘[2003 : 189]から引用

結婚の離婚率は台湾人同士の離婚率より高い。とくに、短時間の見合いツアーですぐに結婚相手を決めた台湾人男性と東南アジア出身の女性との国際結婚の離婚率が高いとされる。一般的に言って、中国籍配偶者は台湾人と同じ漢民族で、文化と言葉の壁がなくて、台湾生活に馴染みやすいので、離婚率も東南アジア出身の配偶者より低い。2004年と2005年に中国籍配偶者との離婚率が東南アジア籍配偶者より高い理由は、その年は中国人女性の偽装結婚が多いとされている。

表 2. 台湾の国際結婚の統計におけるアジア花嫁の統計²³

年別	結婚総計	台湾人同士結婚	国際結婚			国際結婚割合 (%)
			合計	外国籍配偶	中国籍配偶	
2001	170,515	124,313	46,202	19,405	26,797	27
2002	172,655	123,642	49,013	20,107	28,906	28
2003	171,483	116,367	55,116	19,643	35,473	31
2004	131,453	100,323	31,130	20,338	10,792	23
2005	141,140	112,713	28,427	13,808	14,619	20
2006	142,669	118,739	23,930	9,524	14,406	16
2007	135,041	110,341	24,700	9,554	15,146	18
2008	154,866	133,137	21,729	8,957	13,292	14
2009	117,099	95,185	21,914	8,620	13,294	18
2010	138,819	117,318	21,501	8,169	13,332	15
2011	165,327	143,811	21,516	8,053	13,463	13

表 3. 台湾の結婚総計に占める離婚率²⁴

年	合計	台湾人同士 離婚	国際結婚 の離婚	中国籍配偶者 との国際結婚	東南アジア出身配偶者 との国際結婚
2004	11.8	10.27	35.6	38.36	27.96
2005	11.79	10.38	31.79	32.15	29.37
2006	12.13	10.71	30.9	29.49	30.93
2007	10.98	9.61	28.23	25.7	31.16
2008	10.52	9.05	28.36	24.77	33.68
2009	10.72	8.97	31.14	27.67	36.7
2010	10.89	8.75	34.82	33.67	36.45
2011	10.66	8.75	31.46	28.89	35.9

²³内政統計通報 2012 年 20 週により作成 <http://sowf.moi.gov.tw/stat/week/list.htm> (2012. 6. 25) 参照

²⁴内政部戸政司全球資訊網 <http://www.ris.gov.tw/346> (2012. 6. 25) 参照

表 4. 母親の国籍による新生児の構成割合²⁵

年	總計	台湾人母親	外国人母親						
			合計	中国籍			外 國 籍		
				計	中国本土	ホンコン・マカオ	計	東南アジア各国	その他
1998	100.00	94.88	5.12
1999	100.00	93.95	6.05
2000	100.00	92.39	7.61
2001	100.00	89.34	10.66
2002	100.00	87.54	12.46
2003	100.00	86.63	13.37
2004	100.00	86.75	13.25	5.18	5.15	0.03	8.07	7.97	0.09
2005	100.00	87.12	12.88	4.87	4.84	0.03	8.01	7.91	0.10
2006	100.00	88.31	11.69	5.10	5.05	0.05	6.59	6.50	0.09
2007	100.00	89.77	10.23	4.95	4.91	0.04	5.28	5.17	0.11
2008	100.00	90.40	9.60	4.95	4.90	0.05	4.66	4.54	0.12
2009	100.00	91.32	8.68	4.64	4.57	0.07	4.05	3.94	0.11
2010	100.00	91.30	8.70	4.90	4.83	0.08	3.80	3.66	0.14
2011	100.00	92.17	7.83	4.55	4.47	0.08	3.29	3.16	0.12

多くが跡継ぎを産むことが期待されているアジア花嫁は一般的に台湾に来てまもなく妊娠した。アジア花嫁現象のピークは 2003 年であり、そして結婚後多くの花嫁がすぐ妊娠したという背景があり、外国籍女性の出産ブームは 2003 年と 2004 年において、ピークを迎えた。アジア花嫁現象ブームの沈静化とともに、アジア花嫁の出産ブームも次第に下火になってきた。ピーク時の新生児 7 人につき 1 人という割合から、2007 年に 10 人に 1 人が外国籍母親の新生児という割合に減少した。アジア花嫁の増加は、アジアにおいて最も深刻な少子化に直面した台湾で、低迷した出生率を増加させる効果をもたらしたというプラス面は否定できない。

第 2 節 アジア花嫁の社会・経済的背景

アジア花嫁の歴史を顧みたと、本節では人口移動論でしばしば用いられる理論の一つである「プッシュ・プル理論」をもとにして、アジア花嫁の社会・経済的背景および増加した諸要因を分析する。受け入れる側である台湾のプル要因と送り出す側である中国と東南アジアのプッシュ要因を分析することによって、アジア花嫁の全体像が解明される。

²⁵内政統計通報 2012 年 23 週により作成 <http://sowf.moi.gov.tw/stat/week/list.htm>
(2012. 6. 25 参照)

1. 台湾側のプル要因

① 台湾人男性の結婚難

台湾社会のジェンダー関係の変化と長年に渡り、存在している性比不均衡に加え、経済発展によって農村男性や都市部とその近郊の中低階層の男性が周辺化され結果、今日台湾人男性の結婚難をもたらした。

まず、ジェンダー関係の変化を見てみる。ジェンダー関係の変化には、高揚した女性の自意識、女性の社会進出、道徳観や価値観の変化など様々な要素が関係している。教育の観点から見てみると、女性の高等教育就学率の上昇と台湾人女性の高揚してきた自意識とは密接な関連がある。1976年の女性の高等教育就学率はわずか11.9%に過ぎなかったが、1993年に初めて男性を越え、45.8%に上昇した。さらに2002年に、男性の80.7%を約6%上回って、86.3%まで上昇した〔行政院主計處編2003:58〕。女性の高学歴化は、女性の社会経済的ステイタスの上昇をもたらした。台湾人女性の地位の高さをGEM²⁶

(gender empowerment measure) 指数から示すと、世界各国のGEMランキングにおいて、2005年台湾のGEM指数は19位で、55位の日本、65位の韓国より高く、16位のシンガポールに次いで、アジア2位になった。21%という女性国会議員の割合も日本の11.1%、韓国の13.4%よりはるかに高い。

高学歴の女性は、比較的収入の高い仕事に就き、経済的に自立することができる。また、近年、道徳観や価値観の変化とともに結婚しない女性に対する社会の批判の目は消えつつある。給料は全部自分で使い、結婚に拘束されない「独身貴族」というライフスタイルが広まっている。このような結婚に関する観念の変化とともに進んでいる晩婚化・未婚化現象は、具体的な数字から見ると、一目瞭然である。表5.の男女別・初婚年齢および年齢階級別の有配偶者率を見ると、1991年の30-34歳の女性の有配偶者率は82.8%もあり、2001年に72.0%に減少し、2007年にわずか60.2%になった。35-39歳の女性の有配偶者率は1991年の86.1%から2007年の71.2%に下落した。

²⁶ GEM 指数とは女性の経済、政治、専門職活動への参加を測定するものである。この測定は1995年、ジェンダー平等に関して、世界中の国に順位をつけるために、国連開発計画による開発された複合指数である〔国連開発計画1996:94-95〕。台湾の行政院主計処は国連開発計画が導入したGEMの計算方法に基づいて、世界各国のGEMランキングにおける台湾の順位を計算した。行政院主計処「性別統計専区」<http://www.dgbas.gov.tw/ct.asp?xItem=35&ctNode=3259> (2012.12.9) 参照

表 5. 男女別・初婚年齢および年齢階級別の有配偶者率²⁷

年別	男女別・平均初婚年齢(歳)		男女別・有配偶者率 (%)									
			15-19歳		20-24歳		25-29歳		30-34歳		35-39歳	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1991	29.1	26.0	0.6	2.4	8.2	24.5	41.7	65.1	73.2	82.8	84.5	86.1
1998	29.8	26.0	0.4	1.9	5.5	17.6	32.0	54.0	63.0	76.5	77.3	81.9
2001	30.8	26.4	0.3	1.5	4.7	13.9	27.6	47.0	59.4	72.0	74.9	79.1
2002	31.0	26.8	0.2	1.3	4.2	12.5	25.8	44.1	58.1	70.3	74.0	78.0
2003	31.2	27.2	0.2	1.1	3.8	11.3	24.2	41.5	56.6	68.5	73.0	76.8
2004	30.7	26.9	0.2	0.9	3.3	10.0	22.1	38.3	54.5	66.5	71.7	75.5
2005	30.6	27.4	0.1	0.7	2.9	8.3	20.2	34.5	52.1	63.4	70.1	73.3
2006	30.7	27.8	0.1	0.6	2.6	8.0	18.6	33.4	49.6	62.2	68.4	72.6
2007	31.0	28.1	0.1	0.5	2.4	7.4	17.0	31.4	47.3	60.2	66.8	71.2

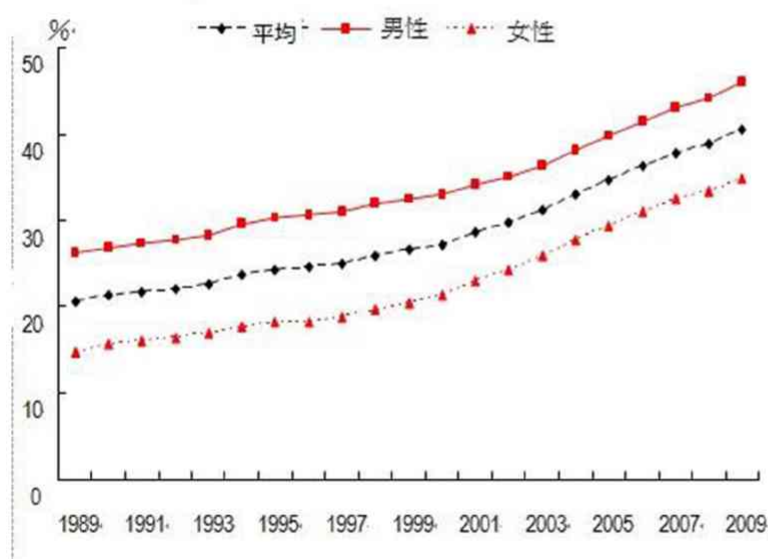


図 2. 25 歳～44 歳の男女別未婚率²⁸

図 2. を見ると、男女双方の未婚率が年々上昇しつつある。女性は、自分よりも年上で高い社会経済的ステイタスの夫を望む傾向が強いため、男性の未婚率は常に女性より 10% 以上も上回っている[行政院 20009]。

²⁷行政院經濟建設委員會人力規劃處 2009 年 6 月 9 日の新聞稿「台灣地區兩性婚姻趨勢分析」を引用 <http://www.cepd.gov.tw/m1.aspx?sNo=0011882> (2013.12.29) 参照

²⁸図 2 と図 3 は行政院主計處[2009: 17]を元にして作成

<http://ebook.dgbas.gov.tw/ct.asp?xItem=33675&ctNode=5971&mp=103> (2013.12.29) 参照

性比不均衡を見てみる。台湾は清朝の時代以来、人口構造における性比不均衡がすでに存在していて、男性人口は常に女性を上回っている。かつて「中国人の祖父がいても中国人の祖母はいない」（有唐山公、無唐山媽）という台湾語の諺がある。その背景は清国の男性限定で台湾への渡航が認められたためである²⁹ [若林 2001 : 31-33]。また、1949 年に国共内戦で敗れた国民党政権の台湾撤退とともに、大量の官僚や兵士が台湾に流入した。

近年の性比不均衡の要因に関して、専門家は加速した少子化、「後継ぎ」（傳宗接代）の固定観念と後で述べるような生殖医療技術の進歩を指摘した [行政院主計處 2009 : 16]。女性の高学歴化と晩婚化による平均出産年齢の上昇で、合計特殊出生率は低下する一方である。台湾の「少子化」現象は日本を超える速度で加速し、2010 年に台湾の合計特殊出生率が世界で最も低い国になった。台湾の少子化問題は日本と異なり、「傳宗接代」の固定観念の元で、出生性比の男児優位性という現象を伴って進行している。

台湾では憲法により男女平等が明文化されていて、また近年では従来の家族像やジェンダー観念が大きく変化したことにも関わらず、家督・財産相続の実態は相変わらず父系主義に基づいている。「傳宗接代」という伝統的な観念はまだ根強く存在していて、特に地方都市や農村地域のほうが強い³⁰。図 2「嬰兒性比例・總生育率」（新生児性比・合計特殊出生率）の推移を見ると、1985 年の出生性比はまだ正常値以内だった。1986 年から、合計特殊出生率が人口置換水準の 2 を下回って以降、出生性比は生物学的正常値とされる 105 を超えて、108 になった。つまり、合計特殊出生率が下降し、跡継ぎは男子だという固定観念からまだ解放されていないので、出生性比における男児選好の傾向が表面化した [内政部 行政院 2009 : 17]。

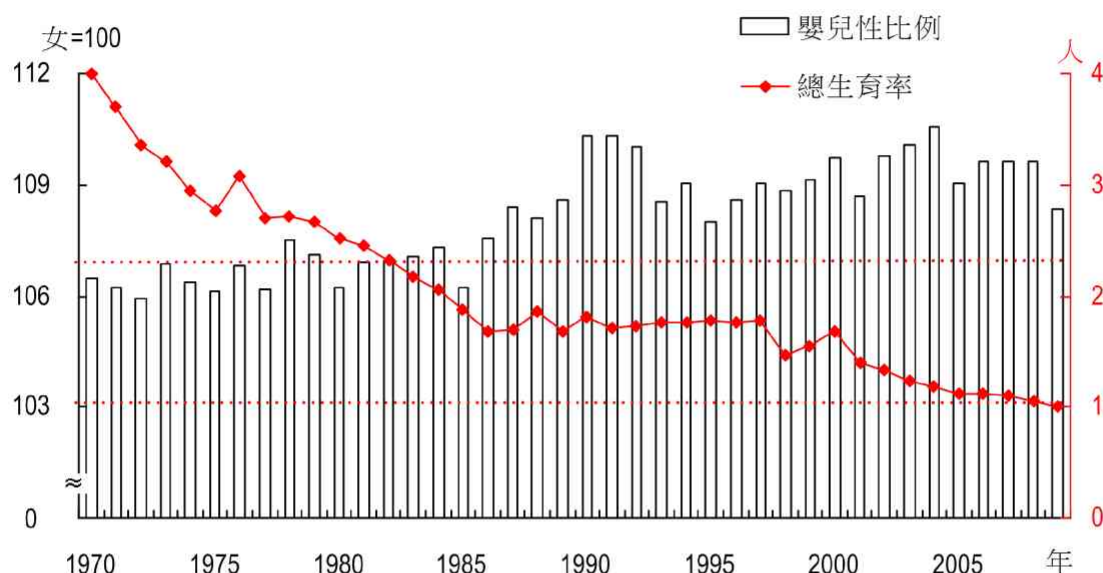
生殖医療技術の進歩は男児選好の志向を実現する手段である。80 年代に入り、本来遺伝子上の異常を確認するための超音波や羊水検査などの医療技術は海外から台湾に伝わった。しかし、羊水検査が性別判断に悪用され、胎児の性別が女兒とわかると、健康上の理由などという名目で人工中絶手術を受ける例が多いということである [澤田 2008、行政院 2009]。1986 年以降、出生性比の不均衡現象が持続している。つまり、少子化と連動する出生力の

²⁹清は台湾領有の決定とともに、台湾への渡航は認められることになったが、厳しく制限された。清国政府は三ヵ条の渡航制限令を布告し、台湾に渡航する者は、原籍地の官庁の同意書を必要とし、分巡台厦兵備道が審査し、さらに「台湾海防同知」（台湾海岸守備隊司令官）の最終審査によって許可し、密航者は厳罰に処する、台湾に渡航する者は、家族の同行を禁じ、すでに台湾に渡った者は、家族の呼び寄せを禁ずる [若林 2001]。

³⁰行政院主計處 [2009]によると、都市化が進むほど出生性比が低くなり、農村地域では出生性比が高いという。

「男性化」は、女性の晩婚化・非婚化と相まって、結婚市場における男性の過剰性、すなわち台湾人男性の結婚難の一因となっている。

図 3. 「新生児性比・合計特殊出生率」（嬰兒性比例・總生育率）



最後は台湾の経済発展によって、周辺化された台湾人男性の問題を考える。前節で述べたように、始めてアジア花嫁現象のブームに火をつけたのは農村男性である。台湾政府の「都市工業への傾斜」の政策によって、農家の人々は「台湾経済の奇跡」の犠牲者となったのである[夏曉鵬 2002: 175]。とくに、台湾経済が発展する段階の 1960 年前後に出生し、台湾資本が海外進出し始める段階に適齢者になる台湾人男性である。経済面も婚姻面も周辺化された男性は単に農村の青年だけではない。漁業に従事している男性や工場に働いているブルーカラーも深刻な結婚難に悩んでいたのである。王宏仁の調査によると、ベトナム人女性と結婚した台湾人男性は平均年齢が 40 才前後、職業がブルーカラー、運転手、自営業、農業に集中しており、全国平均収入よりやや低い地域に居住する割合が高い[王宏仁 2001]。要は、台湾社会の劣位に置かれた、時代に取り残された男性とも言えよう。

こうした台湾人男性のジェンダー意識は時代の変化にもかかわらず、進んでいない。初めてアジア花嫁現象における台湾人男性を研究対象とした論文「外国籍花嫁を娶る台湾人男性の生活経験研究」(台灣男性擇娶外籍配偶之生活經驗研究)によると、インタビューを受けた男性の台湾人女性に対する見方は下記の 3 点だという。(1) 台湾人女性の望みが高

いし、要求が多い。結婚相手を選択する基準は身長、学歴、給料における「三高」（身長が高い、学歴が高い、給料が高い）である。（2）台湾人女性の自主性が高い。自主性が高い女性は人の意見を受け容れず、意志の疎通が難しい。結婚後の嫁姑問題が予想できる。（3）伝統的美徳も見られない。昔の「三従四徳」（結婚前に、父に従う。結婚後、夫に従う。夫が亡くなった後、長男に従う。貞順、婦言、婦容、婦功という四徳）、「おとなしい、言うことを聞く」、「家庭を重視する」という女性の美徳が台湾人女性には見られなかったと男性は考えている[鍾重發 2003 : 53]。伝統的な家族像が大きく変化したにも関わらず、古き良き妻を求めている台湾人男性がいる。彼らは家父長的思想が強く、「子孫を残さないことは、最も親不孝」（不孝有三、無後為大）と考えて、自己主張が高い台湾人女性との自由恋愛と比較すると、むしろ「夫の言うことを聞く従順」な女性というイメージがあるアジア花嫁との国際結婚のほうが安全で確実だと思って、国際結婚を選択したのである。

台湾とベトナムの国際結婚における台湾人男性の動機を分析した Wang と Tien も台湾人男性の伝統的なジェンダー意識を指摘した。こうした台湾人男性は「男性は一家の大黒柱であるべき、女性は夫に頼って、婦徳を守るべきである」と考え、「台湾人女性が求める生活水準が高すぎ、みんな自立しすぎだ」と語った。「越境結婚は単なる結婚だけではなく、台湾人男性が求めている「男らしさ」（masculinity）の実現にもつながる。要は、地元の台湾社会では実現不可能な伝統的なジェンダー関係は越境結婚により、実現した[Wang and Tien 2009 : 13-37]。そもそも、彼らは台湾の結婚市場において、不利な位置に置かれ、地元の台湾人女性に相手にされない人々といえよう。そもそも、彼らは台湾の結婚市場において、不利な位置に置かれ、地元の台湾人女性に相手にされない人々といえよう。

近年、中国および東南アジア女性と結婚した台湾人男性は経済的・社会的地位が低い男性に限らず、科学工業園区などの半導体企業に勤めるエンジニアやサラリーマンも増えてきた。彼らは平日仕事に打ち込む一方で、異性と知り合う機会が乏しいため、ますます婚期が遅れた。また、会社の管理職で妻と死別した熟年の男性が、子供が独立し、自分の第2の人生を求めるため、20代の東南アジア女性と結婚した事例もしばしばマスメディアで報道された。

② 文化的類似性

国際結婚における当事者にとって、配偶者を選択した際、文化的類似性は重要な役割を

果たしている[竹下 2000、謝億榮 2006]。台湾人男性が中国籍配偶者を選択した最大の理由は、常に言葉や文化の壁がなく、結婚生活が順調に行くからと答えている。また国民党老兵と離婚歴のある中国籍配偶者という組み合わせの「介護式」結婚において、国民党老兵は、故郷の方言を話せる中国籍配偶者に対して、親近感を持っている。台湾人男性と中国人女性との国際結婚を研究した劉千嘉によると、多くの国民党老兵は現在の介護、また老後の介護のために、年齢が 20～30 歳も離れた中国人女性と結婚した。こうした国際結婚はよく「介護式」結婚と呼ばれている[劉千嘉 2003]。

若者が中国籍配偶者を選択した理由は将来の子供の教育のためだと考える。漢字が読めない東南アジア出身の女性なら、子供の教育指導ができない。漢字が読める中国人女性なら、子供の教育指導ができる[劉千嘉 2003]。中国で通用している漢字は簡体字だが、台湾に来て勉強すれば、繁体字の中国語も読めるようになる。中国籍女性にとって、台湾は中華文化圏に属し、言葉や文化の壁がなく、隣接したアジアの韓国・日本と比較すると、海外の中で生活しやすい環境のひとつである。

続いて、台湾と東南アジアとの国際結婚における文化的類似性を見る。台湾人男性は東南アジア出身の女性を配偶者として選択する際、中華民族の「血」が流れている華人が好まれている[横田 2006]。初めてアジア花嫁ブームに火をつけたのは客家人の農村の結婚難であった。80 年代初期、花嫁候補は客家系華人を最優先し、続いて福建省南部から東南アジア各国に移住した閩南系華人が好まれていた。華人を優先する要因には、客家語³¹ないし閩南語ができ、「教養」が相対的に高く、肌が白いことが挙げられる。その中で、客家語ないし閩南語の能力は結婚生活において、意思疎通の第一条件である。客家系華人が喋っている客家語と閩南系華人が喋っている閩南語は現在台湾社会で通用されている客家語と台湾語は多少差異が存在しても、意思疎通が可能である。このように、台湾とインドネシアとの国際結婚に関して、客家人や福建系華人が好まれている理由は文化的類似性と指摘されている[諾曼・古德曼 2002、Hsia 1997、金戸 2008]。一方、インドネシア籍華人女性は華人という誇りを持っていて、地元のジャワ人との結婚を避けて、華人同士の結婚を望

³¹台湾の 4 大エスニック・グループはそれぞれの出自言語があり、先住民はアミ語、アタヤル語などである。客家人は客家語、閩南人は閩南語、外省人は中国語（北京語）を使用している。なお台湾では通用した閩南語は日本統治時代を経て以来、中国福建省南部で使われている閩南語と違い、独自の変化を遂げし、近年は台湾語と呼ばれた場合が定着している。言語学者である黄宣範は 1993 年台湾のエスニック・グループの人口を調査した。閩南人が 73.3%、客家人が 12%、先住民が 1.7%、外省人が 13%という比率の結果が出た[黄宣範 1995]。

んでいる。実際、本論文の主な聞き取り調査対象の一人であるインドネシア籍華人 G と G の両親はまさに、このような思いを抱いている（第 3 章第 1 節参照）。

華人以外の女性ならば、東南アジア諸国の中で、ベトナム人女性が最も好まれている。その背景として、文化的類似性も常に指摘されている[王志弘 2006、金戸 2008、Nguyen and Tran 2010]。台湾とベトナムとの国際結婚仲介業者の宣伝文句を見ると、「東南アジア諸国の女性の中で、ベトナム人女性の外見は台湾人と最も似ていて、肌が白い」と書かれている。外見だけではなく、実際、東南アジア諸国の中では、ベトナム文化は中華文化圏に最も近いとされている。ベトナムは秦の始皇帝以後、1000 年にわたって中国王朝の郡県支配を受け、中国文化の影響が深く浸透した。宗教的習慣に関して、台湾人の仏教信者は旧暦の一日と 15 日に殺生せず、菜食しか食べない習慣がある。ベトナムの仏教も同じである。台湾人にとって最も重要な節句である「三大節」（春節、端午節、中秋節）はベトナムにもある[陳蓓琿 2007]。また、台湾とベトナムの伝統的な側面における社会・文化の類似性と、現在のベトナムの経済・社会の発展の度合いが 1960 年代の経済発展前の台湾社会に類似している。つまり、伝統的な家族規範や女性の勤勉さにおいて、ベトナムは昔の台湾の農村社会と類似性を持っている。そのため、古き良き女性を求めている台湾人男性はベトナム人女性に親近感を持っている[王志弘 2006、金戸 2008]。

2. 中国人女性との国際結婚

送り出す側である中国側のプッシュ要因に関して、経済格差と「現代化への憧れ」を指摘したい。ただし、経済格差は同時にプッシュ要因でもあり、プル要因でもある。

① 経済格差

台湾と中国の両国の貿易経済関係の発展（台湾企業の海外進出）は国際結婚の増加に関して、きわめて重要な役割を果たしている。台湾と中国結婚の動向と台湾が中国へ投資するトレンドが一致した[夏曉鵬 2002]。1979 年に中国が従来武力解放方針を改め兩岸の交流を呼びかけたことから、両国の間の貿易と投資が開始された。その年、中国は香港に隣接する深圳、マカオに隣接する珠海、華僑が多く海外との交流が密接である汕頭、台湾の対岸に位置する廈門を経済特区として指定した。一方、台湾は蔣経国政権時代の 1980 年代半ばに中国との中継貿易を黙認し、更に 1991 年からは中国への間接投資も解禁した。その

後、台湾と中国の経済交流は急速な進展を見せ、2007年に両国の貿易総額は1000億ドルを超え、台湾の中国に対する貿易依存度は約22%になった。また、2011年度の台湾対中国の貿易総額は1693億ドルで、中国は台湾の最大な貿易パートナーとなった。台湾企業が中国に進出とともに、台湾商人、台湾籍幹部、駐在員、技術者など多くの台湾人男性が中国に移住した。90年代後半から、単身赴任の既婚台湾人男性が上記の経済特区で「愛人を囲む」（包二奶³²）文化が流行っている。2008年、中国との友好政策を貫いている国民党の馬英九総統が当選以降、中国との関係は急速に緊密化し、いまや台湾の輸出額の4割を中国が占め、中国に進出した台湾企業は10万社以上、中国に在住する台湾人は上海、アモイ、広州など大都市を中心に100万人（台湾の全人口は約2300万人）、年間往来者数は年間500万人を超えるといわれるまでになった。

「中国籍配偶者の台湾生活の状況に関する訪問と調査」（大陸配偶來台生活状況案例訪視）[陳小紅 1999]によると、中国人女性と結婚した台湾人男性は次の3つのタイプという。（1）長期的に中国に駐在する台湾商人と台湾人幹部、（2）親族訪問する際、親戚の紹介で故郷の女性と結婚した男性、（3）仲介業者の紹介で中国人女性と結婚した男性。とくにタイプ（1）のように、台湾企業の中国進出も台湾と中国の結婚の増加に関して、きわめて重要な役割を果たしている³³。このように、両国の人々の交流が活発になり、台湾と中国との国際結婚は次第に増加してきた。

中国の政策も台湾と中国の国際結婚に関係している。1980年代に改革開放政策が進行しつつあり、中国人民も海外に行けるようになった。「台湾統一」という政治的戦略として、「台胞」（台湾人同胞）に対し、友好ムードを演出している[謝億榮 2006：23]。中国政府は「兩岸加速通婚、祖国加速統一」（兩岸の通婚ベースを加速すると、中国と台湾の統一を加速することができる）というスローガンを出して、台湾との国際結婚を推進している。90年代台湾との交流が開放した最初、当時まだ経済発展していない中国の人々にとって、電気製品をお土産として親族に配る台湾人老兵および台湾人は金持ちで、台湾は「宝島」だと思われるようになった。台湾人と結婚することが、貧困を脱出する最善の方法だとされた。離婚した中国の農村女性は、台湾人男性との再婚が人生を逆転する最速な方法だと考えていた[劉千嘉 2003、林照真 2003、賽漢卓娜 2011]。

³²二奶とは愛人のことである。包とは「包養」の省略で、愛人に金銭を提供し、面倒を見る意味である。

³³本論文の調査対象の一人である中国籍 WA はまさにこのタイプ（1）の国際結婚である。

②「現代化への憧れ」

送り出す側の国の女性は母国において、皆が社会の底辺にいる貧しい人々ではないと言えよう。山形県在住の韓国人妻の主体性を研究している柳蓮淑は経済的要因だけでは説明しきれない部分があると主張し、「文化的逃避」という言葉で開発途上国の女性の行動を説明した。女性の意識の変化と共に、従来の結婚制度の中に入ることを避けようとする行動が生じた。経済的により豊かな国に移住すれば、「近代的で、よりよい生活が待っているのではないか」という期待を抱いて、国際結婚の道を選んだという。彼女らは出身国で中産階級に所属していて、越境する能力と情報を持ち合わせている比較的高学歴の女性たちである〔柳蓮淑 2006: 119-133〕。韓国人妻が日本男性との国際結婚を選択した動機と中国人女性が台湾人男性との国際結婚を選択した動機には類似している側面もある。また、林照真[2003]によると、台湾に移住した中国籍花嫁には2つのタイプがあるという。一つのタイプはより良い暮らしを望んでいる農村女性で、再婚と再再婚の形で国民党老兵と結婚したものである。もう一つのタイプは、学歴が相対的に高く、若い女性が台湾人男性と自由恋愛で、結婚したものである。心理的に潜んでいる「現代化への憧れ」によって、国際結婚を選択したのである。中国の若い女性は台湾社会に憧れを持っていて、台湾がテレビドラマ「流星花園」³⁴で描かれたような社会だと思っている。このように中国の女性が台湾のドラマ、バラエティ番組の影響を受けて、台湾社会に対して「現代化への憧れ」を持つようになった。ただし、結婚移民として日本に移住した韓国女性と違って、中国の女性は「文化的逃避」というよりも、むしろ「現代化への憧れ」という動機で国際結婚を選択したと考えられる。

3. 東南アジア出身女性との国際結婚

送り出す側である東南アジア諸国側のプッシュ要因に関して、経済格差と国際結婚仲介業者の関与およびベトナム人女性の社会的背景を分析する。この中の経済格差と国際結婚仲介業者の関与は同時に受け入れる側である台湾社会でも存在しているため、プル要因とも言える。

³⁴ 「流星花園」とは日本の少女漫画である『花より男子』を脚本にした台湾ドラマである。台湾で記録的なヒットになり、世界13カ国に輸出された。とくに香港、中国、インドネシア、シンガポール、フィリピンでは海外ドラマ歴代最高視聴率を記録するなど世界的ヒット作となった。

① 経済格差

夏曉鵬[2002]は、アジア花嫁現象を資本の国際化による商品化された国際結婚だと解説した。資本主義の発展によって、不公平な経済活動が展開され、「中核部」、「半中核部」、「周縁部」という「新国際分業関係」がもたらされた。アメリカ、日本、ヨーロッパなどの中核部諸国の多国籍資本は市場開発や投資のために、1980年代からマレーシア、タイなどの周縁部国家に進出した。自由市場経済のグローバル化によって、先進国の多国籍企業が国境を超えて、超国家的に経済活動をしている。大競争の時代、多国籍企業が競争に打ち勝つために、より安い賃金で労働者を使い、より悪い労働条件で酷使する。資本主義の発展によって、不公平な国際分業関係がもたらされた[夏曉鵬 2002 : 161-193]。台湾にきた東南アジア出身の女性にとって、国際結婚は本人が母国の貧困を脱出するという目的以外に、生家の経済的状況を改善できる生存戦略の一つでもある。上で述べたように台湾人男性も国際分業体制のものの犠牲者の一人として、ホスト社会の結婚市場で周縁化されたため、やむをえず発展途上国の女性との国際結婚を選択したのである。

台湾と東南アジア諸国との貿易経済の発展を見てみる。台湾經濟部投資審議委員会の資料によって、1987年度の東南アジアへの投資金額は海外投資の全体の18.2%を占め、1870万ドルだった。1991年に、東南アジアへの直接投資はさらに43.5%にも上った。1997年のアジア通貨危機の影響を受けたにもかかわらず、東南アジア6国（タイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア、シンガポール、ベトナム）の投資当局の公表資料によって、1998年9月までに台湾の投資金額は379億ドルもあり、アジアNIEsにおいて一位であった[陳庭芸 2002 : 41-44]。こうした東南アジア投資ブームの背景は、台湾政府が1994年に東南アジアへの投資という「南向政策」を決定したことである。1994年から1997年という3年の期間を設定した。その結果、1回目の東南アジア投資ブームを引き起こした。その後、1998年3月4日、行政院が可決した「東南アジアに対する経済貿易活動を強化する具体的な措置」（加強對東南亞經濟貿易行動方案具體措施）によって、2回目の東南アジア投資ブームが形成された。「南向政策」が引き起こした2回の東南アジア投資ブームのものと、直行便の開通、商工会議所の設置、人・モノの活発な交流ができた。そこで、台湾人男性と東南アジア女性との国際結婚はさらに増加した。

② 国際結婚仲介業者の関与

台湾と東南アジア諸国との間に、インドネシアやカンボジアなどとの国際結婚仲介業者システムが形成された。その中で、最も大きな国際結婚仲介業者システムと言うと、台湾とベトナムとの間に形成された国際結婚仲介業のメカニズムである。台湾とベトナム結婚仲介業の仕組みと役割について現地調査³⁵した王宏仁と張書銘は台湾とベトナム間の国際結婚の数の増大の背景に、国を跨る結婚仲介に関する分業体制のネットワークが存在していると指摘する〔王宏仁・張書銘 2003〕。調査結果によると、こうした分業体制のネットワークにおいて、台湾側にいる大手仲介業者と個人ブローカー、ベトナム側にいる「海外の台湾出身の企業経営者」（台商）と台湾仲介業者の海外代表の台湾人、華人係である大手ブローカー、ベトナム人個人ブローカーと関連書類の専門代理人など、それぞれの役割を果たしている。個人ブローカーは農村にいる花嫁候補を探して、ホーチミン市にいる大手ブローカーのところに連れて来る。各大手ブローカーの手元には数人の個人ブローカーが存在し、個人ブローカーの手元には、10 から 100 名ぐらいの花嫁候補がいる。台湾人男性がベトナムに見合いに来る前、総務役である大手ブローカーは提携している個人ブローカーに時間と場所を知らせる。それぞれの個人ブローカーは、また手元の花嫁候補を連れて、見合いに参加させる。

分業体制では、意味深いのは、探される花嫁候補は非華人系の若い女性ということである。なぜかと言うと、華人系なら、台湾人男性との意思疎通ができるため、自然に金銭的要求や物資的注文が多くなるからである。こうなると、顧客には申し訳ないし、また利潤も減少するケースが多いという。言葉が通じる「売り手」の花嫁は中間の商人である仲介業者を越えて、直接に「買い手」である台湾人男性と接触することによって、中間の商人の利益が減るからである〔前掲書：201〕。また、こうしたブローカーの数の増加とともに、同業の競争が激しくなった。そこで、商品価値を高めるために、商品である「花嫁」の「値下げ」や「加工」³⁶ が始まった。「最大の利益」を追求するために、ますます「女性の商品化」が進行していると言えよう。まさしく二人の論文のタイトル「商品化された台湾・

³⁵ 王宏仁と張書銘が 2000 年(8/3-9/3)、2001 年(2000/12/29-2001/1/21、6/21-7/15、12/7-12/18)にベトナムへ赴き、ベトナム花嫁候補、台湾男性、ホーチミン市に駐在した台湾弁事処の役員、仲介業者の「台商」、台湾仲介業者の海外担当者を対象に調査した。しかも、実際に仲介する過程および見合い現場に参加した調査である〔王宏仁・張書銘 2003：177-211〕

³⁶ 「加工」とは商品である「花嫁」の利益を上げるために、地方から来た花嫁候補の女性をおしゃれな格好にすることと花嫁を教育することである。教育内容は中国語と台湾語の学習などである。

ベトナム国際結婚市場」(商品化的台越跨國婚姻市場)の通りである。国際結婚市場はもうはや新興産業の一つとしてなっていて、仲介業者だけではなく、台湾人男性と結婚したベトナム人女性も市場に参入し、姉妹・親戚・友人を夫の親戚や友人、近所に紹介し、個人ブローカーになった。

近年国際結婚の仲介に関しては、結婚の商品化や人権などの点から問題視されてきた。2007年12月26日に修正された入出国及移民法の第58条では、国際結婚の仲介に関してつぎのように述べられている。(1) 国際結婚の仲介を営業として行うことは許されない、(2) 国際結婚の仲介により報酬の要求や契約をすることは許されない、(3) 広告物、出版物、ラジオ、テレビ、インターネットなどの公衆に伝える方法を用いて、国際結婚の仲介を宣伝することは許されない。さらに、国際結婚の仲介に関する宣伝を委託・受託・自身で行った場合には、入出国及移民法第78条に設けられた罰則により10万台湾ドル以上50万台湾ドル以下の罰金に処せられる。確かに、こうした仲介業者の宣伝に関して、女性を商品として扱うことを禁止すべきだが、国際仲介業者の功利的な一面を強調するだけではなく、地元の女性と結婚できない台湾人男性の結婚問題を解決し、上昇婚を求めるベトナム人女性に安全で確実な道を提供した分業体制の一面も評価すべきだと考える。

③ ベトナム人女性の社会的背景

東南アジア女性との結婚に関しては、中国人女性との国際結婚と同様に、経済格差、国際結婚仲介業者の関与、文化的類似性が共通するほかに、東南アジア各国の社会的背景も常に指摘される。台湾に來た東南アジア出身の女性配偶者の中で、人数が最も多いのはベトナム籍配偶者であるため、ベトナムを中心に述べる。

王と張の調査[2003:177-211]によると、台湾人男性と結婚したベトナム人女性はメコンデルタ地域出身で、実家は農業か自営業が多い。彼女らの出身地はほぼカントー、ドンナイなどの「メコンデルタ地域」(下六省)という。南部のティエンザン省では、外国人と結婚した女性が増え続けている。1995～1998年の4年間に外国へ嫁いだ女性は合計1464名である。その相手の男性配偶者は、アメリカ人が560人で、台湾人が379人で、それ以外はオーストラリア人とカナダ人だった。ただし、台湾人以外は、全て海外に移住したベトナム系男性だった。また、1995年に外国人と結婚した263名の女性はほぼ農村出身の若い女性だった。外国人と結婚したベトナム人女性に関する正式な統計はないが、ほかの省で

は外国人と結婚した女性はさらに多いと言われる。ベトナムの地方紙でも上記と類似した報道がある。台湾人男性との国際結婚はメコンデルタ地域だけで起きた現象ではなく、各省の農村にも広がった。たとえば、カンボジアと接したタイニン省は農業に従事する人が多くて、生活が貧困である。外国人男性と結婚した女性が多い。ベトナムで最初はホーチミン市で現れた現象だが、このように各地に広がっていた。台北駐ホーチミン市経済文化弁事処の2004年度ベトナム人女性配偶者の戸籍統計資料〔龔宜君・張書銘2011:5〕によると、タイニン省が最も多いが、メコンデルタ地域（カントー、ドンナイ、ロンアン、ドンタップ、アンザン、ティエンザン、キエンザン、ヴィンロン、ベンチェ、チャーヴィン、ソクチャン、ハウザン、バクリエウ、カマウ）の各省を合わせると、台湾人男性と結婚した全ベトナム人女性の6割を超えた。その中で、数多くのベトナム女が台湾人男性と結婚したカントー省のTHOT NOT区は「台湾島」と呼ばれていて、〔龔宜君2005:9、Nguyen and Tran 2010:171〕、ヴィンロン省にも「台湾島」と呼ばれる地域がある〔范明秋2008:37-38〕。また、カントー省の資料によると、2000年から2003年まで、外国人男性と結婚した地元の女性の9割以上が台湾人男性と結婚した〔Nguyen and Tran 2010:161〕。

なぜ台湾人男性と結婚したベトナム人女性はメコンデルタ地域に集中したのか。2004年ベトナムの研究者Nguyen and Tranはホーチミン市国立大学と連携し、台湾人男性との国際結婚ブームに関して、メコンデルタ地域に在住の635世帯と460人の若者の聞き取り調査を行い、ベトナム人女性の背景を明らかにした。この調査はマクロの視点とミクロの視点から台湾人男性とメコンデルタ地域の女性との国際結婚の要因を分析した。マクロレベルの視点から分析すると、メコンデルタ地域は土地が肥えていても、天災や洪水が多く、多くの人々は農業に従事して、貧困である。次は、また、「男尊女卑」という儒教思想はまだこの地域に強く残っている。時代が変わっても、地方の村では教育レベルが低くて、古い思想がまだ残っている。台湾人男性はこうした古き良き女性を求めている。さらに、台湾はベトナムに投資する諸国のうちで、最大の投資国である。マクロレベルの視点から分析すると、経済事情が最大の理由である。この地域の世帯は全国の平均収入より低く、教育レベルも非常に低い。多くの親は娘と台湾人男性との国際結婚を望んでいて、貧困脱出の唯一の方法だと思っている。女性本人も実家の経済状況の改善のため、台湾人男性と結婚したと答えている。また台湾に移住した女性の成功の例を見て、多くの地元女性は刺激を受けた。地元の女性はこぞって、台湾人男性と結婚するようになった。さらに、台湾人

男性と結婚したベトナム人女性は両国の間にもっているネットワークを使って、親戚や友人の女性を台湾人男性に紹介した[Nguyen and Tran 2010 : 165-167]。

台湾とベトナムの国際結婚におけるベトナム籍配偶者と生家との繋がりを研究しているベトナム人研究者范は世帯戦略を指摘した。自身の貧困脱出以外に、彼女らの家族も階層の上昇を願っている。要は、経済と面子の問題である。資本主義国家の男性と結婚することはベトナムの農家の人々にとって、家族の誇りである。周囲の農民や近所にとって、資本主義国家の男性と結婚した女性およびその家族は地元の人々より高い社会的地位を持つことになる[范明秋 2008 : 9]。

国際結婚は単なる地方に住む人の世帯戦略だけではなく、都市部の若い女性の憧れにもなった。近年経済発展してきたベトナムでは、台湾系企業や台湾系工場で台湾人幹部と知り合って、結婚に至った事例³⁷も増えてきた。知り合いや同僚が台湾人男性と結婚し、海外移住という夢が叶った事例を見て、自分もいつか台湾人男性と知り合って、海外暮らしをしたいと思います都市部の若い女性が多くなった。

多くの親と若いベトナム人女性は台湾人男性との国際結婚を望んでいるが、一方ベトナム政府、マスメディア、女性団体はこうした国際結婚に反対している。結婚仲介業者の手配したお見合いを通して短時間で数多い女性を商品として選択することが批判され、商品化された国際結婚と呼ばれて、台湾人男性の嫁探し問題はベトナムでも社会問題となっている[渡辺 1998、許雅恵 2004、龔宜君 2005、謝億榮 2006]。ベトナムの法律では 18 才以下の女性の結婚が禁止されている。しかし、多くの若い女性は経済状況の改善のため、高校に進学せず、年齢が離れた台湾人男性と結婚した³⁸。ベトナムのマスメディアは台湾人男性がベトナム花嫁を選択するやりかたが台湾とベトナムの両国のプライドを傷つけることだと批判している。また、台湾人男性との離婚、再婚の繰り返しを手段として、豊になるという目的を達成したベトナム人女性に対して、非難の声が上がっている。台湾に移住したベトナム籍配偶者は DV を受けたり、台湾人家族に虐待されたりする痛ましい社会事件が起きると、地元のマスメディアは大きく報道する。女性団体はいつも政府に抗議している[許雅恵 2004、龔宜君 2005]。さらに、多くの地元の女性が台湾人男性と結婚したため、メコンデルタ地域の男性はすでに深刻な結婚難に直面している[Nguyen and Tran 2010 : 176]。

³⁷本論文の調査対象のベトナム籍 CH はベトナムの台湾企業の工場で働いたとき、台湾人幹部と知り合い、結婚した。

³⁸高雄市に移住した複数のベトナム籍花嫁の聞き取り調査で得た情報である。

ベトナム政府は自国の女性を守るために、近年国際結婚に関する法律や規定を次々と策定し、違法な行為の取り締まりを強化している。2000年に改正された婚姻・家族法は[外国要素のある婚姻・家族関係]という条項を新たに設け、細則として2002年に政府議定書を発効した。同書は「女性と子供の労働力・性売買」を目的とする偽装結婚を取り締まるために策定されている。アメリカ国務省の人身売買報告書の勧告を受け、2011年には人身売買禁止法が制定された。国としては性売買を規制するのであって、本人同士の合意による国際結婚を認めないというわけではない。ホスト社会・家族に適応できるような取り組みが地方の女性団体などで始まっている[岩井 2012 : 187]。

第3節 高雄市のアジア花嫁

前節では台湾におけるアジア花嫁の歴史と背景を紹介してきた。序論でも述べたように、アジア花嫁に関する先行研究の大半は農山漁村地域を対象にしたもので、都市部の先行研究は数少ない。都市部のアジア花嫁の生活適応を判明するために、筆者は、台湾で2番目の都市である高雄市を調査地として選定した。本節では高雄市のアジア花嫁に焦点を当て、さらに深く考察するため、高雄市の概況とアジア花嫁の現状、および主な調査地域である三民区におけるアジア花嫁の現況を紹介する。

1. 高雄市の概況とアジア花嫁

高雄市のアジア花嫁の現況を紹介する前に、高雄市の概況と現住人口の婚姻状況という重要な背景を理解する必要がある。

① 高雄市の概況

現在の高雄市は2010年12月25日に高雄県と合併し、台湾において面積が最も広い直轄市となった。なお、本論文の調査地が全て元の高雄市の範囲内であり、また、調査が合併前の2009年から始まったので、本論文で言及する高雄市は全て合併前の11行政区からなる高雄市のことである。

高雄市は西が台湾海峡、南が巴士海峡に面し、台湾の西南部に位置している。面積は153.6km²で、名古屋市の半分よりやや小さめの面積を有し、台北に次いで二番目に大きな

都市である。1月の平均気温は18.8度で、7月は28.9度である。1966年から楠梓区において加工輸出区が開業し、以後、加工貿易の工業団地や重化学工業のコンビナートが集積し、台湾随一の工業都市となった。臨海工業区には中国鋼鉄株式会社、中国造船株式会社など国営企業の工場が立ち並び、台湾経済を支えている。また、市内には国内最大の貿易港があり、総面積27km²の高雄港はインド洋と東北アジアを結ぶ重要な中継地である同時に、台湾の最も重要な対外貿易港である。

高雄市の周辺に重工業地帯が広がり、1980年代に大気汚染、水質汚染が社会問題となっていた。また外省人の多い台北に対して本省人の多い高雄は野党的色彩や台湾アイデンティティが強く、1979年に美麗島事件（高雄事件³⁹）なども発生している。近年高雄市の中心を流れている「愛河」の汚染問題を改善し、環境保護に対してさまざまな施策を講じた。大規模な観光産業の開発を随時行っていて、都市のメインストリートには沢山の木々や花々などが整備され、信号や道案内の看板がLEDで作られ、エコテクノロジーが多く取り入れられている。高雄市は過去の政治抗争、労働者デモのイメージから脱皮し、「緑」、「エコロジー」、「文化」及び「自然」の方向に向けて、観光都市となった⁴⁰。

³⁹美麗島事件（高雄事件とも称す）は1979年12月、世界人権デーに台湾高雄市で行われた雑誌『美麗島』主催のデモが、警官と衝突し、主催者らが投獄されるなどの弾圧に遭った事件。台湾の民主化に大きな影響を与え、今日の議会制民主主義や「台湾本土化」（台湾を本土として生きていくという住民の民意を体現した行政理念）へと繋がった。美麗島事件は民進党の政治的出発点であると言える。民進党結党以前の事件であるが、後の党員の多くが事件に関連し、民主改革と国民党の一党独裁体制の打破に大きな功績を残した。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%BE%8E%E9%BA%97%E5%B3%B6%E4%BA%8B%E4%B%B6>（2014.12.31）参照

⁴⁰高雄市政府全球資訊網における高雄市紹介の資料を参考にして作成

<http://www.kcg.gov.tw/CP.aspx?n=2C50CC76EFD6D489&s=E8EDF3395DA7BF79>
（2013.2.11）参照

地図 1. 台湾地図における高雄市の位置⁴¹



地図 2. 高雄市の行政区地図⁴²



表 6-1. 高雄市各行政区の人口統計⁴³ (2010 年 11 月)

⁴¹台湾 ing「地図」 <http://taiwaning.zening.info/map/Taiwan-County-Map.htm> (2013.12.17) 参照

⁴²高雄市政府情報網 <http://www.kcg.gov.tw/japanese/> (2008.10.5 参照)

行政区	人口數(人)	面積(km ²)	人口密度(人 / km ²)
鹽埕區	27,434	1.4161	19,373
鼓山區	131,578	14.7523	8,919
左營區	191,735	19.3823	9,892
楠梓區	172,919	25.8276	6,695
三民區	354,191	19.7866	17,901
新興區	55,413	1.9764	28,037
前金區	28,955	1.8573	15,590
苓雅區	184,189	8.1522	22,594
前鎮區	199,375	19.1207	10,427
旗津區	29,969	1.4639	20,472
小港區	154,424	39.8573	3,874
高雄市	1,530,182	153.5927	9,963

表 6-2. 高雄市の各行政区 1 世帯当たり年間平均所得⁴⁴（台湾ドル）（2009 年）

行政区	総所得	可処分所得
鹽埕區	1,006,935	835,807
鼓山區	1,153,488	948,753
左營區	1,164,294	954,575
楠梓區	1,104,029	890,656
三民區	1,077,264	897,892
新興區	1,462,018	1,250,627
前金區	977,280	724,384
苓雅區	1,166,469	942,767
前鎮區	1,124,051	947,066
旗津區	770,198	661,033
小港區	1,129,445	926,895
高雄市	1,126,130	928,214

続いて、表 6-2. 「高雄市の各行政区 1 世帯当たり平均所得」を紹介することによって、各行政区の生活水準を把握することができる。上位ランキングを見ると、1 位が新興區、2 位が苓雅區、3 位が左營區である。1 位の新興區は高雄市の真ん中にあり、商業ビル、銀行が林立し、高雄市の金融センターと称される。2 位の苓雅區は文化教育区と称される。その理由は、重要な芸術と文化イベントの展示場所の「高雄市文化中心」（高雄市文化センター）と、高雄師範大学をはじめとする名門校らが苓雅區に集中しているからである。3 位の左營區には、古い「眷村」が残存している地域もあれば、高速鉄道と地下鉄の開通によって、発展が著しい地域もある。近年、新興區をはじめとする商業圏の発展はすでに飽和状態になり、都市の発展は北部（左營區）へ進む一方である。さらに下位を見ると、最下

⁴³高雄市政府民政局「人口統計」を元に作成

<http://cabu.kcg.gov.tw/ReportView3.aspx?typeID=120&ReportType=3>（2010.12.11 参照）

⁴⁴ 中華民國統計資料網／主計總處專區／家庭収支調査

<http://www.stat.gov.tw/lp.asp?CtNode=510&CtUnit=352&BaseDSD=7&mp=4>（2010.4.5 参照）

位が旗津区である。旗津の世帯平均所得は他の行政区と比較すると、桁違いに低い。旗津は高雄市の離島にある小さな漁港であり、漁業に従事している人口が多い。漁業は不安定で、住民の収入が低い。行政区の中では、旗津の発展が最も遅れている。また、高雄市の中心部との交通が不便であるために、過疎化が進む一方である。

① 高雄市の婚姻状況

2010年11月末時点で高雄市の人口は1,530,182人で、世帯数は588,439世帯、一世帯あたりの平均人数は2.6人である。65才以上の高齢者数は154,785人、高雄市全人口の1割（10.1%）を占めている。2009年度の初婚年齢は、男性が全国平均の31.6歳をやや上回って32才であり、女性が全国平均の28.9をやや上回って29.5才である。台北に次いで、初婚年齢が最も高い都市である。高雄市を台湾全体と比較すると、大都市的性格を反映して平均世帯人数は少なく、高齢者率が高く、晩婚化傾向が著しい。

年齢別、学歴別、男女別の高雄市の現住人口の婚姻状況を紹介する。まず、年齢別と男女別の婚姻状況を紹介する。未婚人口の統計から見ると、各年齢層で男性は女性より大幅に上回っている。特に、30～34歳（性比140）と35～39歳（性比136）という年齢層では、未婚男性の割合が高い。結婚適齢期に当たる30～34歳、35～39歳という年齢層では、人口性比がほぼ均衡であるにもかかわらず、未婚男性人口の多さという統計から、高雄市男性の結婚難の深刻さが明らかになる。

表7. 高雄市現住人口の年齢別婚姻状況⁴⁵（2012年10月）

年齢	合計人口			未婚			有配偶			離別			死別		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
20～24歳	188121	97719	90402	182105	96150	85955	5187	1375	3812	817	193	624	12	1	11
25～29歳	211849	107403	104446	169148	93471	75677	37366	12416	24950	5159	1509	3650	176	7	169
30～34歳	246337	122926	123411	123962	72397	51565	106050	44479	61571	15702	5994	9708	623	56	567
35～39歳	229390	114115	115275	67764	39008	28756	134865	63516	71349	25358	11425	13933	1403	166	1237
40～44歳	225187	113023	112164	42615	23842	18773	148513	73644	74869	31412	15165	16247	2647	372	2275
45～49歳	227373	113288	114085	28987	16179	12808	158920	79742	79178	34239	16668	17571	5227	699	4528
50～54歳	218848	106892	111956	18831	10647	8184	159704	80102	79602	30940	14801	16139	9373	1342	8031
55～59歳	203415	98282	105133	11286	5856	5430	152259	78290	73969	24454	11945	12509	15416	2191	13225
20～59歳	1750520	873648	876872	644698	357550	287148	902864	433564	469300	168081	77700	90381	34877	4834	30043

⁴⁵ 表7、表8-1、8-2、8-3を高雄市政府民政局/統計資料により作成

<http://cabu.kcg.gov.tw/Report/ReportTypeFile.aspx?id=141&menuid=186>（2012.11.11 参照）

表 8-1. 高雄市 20～59 歳男性の学歴別

婚姻状況（2012 年 10 月）

	未婚	有配偶	離別	死別	合計	
総計	357550	433564	77700	4834	873648	100%
大学卒	119886	104171	6682	513	231252	26%
専門学校	32407	74394	9295	577	116673	13%
高卒	149215	158161	33371	1593	342340	39%
中卒	46529	69347	21788	1182	138846	16%
小学校	9513	27491	6564	969	44537	5%

表 8-2. 高雄市 20～59 歳女性の学歴別

婚姻状況（2012 年 10 月）

	未婚	有配偶	離別	死別	合計	
総計	287148	469300	90381	30043	876872	100%
大学卒	126501	81789	7076	1006	216372	25%
専門学校卒	35955	68537	8754	1389	114635	13%
高卒	101787	183722	40484	8221	334214	38%
中卒	18148	78876	22139	7680	126843	14%
小学校卒	4757	56376	11928	11747	84808	10%

表 8-3. 高雄市 20～59 歳の大学卒と高卒の婚姻状況（2012 年 10 月）

	男性		女性	
学歴	未婚	有配偶	未婚	有配偶
大学卒	52%	45%	58%	38%
高卒	44%	46%	30%	55%

学歴から高雄市の 20～59 歳人口の婚姻状況を見てみる。男性人口の中で、大卒者は 26% を占め、高卒者は 39% を占める（表 8-1 参照）。女性人口の中で、大卒者は 25% を占め、高卒者は 38% を占める（表 8-2 参照）。女性の未婚人口を見てみると、大卒未婚者は高卒未婚者より 2 万 5 千人が多い。これに対して、男性の未婚人口では、高卒者は大卒者より 3 万人も上回る。「女性は自分より身分が高い男性に嫁する。男性は自分より身分が低い女性を娶る」（上嫁下娶）という伝統な観念まだ根強く残っているため、高学歴の女性が選択できる男性の幅は低学歴の女性より狭くなっている。また、高学歴の女性は経済的に自立し、自ら結婚をしないことを選択することもある。表 8-3 は大卒と高卒の婚姻状況の比較である。高卒では、女性の 55% が有配偶者であるのに対し、男性は 46% である。一方、大学卒になると、有配偶者の割合は、男性の 45% に対して、女性はわずか 38% である。女性は大学卒者未婚率が高く、男性は高卒の未婚率が高いという現象を表している。

② 高雄市のアジア花嫁の分布

高雄市現住人口の婚姻状況という背景を理解した後で、高雄市のアジア花嫁の分布を調べることによって、高雄市のアジア花嫁の現況を把握できる。ここでは、各行政区の外国籍配偶者に関するいくつかの統計から、アジア花嫁の分布を見てみる。まず、表 4. 高雄市の外国籍配偶者統計の統計を見ると、行政区を問わず、女性配偶者が圧倒的に多い。さらに、女性配偶者の出身国のランキングを見てみると、1 位が中国籍女性、2 位がベトナム籍女性、3 位がインドネシア籍女性ということが分かる。表 9. の統計から、高雄市の外国籍

配偶者の大半は、中国および東南アジア諸国から来た女性である。

表 9. 高雄市各行政区の外国籍配偶者統計⁴⁶（2012 年 10 月）

国別	中国		ベトナム		インドネシア		フィリピン		タイ		カンボジア		その他の国	
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
鹽埕区	19	334	0	93	2	16	1	13	2	9	0	1	80	35
鼓山区	55	877	1	336	5	70	1	22	2	23	0	5	181	52
左営区	107	2290	0	456	2	52	2	36	7	34	0	16	313	83
楠梓区	49	1076	0	404	3	74	4	104	11	51	0	21	153	37
三民区	171	2617	0	914	7	154	3	66	22	65	0	35	584	155
新興区	18	303	0	69	1	9	1	13	4	4	0	2	80	47
前金区	14	293	0	61	0	7	1	4	1	9	0	3	85	30
苓雅区	74	1290	1	312	2	55	2	32	3	23	0	15	351	84
前鎮区	120	1658	3	757	2	159	6	49	15	59	0	39	267	81
旗津区	18	339	0	289	0	168	0	16	1	14	0	3	7	8
小港区	30	1101	0	504	2	118	1	37	6	33	0	18	77	24
高雄市	675	12178	5	4195	26	882	22	392	74	324	0	158	2178	635

外国籍女性配偶者の地域分布を調べてみる（表 10－1 参照）。まず、人数が最も多い中国籍女性配偶者の分布を見る。三民区の中国籍女性配偶者の人数が最も多い。三民区は 11 行政区の中で、人口が最も多く、人口規模や外来住民が多いであるために、アジア花嫁の人数が多いのは当然である。中国籍女性の比例が最も高いのは左営区である。前節で述べたように、左営区の中国籍女性の割合が高雄市の平均値より 12% も上回っている。左営区は台湾南部に、規模が最も大きい「眷村」が集中する地域である。「眷村」は村の名前ではなく、1949 年、蒋介石政権とともに、台湾に逃げた国民党軍人及びその家族に提供した住居の集落である。昔こうした集落では、強い「外省人」仲間意識が強くて、集落外（本省人）との繋がりが希薄であった。こうした古い集落に住んでいる年老いた国民党老兵にとって、同じ故郷の中国籍女性は台湾語を喋っている台湾人女性より親しみを感じている。台湾人意識が台頭した近年では、同じ中国人アイデンティティを持つ中国籍の女性は一層親近感を持つことになった。

2 位のベトナム籍女性の地域分布を見てみる。中国籍女性配偶者と同様に、三民区が人口規模の大きさで、ベトナム籍配偶者の人数が最も多い。輸出加工区があり、工場に就労しているブルーカラーが多い前鎮区は三民区に次いで、ベトナム籍女性の人数が多い。ベトナム籍女性配偶者の割合が最も高いのは旗津区である。高雄市の平均値 22% より 13% も上回っている。上で述べたように、高雄市の各行政区では、旗津区は発展が最も遅れているし、生活水準が最も低い地域である同時に、過疎化も加速する一方である。地元の若い

⁴⁶表 9、表 10 - 1、10 - 2、表 11、表 12 - 1、12 - 2、12 - 3 を高雄市政府民政局/人口統計/により作成。http://cabu.kcg.gov.tw/ReportView3.aspx?typeID=120&ReportType=3 （2012. 11.13 参照）

女性は高雄市中心部に流出する傾向がある。そのため、旗津区の適齢人口に関して、男性は女性より遥かに上回る。実際に旗津区の外国籍配偶者の研究によって、外国籍配偶者と結婚した旗津区の男性は次の共通点があり、「低学歴、低収入、社会的経済的地位が低い」という[王秀喜 2004 : 80]。この地域の男性の結婚難が各行政区の中で、最も深刻な地域であることとは過言ではない。さらに、3位のインドネシア籍女性の分布を見てみる。旗津区、前鎮区、小港区という3区のインドネシア籍女性の人数を合わせると445名に達する。この数字は高雄市全体のインドネシア籍女性の半分を上回る。つまり高雄市のインドネシア籍配偶者はこの3区に集中している。また、各行政区の外国籍配偶者に関して、インドネシア籍女性が占める割合の平均値は5%であるにもかかわらず、旗津区のインドネシア籍女性が占める割合は20%も占める。旗津区の外国籍配偶者の研究によると、インドネシア籍配偶者は、親戚の紹介を通して台湾人男性と結婚したケースが多い。またインドネシア籍女性が台湾に来た年数は8年以上のほうが多く、ベトナム籍女性は8年未満のほうが多い[前掲書]。彼女らは最初のアジア花嫁ブーム、つまりインドネシア籍が最も多い1995年～1997年の時期に台湾に来たとされる。いずれにしても、旗津区は生活レベルが低くて、多くの男性は地元の女性と結婚することが困難で、外国籍女性と結婚したのである。

出身国別から女性配偶者の分布を見た後で、各行政区の全人口に占める中国および東南アジア女性配偶者の割合が最も高い行政区を見てみる（表10-2を参照）。順位は、1位が旗津区、2位が左営区、3位が鹽埕区である。1位の旗津区の背景は上で述べたようである。2位の左営区の背景には、数多い中国籍配偶者の存在があるとされる。3位の塩埕区は生活水準が低い地域であるし、中国籍配偶者も数多く存在している。

表10-1. 出身国から見た外国籍女性配偶者の割合（2012年10月）

国別	中国		ベトナム		インドネシア		フィリピン		タイ		カンボジア		その他の国		合計
鹽埕区	334	67%	93	19%	16	3%	13	3%	9	2%	1	0%	35	7%	501
鼓山区	877	63%	336	24%	70	5%	22	2%	23	2%	5	0%	52	4%	1385
左営区	2290	77%	456	15%	52	2%	36	1%	34	1%	16	1%	83	3%	2967
楠梓区	1076	61%	404	23%	74	4%	104	6%	51	3%	21	1%	37	2%	1767
三民区	2617	65%	914	23%	154	4%	66	2%	65	2%	35	1%	155	4%	4006
新興区	303	68%	69	15%	9	2%	13	3%	4	1%	2	0%	47	11%	447
前金区	293	72%	61	15%	7	2%	4	1%	9	2%	3	1%	30	7%	407
苓雅区	1290	71%	312	17%	55	3%	32	2%	23	1%	15	1%	84	5%	1811
前鎮区	1658	59%	757	27%	159	6%	49	2%	59	2%	39	1%	81	3%	2802
旗津区	339	41%	289	35%	168	20%	16	2%	14	2%	3	0%	8	1%	837
小港区	1101	60%	504	27%	118	6%	37	2%	33	2%	18	1%	24	1%	1835
總計	12178	65%	4195	22%	882	5%	392	2%	324	2%	158	1%	635	3%	18764

表 10-2. 高雄市全人口に占める外国籍女性配偶者の割合（2012 年 10 月）

	男性	女性	人口合計	中国籍女性配偶者	中国籍女性配偶者の割合	東南アジア出身女性配偶者	東南アジア出身女性配偶者の割合	中国・東南アジア女性配偶者合計	中国・東南アジア女性配偶者の割合
鹽埕区	13082	13140	26222	334	1.27%	132	0.50%	466	1.78%
鼓山区	65230	68734	133964	877	0.65%	456	0.34%	1333	1.00%
左営区	95194	99621	194815	2290	1.18%	594	0.30%	2884	1.48%
楠梓区	87060	88738	175798	1076	0.61%	654	0.37%	1730	0.98%
三民区	170476	179234	349710	2617	0.75%	1234	0.35%	3851	1.10%
新興区	25990	27759	53749	303	0.56%	97	0.18%	400	0.74%
前金区	13716	14534	28250	293	1.04%	84	0.30%	377	1.33%
苓雅区	87073	92439	179512	1290	0.72%	437	0.24%	1727	0.96%
前鎮区	97221	99025	196246	1658	0.84%	1063	0.54%	2721	1.39%
旗津区	15286	14182	29468	339	1.15%	490	1.66%	829	2.81%
小港区	77934	77845	155779	1101	0.71%	710	0.46%	1811	1.16%
高雄市	748262	775251	1523513	12178	0.80%	5951	0.39%	18129	1.19%

2. 三民区のアジア花嫁

本論文が高雄市の三民区を主な調査地にした理由は 2 つある。第一の理由は、聞き取り調査に協力してくれるインフォーマントは殆ど三民区に在住しているからである。アジア花嫁のライフストーリーを明らかにするため、長時間および何度もの聞き取り調査が必要である。序論で述べたように、近年アジア花嫁に関する研究が盛んであるため、彼女らの元に常に研究者のアンケート調査票の回答依頼やインタビュー依頼が来ている。このような依頼を拒絶した外国籍配偶者が多い。三民区にある筆者の実家の飲食店のつながりを通して、積極的に協力的ないなインフォーマントを見つけることができた。第二の理由は、三民区が高雄市最大の行政区であり、そのアジア花嫁の人数も高雄市の各行政区の一位である。三民区に在住しているアジア花嫁の個々の事例を深く考察することを通して、高雄市全体のアジア花嫁の現状と生活状況を確実に理解し、把握していきたいと思う。

① 三民区の概況

三民区には元々三塊厝、大港、灣子内、宝珠溝、獅頭、本館、覆鼎金という 7 つの集落があった。清朝のとき、中国大陆から台湾に撤退した鄭氏政権は、王、蔡、鄭の三氏が入植したことから三塊厝と称されるようになった。戦後は三民主義が実現される模範の町を理想に三民区と改称された。区内の「高雄火車站」（高雄駅）に、台湾高鉄、地下鉄、台鉄、市内バスが集

中し、また何本ものハイウエーや高速道路が通っていて、市内へのアクセスだけではなく、隣接の県、市との交通が非常に便利で、南台湾の交通運輸センターと呼ばれている。したがって、本区は外来の住民の入居が多く、人口が高雄市の4分の1も占めている。三民区の住民の平均所得は高雄市民の平均所得よりやや低い（表6-2参照）。

② 三民区の婚姻状況

2010年11月末時点で三民区の人口は354191人で、世帯数は131591世帯、一世帯あたりの平均人数は2.7人である。65才以上の高齢者数は33004人で、三民区人口の約1割（9.3%）を占める。ともに高雄市の平均に近い。また、学歴に関して、三民区の住民の学歴は高雄市民の平均学歴よりやや高いほうである。

年齢別婚姻状況から三民区の婚姻状況のしてみる（表11参照）。三民区の人口では、20～29歳と55歳～59歳の人口以外、女性は男性より多く、全体的に女性は男性より多い行政区である。さらに、未婚人口を見ると、結婚適齢期に当たる30～34歳、35～39歳という年齢層では未婚男性の人口が未婚女性を上回る。30～34歳、35～39歳という年齢層では、女性の人口はもともと男性より多く上回ることににもかかわらず、未婚男性の多さという統計から三民区男性の結婚難が明らかになる。

表 11. 三民区現住人口の年齢別婚姻状況

年齢別	合計人口			未婚			有配偶			離別			死別		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
20～24歳	24151	12523	11628	23657	12399	11258	429	106	323	64	18	46	1	0	1
25～29歳	27512	13914	13598	23354	12606	10748	3665	1178	2487	482	129	353	11	1	10
30～34歳	30566	14870	15696	16878	9422	7456	11942	4862	7080	1690	579	1111	56	7	49
35～39歳	28809	13556	15253	9144	4921	4223	16505	7407	9098	3011	1218	1793	149	10	139
40～44歳	29188	13766	15422	5794	2902	2892	18926	9025	9901	4198	1799	2399	270	40	230
45～49歳	29187	13744	15443	3983	1984	1999	20133	9728	10405	4531	1957	2574	540	75	465
50～54歳	28290	13259	15031	2515	1267	1248	20526	10033	10493	4239	1807	2432	1010	152	858
55～59歳	27106	12793	14313	1599	717	882	20197	10270	9927	3602	1556	2046	1708	250	1458
20～59歳	224809	108425	116384	86924	46218	40706	112323	52609	59714	21817	9063	12754	3745	535	3210

表 12-1. 三民区 20～59 歳男性の学歴別婚姻状況（2012 年 10 月）

	未婚	有配偶	離別	死別	合計	
合計	46218	52609	9063	535	108425	100%
大学卒	17922	16153	1022	76	35173	32%
専門学校卒	4444	10687	1362	96	16589	15%
高卒	17932	16895	3859	190	38876	36%
中卒	4717	6213	2160	103	13193	12%
小学校卒	1203	2661	660	70	4594	4%

表 12-2. 三民区 20～59 歳女性の学歴別婚姻状況（2012 年 10 月）

	未婚	有配偶	離別	死別	合計	
合計	40706	59714	12754	3210	116384	100%
大学卒	19164	13431	1206	172	33973	29%
専門学校卒	5125	10513	1510	224	17372	15%
高卒	13453	22700	5806	1085	43044	37%
中卒	2207	7426	2712	718	13063	11%
小学校卒	757	5644	1520	1011	8932	8%

表 12-3. 三民区 20～59 歳の大学卒と高卒の婚姻状況比較（2012 年 10 月）

	男性		女性	
学歴	未婚	有配偶	未婚	有配偶
大学卒	51%	46%	56%	40%
高卒	46%	43%	31%	53%

第2章 政府の政策と公益団体の支援

前章では台湾におけるアジア花嫁の歴史、社会的背景および高雄市のアジア花嫁の概況を紹介した。序論で述べたように、「アジア花嫁現象」と共に、言葉の壁、文化摩擦、生活適応、「新台湾の子」の教育問題、その家族をめぐる問題など、さまざまな社会問題が浮上してきた。とくに、東南アジア出身の女性は言葉の壁、生活習慣・文化の相違によって、台湾生活に馴染めない事例が数多い。言語・文化の相違に起因する社会適応上の課題を解決するために、政府は東南アジア出身の花嫁を主な対象として多くの施策を考案した。また、民間団体もさまざまな支援活動をしてきた。本章はこれらの支援活動の様子を明らかにするため、第1節では、中央政府のアジア花嫁政策の経緯と内容を紹介する。第2節では地方自治体である高雄市の実践体制やアジア花嫁の支援を行う拠点である新移民センターおよび新移民コミュニティー・サービス拠点を取り上げる。第3節では、アジア花嫁に対する支援活動の現場である生活適応クラスを紹介し、その問題点を指摘する。第4節では、アジア花嫁支援の草分け的活動をしてきた公益団体の経緯と活動を明らかにしたい。

第1節 中央政府のアジア花嫁政策

政府の政策を述べる前に、政策の制定などに関する経緯を説明する。台湾のアジア花嫁現象はすでに70年代から始まって、80年代の「輸入花嫁」（進口新娘）時期を経て、90年代の「外国籍花嫁」（外籍新娘）にいたって、アジア花嫁に関する報道や記事は常に社会の注目を浴びていて、深刻な社会問題とされていた。結婚移民を管理する移民政策を講じるべきだと立法委員（日本の国会議員に相当）が進言し、また彼女らへの支援政策を考えるべきだと民間団体や有識者が呼びかけたにもかかわらず、2002年まで政府の積極的な姿勢は見られなかったのである。2002年以降、「新台湾の子」と呼ばれる外国籍配偶者の子供に関する知的障害や発達障害の記事や、中国語を読めないし話せない「外国籍花嫁」は国の将来を担っている「新台湾の子」の教育には適任か、などという記事が次々とマスメディアに発表され、政府だけでなく、社会全体も次世代の台湾の人口の質を憂えていた。今までアジア花嫁に関わる議論は常に官僚の各部門の間で、互いに自分の責任ではなく、たらい回しという態度で対応されていた。政府が積極的な姿勢で対応し始めたのは「新台

湾の子」の発達が遅れているという論議が現れたからである[夏曉鵬 2005 : 21、王君琳 2005 : 195]。そこで、2002 年行政院（内閣府に相当）院長の主導で「行政院の女性の権利と利益を促進する委員会」（行政院婦女權益促進委員会）が、2004 年度から国の予算を立てて、アジア花嫁の基本權益を守るために彼女らの生活を支援する積極的な政策に転じることを決めた。2003 年に上記の委員会で決定された「外国籍および中国籍配偶者のケアと指導」（外籍與大陸配偶照顧輔導）には、1. 生活適応の支援、2. 優生学的医療保健、3. 教育文化の上昇、4. 子育てへの協力、5. 就労権利の保障、6. 人身安全の保障、7. 法令制度の整備、8. 意識啓発の実行という 8 つの重点政策があり、これが現行のアジア花嫁に対する基本政策となっている⁴⁷。次はこうした政策内容について、詳しく述べる。

① 生活適応の支援

背景には、政府のアジア花嫁に対する先入観が存在している。つまり、アジア花嫁が文化・習俗の違いや言葉の壁によって、短期間に台湾の生活環境に馴染むことができず、さまざまな社会問題、家庭問題を引き起こしたと政府は考えている。中国籍配偶者は言葉の壁がなくても、社会制度、価値観、政治的なイデオロギーの差異によって、生活適応にも支障を来しているという現状である。また、アジア花嫁はよく跡取りになる子供を生む道具、年老いた親の介護をする家事労働者、安価な再生産労働者だとされて、いわゆる「オール・イン・ワン」（複数の機能がそなわった）だと見なされた。そのため、家庭生活において、普通の台湾人妻と平等な待遇をされることは極めて困難だと言えよう。もっとも、こうした国際結婚は大半、仲介業者の紹介による即席結婚であるために、恋愛感情が含まれていない「売買婚」だと思われるので、アジア花嫁と結婚している台湾人男性や家族は、アジア花嫁を物扱いにするケースが少ないとは言えない。アジア花嫁を一日も早く台湾の生活に馴染ませるために、下記の具体的な措置が求められた。

a. 全面的に外国籍および中国籍配偶者の生活状況の調査を実施し、2004 年 6 月に「内政部による外国籍と中国籍配偶者の生活状況の調査報告」を完成させる。

b. 生活適応の指導のための教室の開講を強く推進し、課程の内容、教材、授業の教え方を充実させ、生活適応クラスの専門講師の養成を強化する。また、台湾人家族とともに参

⁴⁷移民署の「外籍配偶照顧輔導措施」

<http://www.immigration.gov.tw/lp.asp?ctNode=31541&CtUnit=16711&BaseDSD=7&mp=1>
(2012. 11. 13) 参照

加することを推奨する。

c. 台湾人と結婚する際に関わる法律・規則、台湾の生活情報などの知識を提供するために、外国籍および中国籍配偶者の台湾生活マニュアルを編集し、多言語で印刷する。その配布物は台湾の海外駐在事務所、関係する国家の出先機関、全国の区公所（日本の市役所に相当）に配布する。

d. 生活適応への指導に関わる資料の問い合わせの窓口を設立する。民間団体のマンパワーをまとめて、外国籍および中国籍配偶者への支援措置を広める。地域的サービス拠点を設立し、「コミュニティのサービス機能」を強化する。

e. 外国籍および中国籍配偶者およびその家庭への支援とサービス措置を検討する。

f. このような国際結婚をした女性は多く交通不便な山村地帯にいて、その交通手段はほとんどスクーターである。アジア花嫁を家に閉じこめないようにするためには、スクーターの免許を取ることが非常に大事なのである。そこで、台湾政府は多言語で書かれた問題集や試験問題などの資料を作成し、アジア花嫁がスクーターの免許を取得できるように協力する。

g. 関係する国の出先機関と外国籍配偶者との繋がりを促進し、積極的に外国に台湾に関する情報を提供することによって、台湾の国際的イメージを上昇させる。というのは、ホスト社会で台湾人家族の虐待を受けた結婚移民に関する新聞記事は出身国のマスメディアに頻繁に報道され、台湾の国際的イメージにダメージを与えたからである。

h. アジア花嫁が入国する前の支援体制を設けて、出身国の政府と連携し、台湾生活、風習、国情、移民法令および関連ある権利と義務などの情報を提供することによって、適応期間をより短くさせることが期待できる。

政府のアジア花嫁政策の中で、生活適応の支援は彼女らにとって、最も役に立っている政策である。この政策のもとで実施された「内政部による外国籍と中国籍配偶者の生活状況の調査報告」は、全国の結婚移民の生活実状や悩みを明らかにして、彼女らのニーズに合わせて、さまざまな政策を講じた。生活適応クラスの間を通して、アジア花嫁は台湾風習や中国語の学習だけではなく、同胞と知り合って、ネットワークを広げることができた。一方、政府も生活適応クラスの間を借りて、アジア花嫁にかかわる国籍の取得、国民保健の加入、就労の制限などの情報を伝達した。

次に述べる優生学的医療保健、教育文化の上昇、子育てへの協力という3つの政策は台

湾政府におけるアジア花嫁政策の大きな転換に密接な関係があり、前述した「台湾の人口の質を憂える」という議論から出発したと言えよう[夏曉鵬 2005 : 21、王君琳 2005 : 195]。元内政部部長余政憲の「内政部による外国籍および中国籍配偶者のケアと指導の報告書」(外籍與大陸配偶照顧輔導措施專案報告)によると、「跡取りになる子供を生む任務を催促されているアジア花嫁と結婚している台湾人男性の一部は、高年齢、心身障害者、社会的地位や経済的地位が低い人である。優生保健に注意しないと、その子供たちは親の心身の病気の影響のもとに、先天性欠陥か発展が遅れる予備軍になる可能性が非常に高い」という[余政憲 2003 : 4]。また、国の行政部門の長官や教育部門の役人、内政部の官僚、立法院の立法委員は「新台湾の子」の成長が遅れて、次世代の台湾人の人口の質を低下させてしまうという懸念を抱いて、まず、「新台湾の子」の母親である外国籍配偶者の身体管理を実行すべきだと考えた。そこで、彼女らに対して、以下のような医療保健全般のサービスを提供することによって、健康な体の維持ができるように期待した。

② 優生学的医療保健

具体的な措置は入国する前の健康診断の義務化や全員に国民健康保険に加入させることである。こうした指導を通して、外国籍配偶者に関する妊娠、出産、育児などの状況の把握ができる。また、「優生保健上の減免措置ないし費用の補助」という条例を適用するアジア花嫁およびその夫に、出産前の遺伝診断や子宮内リング、結紮手術の経費などの手当を提供している。

アジア花嫁を支援している人権団体はこの政策が人権侵害だと批判した。つまり、政府はアジア花嫁の夫が高齢者と心身障害者であるために、アジア花嫁は先天的に発達障害か発達遅延の子供を生む可能性が高いと考えている。また、アジア花嫁とその家庭は台湾社会の中下層であるために、子供を教育する能力は乏しく、良い教育環境を提供することが困難である。さらに、「特定の外国籍配偶者」(夫が心身障害者の外国籍配偶者)は出産すべきでないと政府は切望している。女性の出産する権利が国家のもとに管理され、出産という個人の領域が国の権力に干渉されてしまうと研究者は強く批判した[夏曉鵬 2002、陳雪慧 2005、范婕滢 2006]。一方、アジア花嫁本人はこの政策を評価している。東南アジア諸国や中国と比較すると、台湾の医療福祉は非常に進んでいる。国民健康保険の加入の義務付けを通して、アジア花嫁は台湾に来て、すぐに台湾人並みの医療福祉のシステムを適

用することができる。

③ 教育文化の上昇

次世代の台湾人の人口の質を上昇するために、まず「新台湾の子」の教育という重責を担っているアジア花嫁の成人教育および彼女らが子供を教育するために必要な知識を教育しなければならないと政府側は考える。具体的な措置は下記の通りである。

- a. 外国籍および中国籍配偶者に国民教育を強制的に受けさせることの可能性を検討する。
- b. 成人基本教育研修クラスを設けて、能力別の授業を行うことによって、言語能力の上昇を促進させる。
- c. 外国籍および中国籍配偶者の家庭における教育の活動を主催する。国際結婚、多様化した家族、ジェンダーフリーなどの観念を家庭教育に導入し、教育する。社会全体で国際結婚に正確な認識を持つことができるように努める。また、台湾籍配偶者の社会的責任を強化する。
- d. 外国籍および中国籍配偶者が小、中学校の夜間スクールに入学し、正式な学歴を取得できるように奨励する。
- e. 外国籍および中国籍配偶者の成人基本教育のための講師研修を行う。参考教材を研究し、教材をネットに登載し、データベースを共有することによって、授業の効果を高める。

この政策は生活適応の支援という政策の延長とも言える。生活適応クラスが初心者向けの授業であるのに対して、教育文化の上昇という政策のもとに設けた成人基本教育研修クラスは上級レベルである。この政策の出発点は評価すべきだが、実際に参加したアジア花嫁は数少ない。多くのアジア花嫁やその家族は基本的な会話ができれば、簡単な中国語が書けばいいと考えている。なぜ時間を費やして、夜わざわざ家から出て、また学校に行くのかという、台湾人夫の反対意見もある。そもそも多くのアジア花嫁は高齢の親の介護、子供の面倒と家業の手伝いという役割が課せられているため、学歴の取得は実生活には役に立たないとされている。もし学校に行く余裕があれば、むしろその時間を親や子供の面倒に費やしたいほうがいいと台湾人夫は考えている。これに対して、アジア花嫁は、もしその余裕があれば、むしろバイトの勤務時間を増やし、より多くの給料を稼ぐほうが、家計の分担や母国への送金に役に立つことができると考えている。また、この政策の中で、台湾籍配偶者の社会的責任の強化という実践が困難である。アジア花嫁と結婚した台湾人

男性は、一般的に学歴が高くない男性である。古い考え方を持っている彼らは、古き良き女性を求めて、経済発展が台湾より遅れている東南アジア出身の女性と結婚したケースが多い。彼らにジェンダーフリーなどの観念を教育することはきわめて困難である。

④ 子育てへの協力

この政策の目的は積極的に外国籍および中国籍配偶者の子供の教育を支援し、成長が遅れる子供に早期治療のサービスを提供することである。具体的な措置は下記の通りである。

- a. 外国籍および中国籍配偶者の子供を全面的に幼児健康保障システムに加入させる。
- b. 外国籍および中国籍配偶者の子供の成長に関する検診を強化する。
- c. 外国籍および中国籍配偶者の子供の発達が遅緩である場合、早期的な治療のサービスを提供する。
- d. 外国籍および中国籍配偶者の子供に対して、社会文化などの科目学習への指導を強化し、放課後の指導を提供することによって、環境に適応する能力や学習能力を上昇させる。
- e. 専門家や学者に依頼し、「東南アジア出身の配偶者の児童に関する生活状況」という研究をする。
- f. 外国籍および中国籍配偶者の子供の生活適応に関するシンポジウムを定期的に主催する。
- g. 「4才から6才までの育児手帳」を編集し、多言語で印刷する。
- h. 外国籍および中国籍配偶者の子供を優先的に公立の幼稚園や保育所に入園させる条例を制定する。参考教材を研究し、教材をネットに登載し、データを共有することによって、授業の効果を高める。

もともとアジア花嫁の子供は学習能力が低下で、特別な指導を受けるべきだと政府は考えている。この政策はアジア花嫁の子供に対する差別政策だと女性団体が批判した[夏曉鵬 2005: 23、范婕滢 2006]。特別視されている子供に精神的にダメージとストレスを与えかねないという教育専門家の意見もある。外国籍および中国籍配偶者の子供を対象にしている放課後の指導クラスは、民営の「安親班」⁴⁸（子供の面倒を見る塾）の役割と同様に、共働きの両親がまだ帰宅していない間に、子供の面倒を見る。これは経済状況がよくない国際結婚の家庭にとって、よい政策だと評価すべきだ。

⁴⁸「安親班」とは働く親を安心させるために、放課後の児童の宿題や学科の復習などの指導を行う塾である。民営の「安親班」は児童を家まで送り届ける。

新台湾の子の発達障害問題に関して、「内政部による外国籍と中国籍配偶者の生活状況の調査報告」によると、6歳以下の発達遅れ児童の比例に関して、外国籍母親の子供はわずか0・1%を占めているだけで、その割合は台湾人母親の子供より低いという。政府が政策を講じる前に、マスメディアの言動に左右されず、アジア花嫁およびその子供の現状を確実に把握してから支援政策を講じるべきだ。政府は彼女らやその子供への支援政策を立てるだけで、政策内容の必要性を慎重に考慮していない[陳雪慧 2005]。

新台湾の子に関する支援政策は学者や一部の女性団体に批判されたが、多くのアジア花嫁本人はこの政策を非常に評価している。それは、多くのアジア花嫁の家庭は経済的・社会的地位が低いため、無料の「安親班」の存在で、経済面の負担を減らすことができるからである。

⑤ 就労権利の保障

この政策の理念は、アジア花嫁の就労権利を保障し、経済的に自立させ、安定した生活を送らせることである。具体的な措置はアジア花嫁に就職相談サービスを提供することと事業者就労許可を持っているアジア花嫁を推薦し、仲介することである。またDVを受けたアジア花嫁を対象に、優先に就職の支援を提供する。政府の証明書をもって、無料で職業訓練を受けさせる支援が行われている。さらに、在留資格をもっていないDV被害者の就労制限に関わる法令の改正、労働許可の申請緩和を積極的に検討する。この政策のもとで、アジア花嫁に対する就労制限を緩和した。これまで外国人は雇用主を通して政府に就労許可を申請し、これを得ない限り、就労することは禁止されていた。しかし、前述したようにアジア花嫁と結婚した台湾人男性の大半は経済力が比較的に低いので、彼女らは家計を助けるため、また母国に仕送りするため、無許可で働くケースが多数ある。こうした状況に応じ、政府は2003年に「就業服務法」を改定し、在留許可をもつ結婚移民は自由に就労できることになった。ほかにも、外国籍および中国籍配偶者に職業研修や訓練を提供し、就職能力や起業能力を上昇させる支援が行われている。

政府の政策の出発点は評価すべきだが、こうした政策の恩恵が確実に外国籍配偶者に与えられるかと実務者および有識者は疑問をもっていた。そもそも、中国語を読めないアジア花嫁にとって、就労に関する情報収集は容易なことではない。また、アジア花嫁が台湾の法令に疎いという弱点を利用して、最低賃金制を守っていない不法な雇い主もいた。法

津の改定後、在留許可をもつ結婚移民が自由に就労できるようになったのにもかかわらず、悪質な雇い主は身分証明書をまだ取得していないアジア花嫁に対して、台湾人労働者より低い賃金を支給し、就労保険をかけないなど、不公平な扱いをした。この状況を改善するために、2010年から政府は在留許可書の上に、「就労可」と標記し始めた。身分証明書をまだ取得していないアジア花嫁の仕事の権利や福祉を守るためである。近年、アジア花嫁の就労に関する政策の緩和や政策の宣伝のおかげで、アジア花嫁の仕事環境はすこしずつ改善してきた。しかし、アジア花嫁は学歴や中国語能力の制限で、単純労働の仕事に就くことが多い。

⑥ 人身安全の保障

国際結婚において、アジア花嫁は常に高齢化した舅や姑の介護をする家政婦や児童を生む道具と見なされて、伝統的な家父長制の枠に縛られている。極端な場合では、自分が代価を払って連れてきたのだから、自分の好きにしてもいいという考え方が夫の暴力につながるケースもある。そこで、DVを受けたアジア花嫁の人身を保護するために、下記の具体的な措置が実行されている。

- a. サービスの情報や拠点を相互的に利用し、DVを受けた外国籍配偶者に対する保護措置を強化する。
- b. DVを受けた外国籍配偶者に対する緊急支援を強化する。
- c. 民間のボランティア団体を結んで、翻訳、通訳サービス体制を設けて、民間団体による通訳サービスの設立に向けて支援する。
- d. DVの通報制度を確実に機能させるために、同一の窓口を設ける。また、英語、ベトナム語、インドネシア語、タイ語、カンボジア語などの多言語で対応し、相談サービスを提供する。

今まで、DVを受けた外国籍配偶者は離婚後の強制送還を恐れて、警察に通報に行けなかった。2007年末に、法律が修正されて、離婚後の強制送還が取り消されて、例外的に居住の許可が可能になった。ただし、現在は親権の取得という問題がまだ残っている。台湾の法律では、離婚裁判における親権の判断は常に親の経済事情で下される。離婚後、しかも、まだ台湾の身分証明書を取得していない外国籍配偶者は、こうした裁判ではなかなか子供の親権を取得することができない。また、離婚後の外国籍配偶者は国籍を取得する際、500

万台湾ドル（1500 万円）以上の財産証明が必要だという厳しい法律がある。そのため、子供の親権を取得するため、結婚生活が破綻した外国籍配偶者は国籍を取得する前、夫の暴力を我慢せざるをえない。このような具体的な事例は第第 3 章第 3 節で詳述する。現在「移民／移住・人権修法連盟」（移民の人権に関する法律改正を求める連盟）は離婚した外国籍配偶者の国籍取得に関する法律の改正を要請している。

⑦ 法令制度の整備

今まで台湾の移民人口に関して、常に流出人口は流入人口を大幅に上回っていたので、移民に関する条例はほとんど流出人口を対象に定めた条例であった。移民政策に関する法令は整備されているとは言えない。今まで外国人の入国管理を担当する「入出境管理局」

（入国管理局に相当）は内政部警政署に属していた。国民の海外への移民業務は外交部（外務省に相当）に管轄されていた。近年、女性結婚移民の激増によって、初めて流入人口は流出人口を上回ることになった。そこで、移民法の改正と移民署の設立が急務だとされた。

移民署の設立の目的は、海外に流出した移民と台湾に流入した移民に関する業務をまとめて、単一の窓口にすることである。また、時代の需要に合わせた移民政策を考案する組織が必要であるために、移民署を設立したのである。具体的な措置は下記の通りである。

- a. 台湾の移民政策を検討し、適切な法律・政策を考案する。
- b. オーバーステイをした外国籍配偶者は罰金の処罰で済ませて、強制退去されないように検討する。
- c. 外国籍配偶者および中国籍配偶者に関連する統計資料を継続的に収集し、データベースを設立する。
- d. 3 ヶ月ごとに、政策を実行する部門の状況を検討し、全体的に成績や効果を評価する方法を考案する。

この政策のもとで、移民署が 2007 年に成立した。一方、従来の「入出國及移民法」（日本の入管法に相当する）は「移民管理法」だとされて、外国人の人権と利益を無視するものだと批判された。民間の移民団体、外国人労働者団体、人権団体、女性団体による「移民／移住・人権修法連盟」（移民の人権に関する法律改正を求める連盟）は 2004 年 4 月から、この「入出國及移民法」についての修正や新条例を求める討論を重ねて、2005 年 3 月に、民間版の「入出國及移民法」修正案を提出し、立法委員に働きかけた。2007 年 11 月

30日に、「入出國及移民法」修正案を可決した。この修正案は台湾社会の外国人の人権擁護において、大きな一歩と言える。具体的な改正法案は上で述べた離婚後の居住の許可以外に、下記の5点がある。

- a. 結婚移民の入国に関する定員制の枠および財産の有無という法律を取り消した。
- b. 強制的に送還する場合には、審査会議と意見の陳述という2つの手続きを経ないと、強制送還ができない。
- c. 外国人の集会・請願の権利を保障する。
- d. 雇い側との訴訟期間内に、外国人労働者のビザの延長を許可する。
- e. 人身売買の被害者を保護する。

「移民／移住・人権修法連盟」の努力により、さまざまな条例が改正されてきたが、改善すべき所はまだまだある。たとえば、離婚後の外国籍配偶者は中華民國の国籍を取得することが困難である。また、外国人の帰化に関して、国籍を取得する前に、まず母国の国籍を放棄しなければならない。もし、母国の国籍を放棄し、中華民國の国籍の取得を待っている間に、夫と離婚すれば、無国籍の状況になりやすい。この点も改善すべきだ。

⑧ 意識啓発の実行

この政策の理念は国籍、民族、文化の違いを越え、すべての人が互いに認め合い、差別をなくすよう啓発に努めることである。

- a. 国民が包容、受容、平等的待遇の態度を持って、異なるエスニック・グループを認めるようにと呼びかける。また、多文化的コミュニティーを建設し、環境を改善することに努める。
- b. 多文化教材を企画し、多文化社会の発展を宣伝し、呼びかけることによって、小さいときから、エスニック・グループ間の平等と相互の尊重という観念が育つようにする。
- c. 市民グループ、ボランティア団体等に対し、多文化共生の考え方についての広報、啓発に努める。
- d. 政策を実験する県、市を選定し、「外籍與大陸配偶照顧輔導」（外国籍および中国籍配偶者のケアと指導）という政策を実行する模範都市を企画する。

今まで意識啓発の実行という政策は宣伝・広報という段階にとどまっているが、上記の「入出國及移民法」修正案において、初めて国籍、民族、肌の色、階級、出身による差別

には罰金が課されるという反差別条項が盛り込まれ、また商業化した結婚仲介業と女性を物扱いした宣伝を禁止することが明記された⁴⁹。この政策を実施して以来、街中で外国籍配偶者を商品化した看板はほとんど見られなくなった。各縣市では東南アジア各国の文化を紹介するイベント、展覧会や祭りがよく開催されている。ホスト社会では長年続いたアジア花嫁に対する差別を短時間ではなくすることは不可能だが、近年政府の広報政策の宣伝と地方自治体のアジア花嫁イベントの開催により、次第に改善しつつある。

政府は八つの政策の中で、上でも言及したように、次世代の台湾人の人口の質を危惧するために、優生学的医療保健、教育文化の上昇、子育てへの協力という3つの政策を展開し、アジア花嫁に対して全面的な支援を提供し始めた。そのため、生活適応の支援政策とこの3つの政策はほかの政策より重視され、先に進んでいる。ほかの政策は多くの研究者の提言や人権団体の持続的な抗議運動を通して改善されてきた。たとえば、移民署の設立は多くの研究者の提言によって成立された部門である。「入出国及移民法」の修正の成功は長年民間の移民団体、外国人労働者団体、人権団体、女性団体の抗議運動のおかげである。

「外国籍および中国籍配偶者のケアと指導」（外籍與大陸配偶照顧輔導）の重点政策を立てた以降、行政院が2004年に制定した「外国籍と中国籍配偶者の移入における現段階の対応政策」（現階段外籍與大陸配偶移入因應方案）に基づき、教育部は2005年に「新移民文化計画」を制定した。この計画の目標は三つある。第一は、国民の「新移民」⁵⁰への共感や認識を高め、台湾と国際文化との交流や融合を促すことである。第二は、外国籍配偶者の生涯学習システムを運用することにより、彼女らが自己に対する価値観を高めさせ、その家庭の親子に読書習慣を身に付けさせ、個人、家族、社会のよい発展に繋がることである。第三は、「新台湾の子」が双方の文化への認識を促進し、文化意識と健全な人格を育む

⁴⁹近年国際結婚の仲介に関しては、結婚の商品化や人権などの点から問題視されてきた。2007年11月30日に可決された「入出国及移民法」の第58条では、国際結婚の仲介に関してつぎのように述べられている。(1) 国際結婚の仲介を営業として行うことは許されない、(2) 国際結婚の仲介により報酬の要求や契約をすることは許されない、(3) 広告物、出版物、ラジオ、テレビ、インターネットなどの公衆に伝える方法を用いて、国際結婚の仲介を宣伝することは許されない。さらに、国際結婚の仲介に関する宣伝を委託・受託・自身で行った場合には、入出国及移民法第78条に設けられた罰則により10万台湾ドル以上50万台湾ドル以下の罰金に処せられる。

⁵⁰ 第1章第1節で述べたように、アジア花嫁に対する差別用語を是正するために、夏曉鵬と婦女新知基金会は2003年「請叫我——，讓新移民女性說自己徵文活動」（私を——と呼んでください。新移民女性に自分のことを言わせようという投稿イベント）を開催した。中国や東南アジア出身の女性たちの投票によって、「新移民女性」という名称が選ばれた。その後、教育部はアジア花嫁を新移民と呼ぶようになった。

ことである。実施内容は、「新移民」のための生涯学習システムを作り、新移民学習センターの設立、「新移民」の教育研修や家庭教育活動への参加の奨励、「新移民」の学習ルートの普及、国際結婚の家庭に関する調査研究や学術交流の継続、多文化教育や異文化間理解の促進、「新移民」に対する情報の提供などがある。さらに、内政部は2005年からの10年の間に、30億台湾ドル（90億円）をかけて、「外国籍および中国籍配偶者のケアと指導基金」（外籍配偶照顧輔導基金）を創設し、結婚移民の各種の学習コースへの参加を奨励し、結婚移民の教育レベルや親としての子育て、教育能力の向上を目指している。

以上のように、台湾政府は「外国籍および中国籍配偶者のケアと指導」の8大重点政策以外に、「新移民文化計画」を制定し、アジア花嫁と「新台湾の子」に対して、さまざまな支援政策を打ち出した。しかし、政府の内容を検討すると、「優生学的医療保健」におけるアジア花嫁に対する人権侵害、「教育文化の上昇」における教育施設の利用者の少なさ、「子育てへの協力」における「新台湾の子」への差別、「就労権利の保障」における情報伝達の不足、「人身安全の保障」と「法令制度の整備」における法律の不備、「意識啓発の実行」における即効性の欠如などという問題点が明らかになった。

このような問題点だけでなく、政策を実行する際に、現場の担当者がアジア花嫁にもっと配慮することが重要だと考える。アジア花嫁に対して、国民が包容、受容、平等的待遇の態度を持って、異なるエスニック・グループとして認めるように政府は呼びかけている。しかし、移民署の台湾人ボランティアやスタッフはアジア花嫁に友好的な態度をしているとは言えない。政府は各部門の職員に対して、多文化教育を実行すべきである。また、政策の宣伝がまだ不十分である。多くのアジア花嫁は自身の権利に関する現行の政策を知らなくて、その恩恵を受けることができない。アジア花嫁政策を立てる前に、アジア花嫁の現状をもっと把握すべきだ。

政府は国の予算を惜しまずアジア花嫁に注ぎ込むという姿勢が一般の市民の間でよく批判され、ばらまき政策という批判の声も出ている。今まで先住民などのマイノリティを支援する団体に提供してきた予算をアジア花嫁に回すことになった[王君琳 2005 : 197]。その結果、限りある予算を奪い合い、マイノリティ支援団体の間で、対立を引き起こしかねない。アジア花嫁や「新台湾の子」が国の負担と考える市民も少なくない。さまざまな問題点や批判が存在しながらも、政府のアジア花嫁政策の実行によって、台湾社会は確かに多くのアジア花嫁にとって、より生活しやすい社会になりつつある。そして、「新移民文化

計画」による小学校の多文化教育のイベントを通して、台湾人と台湾人児童がアジア花嫁と「新台湾の子」に対して持っている偏見は次第に減少しつつある。

第2節 高雄市における政策の実践と新移民センター

第1節で中央政府のアジア花嫁政策の具体的な内容と問題点を述べた後、地方自治体である高雄市で、彼女らに対する政策が実際にどのように行われているか明らかにしたい。本節では、高雄市政府の支援体制およびアジア花嫁の支援を統括している新移民センターの成立の経緯などを述べる。

1. 高雄市の支援体制

高雄市政府は中央政府の政策に基づいて、アジア花嫁への支援を行い、生活適応支援、成人教育学習、就職カウンセリング、健康管理および相談、運転免許取得の指導、福祉サービス相談という6つのタイプに分けている⁵¹。ここでは、具体的な支援体制を紹介する。

① 生活適応支援

中央政府の「生活適応の支援」と対応し、担当部門は民政局戸籍行政課である。内容は生活適応クラスの開催である。これは中国語会話、台湾の風習、結婚生活の相談、子育ての知識などの授業が行われる。

② 成人教育学習

中央政府の「教育文化の上昇」と対応し、担当部門は教育局社会教育課である。成人基本教育クラス（外国籍配偶者の専門クラス）を主催し、これは生活適応クラスを卒業したアジア花嫁を対象に開講した上級中国語クラスとも言える。外国籍配偶者の生涯教育、言語学習などの授業が行われる。成人基本教育クラスを卒業したアジア花嫁は台湾の小学校・中学校卒業に相当する学歴を取得することができる。

③ 就職カウンセリング

中央政府の「就労権利の保障」と対応し、担当部門は勞工局就業訓練センターである。仕事の紹介および相談、また職業訓練の紹介などのサービスを提供する。

⁵¹高雄市政府社会局 http://sochbu.kcg.gov.tw/?prog=2&b_id=8&m_id=41&s_id=128
(2013.4.11 参照)

④ 健康管理および相談

中央政府の「優生学的医療保健」と対応し、担当部門は衛生局健康管理課である。妊婦の健康管理以外に、新生児の健康管理などの相談も行われる。

⑤ 運転免許取得の指導

中央政府の「生活適応の支援」と対応し、担当部門は高雄市監理処である。監理処は試験の問題集を英語、ベトナム語、カンボジア語、タイ語、インドネシア語に翻訳し、監理処のサイトに載せて、データベースを作成した。試験の問題が多言語で印刷され、外国籍配偶者は自分の母語を選択し、試験を受けることができる。

⑥ 福祉サービス相談

中央政府の「人身安全の保障」と「生活適応の支援」、「意識啓発の実行」と対応し、担当部門は社会局「婦人保護サービス課」（婦女及保護服務科）である。この福祉サービス相談の主な拠点は「新移民家庭サービスセンター」（新移民家庭服務中心）であり、「新移民センター」と略称される。後に「新移民センター」の詳細を述べる。この部門はアジア花嫁の福祉サービスの相談以外、彼女らやその家族を対象にした懇親会や研究会、新移民発展団体のセミナーなどのイベントも主催している。

以上のように、高雄の支援体制はほぼ中央政府の政策に基づいている。なお、中央政府の「法令制度の整備」という政策内容は中央政府の権限に限られているため、高雄市の支援体制には含まれていない。

高雄市政府の支援体制の6つのタイプの中で、①「生活適応支援」と⑥「福祉サービス相談」を利用しているアジア花嫁が最も多い。「生活適応支援」とは言うまでもなく、生活適応クラスの開催を担当しているため、多くのアジア花嫁と直接的な関わりがある。⑥「福祉サービス相談」の主な拠点である「新移民センター」はアジア花嫁の支援の統括センターであるため、多くのアジア花嫁はこの支援体制を利用したことがある。これ以外のタイプの支援体制を利用しているアジア花嫁は限られている。たとえば、基本の中国語をマスターすると、上級クラスへの進学をやめ、就職するアジア花嫁が多い。また、台湾人家族の反対や子育ての都合により、進学を諦める事例も多い。これが②「成人教育学習」の利用者が少ない背景である。③「就職カウンセリング」に関して、多くのアジア花嫁は自分の中国語能力に自信を持たなくて、公的機関の利用を敬遠している。実際、多くのアジア花嫁は同胞のネットワークを通して、アルバイトの仕事を見つけている。⑤「運転免許取

得の指導」に関して、多くのアジア花嫁は生活適応クラスに通ったとき、運転免許に関する指導を受けている(第2章第4節を参照)。わざわざ、高雄市監理処に訪ねる必要がない。この機能は生活適応クラスと重なるという意見もある。

高雄市の支援体制に潜む問題点は全体的に、中央政府の政策への指摘はほぼ同じである。そもそも高雄市政府は中央政府の政策に基づいて、アジア花嫁の支援体制を展開してきたため、中央政府の政策に存在している問題点は当然高雄市の支援体制に存在している。

ホスト社会ではアジア花嫁を支援するだけでなく、アジア花嫁の入国、在留などの管理も重視されている。ここで、管理部門である移民署の概要を述べる。台湾の移民署は各市県に、「事務所」(服務處)、専勤隊、国境事務大隊、収容所という四大部門がある。事務所は中央政府が各市県に設置している出張所のような存在で、総括業務を担当する。専勤隊は移民署に管轄されている警察のような役割を果たしている。移民署が成立する前に、面談審査、密入国や不法滞在などを取り締まる業務は警察の担当であった。国境事務大隊はビザ、中国籍配偶者の入国面接、入国審査などを担当する。収容所は退去強制前の一時的な収容施設である。高雄市専勤隊は高雄市のアジア花嫁の入国、在留などを管理している。

一方、高雄市にある事務所では、アジア花嫁のエンパワーメントを支援するために、通訳ボランティア制度を設けた。高雄市サービス拠点の案内所では、中国語が堪能なタイ、ベトナム、インドネシア籍の配偶者を通訳ボランティアとして駐在させる。こうした通訳ボランティア制度は彼女らが持っている言語能力の長所を生かし、同胞を助けるだけではなく、自身のエンパワーメントにもつながる。第3章で取り上げる7人のアジア花嫁の一人、ベトナム籍配偶者Cは高雄市の事務所案内所で通訳ボランティアを担当している。

以上のように、高雄市の支援体制に関して、「成人教育学習」に関する利用者数の少なさ、公的機関の敬遠、政府部門の機能の重複などの問題点が存在しながらも、多くのアジア花嫁は「生活適応支援」と「福祉サービス相談」により地元の生活に馴染むことができた。そして、高雄市の移民署はアジア花嫁を管理するだけでなく、アジア花嫁担当の通訳ボランティア制度も設立し、ホスト社会におけるアジア花嫁のエンパワーメントに貢献していることを明らかになった。

2. 新移民センター

高雄市の社会局ではアジア花嫁に対する福祉などのサービスを全般的に提供している施設が新移民センターである。「新移民」という言葉は第1章第1節で紹介したように、アジア花嫁の投票から選ばれた名称である）。それ以来、アジア花嫁とその家族のことを「新移民家庭」と呼ぶようになった。政府やマスメディアもアジア花嫁を尊重するために、「新移民」と呼ぶようになった。しかし残念ながら、一般市民は相変わらずアジア花嫁を「外籍新娘」や「外配」⁵²と呼んでいて、「新移民」という名称は民間には定着していない。高雄市社会局は高雄市の「新移民家庭」を支援するために、2001年から民間の人的・経済的・社会的資源と連携し、さまざまな福祉サービスを提供してきた。中にはオリジナルな全国初のサービスも工夫されてきた。

こうしたサービスを提供していくうちに、「新移民家庭」が共有して使用できる空間がないことに気が付いた。そのため、2005年から「高雄市新移民家庭サービスセンター」（高雄市新移民家庭服務中心）の設立に着手し、相応しい場所を探した。ちょうど高雄市文化局の前金区分館が移転したので、その空いた元前金区分館が社会局に譲渡された。建物が改築され、センターの名前とロゴデザインの投票キャンペーンを経て、2006年10月に高雄市新移民家庭サービスセンターが設立され、のちに「新移民センター」と呼ばれるようになった。

新移民センターは上記のような民間の資源を統合し、その中核として、アジア花嫁の悩みと福祉に関する相談を受け付ける。また、各区のコミュニティー・サービスとの連携を通して、さまざまな懇親会や交流会などを開催している。こうしたサービスの提供やイベントの開催を通して、新移民へ多元的な支援をして、彼女らの生活適応などの諸問題が解決されるように期待されている。そして、新移民に母国の「実家」で受けたような暖かいケアを提供することによって、すみやかに台湾社会に馴染めるように支援している。同時に、高雄市政府は新移民を尊重する都市になることを目標にしている⁵³。

新移民に対するケアとサービスの利便性を追求するために、中核となる新移民センター以外に、高雄市の11の行政区それぞれに「新移民コミュニティー・サービス拠点」（新移民社區服務據點）を設けた。2006年に初めて楠梓区でコミュニティー・サービス拠点を設

⁵² 「外籍配偶」の略称である。

⁵³ 台湾國家婦女館南區

<http://www.taiwanwomenscenter.org.tw/ct.asp?xItem=92121&ctNode=267&mp=1>
(2013.4.10 参照)

立した。2007 年、小港区、三民区、苓雅区、前鎮区、旗津区などの 5 行政区に拠点を設け、2008 年は左營区と前鎮区に拠点を設けた。拠点の設立は新しく事務所を構えることではなく、支援事業を地元の公益団体に依頼し、民間の人的・経済的・社会的資源を利用している。たとえば、楠梓区のサービス拠点は楠梓区にあるキリスト教会法人団体の「高雄市生命樹国際關懷協会」に設立されたし、三民区のサービス拠点は三民区にある「財団法人高雄市キリスト教会聖愛堂」（仮名）に設立された。本章の第 3 節では「財団法人高雄市キリスト教会聖愛堂」が運営している生活適応クラスの詳細を述べる。各サービス拠点で、生活適応クラスと「新移民家庭」を対象にした親睦会や懇親会を開催する。また、新移民の出身国の祝日にエスニック料理大会などのイベントも行う。このような活動を通じて台湾にきた新移民たちの親睦を深めて、お互いにコミュニケーションが取れるように支援している。

新移民のエンパワーメントの助成のために、社会局の指導のもとに、アジア花嫁団体が続々と成立した。最初は 2007 年 5 月にインドネシア籍配偶者の団体である「高雄市インドネシア姉妹親睦会」（高雄市印尼好姊妹會）が設立された。この経験をもとにして、2007 年 11 月 20 日に「高雄市ベトナム姉妹同郷会」（高雄市越南姉妹同郷會）、2008 年 8 月 2 日に「高雄市タイ・フィリピン姉妹同郷会」⁵⁴（高雄市泰國菲律賓姉妹同郷會）、2009 年 10 月 25 日に「中国姉妹親睦会」（大陸好姊妹聯誼會）が成立した。アジア花嫁団体の具体的な活動は第 4 章「アジア花嫁のネットワークと活動」で詳細に述べる。

アジア花嫁の支援体制に関して、高雄市は台湾の地方自治体の中でも常に評価され、高雄市から全国へ広まるサービスも多い。たとえば、新移民センターの設立は高雄市社会局のオリジナルの発想で、台湾初のアジア花嫁の専用施設である。高雄の新移民センターの設立をきっかけとして、全国各地に新移民会館が続々と設立された。新移民センターの成立は、アジア花嫁に同胞同志との交流の場所を提供しただけではなく、相互扶助システムの形成にも貢献している。ただし、新移民センターを利用しているのは一部のアジア花嫁に限られている。経済的な余裕を持ち、しかも、社会活動に興味を持っているアジア花嫁がよく新移民センターを利用している（第 4 章第 2 節参照）。

⁵⁴ タイ籍とフィリピン籍配偶者の人数が多くないから、まとめて一つの親睦会に成立した。

第3節 高雄市の生活適応クラス

新移民センターはあくまでもアジア花嫁に対する支援の統合センターである。アジア花嫁に対する具体的な支援活動は生活適応クラスという現場で行われる。本章の第1節で述べたように、政府のアジア花嫁に対する支援政策の中で、最も評価された政策のひとつは生活適応クラスの開講である。本節では、高雄市政府が主催する生活適応クラスの現場、生活適応クラスの主事者から見たアジア花嫁に対する支援の問題点を述べる。

生活適応クラスの指導機関は内政部の移民署であり、主催部門は各市、各県の民政局⁵⁵である。各市、各県の民政局はキリスト教団体、女性団体、仏教団体などに依頼し、生活適応クラスを開講した。つまり、生活適応クラスの運営に関わる担当者はほとんど公務員ではなく、民間人である。高雄市民政局は各行政区で設立された「新移民コミュニティー・サービス拠点」の社団法人にクラスの開講を依頼した。本論文の主な調査地である高雄市三民区のコミュニティー・サービス拠点は高雄市財団法人キリスト教会聖愛堂にあり、この教会が三民区的生活適応クラスの運営を任されている。筆者が2008年9月13日、2009年8月29日、9月12日と計3回で、聖愛堂教会を訪れ、生活適応クラスの授業を調査した。2回目以降の調査は、宿題の添削、通訳⁵⁶などを担当する授業アシスタントとして、授業に参加した。ここで、3回の調査をもとに、授業の流れ、授業内容と現場の状況、問題点を述べる。

1. 三民区的生活適応クラスの授業現場

生活適応クラスの授業は毎回4時間、計9回で一つのコースを修了する。授業の時間は毎週土曜日の午後1時半から5時半までである。修了後、高雄市民政局は帰化の際に必要な中国語能力の証明書を発行する。まず、2008年9月13日のクラスの授業内容を紹介する。一限の授業は「国語」という中国語の読み書きの授業である。教科書は高雄市民政局

⁵⁵ 民政局は地方政府の行政機関である。市民と県民の国籍帰化、喪失、回復などの相談、戸籍登録後のそれぞれの戸籍に関する証明の登録の手続き、出生、死亡、結婚、離婚、改名、身分証明書、国籍変更、印鑑登録などの業務を行う。

⁵⁶ 通訳は中国語を台湾語に訳したことである。2008年に初めて生活適応クラス調査の時、第3章「アジア花嫁のライフヒストリー」で取り上げる7人のアジア花嫁の1人、インドネシア籍配偶者Gと知り合い、それ以来親交を深めて、調査に協力してもらった。福建系華人Gは台湾語が流暢だが、中国語が聞き取れない。筆者は彼女の隣で付き添って、授業内容を台湾語に訳した。

が出版した本であり、その内容は台湾の風習、高雄市の地理、日常生活の中国語会話である。講師は教会のスタッフである。一限の授業に関して、普通は中国語の授業が多いが、生徒の中国語レベルによって、台湾語の授業に変更した場合もある。あるいは、2時間の授業時間のうちに、前半は中国語の学習で、後半は台湾語の学習というパターンもある。前章高雄の概観を述べたように、高雄市の街では、ほとんど台湾語が使用されているし、中国語を話せない高齢者も多いため、台湾語の学習は非常に重要であり、むしろ、中国語の学習より実用性が高いともいえる。二限の授業は政府機関の役人による専門知識の科目である。専門科目によって、それぞれ担当部門の役人が講師として来る。例えば、当日の専門科目が在留および国籍・帰化の授業だったら、当日の講師は移民署の役人である。

教室の入口にカウンターのような物が設置されて、生徒の名札が置かれている。生徒が教室に入った時、すぐ自分の名札を取り、出席簿にサインする。そして、先週の宿題を先生に提出して、今週の宿題、連絡事項と校外イベントのプリントなどをもらう。当日の授業は1時半に開始すると決められていたのにもかかわらず、早めに来る生徒もあり、また遅刻する生徒もあった。特に中国籍の生徒は前半の授業が終わってから、授業に来た。それは、前半の「国語」は中国籍配偶者に役に立たないためである。そもそも中国籍の生徒は数少ないのである。このクラスの特徴は夫連れのベトナム籍配偶者が何人もいて、夫はよく妻の面倒を見ることである。夫連れでなく、講師の中国語のスピードにはついていけなかった生徒の隣に教会のボランティアが付き添って説明していた。同時に、中国語がすでに上手なベトナム籍女性も新しく来たベトナム籍の同胞を手伝った。一限の授業が中国語や台湾語のとき、授業の秩序はまだ良好で、生徒は集中していた。二限目の専門科目の授業のとき、法律や専門用語が多くて、聞き取れない生徒が多く、私語を始める生徒も増えてきた。アジア花嫁とかかわる重要な条例の内容が出ると、教会のボランティアは「奥様のために、よく聞いてください」と同行のアジア花嫁の夫に呼びかけた。

2回目と3回目の調査は表13のカリキュラムに載せた2009年8月29日、9月12日の授業であった(表13参照)。ここで、カリキュラムの内容について紹介する。このクラスは中国語上級者向けのクラスで、生徒たちの要求に応じて、日常会話の中国語授業の代わりに、台湾語授業を行った。第1回の授業(8月1日)ではいつも高雄の地理や風習を紹介する。第2回の授業(8月15日)内容は台湾料理で、大人気の授業である。生徒たちはグループに分けられ、積極的に参加し、楽しく料理を作ったりしている。

2回目の調査時（2009年8月29日）には国籍法の授業があり、法令がさらに複雑で分かりにくい。台湾人の筆者にとってさえ分かりにくいから、日常会話のレベルしかできないアジア花嫁にとって、もっと難しい。担当の講師もこの現状をよく理解し、生徒に問い合わせの電話番号をメモしなさいと、大きな声で何回も繰り返した。東南アジア出身の配偶者は国籍法の授業内容をあまり理解できなくて、質問も出せなかった。中国籍配偶者は言葉の問題がなくて、頻繁に質問をした。とくに、身分証明書の取得に関する質問が多い。夫が教室を出たらすぐ「離婚しても、台湾の身分証明書をまだもらえるか」という質問をした中国籍配偶者が印象的だった。専門科目の内容は実用性を重視し、新しく台湾にきたアジア花嫁に対して非常に役に立つ。

3回目の調査時の授業（2009年9月12日）の専門科目は就職情報と職業訓練の紹介であった。詐欺グループがアジア花嫁が中国語をあまり読めなく、また台湾の就職事情に疎いという弱点を狙って、アジア花嫁の個人情報を盗用し、悪用したケースが多発した。就職に関わる詐欺などの事例をわかりやすく生徒に説明した。第8回の授業（9月26日）は台湾文化の見学旅行であり、アジア花嫁の家族旅行でもある。教会スタッフはこのチャンスを重視し、アジア花嫁やその家族に積極的に声をかけ、親交を深めて行こうとする。

表 13. 高雄市キリスト教聖愛堂の生活適応クラスのカリキュラム⁵⁷

財団法人高雄市キリスト教聖愛堂				
高雄市政府 2009 年度外国籍および中国籍配偶者の生活適応クラスのカリキュラム				
授業時間：毎週土曜日午後 1：30～5：30				
実施期間：2009 年 8 月 1 日～10 月 3 日				
授業場所：高雄市三民区キリスト教聖愛堂				
日時	時間	授業内容	時 間 数	講師
8/1	1 限 13：30～ 15：30	高雄を知る（地理、 年中行事などを含 む） 台湾語	2	大学カウンセリング教諭
	2 限 15：30～ 17：30		2	小学校教諭
8/15	1 限 13：30～	台湾料理	2	料理の先生

⁵⁷高雄市キリスト教聖愛堂の生活適応クラスのカリキュラムを元に作成

	15 : 30 2 限 15 : 30～ 17 : 30	手工芸品制作	2	DIY 講師
8/22	1 限 13 : 30～ 15 : 30 2 限 15 : 30～ 17 : 30	衛生保健(幼児の予 防接種、疾病予防、 国民健康保険紹介) 子育ての知識	2 2	医療機器の代理店の経理 大学カウンセリング教諭
8/29	1 限 13 : 30～ 15 : 30 2 限 15 : 30～ 17 : 30	台湾語 在留、帰化の知識	2 2	小学校教諭 移民署の役人
9/5	1 限 13 : 30～ 15 : 30 2 限 15 : 30～ 17 : 30	スクーター免許試 験と交通常識 台湾語	2 2	小学校教諭 小学校教諭
9/12	1 限 13 : 30 ～ 15 : 30 2 限 15 : 30～ 17 : 30	就職情報と職業訓 練コースの紹介 台湾語	2 2	労工局のスタッフ 小学校教諭
9/19	1 限 13 : 30～ 15 : 30 2 限 15 : 30～ 17 : 30	人身安全、DV や性 暴力の予防 台湾語	2 2	女性警察官 小学校教諭
9/26	課外授業	台湾文化を扱う博 物館の見学	4	家族連れ参加
10/03	1 限 13 : 30～ 15 : 30 2 限 15 : 30～ 17 : 30	社会福祉の紹介 結婚生活のカウン セリング	2 2	介護会社のスタッフ 大学カウンセリング教諭

2. 生活適応クラスの主事者である H 氏の意見

筆者は多方面からアジア花嫁の生活適応問題にアプローチしようとするために、生活適応クラスの主事者である H 氏に話を聞いた。H 氏は幼児教育の専門家であり、教会のボランティアである。彼女は 2007 年から現在（2013 年 4 月時点）まで、生活適応クラスの運営と授業の講師を担当している。ボランティアが支援活動現場で直面した困難、政府の政策の問題点とアジア花嫁の適応問題に関して、彼女の意見を聞いた。以下は彼女へのインタビュー結果である。

問い：外国籍配偶者に対する支援活動の現場において、どのような困難なところがあるのか。

答え：夫やその家族の考え方を直すのは大変だ。例えば、妻に生活適応クラスを継続させることを反対した夫は妻の自立を恐れているようだ。妻がたくさん勉強すると、自分より賢くなって、コントロールできなくなると、夫は思っているようだ。一方、将来、子供の教育のために、妻にもっと勉強してほしいと思っている夫もいる。

問い：国際結婚の家族を対象にする政府の現行政策について、改善すべきところがあるか。

答え：台湾政府は本当に「新住民家庭」⁵⁸にとっても良くしている。多くの優遇政策を立てている。ただ残念なのは、半数以上の「新住民家庭」はその政策や補助を知らない。この生活適応クラスに来た生徒たちに、私たちは常に政府の政策や彼女らの権利に関する新しい法例などを教えている。

問い：現在の生活適応クラスにはどのような問題点があるのか。今後進むべき方向を教えてください。

答え：週に一回の授業は生徒たちと接触する時間があまりにも短くて、深い交流はなかなかできない。今後は、授業以外に課外活動、家族遠足などのイベントを開催し、もっと深い交流を進めて行きたい。信頼関係を築かないと、生徒は生活や家庭で直面する問題をなかなか打ち明けてくれない。

問い：外国籍配偶者がこのコミュニティ・サービス拠点を利用する状況はどうなのか。

答え：政府は生活適応クラスの宣伝用ダイレクトメールを外国籍配偶者の家に送る。外国籍配偶者の夫はそれを見て、妻をクラスに連れてきた。また、夫や家族は近所の外国籍配

⁵⁸ 第 1 章第 1 節で述べたように、アジア花嫁に対する偏見を除去するために、彼女らを「新住民」という名称が提案された。台湾男性とアジア花嫁との国際結婚の家庭は「新住民家庭」と呼ばれるようになった。新住民に対して、「新移民」はアジア花嫁の投票から選ばれた名称である。現在新移民と新住民は同時に使われている(第 1 章第 1 節参照)。

偶者が生活適応クラスに通っていることを知って、彼女をクラスに連れてきた。親交を深めた生徒は自分の生活問題だけではなく、同胞が悩んだ時、同胞をここに相談に連れて来て、よかったと思う。

問い：外国籍配偶者が政府や公的支援を利用する状況について、どう思うのか。

答え：外国籍配偶者は中国語をあまり読めないから、自力で公的支援を利用するのは難しい。その家族は学歴が高くない人々が多く、申請に関する複雑な手続きの書類を見るとややこしいと思っていて、諦める人も多い。関連の書類を読めない台湾人家族も多く存在している。

問い：外国籍配偶者が福祉施設を利用している率が低い原因について、どう思うのか。

答え：みんな生活があまり裕福ではない。大体簡単な中国語ができると、すぐ仕事に行くケースが多い。仕事に行かない人も家事や子育てで忙しくて時間がない。

問い：国際結婚で問題が起きると積極的に政府機構や女性団体に支援を求めるのはどういう人か。

答え：中国籍配偶者のほうが多い。東南アジア籍の配偶者もいるけど、やはり少ない。よほどDVが深刻な場合ではないと、自ら相談しに来る東南アジア出身の配偶者は少ない。

問い：台湾の生活において、トラブルがよく発生するケースはどういう場面か。

答え：嫁姑問題が多い。赤ちゃんの哺乳のやりかた、「坐月子」（出産後の体の回復に続く一ヶ月の静養）の慣習や子供のしつけなど、とにかくいろいろある。台湾では、「坐月子」の期間では必ず「麻油鶏」⁵⁹を食べる。「麻油鶏」は大量のゴマ油を入れて、非常に脂っこい。ベトナムやタイは熱帯にあり、あっさりした料理が好まれている。そのため、ほとんどのベトナム籍女性やタイ女性は「麻油鶏」を食べられない。時間かけて作った「麻油鶏」の手料理を食べてくれなかったベトナム籍花嫁に怒った姑もいる。常夏の東南アジアから来た彼女らにとって、最も我慢できないのは、その一ヶ月ではシャンプー禁止⁶⁰の習慣なのだろう。

問い：適応良好と適応不良の外国籍配偶者の差異はどこにあるのか。

答え：言葉の壁と夫や夫の家族の態度だ。最初みんな言葉はあまり通じないから、慣れて

⁵⁹麻油鶏は生薬用生姜・米酒・胡麻油・鶏肉で作るスープで、血液循環を良くし身体を温めることができることから、寒い冬の日によく食べられる。産後の体力回復時に昔から飲まれていて、「坐月子」期間には欠かせない料理の1つである。

⁶⁰「坐月子」期間に、体や頭を冷やすことがよくないから、シャンプーやお風呂が禁止される。この風習に従う若者は少ない。

いないことも多いが、次第に言葉の壁を乗り越えて、台湾の生活に馴染んできた。夫やその家族の態度はとても重要だ。台湾に移住したばかりの彼女らの生活範囲はほぼ家に限られている。毎日接している人は夫やその家族だ。そのため、夫やその家族が彼女らの生活をちゃんと支援すれば、大体問題がないと思う。

問い：台湾社会において、外国籍配偶者を差別することが存在しているのか。もしあれば、具体的な話を教えてください。

答え：台湾社会はやはり外国籍配偶者を見下しているが、最近数年は外国籍配偶者の人数が増えてきたとともに、民衆も慣れてきて、見物のような目差しをしないようになってきた。子供の教育に意見が違っているとき、夫や姑は常に彼女らを馬鹿にして、「未開の国から来たあなたに子供を教育する力があるのか」というような目差しで彼女らを疑っているようだ。また、職場で差別的な待遇を受けたケースもたまにある。外国籍配偶者が身分証明書をもっていないから、最低賃金の法律を守っていない業者がいる。「工作証」（就労許可）がまだ降りていない外国籍配偶者に、安い給料できつい仕事をさせている業者もいる。

3. 生活適応クラスの問題点

H氏が指摘した問題点はまさに現行政策の不備なところである。つまり、政府がアジア花嫁に対するさまざまな手当を提供しているのに、多くのアジア花嫁とその家族はこの福祉政策を知らない。唯一の例外が中国籍配偶者の場合である。中国籍配偶者は自分自身の権益に関して、他国のアジア花嫁よりも敏感である。言葉の壁がなく、中国語を読めることもあり、母国の文化も影響しているようである。適応良好と適応不良の外国籍配偶者の差異点は台湾人夫やその家族の態度にあるという指摘に同感する。筆者と接してきた何人のアジア花嫁は全くその通りである。夫の支援がないアジア花嫁には結婚生活が破綻したケースがいくつある。夫の支えで、さまざまな困難を乗り越えてきたアジア花嫁もたくさんいる。以上のような実例は第3章で詳述する。

H氏の指摘以外に、生活適応クラスにはいくつかの問題点が存在している。まず、授業の内容は中国籍配偶者に不向きである。政府は東南アジア出身の配偶者向きクラスと中国籍配偶者クラスを分けるべきだ。また、国語の授業の講師であろうと、専門科目の講師であろうと、みんな話のスピードが普通であるため、初心者の外国人はついていけない。幸いなことに、現場に何人のボランティアが生徒の隣に付き添って説明したりしていた。さ

らに、週に1回の授業であるために、外国籍配偶者に知らせようという情報がどの程度に伝わっているかが疑問である。夫同伴の場合では、夫は外国籍配偶者のかわりに、結婚移民の権益に関する条例と法律を勉強することができる。しかし、台湾に来たばかりの生徒が授業の内容を確実に吸収できるのかという疑問がある。

生活適応クラスの授業内容だけではなく、生活適応クラスの主催者である財団法人高雄市キリスト教聖愛堂の姿勢にも問題点が存在している。キリスト教団体がアジア花嫁を支援する最終目的はアジア花嫁たちを改宗させることである。授業の後で、筆者がスタッフの授業反省会に参加した際、スタッフの「親愛なる主イエス・キリストよ。より多くの外国籍配偶者が信者になれる道を指示してください」という祈りを聞いた。また、接触した一人のベトナム籍花嫁は、スタッフが頻繁に自宅に電話をかけ、教会での礼拝の誘いなど積極的な勧誘に反感を覚え、それ以来、生活適応クラスに参加しなくなった。教会スタッフは生徒の家庭で起きた揉め事の解決に関して、確かに大きな力を発揮し、和解の役を務めてきた。少数のスタッフの強引な宗教勧誘はアジア花嫁の反感を買うので、避けるべきである。

高雄市の実践に関して、最も重要なことは生活適応クラスの開催である。生活適応クラスにはいくつかの問題点が存在するが、多くのアジア花嫁はこの生活適応クラスの参加を通して、ホスト社会で直面した困難を次第に克服してきた。中国語の学習はもちろん重要な成果の一つであり、何よりも同胞と知り合って、ネットワークを広げることが最も大きいメリットである（ネットワークについては第4章で詳述する）。職業相談に関して、実際にこのサービスを利用したアジア花嫁が少ない。多くの外国籍配偶者は同じ国の出身の外国籍配偶者のネットワークを通して、アルバイトを探している。外国籍配偶者は言語と学歴の制約があり、業種や仕事は限られている。平日は家事や育児に追われて、家に閉じ込まれることが多いアジア花嫁の場合、生活適応クラスの利用し、外出して、久しぶりに同胞と母語で話したりして、ストレスの発散ができるというメリットは大きい。

第4節 公益団体の支援

台湾に移住したアジア花嫁への支援活動は政府だけではなく、前節の生活適応クラスの例のように、民間の公益団体も重要な役割を果たしている。むしろ民間の公益団体のほう

が先に積極的な支援を行った。本節では台湾で初めてアジア花嫁に対する支援を行った民間公益団体の活動と高雄市における公益団体の活動を述べる。

1. 台湾初の「外国籍花嫁識字班」と「南洋台湾姉妹会」

全国各地にある中国語クラス、生活適応クラスをはじめとするアジア花嫁に対する支援の草分け的活動は、「美濃愛郷協進会」⁶¹が設立した「美濃外国籍花嫁識字クラス」（美濃外国籍新娘識字班）から始まったのである。これが台湾での初めての「外国籍花嫁識字クラス」である。美濃は高雄県にある有名な客家村である。第1章第1節で述べたように、客家村の男性は深刻な結婚難に直面し、アジア花嫁との国際結婚が多い。美濃も例外なく、町中でアジア花嫁の姿がよく見かけられる。美濃出身の夏曉鵬をはじめとする「美濃愛郷協進会」のメンバーは、1995年の夏ごろ町のインドネシア籍花嫁62と日々接触し、彼女らが日常生活で直面する主な困難は中国語の読み書きができないことに気が付いた。そのため、町のインドネシア籍花嫁のために中国語教室を開講した。その後、この中国語教室を全美濃鎮に拡大するために、高雄県政府に「美濃外国籍花嫁識字クラス」という計画を申請した。この計画の目的は中国語の学習を通して、新移民女性のエンパワーメントを促成させることである。このクラスはアジア花嫁を対象に母国の言語や歴史を教える教師になれるようなトレーニングを始めた。彼女らはもはや中国語クラスの生徒ではなく、台湾の市民に教える立場にある。2002年9月、台北県の永和コミュニティ大学と連携し、「外国籍花嫁識字クラス」を開講し、台北にも拠点を設立した。

「美濃外国籍花嫁識字クラス」のメンバーは「美濃愛郷協進会」と永和コミュニティ大学女性団体の協力のもとで、2003年12月7日に初めてアジア花嫁からなる社会法人団体である「南洋台湾姉妹会」を設立した。姉妹会のメンバーは美濃と台北県永和のインドネシア人、ベトナム人、タイ人などのアジア花嫁が多く、みんな東南アジア出身であるため、南洋という団体名を選択した。地元の台湾人との交流機会が多く、台湾人主婦の入会者もいる。ボランティア活動を通じて台湾人女性がアジア花嫁を理解するようになり、団結が生まれてきた。「南洋台湾姉妹会」の3分の2の理事は東南アジア花嫁が担当し、理事長は東南アジア花嫁に限定されている。団体の主旨は会員のエンパワーメントと移民女性に関

⁶¹ 「美濃愛郷協進会」は最初美濃ダム建設反対運動のため、地元の青年を中心に成立した協会である。現在は客家文化の振興に力を入れている。

⁶² 90年代流入したアジア花嫁はインドネシア籍女性が最も多い（第1章第1節参照）。

する法令の改正を求めることだ。団体を成立させて以来、中国語の学習だけではなく、会員のエンパワーメントに取り組み、多文化の講師や東南アジア各国の通訳人材を育成してきた⁶³。

長年の活動を経て、「南洋台湾姉妹会」は「移民の人権に関する法律改正を求める連盟」（移民／移住・人権修法連盟）と連携し、従来の入管法の改正を訴え、民間版の「入出國及移民法」修正案を提出した（第2章第1節参照）。2005年7月、高雄と屏東のアジア花嫁は家族とともに、行政院の前に行き、入管法の改正を求めたデモの最前列に出た[夏曉鵬 2005: 12]。「南洋台湾姉妹会」の幹部によると一般の人々やメディアも、アジア花嫁は若く貧しく何もわかっていないと思っていたが、「南洋台湾姉妹会」の活動の姿を知って、彼女たちに対する見方は次第に変化してきたという。しかし、アジア花嫁のデモ参加活動に関して、「南洋台湾姉妹会」の台湾人指導者の呼びかけが大きいと考える一般の台湾人が多い。

「南洋台湾姉妹会」は演劇を通して、アジア花嫁のエンパワーメントを促成させるために、2009年「南洋姉妹劇団」（南洋姐妹劇團）を成立させた。これは台湾初の東南アジア籍花嫁からなる劇団である。まず、演劇を通して、東南アジア花嫁が日常生活の経験から自立意識への目覚めを喚起した。そして、母国から海を越えて台湾に来た東南アジア花嫁であるヒロインが家庭と職場で直面したさまざまな困難を描き、いかに克服してきたかという物語である「海を越える夢」⁶⁴（漂洋的梦想）を演じた。公演後、観衆との交流のために、座談会も設けている。演劇の公演は、アジア花嫁本人のエンパワーメントの達成だけではなく、アジア花嫁に対する台湾人の偏見の払拭と理解の促進にも繋がった。法改正デモへの参加や演劇の活動だけではなく、アジア花嫁を題材にしたドキュメンタリーの撮影、『外国籍花嫁と呼ぶな』⁶⁵（不要叫我外籍新娘）という書籍[夏曉鵬 2005]の出版など、「南洋台湾姉妹会」は夏曉鵬およびソーシャルワーカーの指導のもとで、アジア花嫁の権利と利益のために、活動してきた。

以上の活動はすべてアジア花嫁の立場に立って、彼女たちのエンパワーメントのために、

⁶³ 南洋台灣姐妹會 <http://tasat.org.tw/blogs/10> (2013.11. 18 参照)

⁶⁴ 「海を越える夢」（漂洋的梦想）とは舞台劇のタイトルである。アジア花嫁は海を越えて、台湾に来て、自分の夢を叶える意味がある。

⁶⁵ 『外国籍花嫁と呼ぶな』では、ホスト社会の偏見に対して不満を綴ったアジア花嫁本人の投稿および、アジア花嫁に対する不公平の現状に対して、学者の訴えが寄せられている。台湾人の自省を促す書籍である。

展開してきた支援と思われるが、すべてのアジア花嫁がこのような活動を全面的に評価しているとは限らない。「南洋台湾姉妹会」幹部の「煽動」によってアジア花嫁が入管法改正デモに参加したと批判したベトナム籍花嫁もいる。このデモを見たベトナム籍花嫁である陳は『蘋果日報』に投稿し、「南洋台湾姉妹会」に対する不満を訴えた。陳によると、私たちはただ平凡な暮らしを望んでいるだけである。平日は夫の許可がないと、外出できない私たちがどうやって高雄から台北まで抗議しに行ったのか。同胞が民間団体（南洋台湾姉妹会）に利用され、デモの道具になってしまったことに対して、侮辱と悲しみを感じたと、陳は書いている[陳鳳鳳 2005]。一方、陳の投稿に対して「南洋台湾姉妹会」のタイ籍の邱理事長は、アジア花嫁全員の権利と利益のために、私たちは抗議しに行ったと反論した。実際、当日のデモでは、アジア花嫁の家族たちも同行した。自由に外に出られるアジア花嫁の私たちが自由に外出できない同胞のために声をあげないと、だれが彼女たちのために、声を発するかと邱はコメントした[邱雅青 2005]。

アジア花嫁に関する不合理な法令は確かに「南洋台湾姉妹会」やほかの民間団体の訴えで次第に改善されるようになった。しかし、「南洋台湾姉妹会」などの民間団体はアジア花嫁をデモに参加させた場合、一般のアジア花嫁の立場への配慮も必要である。抗議に参加するアジア花嫁の姿を見た一部の台湾人家族が、今後自分の妻の行動をますます制限するかもしれないという懸念がある。

2. 高雄市における公益団体の支援活動

前節の高雄市新移民コミュニティ・サービス拠点の紹介に関して、キリスト教教会団体にあることがわかる。高雄市における公益団体の支援活動に関して、キリスト教教会団体は最も積極的で、幅広く活動している。その中で、キリスト教長老教会の陳聡明牧師が開催した外国籍配偶者生活適応クラスが現在高雄市生活適応クラスの見本となっている。ここで、陳聡明牧師（仮名）のアジア花嫁に対する支援活動の経緯を紹介する。

2005年陳牧師が前鎮に来たとき、前鎮区はベトナム語、タイ語、インドネシア語など台湾人が読めない文字の看板が目立ち、それぞれの店内には、東南アジア各地の特産物、薬品、新聞雑誌などが陳列されていた。市場では、たどたどしい台湾語で、売り手に魚、野菜、肉の値段を聞いたりしている若い主婦がたくさんいた。これは陳牧師が前鎮区に来た最初のイメージであった。彼女らのために、何かできないかと考えていた。2005年5月、

陳牧師が高雄市キリスト教家庭協談センター⁶⁶（以下、家協と呼ぶ）を訪問した際、家協が高雄市政府から外国籍配偶者に関する業務の依頼を受けていることを知った。イベントを主催する際、常に各機関に場所を借りらないといけない。前鎮区はアジア花嫁がもっとも集中している地域で、前鎮教会でイベントをしてくださいと陳牧師は家協のスタッフに声をかけた。完成したばかりの礼拝堂はきれいだし、各設備も整っているし、教室もいっぱいあるからと彼は勧めた。その後、家協は教会の場所を借りて、イベントや各種のクラスを行った。最初のころ、教会側は場所とベビーシッターサービスを提供していた。家協側は生徒の募集、教学、経費の申請などの仕事を担当していた。授業の内容は生徒を最も募集しやすい「スクーター免許受験クラス」であった。中国語とベトナム語を対照した教材を使用していた。このように、前鎮区のアジア花嫁は次第に教会、牧師、スタッフらに親近感を持つようになった。教会も次第に彼女らの生活スタイルや環境、生活にある困難を把握してきた。彼女らをリラックスさせる場所を提供してきた。

その後、家協の紹介で、高雄市民政局⁶⁷の職員は「外籍配偶生活適応クラス」の業務の依頼しに教会を訪ねてきた。これは民政局が初めて、適応クラスの業務を民間の団体に委託したケースである。今まで公立の小中学校の教室を借りて開いた生活適応クラスは夜間しか利用できなかった。生徒たちはみんな家族の晩御飯の用意をしなければならないから、クラスに参加できる人が少ない。そのため、民政局は民間団体に目を向けて、生活適応クラスの委託業務を始めたのである。このチャンスは二度と来ないと思い、陳牧師は長期的な業務だと見込んで、積極的に授業の開始に着手した。

8月に前鎮教会は高雄市民政局第四課と契約し、生徒の募集をして、9月に授業を開始した。契約の内容では、前鎮区の3クラスを担当する。入学式は11人しか来なかった。生徒の人数を増やすために、友達を連れて来る「案内賞」を設けて、小さな奨励でうまく展開できるようにした。授業の内容は行政情報、交通安全、社会福祉、戸籍法令、台湾語教室などである。授業の時間が経つとともに、生徒の人数もだんだん増えてきた。また、生徒の家族を誘って、課外授業と見学旅行を開催した。2台のバスでも載せられない大人数で

⁶⁶ 1974年台湾キリスト長老教会寿山中会（高雄市の寿山地区を管轄する教会の組織）は現代社会の変化とともに、結婚と家庭生活に与える社会変化と衝撃の重大さを認識した。家庭と社会をより深く支援していくために、高雄市キリスト教家庭協会センターを設立した。一般に、家協と略称されている。その後、時代の変化を会わせて、二つのエクステンション・センターを増設した。ひとつは高雄市旗津老人福利サービスセンターにあり、もう一つは高雄市新移民センターにある。

⁶⁷高雄市民政局第四科が外国籍配偶者の生活適応クラスの担当である。

あった。11月終わりの卒業式に、小港教会の2つクラスと合同で、生徒が授業を受けた成果の発表会を行った。発表会当日、来賓や家族らは150人も来て、指導機関の人々は大喜びだった。来場者はアジア花嫁たちが歌った台湾語民謡と童謡に驚いた。生徒が生活適応クラスを卒業した後、教会との付き合いも継続している。たとえば、卒業した生徒が出産すると、教会のスタッフは出産お見舞いと「坐月子」のケアしに行ったりしている。新生児の「彌月礼」⁶⁸のとき、生徒もケーキを教会に持ってきて、みんなと一緒に食べたりしている。こうして、前鎮教会が担当している生活適応クラスは数多くのアジア花嫁を支援して、彼女らと台湾人家族や地域の住民たちとの関係の改善も果たしているようだ。しかも、高雄市の生活適応クラスの見本になって、よく見学に来る団体が多いし、高雄州市長陳菊をはじめとする政治家たちも視察に来た。

陳牧師が前鎮教会にいる4年間、教会の経済事情は信者数の減少や人口の流出などで、悪化した。2009年、陳牧師は責任を取るために辞任した。前鎮教会の牧師を辞任したにも関わらず、アジア花嫁の支援活動をし、高雄市ベトナム同郷会の顧問を担当している。

以上のように、キリスト教長老教会の陳牧師が率いる献身的な支援活動は高雄市在住のアジア花嫁と高雄市政府の間で、評価されている。一方、第3節で述べたように、生活適応クラスの一部スタッフの行き過ぎた宗教勧誘も存在している。そのため、今後宗教団体がアジア花嫁を支援する際、露骨な宗教勧誘を控える姿勢が望まれている。また、アジア花嫁をデモの道具として利用する「南洋台湾姉妹会」の活動を批判したアジア花嫁も存在している。ただし、台湾初のアジア花嫁からなる社団法人の「南洋台湾姉妹会」であろうと、高雄市の生活適応クラスの見本になった前鎮区の「外国籍配偶生活適応クラス」であろうと、両方とも民間の公益団体の支援から始まった活動である。民間公益団体が率先して、台湾社会におけるアジア花嫁への支援活動を始め、さまざまな活動をし、ある分野では政府と地方自治体のアジア花嫁政策に方向と見本を提示したことを評価すべきだと考える。

⁶⁸ 「彌月礼」は漢民族の風習で、新生児が生まれて1ヶ月経ったとき、出産祝いをもらった人にお返しを贈ることである。「彌」は「満ちる」という意味で、ひと月に満ちることで、つまり1カ月が経つということである。

第3章 アジア花嫁のライフヒストリー

前章で述べた台湾政府のアジア花嫁政策、生活適応クラスの現場、高雄市のキリスト教団体の支援などからホスト社会におけるアジア花嫁の生活の一面を知ることができた。国や民間のさまざまな支援活動から見ると、アジア花嫁はホスト社会で偏見を受け、まるで救済を待っている弱者かのように描かれているが、彼女らは本当に単なる弱者であろうか。実際のアジア花嫁の姿を明らかにするために、本章では高雄市在住の7人のアジア花嫁のライフヒストリーを紹介する。アジア花嫁本人の思いや語りを通して、台湾社会で直面した困難を明らかにしたい。それぞれのライフヒストリーから、彼女らがどのように努力し、そして、いかなる生存戦略を使って、さまざまな困難を乗り越えたかがわかる。

本章の第1節では、7人のアジア花嫁のプロフィールについて、紹介する。本論文の中心的なテーマが生活適応問題であるため、結婚生活が順調であるかどうかはアジア花嫁の台湾における生活適応を考えるための重要な指標である。彼女らを結婚生活が継続しているかどうかに分けて、第2節「結婚が継続しているケース」と第3節「結婚が破綻したケース」で、それぞれ4人と3人のライフヒストリーを詳しく取り上げる。最後の第4節では、7人のライフヒストリーから読み取れる結論をまとめて、彼女らの生存戦略を議論する。

第1節 高雄市の7人のアジア花嫁

高雄市のアジア花嫁調査に関して、無作為抽出法ではなく、有為抽出法というという手法を取り入れて、調査対象を選択した[豊田 1998 : 35 - 39]。台湾人男性とアジア花嫁との国際結婚の多様性を考えて、違うタイプの調査対象を意図的に選択したのである。それぞれタイプが異なる7人のアジア花嫁のライフヒストリーを通して、台湾人男性とアジア花嫁との国際結婚の多様化を表すことができ、国際結婚の縮図を見ることができるようになる。

まず、「国籍」の項目では、中国籍W以外、調査対象は全員が東南アジア出身である。東南アジア出身の女性は言葉の壁、生活習慣・文化の相違によって、台湾生活に馴染めない事例が数多い。言語・文化の相違に起因する社会適応上の課題を解決するために、政府は東南アジア出身の花嫁を主な対象として、多くの政策を考案した。そのため、本論文はおもに東南アジア出身の女性を調査対象にして、彼女らをめぐる諸問題を取り上げる。東南アジア出身の女性の中で、ベトナム籍女性

が最も多いため、ベトナム籍女性を3人取り上げる。その他、タイ籍、インドネシア籍、カンボジア籍の女性それぞれ一人ずつを取り上げる。東南アジア女性と比較するために、中国籍女性を一人だけ加えることにした。

「民族」の項目については、華僑と華人と非華人（タイ人、ベトナム人）を取り上げている。華僑の業務を取り扱う政府機関である「僑務委員会」の解釈によると、華人全体の中に、華僑が含まれる。華僑は今でも中華民国の国籍を保持したまま海外に住んでいる華人を指す⁶⁹。華僑、華人、非華人の中で、非華人にとって、文化の差異、言葉の壁によるハンディキャップが最大である。アジア花嫁の台湾における生活適応の過程において、民族が重要なキーワードだと考えて、中国籍華人、華僑、東南アジア出身の華人、非華人という4タイプのアジア花嫁を取り上げることにした。

「年齢」から見ると、50代のタイ籍M以外、全員30代後半から40代前半である。ほとんど20代ごろ台湾人男性と結婚した。夫の年齢は女性より一回り高いケースが多い。

「学歴」に関して、中学校卒のカンボジアK籍以外、全員は高校卒以上の学歴をもっている。さらに、大学卒という高学歴卒のインドネシア籍Gもいる。ただし、時代による教育レベルの変化を考えると、高校卒業だったMは高学歴に属している。

「夫の学歴」に関して、低学歴の小学校卒のタイ籍Mの夫がいるし、カンボジア籍Kと中国籍WAの夫のように、中学校卒業の者もいる。ベトナム籍CHとベトナム籍HAの夫は専門学校卒業である。ここでも、夫の年齢によって、教育レベルを考慮すべきだ。50代以上の台湾人男性は小学校卒業といえども、低学歴とは言い難い。それは台湾の9年制国民義務教育の実施は1968年から開始し、50代以上の人は6年の国民義務教育の体制のもとで育ってきた世代の人間である。また、タイ籍Mの夫のように60代以上の男性は半分小学校卒業である⁷⁰。ベトナム籍CHとHAの夫は二人とも専門学校卒業といえども、それぞれの年齢を考えると、CHの夫は高学歴に属し、HAの夫の学歴は高学歴に属していない。

「夫と知り合った経緯」から見ると、インドネシア籍G、カンボジアK、ベトナム籍Cは典型的な台湾人男性とアジア花嫁との国際結婚、つまり結婚仲介業者の紹介を通じた国際結婚である。一方、台湾企業の海外進出とともに、両国の人々の交流が活発になり、増えてきたケースが中国籍WAベトナム籍CHの事例である。タイ籍Mとベトナム籍HAは彼女らの台湾への移住労働をきっかけとして、台湾人男性と知り合って結婚した。台湾人男性とアジア花嫁の国際結婚において、結婚仲介

⁶⁹ 中華民国僑務委員会『西馬來西亞華文報之發展與困境——多族群環境中報紙角色和功能性的轉變』
<http://www.ocac.gov.tw/public/public.asp?selno=2963> (2013.4.25 参照)

⁷⁰ 内政部 2013 年第 14 週内政統計通報(15 歳以上人口教育程度統計) http://www.moi.gov.tw/stat/news_content.aspx?sn=7266 (2013.5.5 参照)

業者の紹介、台湾企業の海外進出の影響、アジア花嫁本人の海外移住労働という3タイプがよく見かけられる。それぞれ異なるタイプの国際結婚を取り上げて、アジア花嫁の台湾における多様な生活適応を考察したい。

「台湾にきた年数」という項目では、最も短い年数のHAでも10年以上台湾に住んでいる。その理由は、筆者は主に中国語で聞き取り調査を実施しているので、一定のレベルの中国語能力を持っていない女性の調査が困難である。また、ホスト社会への適応過程の全体像を把握するため、台湾にきた年数が比較的に長いアジア花嫁を調査対象として選択した。

アジア花嫁本人の「職業」という項目では、第2章で述べたように、言語と学歴の制約があり、業種は限られているため、タイ籍Mとカンボジア籍Kとベトナム籍HAのように、飲食店のアルバイトや清掃業者の従業員をはじめとする単純労働に就く人が多い。一方、中国語能力を生かし、外国人労働者仲介の通訳を担当しているベトナム籍CHもいる。さらに、比較的に裕福な経済環境に恵まれて、専業主婦でいられるインドネシア籍Gとベトナム籍Cもいる。

「夫の職業」に関して、国際結婚した台湾人男性の多くは労働者階層に属するか、心身障害者であり、無収入の場合もあるというステレオタイプがある。しかし実際にはGとCHの夫のように、工務店の社長と大手企業の幹部で高収入のケースもある。もちろん、建築現場の労働者をはじめとする単純労働に就くMとHAの夫のケースもある。

「結婚当初の世帯構成」という項目では、多くのアジア花嫁はカンボジア籍Kのように、高齢の親を介護する役割を強要されているというイメージが強いが、夫の家族と別居しているタイ籍M、インドネシア籍G、中国籍WA、ベトナム籍HAのケースもある。一方、夫の家族と同居し、2世帯住宅のベトナム籍CHのケースもあり、世帯構成は多様である。

以上のように、それぞれの背景を考慮し、台湾の国際結婚を代表するさまざまなタイプの7人のアジア花嫁を意図的に選択したので、国際結婚の多様性を示し、国際結婚の全貌を把握することができる。

表 14. 7 人のアジア花嫁のプロフィール (2013 年時点)

	M	K	C	G	WA	CH	HA
結婚生活	継続	継続	継続	継続	破綻	破綻	破綻
国籍	タイ	カンボジア	ベトナム (南部)	インドネシア	中国	ベトナム (南部)	ベトナム (北部)
民族	タイ人	潮州系華人	広東華人	福建系華人	中国籍華人	客家系華僑	ベトナム人
年齢	56	39	41	43	42	38	35
夫の年齢	68	59	48	56	43	46	36
夫婦の結婚歴	初婚同士	初婚同士	初婚同士	初婚同士	初婚同士	初婚同志	大離婚歴あり
学歴	専門学校卒	中学校卒	高卒	大学卒	高校卒	高校卒	専門学校卒
夫の学歴	小学校卒	中学校卒	高卒	高校卒	中学校卒	専門学校卒	専門学校卒
夫と知り合った経緯	台湾の職場で夫と知り合った	結婚仲介業者	結婚仲介業者	結婚仲介業者	夫が中国出張、上司の紹介	ベトナムの職場で夫と知り合った	台湾の職場で夫と知り合った
台湾に来た動機	仕事	結婚	結婚	結婚	結婚	結婚	仕事
台湾に来た年数	28	18	16	15	14	15	11
結婚生活の期間 (年)	26	18	16	15	8	3	3
結婚当初の世帯構成	夫の家族と別居	夫の家族と同居	夫の家族と同居	夫の家族と別居	夫の家族と別居	夫の家族と同居	夫の家族と別居
現在の世帯構成	夫と息子 (23 才) と娘 (18 才)	姑 (85 才) と夫	舅姑、義兄一家、娘 2 人 (15 才と 13 才)	夫と娘二人 (14 才と 9 才)、義兄 (58 才)	娘 (13 才)	息子 (14 才)	夫と息子 (2 才)
職業	飲食店のアルバイト	飲食店のアルバイト	専業主婦 高雄市ベトナム	専業主婦	自営業 (ジューズスタン)	外国人労働者 仲介会社の通	清掃業

		現在は姑の介護	ム同郷会会長		ド)	訳	
夫の職業	建築現場の労働者	電気屋経営	解体業経営	工務店の社長	製菓会社営業、闇金	大手企業の会社員	警備員
結婚生活の現状	持続	持続	持続	持続	夫と離婚。交際相手は離婚歴の40代の外省人。	夫の不倫が発覚し、離婚。交際相手は離婚歴の台湾人40代男性。	夫と仲が悪く離婚協議中。交際相手は既婚の外省人（56才）。

第2節 結婚が継続しているケース

本節では結婚生活が継続しているタイ籍 M とカンボジア籍 K、インドネシア籍 G、ベトナム籍 C のライフヒストリーを紹介する。海外移住労働者として台湾に来たタイ籍 M 以外、全員結婚仲介業者の紹介を通し、夫と知り合い、結婚をきっかけとして、台湾にやって来た。台湾に来た年数の長さを順番に、4 人それぞれのライフヒストリーを紹介する。4 人のライフヒストリーを紹介した後で、彼女らがどのような問題に直面し、そして、いかなる生存戦略を使って、さまざまな困難を乗り越えたかをまとめて、分析する。

1. タイ籍 M のライフヒストリー

図 4. M の家族構成

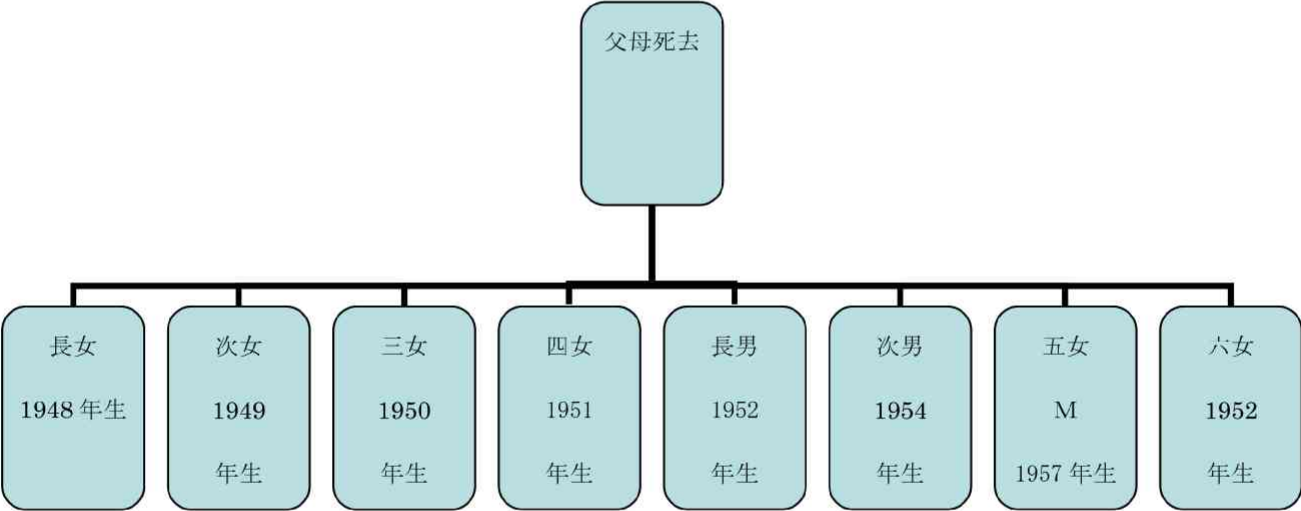


図 5. 夫の家族構成



① Mの生い立ち

タイ籍 M は高雄市三民区にある筆者の実家の揚げ物屋で働いている。2002 年に、M の近所の人の紹介で、店に来た。彼女が初めて来たとき、身だしなみが良くて、店頭立つ仕事を任せられなくて、閉店後の掃除の仕事をさせた。その後、M は夫が失業し、家計が苦しくなったため仕事時間をもっと長くしてほしいと申し出た。ちょうど一人のスタッフがやめた時だったため、申し出を受け入れ、M は身だしなみに心がけて、次第に食材の下準備や商売の仕事を覚えていった。今では店頭で顧客と直に対面し、勘定を受け取る仕事をしている。長年の付き合いで、M は筆者の聞き取り調査を快く受け入れた。

M はタイのバンコク出身である。父親は最初の妻が亡くなったので、M の母親と再婚した。父親は公務員で、安定した収入を得ている以外に、地主の子孫でもあり、毎年借地料ももらっていて、裕福な家の生れだった。長女から五番目の子供までは最初の妻の子で、次男以降は M の母親が生んだ子供である。M の母親は結婚していきなり 5 人の子供の母親になった。血縁が繋がっていない子供にも関わらず、M の母親は子供全員に同じ愛情を注ぎ、育ててきた。一方、父親は農林省で働いていたので、全国各地の農業の視察という仕事で、1 年に何か月も出張していた。父親が家にいるとき、子供のしつけには厳しくて、子供はみんな父親のことを怖がっていた。M は子供のときから我が強くて、反抗的で、よく父に叩かれた。父親が出張で家にいない日が多くて、優しい母親のもとで気ままな幼少時代を過ごしてきた。兄弟全員大学卒で、銀行の役員もいるし、公務員もいる。M はエリート一家の兄弟と比べて、問題児だった。近所でも不良で有名だった。妹のことをいじめた近所の若い男性と喧嘩したこともある。M は専門学校を卒業して、車のセールスをしたり、飲食店のアルバイトをしたり、生命保険や車販売の営業など、次々と転職した。仕事をせず実家でぶらぶらしていた時期もあった。近所の人々は M のことをさげすんでいた。「一家はみんな優秀なのに、どうしてろくに仕事せず遊んでいるばかりの不良の子が出たのか」と近所の人々がいつも陰で、M の悪口を言っていた。評判がよくないので、縁談の話は一度も来なかった。

② 台湾に来たきっかけ

近所と親戚の目が気になり、周囲から来る圧力を感じて、バンコクの実家に居づらくなった M は 28 才のとき、友達に台湾へ仕事に行かないかと誘われた。海外移住労働の話は親や家族、誰にも相談していなくて、自分で決断したのである。「自分は外国に行って立身出世して、故郷に帰りたい。今まで自分をばかにしていた近所の人に出世した自分を見せたいと思っていた」と M が語った。

1985 年、出発当日の朝 5 時半ごろ、熟睡していた母親を起こして、「台湾へ仕事に行く。今から空港に行く。台湾で落ち着いたら、また連絡する」と話した。母親はあまりにも驚いて反対の声も出なかった。M の性格をよく知っているから、母親は反対しなかった。なぜならば、M が一度決めたことなら、誰でも止めることができないからである。そして、手元のお金を全て M に渡して、見送った。父親は当時出張中だった。M は仲介業者を通して、友達 3 人と一緒に雲林県麦寮郷の靴工場に来た。仲介料金、チケット代、関連書類の代行料金など、1 人で総額 10 万台湾ドル（当時 50 万円相当）かかった。2 回分割で払った。申し込んだとき、仲介業者の事務所に 5 万台湾ドルを払い、台湾に到着してから、残金の 5 万台湾ドルを支払った。靴工場に来て、みんな寮に住んだ。言葉が通じないから、M は英語で台湾人と意思疎通をしていた。そのうち、だんだん台湾語と中国語を覚えていった。

③ 夫と結婚した経緯

2 年後、台湾生活に慣れてきたころ、台中のほうで都会で、給料がいいと聞いて、台中のタオル工場に転職した。そのタオル工場で雲林県古坑鎮出身である今の夫と知り合った。42 才だった夫は無口で、何を言われても、人と口論しない温厚な人だった。当時、同僚は「こいつは年を取っているから、嫁を貰えないかも。彼の嫁になってあげて」と、よくみんなの前で M に冗談話をしていた。同僚のすすめで、二人は付き合いを始めた。30 才だった M は自分もいい年なので、そろそろ結婚しないとまずいと思っていた。夫は一人っ子で、結婚したら、親戚の付き合いがなくて気楽だと思った。そもそも、M はタイでは親戚の付き合いが嫌だから、台湾に来たのである。舅も亡くなっていたし、普通の舅姑問題と比べて、大した問題がないと思っていた。将来、夫は田舎の一戸建ての家を継ぐので、一応家を持っている人間である。この条件は悪くないと思って、1988 年に夫と結婚した。結婚して 1 年後、姑が病気で亡くなった。そのため、M の結婚生活では、舅姑問題は終始存在していない。

姑はかつて在宅保育の仕事をしていた。当時、面倒を見た女の子の家族と親しく、その子を義理の娘⁷¹にした。一人っ子である夫と義理の妹は仲がよい。彼女は高雄市地下街⁷²でゲーム店とおでんの店を経営していた。店の商売が繁盛して人手不足のため、台中にいた M の夫に声をかけて、店の手伝いを依頼した。M は夫とともに、おでんの店で働き始めた。台中の工場の給料と違い、大金を

⁷¹台湾社会では仲の良い友達の子供を義理の子供にする慣習がある。

⁷² 1978 年にできた高雄市地下街は台湾で最初の地下街で、敷地面積が 3 万坪、3 層より構成された。地下ショッピングモール、百貨店、映画館、ローラースケートリンク、ボーリング場、展覧館、ゲームセンターなど、さまざまな娯楽施設がある。当時アジアでも有名なショッピングモールの一つであった。

手にして、今住んでいる家を購入した。毎日店の忙しい仕事に追われている日々だが、夫婦はよい収入で満足していた。ところが、1989年の年末の火災で、地下街は焼失してしまった。義理の妹は2軒の店を失って、大きな損失を背負った。店を再建する財力がなかったため、夫は建築現場に転職し、Mは高雄市楠梓加工輸出区にある電子部品工場で働くことになった。その後、電子部品工場は倒産し、近所の紹介で筆者の実家の店に来た。

④ 結婚生活

Mの息子によると、表面上母親が強くて父親が弱い感じだが、実は重大な決定を下さないといけない場合、父親が判断を下すという。父親は子供の学校生活や生活面の些細なことにあまり口を出さない人物であった。子供が小さいときには、食卓を囲んで一家が集まることが多かったが、現在はみんなの生活の時間がばらばらで、一緒に食事をすることはまれである。建築現場で力労働の仕事に従事している夫はガーデニングに熱中し、屋上で様々な植物を育てている。特に蘭に力を入れている。建築現場の仕事をやめて蘭の栽培に専念したほうが儲かっているかもしれないと何人にも言われたほどである。Mは大の麻雀好きで、なんと娘を出産した2日後にすぐ近所の人を呼んでマージャンをした。とはいえ、家族の仲が悪いとは言えない。自転車もスクーターも乗れないMはどこかへ出かける時、夫か息子に声をかけると必ずスクーターで送ってくれる。夫婦の仲も悪くない。なぜならば、二人は定年してからタイに移住する予定がある。Mの話によると「旦那は一人っ子で、兄弟がいなくて、万が一のことが起きたら、助けてくれる人がいない。タイにいる兄弟はみんな仲良しで、困ったとき、お互いに手伝えることができる。タイの田舎の土地を買って旦那に好きなガーデニングをさせてあげたい」という。すると、筆者は「心配しなくてもいいよ。息子さんや娘さんはあなたたちに親孝行をするでしょう」と言った。Mは「子供の人生は彼らの人生でそれぞれの生活があり、夫婦の老後の生活は彼らの扶養をあてにしない」と語った。

⑤ 子育てと教育

1992年、結婚して4年が立っても、なかなか妊娠できないMは病院に行って、検査を受けた。医者から妊娠できないと告知されたM夫婦はショックでなかなか事実を受け止められなかった。だが、夫は一人っ子だから、後継ぎを持つという重大な責任を持っている。そこで義理の妹のアドバイスで、児童養護施設から2才の男の子を養子としてもらった。Mの息子は今でも自分が養子という事実を全く知らない。

筆者が初めてMの息子と会ったのは2004年だった。中学校2年生だった彼は内向的で、猫背で話す声がとても小さかった。相手と話すとき恥ずかしくてなかなか相手と目をあわせることができない子だった。中学校を卒業するまでに、頻繁にいじめられる事件があった。しかし、周囲の関係者や本人の話によると、いじめの原因は本人の内向的な性格によるものであり、母親がタイ出身であることとは全く関係がないということであった。中学校を卒業してから、父親の意見を聞いて、息子は企業と連携している自動車専門学校に進学した。勉強が苦手なら、せめて手に職をつけて将来生活に困らないようにとの親の考えである。専門学校に入ってから、いじめられることがなくなり、Mの息子の印象はだんだん明るくなってきた。髪型を変えて、髪の毛も染めて、今風の若者のような外見になった。店の人と話したとき、明るくはきはきと対応できるようになり、自信を持つようになった。2年前、兵役を終えたMの息子は実家の近くのカーショップで仕事を始めた。将来の夢は自分のカーショップを持つことである。Mの話によると、息子は不器用だが、とても親孝行な子供である。お墓参りの日が近づくと、自ら墓参りのスケジュールを組んだりしている。交際中の女性は必ず家に連れて来て、親に紹介することという。

息子を児童養護施設から養子としてもらった3年後、不妊だったMは妊娠した。しかし、検査で胎児の心臓が悪くて、夭折する可能性が大きいと告知された。なかなか妊娠できなかったMはやつと自分の子供を授かることができて、大喜びしていた。生存する可能性がわずかでも、わが子を出産することを決意した。Mは無事に出産したが、娘が8歳まで、何回も心臓のバイパスの手術をした。M夫婦は愛娘の病気を治すために大金をつぎ込んだ。娘は8才まで、ずっと入退院を繰り返したので、幼稚園と小学校に通う日は限られていた。また、人見知りの性格だったため、時には学校の先生の質問に対して、返事ができなかった。学校の授業もついていけなかった。当時の担任は「この子は発達障害で、養護学校に通わせるべきです。うちの学校はあなたの娘には向いていない。」と何度もMに勧めたのである。その先生は年配で、考え方が古くて、中国語を読めないMやアジア花嫁の子供に対して偏見を持っていた。しかし、Mは、娘が今までの授業をあまり受けていないし、学校生活にもまだ慣れていないから、成績が悪いのも当然だと思って、その先生のアドバイス聞き流した。その後、娘は順調に進級し、成績は中の下だが、成績以外は他の児童と変わらないぐらいに成長した。

Mの娘は小学生のとき、よく父親のスクーターに乗って、筆者の実家の店に来ていた。筆者がMの娘と接していて、とても天真爛漫な子供だった。一度、彼女に将来は何になりたいかと聞いたら、

彼女は「ビンロウ売りのお姉さん」(檳榔西施)⁷³と大きい声で返事した。筆者はあまりにも驚いて、その理由を聞いた。すると、「毎日きれいな服を着られるから」と彼女はニコニコと答えた。数年後、中学生だった彼女に将来の夢はまだ「ビンロウ売りのお姉さん」なのかと聞いた。彼女はそんな夢はなかったよと恥ずかしそうに返事をした。今年 17 才になった彼女は、企業と連携している専門学校に通っている。3 か月間、学校でヘアーサロンの技術を勉強し、次の 3 か月は学校と契約している美容室で仕事をしている。彼女は今、台南の美容室で実習をして、将来一人前の美容師になるために頑張っているようだ。

今 M 夫婦の収入は別々である。自分が稼いだお金を自分で使う。家の水道代や電気代は夫が払う。台南の美容院で実習している娘が高雄の学校に戻って、通学する時期になると、M は食材を買って、料理を作る。子供は M が作ったタイ料理を好んでいる。とくに息子はタイに 3、4 回に行ったことがあり、タイの屋台料理を大絶賛している。

⑥ ネットワーク

M のネットワークはほとんど近所に住んでいる台湾人と職場の台湾人同僚である。最初の数年、また台湾に来ないかと声をかけてくれたタイの仲間との付き合いがあったが、高雄に移住してからは段々連絡が少なくなり、今は完全に音信不通の状況になった。台湾に定住して、すでに 25 年を越えた M は台湾の風習、生活に完全に馴染んだと思われるかもしれないが、意外と台湾の婚礼に関して疎い一面もある。2003 年筆者の姉の結納の当日に、M は盛装し、筆者の実家で行われる結納式に来てしまったのである。結納は、普通は男女双方の家族や親戚などだけでとり行われることを知らなかったようである。

周囲の人々にとって、一番理解できないことは、M が未だに中国語の読み、書きができないことである。民政局が主催している生活適応クラスの通知が何回も M の家に届いた。しかもタイ出身の M のために、タイ語バージョンの手紙も届いていたのである。それにもかかわらず、M は生活適応クラスに参加したことが一度もなかった。M にとって、中国語を読み、書きができないことは自分の日常生活に支障がなく、わざわざ生活適応クラスに出る必要がない。むしろその時間を友達とマージャンしたほうが良いと思っている。実は、自分は普通のアジア花嫁と違っていると M は思っている。台湾に仕事に来て、たまたま台湾人の夫と知り合って結婚したのである。M が指しているアジア花嫁というのは台湾人夫が仲介業者を通して、買ってきた「外籍新娘」のことである。そのた

⁷³檳榔西施は台湾の独特な職業で、販売収入を上げるために、露出度の高い衣装を着て、道端でビンロウを販売している若い女性である。

め、彼女は心の底から生活適応クラスは「外籍新娘」のために用意されたものだと思って、台湾の生活に完全に馴染んでいる自分にとって、生活適応クラスに行く必要が全くない。このような話をMは何度も筆者に話した。

⑦ 母国との繋がり

マスメディアの報道によって、アジア花嫁はよく母国への送金問題で、夫や舅姑と口論しているという。ところが、Mは逆に実家の母、銀行で働いていた兄にお金を送ってもらっていたのである。「今は実家にお金を送ってもらっていないが、台湾に来た最初の数年はかなり実家に送金してもらっていた。娘の心臓手術代は結構かかった」とMは語った。80年代ごろ、台湾では海外の人と連絡するのは国際郵便のほうが多かった。Mは娘の手術代の送金依頼に限って、国際電話を使っていた。普段は手紙で家族とのやり取りをしていた。現在は、格安料金の国際電話カードを利用して、タイの家族と連絡している。Mは2、3年に一回タイに帰る。夫は仕事があるから、新婚のとき、一度だけMとともにタイに行った。子供を連れてタイに帰ったときもあるし、腰痛の持病を直すためにわざわざタイに帰ったときもある。タイのマッサージのほうが自分の腰痛によく効く。台湾の整骨師は全く効かないとMは強調した。

2010年、筆者の実家の店の社員旅行はMの案内で、タイのバンコク市へ遊びに行った。Mが通訳している際、タイ語を忘れて台湾語や中国語がよく出ていた。台湾に移住してから、タイ語を喋る機会が非常に少ないからである。当時Mは店のスタッフをバンコク市の郊外にあるMの姉の家に連れて行った。その姉の家は確かに普通の人より裕福で、カラオケ室もホームシアターもある。Mがタイに帰ると、よく姉の家に泊る。

2. カンボジア籍Kのライフストーリー

図6. Kの家族構成

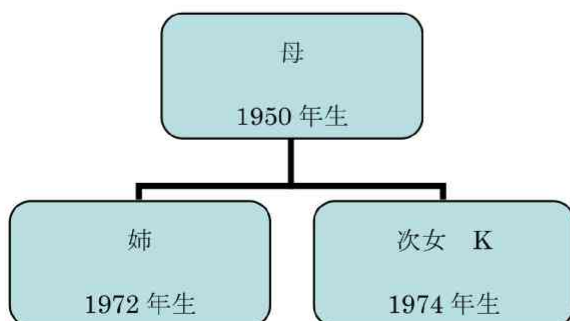
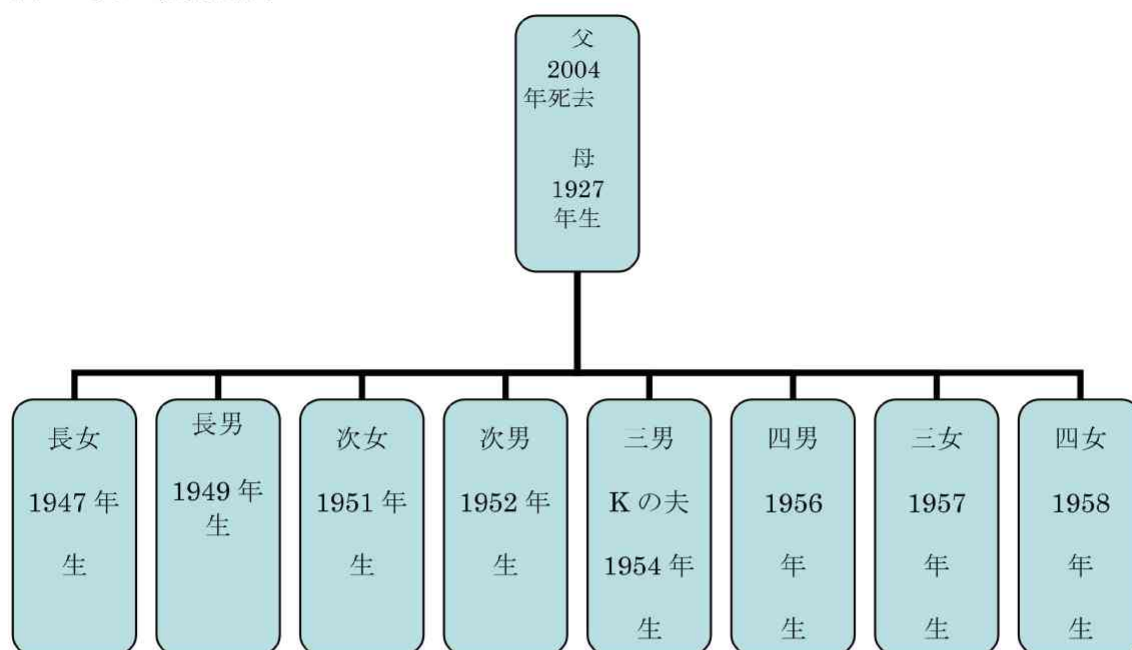


図 7. 夫の家族構成



① K の生い立ちと国際結婚を選択した経緯

カンボジア K は 2000 年から 2001 年まで筆者の実家の店で働いた。当時、筆者は休日に店の手伝いをした際、よく彼女と会話を交わした。一般のアジア花嫁と違い、中国語も台湾語も流暢に話している K に対して、強い印象が残った。彼女は筆者が初めて近距離で接触したアジア花嫁の一人である。2007 年、筆者がアジア花嫁を修士の論文テーマと決めた際、頭の中に浮かんだ調査対象は K と前述した M である。

1974 年に K が生まれる前に、父は共産党の幹部に連行されて、虐殺された。「昔は共産党の統治⁷⁴で、食べ物政府の配給で、こっそり物を食べてはいけないし、全員鼠色の服だけ着させられていた。よけいなことを言うと、殺される」と K は言った。子供時代の苦しい思い出があり、K は母国を離れて、国際結婚を選択しようと思っていた。中学を卒業して、K は就職のために、故郷バタンバン州を離れて、プノンペンに住んでいる親戚の家に移った。そして、写真屋の受付として働いた。当時、周りの友達が続々と結婚した。K の話によると、カンボジアでは国際結婚の場合、最も良い国の選択はアメリカやヨーロッパの国々だ。たとえば、いここはカンボジア系フランス人と結婚して、フランスに移住した。K は「若くないので、選択する余裕がありませんから」（当時 26 才）台

⁷⁴ 1975 年、極端な共産主義を掲げるクメール・ルージュの独裁者ポル・ポト政権が成立した。1979 年までに、早魃、飢餓、虐殺などで 100 万人以上とも言われる死者が出た。その後ポル・ポト派含む三派とベトナム、ヘン・サムリン派との間で内戦が続いた[永井 1994 : 79－114]。

湾人男性と結婚したのである。「朝、夫はおばさんの家に来て、あたしの様子を見て、すぐ縁談の話を持ちかけた。その日の夜すぐに式を挙げた。あんたたちの恋愛結婚とは全然違う」とKは話した。

② 夫が国際結婚を選択した経緯

Kの夫は三民区の下町にある小さな電気家を経営している。小児麻痺の夫は自分の足と仕事の関係もあり、なかなか女性との出会いがなくて、生涯独身のままだと思っていた。しかし、舅姑は反対して、お金を出して、ベトナムでもいいし、カンボジアでもいいし、とにかく嫁探しのツアーに行きなさいと言った。家の近くの市場では、カンボジア籍女性と結婚した男性が何人もいた。近所の人カンボジアへ見合いに行こうと姑に話した。姑は見合いの話を兄弟たちに話した。兄弟全員がKの夫は中学卒で、小児麻痺で、地元の台湾人女性と結婚することは困難だと思って、「外国人嫁」（外籍新娘）をもらうのが最善の方法だと思っていた。しかも、自分たちの代わりに、高齢化した両親の介護をしてもらうとほかの兄弟は思っていた。

1996年にKの夫は、姑の同行で、結婚仲介業者が用意したツアーに参加し、カンボジアのプノンペンに行った。ほかの嫁探しの男性も含めて、6、7人の一行は3日間のカンボジア見合いツアーに参加した。見合いツアーと言っても、専門的な結婚仲介会社ではなく、知り合いの紹介で、外国人女性と結婚する意欲がある男性に声をかけて、一緒にカンボジアに行く旅行である。もちろん、台湾側の紹介人とカンボジア籍の仲人にも「謝礼」（紅包）を払った。Kの夫は初めて気に入った相手（華人）は名前が同じで、姑は反対した。親子は再び何人を見て、Kが最も若くて、従順で、話をよく聞くタイプだと思い、Kを選択したのである。飛行機代、仲介費用、結婚に関する書類の作成、手続きをする手数料、Kの母親への結納金などの費用は全部で33万台湾ドル（142万円）である。実は2人とも、結婚候補の第一希望の人ではなかった。Kの近所の人と親戚は何人も外国人の男性と結婚して、夫の国に移住した。そのため、Kも裕福な国の男性と結婚したいという願望があり、特に欧米など先進国の男性と結婚したかった。しかし、親戚のおばの紹介で、台湾人男性を相手にしている仲介業者と知り合った。Kが紹介された相手は台湾人男性ばかりだった。Kの希望とは少々離れていた。しかし、Kはもう26才で、カンボジアではかなり年だったので、今の夫と結婚したのである。

③ 結婚生活

結婚ビザを待っている間に、Kは中国語の塾に通い、簡単な日常会話を習得した。ところが、高雄の町で、地元の人々みんな台湾語が喋っている。幸いなことは、Kは潮州系の華僑であるために、台湾語をマスターすることは困難なことではない。潮州語と台湾語のルーツは閩南語であるために、発音が類似している。最初の数年、Kは姑舅の世話をするかたわら、生活適応クラスに通い、夫の小さな電気屋を手伝っていた。舅姑の世話をするだけではなく、大家族の料理の担当も任された。家の隣で「ラーメン屋」(麺店)を経営していた義兄の嫁が食事代の一部を出して、Kに夫一家や義兄の一家の食事も任せた。高齢の舅姑は軟らかい食べ物しか食べられないが、義兄の子供は軟らかい食べ物が嫌いで、みんなそれぞれの好みがあり、料理しにくいとKは言った。当時、姑はまだ元気で、よくKがすることに口を出した。姑はKのことを「買ってきた花嫁」と思って、自分や夫の介護をし、息子を慰め、労働力としても使うことはごく当たり前のことだと思っていた。

お正月のとき、実家を離れたほかの兄弟たちは家族連れで実家に戻った。大家族の食事はいつもK一人にさせてしまったのである。義兄弟の嫁たちはただテレビを見ながら、おやつを食べたりしていた。「食事後の食器洗いすら手伝ってくれなかった」とKは言った。なぜ義姉たちは手伝ってしてくれないかとKは不公平に思っていた。数年経ってから、Kはみんながレストランに行けば、食事の支度もなし、片付けることもなしと思って、夫にお願いをして、夫から兄弟にこういう提案をした。Kはやっと大家族の使用人にならないように避け、お正月の悪夢は終わった。

家父長制の漢族社会では親の面倒を見る役は長男と見なされているが、ほかの兄弟の嫁は気が強かった姑と仲が悪いから、当時兄弟の中で、唯一未婚だったKの夫と同居することになった。Kの夫にカンボジアに行かせて、花嫁をもらったのも親の面倒を見させるためだったと夫の兄弟は思っていた。そして、夫の姉妹全員は高雄に在住しているにもかかわらず、お正月に限って、舅姑に会いに来る。このように、夫の家族は両親の介護はK一人に任せて、それが当然だと思っている。Kは親孝行をしている台湾人が少ないと思っている。「カンボジアの人々、みんな親を大事にしている」とKは強調した。彼女はカンボジアの母親に故郷であるバタンバン州で家やテレビを買ってあげた。この家では、Kの姉夫婦が母親と住んでいる。

台湾に来た最初の数年、Kは文句を言わず舅姑の面倒を見てきた。2004年、舅が亡くなってから、Kは少し楽になれた。何よりも結婚当時Kには厳しかった強気の姑は最近数年、年を重ねるとともに、元気を失い、車椅子に乗る生活が始まった。姑は家の中のことにいちいち口を出さなくなり、握っていた財布の紐も手放して、夫に任せることになった。そのとき、Kは姑の介護に対して、意

見を言い始めた。Kは姑がKの夫だけのお母さんではなく、みんなのお母さんだから、お母さんの面倒を見ることは子供全員の責任だと思っている。兄弟4人全員が同じ広さの土地をもらったのに、どうして姑の面倒を見る役は夫だけに任せているかと疑問を感じた。そして、終始舅姑の面倒を見ようとしなかった4人の姉妹は父親の遺産をもらう資格がないとKは思っている。彼女らは父親の遺産放棄の承認文書に関して、一人ずつ10万台湾ドル（30万円）の手数料を要求した。「ただ印鑑を押すだけで、10万元⁷⁵もかかる。本当に理不尽なことだ。」とKは不満げに呟いた。

Kは介護の不満を夫に伝えた。夫は兄弟と交渉して、2006年から、兄弟から一人ずつ毎月6000台湾ドル（18000円）の手当てをもらうことになった。しかし、2009年3月に、Kへの手当てを延納したり、未納したりする兄弟がいたので、Kは姑の介護を辞めて、外で働くことを決意した。そこで、インドネシア人の介護労働者⁷⁶を雇用した。姑と一緒に住んで、食事の世話をしているから、介護労働者に払う給料は夫以外の3人兄弟で分担することになった。インドネシア人介護労働者の給料は月2万2000台湾ドル（66000円）、夫以外の兄弟は一人8000台湾ドル（24000円）を出した。兄弟3人が出した全額の2万4000台湾ドルから給料を引いて、残りの2000台湾ドルは夫とKへの手当てだ。「外国人労働者として台湾に来たのではなく、花嫁として台湾に来た」とKは言った。

台湾ではカンボジアの学歴を認めないから、Kは小学校の成人教育を卒業して、中学校に進学し、高校の入学試験にも見事に合格し、夜間高校に進学した。Kは勉強好きで、分からない単語があれば、すぐ人に聞いたり、辞書を調べたりしている。メモ帳にぎっしりと単語が書かれている。Kと一緒にテレビを見てみると、字幕に分からない単語があるたびに、Kはすぐ筆者に聞いて、メモをとった。2008年にインタビューしたとき、Kは進学の話で悩んでいた。彼女自身はもっと勉強して大学に進もうと思っていたが、中学卒の夫は反対した。学校で勉強して賢くなったKが夫の言うことを聞かなくなったら、夫にとって都合が良くない。「何のために、大学まで勉強するのか。高校卒業だけで、もう十分だ」と夫は彼女に言った。周囲のカンボジア籍の花嫁たちも「お金を稼ぐこそ一番大事なことだ」と言っている。2009年8月に、筆者はKに進学の話を知ると、「大学進学を止めた。『錢』（前）⁷⁷に向かって、進もう」とKは答えた。

⁷⁵台湾通貨の基本単位は圓であるが一般的には元（中国語音同）と省略することが多い。Kは台湾に来て、舅姑の介護をする傍ら、飲食店を始めとするさまざまなアルバイトをした。2006年から義兄弟から介護手当を貰いながら、週2、3回飲食店などのアルバイトを継続している。2009年3月から義兄弟の介護手当の未納により、Kは姑の介護を辞めて、外で長時間働くことを決意した。Kの家は2009年5月から2011年12月まで、インドネシア人介護労働者を雇用していた。

⁷⁶台湾は経済成長やグローバル化、少子高齢化などによって、1980年代にすでに大量の労働力不足が発生していた。90年代から、製造業・建設・家事・看護介護・船員という分野の外国人労働者の受け入れが始まった。看護介護の分野において、インドネシア人女性が主流である[奥島2008:111-159]。

⁷⁷中国語の「錢」と「前」の発音は同じだ。

Kが台湾に来た最初の数年では、夫はあくまでもKが「買ってきた花嫁」で、赤の他人だと思っていた。しかも、夫は、外国籍花嫁みんな台湾に来るのはお金目当てだという固定観念が強かった。父親の遺産の放棄に対して、大金を要求した自分の姉妹と母親の面倒も見ようとしなかった兄弟のを見て、失望した。昔は自分の兄弟と仲良しだった夫はKに心の壁を崩して、仲が良い夫婦になった。

結婚後何年立っても、Kは妊娠しなかった。姑は何人もの孫すでにいて、別にKの出産を急かすことはしなかった。ただ、Kの夫はKより20歳年上だから、Kの妊娠を期待していた。結婚8年目、2004年のとき、夫は大金を払って、Kに不妊治療をさせたが、未だに子供が出来てない。

2011年2月、筆者はKの店を訪ねた。その日、Kの夫がパソコン修理のために、外出した。外は寒いから、手袋をして行くとKは夫に言った。夫は面倒くさいと思い、いいと言って、オートバイに乗って出かけた。1時間後、夫が外から帰ってきたとき、冷えた手をKの首に当てていたずらをして、仲良そうな夫婦に見えた。二人は年の差があり、夫は常に上から視線でKに説教をしている。上から視線といっても、話しぶりは絶対命令するような感じではない。目上の人が年下の人に教えるような感じである。しかし、Kはいつも右の耳に入って、左の耳から出ると夫は言った。

④ ネットワーク

Kの仲がよい友達はずべてカンボジア籍の花嫁である⁷⁸。Kはカンボジア籍花嫁の中では、早めに台湾に来たから、かなり信頼されているようだ。だれか悩みがあれば、よくKの家に来て、相談した。同胞はよくKの家に、集まって、カンボジア料理を作ったり、トランプで遊んだりしている。パートの食品売り場⁷⁹で知り合った台湾人の若者とは仲がよくても、あくまでも職場での付き合いである。

⑤ 夫から見た結婚生活

2009年9月筆者が店に訪ねたとき、Kはちょうどいなかった。Kの夫が店番をしていた。彼は電気屋の仕事だけではなく、パソコンの修理、ビデオの編集の仕事もしている。その日は、店でビデ

⁷⁸ 第4章で取り上げたカンボジア籍YもKの親しい友人の一人である（第4章第2節参照）

⁷⁹ Kは台湾に来て、舅姑の介護をする傍ら、さまざまなアルバイトをした。最初のアルバイトは筆者の実家の揚げ物屋で、その後、朝食屋の店員やデパート食品売り場と量販店のデモンストレーターをした。2006年から義兄弟から介護手当を貰いながら、週2、3回デパート食品売り場のアルバイトを継続していた。2009年3月から義兄弟の介護手当の未納により、Kは姑の介護を辞めて、外で長時間働くことを決意した。Kの家は2009年5月から2011年12月まで、インドネシア人介護労働者を雇用していた。

オの編集の仕事をしていた。このチャンスを活かし、Kの夫に結婚生活の話を聞いた。最初結婚したとき、この嫁と長くやっていけるかと彼は疑問を持っていたために、Kの台湾の身分証明書の手続きをしなかった。3、4年経って、二人の仲が次第に深まってきてから、身分証明書の手続きをした。ずっと我慢してきたが、一旦限界を超えると、夫婦はどうなるかわからないと彼は語った。そして、Kに対する不満を語った。Kは人の意見やアドバイスを一切聞かない。それで、後に変なことになるとうと、夫に助けを求めたり、文句を言ったりしている。特に、Kが愚痴をこぼすことについて、うんざりしている。最初から、彼女にこのままの調子でいくと、変なことになるとうと釘を刺したのに、まったく人の話を聞かなかった。

2、3年前、カンボジア籍の友達はよく家に集まって、カンボジア料理をしたりしていた。みんなが帰ってから、彼女一人で片づけは大変だった。そこで、彼女はできるだけ友達の家で食事会を開いたりすることにした。ところが、友達はよく彼女に足りない食材を買ってもらっている。以前友達を家に呼んだとき、足りない食材を買って来いという依頼を誰も全くしていなかったと、Kはよく夫に友達の文句を言った。いちいち細かいことを言うなら、どんどん友達がいなくなると夫はKに言った。

結婚後何年立っても、Kは妊娠しなかった。姑は何人もの孫すでにいて、別にKの出産を急かすことはしなかった。ただ、Kの夫はKより20歳も年上だから、Kの妊娠を期待していた。結婚8年目、2004年のとき、夫は大金を払って、Kに不妊治療をさせた。Kは卵子増加の注射などの不妊治療を受けたが、未だに子供が出来てない。Kは今年5月、お腹の調子が悪くなったが、病院には行かなかった。台湾では国民健康保険の制度があり、診察費用はわずか150台湾ドル（375円）である。Kが節約して自分の家（後述）を買うために、病院に行かなかった。その日、結局痛みを耐えられなくて、病院に搬送された。診察を受けたら、流産という診断結果で、初めて妊娠していたことが分かった。Kの不妊治療に大金を使って子供の出生を願っている夫にとって、かなりショックのことで、怒りを禁じえないのも当然である。

夫はKをはじめとするカンボジア籍アジア花嫁の時間の観念が欠如していることに呆れている。大体Kをはじめとするカンボジアの仲間たち、みんな時間の観念が欠けている。今日もいつものように、家を出るとき、3時に帰って来ると言っていた。彼女が絶対3時半か4時ぐらいじゃないと帰って来ないと夫は予想している。彼女はカンボジア籍の友達の家に行き、トランプでギャンブルをする。カンボジア籍の友人との集まりを反対していないが、彼はギャンブルに反対している。

Kの今の目標は自分の家を買うことである。この点に関して、夫は理解できないし、この目標を

達成するのも不可能だと思っている。Kの少ないバイト代を何年貯めても、一軒の家を買うことは到底無理だ。そもそも、母と同居している家はすでに、夫の名義に変更した。しかし、店の裏は二番目の兄の家と繋がっていて、彼の家の入口でもある。兄家族らは自由に夫の店に出入りしている。Kはこの点に関して、気にいらなくて、やはり自分の家を持ちたいと常に思っている。家とは他人が自由に入ることができないもので、今のままでは、この家は自分の家ではないとKは強調して、自分の家を買うと決めた。主な仕事は、姑の介護をしていることである（この時、まだインドネシア人介護労働者を雇っていなかった）。給料は夫の兄弟が出し合う。Kは少しでも多く稼ぎたいから、夫の兄弟に内緒で、デパート食品売り場のデモンストレーターのバイトや朝食屋の一時的手伝いをよくしている。

もちろん、Kに対して、不満だけではなくて、感謝していることも多くある。結婚して2、3年後、父が倒れた。その後、2004年父が亡くなるまで、看病の仕事はずっとK一人に任せていており、3人の兄弟の嫁や高雄市に在住している4人の姉妹は手伝いなど一切していなかった。また、不妊治療の痛みを耐えて、2回の不妊治療も受けたことに対して、彼は感謝している。

最後に夫は上を見たらきりがないけど、性質が悪い嫁と比較したら、Kはよいほうだと、語った。夫婦というものはお互いに、理解しあって、譲り合わないといけない。彼女はどれほど聞き入れるかどうかかわからないけど、私はやるべきこと、言うべきことを全部したと言った。ちょうどこの話が終わったとき、Kは外から店に戻った。すると「ほら、僕が言った通りでしょう、4時前には絶対帰らないと言ったでしょう」と夫が言った。

Kの実家は母親が女一手で二人の姉妹を育てたが、生活は普通の家庭よりは裕福である。子供の時がすごく大変だったとKが常に言っていたが、夫は大変な時期はKの4、5才までだけのことと言った。彼女の実家は母親が近くの漁師の手伝いをしながら、コーヒー販売を中心する朝食屋をしていて、生活は苦しくなかった。地元の住民と比べて、Kの実家の経済状況は中の上だと夫は語った。実際、Kの実家は台湾人夫と結婚した以降、親孝行のKの経済援助により、生活環境は非常に改善された。

2. ベトナム籍 C のライフヒストリー

図 8. C の家族構成

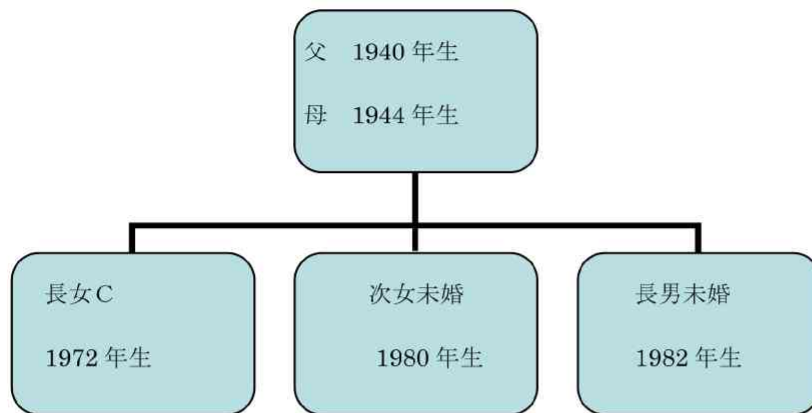
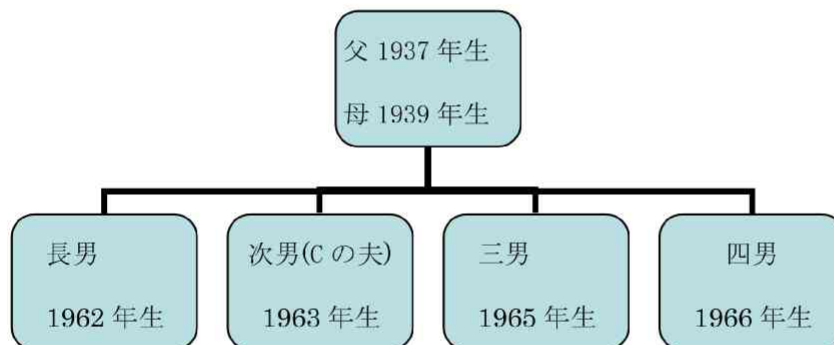


図 9. 夫の家族構成



① C の生い立ちと国際結婚を選択した経緯

2011 年 1 月 27 日筆者は「高雄市地下鉄会社」（高雄捷運公司）が主催している新移民イベント⁸⁰に参加した際、ベトナム籍花嫁の代表である C と知り合った。会話の中で、C が高雄市ベトナム姉妹同郷会の会長であり、移民署の通訳ボランティアをしていることを知り、今まで出会ったアジア花嫁とは完全に違いタイプだと思い、彼女を主な調査対象の一人として決めた。移民署の通訳ボランティア現場に訪れ、高雄市ベトナム姉妹同郷会のイベントでの交流を経て、次第に親交を深めた。

ホーチミン市出身の C の祖先は中国広東省の仏山からベトナムに移民した。家庭では広東語を喋っているが、学校ではベトナム語を話していた。父親は小さなプラスチック成形の金型の店を営む。母親は専業主婦である。長女である C は高校を卒業して、家計を助けようと思って、仕事一筋で生

⁸⁰ 台湾の各市と県は新移民イベントを主催する際、常に、ベトナム、中国、インドネシア、フィリピン、カンボジア、それぞれの国の代表を一人ずつ招待する。

きてきた。Cの故郷では、正月のとき、家の前の木の葉を取って、お寺の占い師に見せて、今年の運勢を教えてもらうという風習がある。

1996年、Cが24才の正月に、占い師にあなたは今年か来年、非常に遠い所かよその国に嫁ぐと言われた。Cは家にもどって、母親に「今年の占いは外れだ。私は外国に嫁ぐなんてありえない」と言った。当時Cが働いている印刷工場の同僚は全員がほぼ女性で、しかも彼女は毎日残業しているばかりで、出会いのチャンスは全くなかった。その年の中秋節の前日、工場の機械の故障で残業の工作在キャンセルされて、休みをもらった。友達は合コンの予定があるから、台湾人男性と一緒にカラオケに行かないかと彼女に声をかけた。彼女はそれに対して、そんなに興味を持っていなかったが、せっかく休みをもらったので、友達と一緒にいった。そのカラオケの店に行くと、夫と知り合った。夫は彼女に一目ぼれで、すぐ結婚の話をした。彼女は結婚の話に驚いたが、夫に対する第一印象はまじめで頼りになりそうな人間であった。夫はすぐCの家を訪問し、結婚の話をした。

Cの父は最初反対した。その理由は父親が台湾人男性に好感をもっていなかったことがある。「自分は台湾で大きい会社を持っていて、あなたの娘に何の不自由ない生活をさせることを保証する」とアピールして、父のところに縁談の話しに来た台湾人男性は過去何人もいた。夫は初対面とき、Cの父親に対して、次の話をした。「私はただの普通のブルーカラーで、富裕な生活はできない。しかし、あなたの娘にお腹を空かせることが絶対ないと保証できる」。Cの父親は彼の人生を振り返って、自分もブルーカラーで、出世していないが、こつこつ仕事をがんばって、三人の子供を育てきた。この男なら、自分の娘を幸せにできると判断し、結婚の話に同意した。

② 夫が国際結婚を選択した経緯

以前、夫は数人の台湾人女性と付き合ったことがある。付き合っていた女性に結婚後、舅姑と同居してほしいという話をすると、だれも同意しなくて、最後はとうとう別れることになった。同じ経験が何回もあったから、親孝行な夫は結婚のことを諦めていた。一方、舅姑は保守的な人間で、子供が大人になって、自分の家庭を作ることが大事だと思って、いつも夫に結婚のことを催促していた。たまたま夫の知り合いに国際結婚の仲介業者がいて、1997年3月に、彼は初めてベトナム見合いツアーに参加したが、気に入る相手が見つからなくて、そのまま台湾に戻った。当時夫は結婚の話を断念していたが、親のしつこい説教に我慢できなくて、9月再びベトナムに嫁探しに行くと、Cと出会った。

③ 結婚生活

Cの夫の両親は5階建ての家を建てて、四人兄弟みんなそれぞれの階で生活させていた。現在舅姑、夫の兄一家、夫一家がこの家に住んでいる。ほかの2人の兄弟は家を出て、自分の家を買った。Cが高雄市新興区に来たとき、舅姑一家、夫の兄弟は仕事の依頼を受けて、専ら建物を壊す作業の現場で働いていた。当時長男の嫁は会社で働いていたため、家の家事や食事などに関する手伝いを一切していなかった。姑は一日中、外で仕事をした後、家族全員の食事を用意しなければならなかった。Cがこの大家族に嫁ぐと、姑は家事や家族全員の食事の用意などを全部彼女に押し付けた。そして、姑はCが作った料理に文句を言うばかりで、感謝の気持ちをもっていなかったようだ。今、舅は退職し、家でぶらぶらしている。姑は近所のダンボールやペットボトルなどリサイクルができるものを収集し、回収業者に売る仕事をしている。4人兄弟も独立して、それぞれ依頼を受けて、解体業の現場で働いている。

夫は親孝行な人で、結婚した当初、常に舅姑の話を聞いて、Cの立場に立っていなかった。しかも、Cに説教し、親に対して親孝行をしなければならないと、いつも口にしていて。また、Cが姑に対する不満を言葉の問題⁸¹や、C個人の思い込みだと夫は思っていた。ところが、二つの出来事をきっかけとして、夫の立場が一転して、姑がCと接した時の態度に疑問を感じ、Cの味方になった。

一つはCが出産したとき、「坐月子」⁸²に関する姑の態度や行為である。1997年Cは夫と結婚して数ヶ月後、妊娠したことに気が付いた。妊娠したばかりで、つわりがひどかった時期にもかかわらず、大家族の食事の用意をしなければならなかった。そして、精神の不安に耐えて、体の疲労を辛抱して作った料理にまた姑がさんざん文句を言った。こうして、Cは姑に対する不満が高まる一方だった。数ヶ月後、Cは無事に長女を出産した。普通の家庭では、姑は家事の手伝いをし、産婦の体の回復をさせるための漢方系食事を作り、新生児の面倒を見ているべきだ。また、現在の社会はみんなそれぞれ忙しいから、姑は産婦を「坐月子」センターに入れて、体の静養をさせることも多い。ところが、Cの姑は出産したばかりの嫁に対する世話や心遣いは一切していなかった。彼女は最低限の「麻油鶏」⁸³の用意さえしていなかった⁸⁴。もちろん、新生児の入浴の手伝いもししていな

⁸¹ Cの夫の家族は閩南系の本省人で、みんな台湾語を喋っている。結婚先は高雄市新興市場の近くで、近所みんな台湾語を話す。しかし、Cが台湾に来る前、ベトナムで勉強したのは片言の中国語のみであったから、もちろん台湾語も聞き取れない。そもそも広東語と台湾語は違う語系に属しているため、Cにとって、広東語は台湾語の学習のために役に立たない。

⁸² 漢民族の女性は産後一ヶ月に、体の静養という「坐月子」の風習がある。この時期、産婦は一切の家事をする必要がない。しかも、家族のほかのメンバーは産婦の食事や面倒を見ないといけな。この一ヶ月だけの地位の転換とも言える。

⁸³ 台湾の閩南系本省人では、坐月子料理と言えば、黒ゴマ油でショウガと鶏肉を炒めた「麻油鶏」である。

かった。四人兄弟の嫁のなかで、C 一人だけ「坐月子」に関する優遇を一切受けていなかった。長男の嫁は実家にもどって、体の休養を取っていたから、姑は2 万元（7 万円に相当する）の「紅包」（祝儀）を長男の嫁の実家に送った。四男の嫁は妊娠していたとき、姑はすでに孫の生後一ヶ月である「彌月」というお祝いの「油飯」やケーキなどを注文した。C の2 人の娘が出生した時、祝いことを全くしていなかった。

もうひとつの出来事は、C の子供二人の誕生を祖先に報告していなかったことだ。四人兄弟の中で、だれかの子供が産まれると、舅姑はすぐ家の仏壇に供えている先祖に報告する。ところが、C の子供の場合は一切報告していなかった。1997 年、長女が生まれたとき、C はまだ大家族のもとに来たばかりで、姑は彼女のことを家族の一員として認めていなかったのも、祖先に報告しなかったのではないかと、夫はやや不満に思っても我慢していた。2 年後、C は2 人目の女兒を出産した。姑がそろそろC のことを認めて、子供二人の誕生を祖先に報告すると夫は思っていた。しかし、姑はあいかわらず、C のことを認めなくて、孫の誕生を祖先に報告していなかった。そして、夫は自分の母親がしてきたことを見かねて、C の立場に立つようになった。今までC が作った料理に文句ばかり言う姑に対して、「どうせ家の嫁が作った料理はおふくろの口に合わないから、いっそみんなそれぞれの階で自分が好きなものを食べた方がいいだろう」と夫は言った。それ以来、大家族の食事はそれぞれの家庭で食べるようになった。舅姑と接する機会が減ってきたとともに、C の台湾での生活は楽になった。

大家族全員が姑のように、C のことを認めていなかったわけではない。たとえば、長男の嫁はよくC の面倒を見て、手伝いをしていた。台湾に来たばかり、長男の嫁は毎日娘の散歩のとき、右も左もわからなかったC を同行させて、台湾のいろいろなことを彼女に教えていた。3 才の姪もよくC と話して、彼女にとって、中国語会話の練習相手だった。中国語だけではなく、彼女が初めて覚えた台湾語もこの姪が使った言葉だった。ある日、散歩帰りの出来事である。3 才の姪は「うんこがあった」と指をさしながら、彼女に踏まないように台湾語で声をかけた。C は台湾語で発音された「うんこ」を初めて聞いたので、意味がわからなかった。兄の嫁の説明で、分かった。C が出産後、彼女はよく新生児の入浴の手伝いをしてくれた。C がベトナム料理を食べたいとき、高雄の有名なベトナム料理店に連れて行った。

2007 年9 月、下の娘が小学校に入ってから以降、C は子育てで忙しい毎日から自分の時間を持てるよう

⁸⁴仮に姑が漢方系料理を作ったとしても、C は食べられないと思う。ベトナム出身の女性は漢民族の坐月子料理である「麻油鶏」や「鶏酒」（客家料理）が苦手なのである。C はこういう漢方系料理を食べたい訳ではなかった。自分とほかの兄弟の嫁と比べて、姑が自分に対する不公平な態度や行為を強調したかったと筆者は思う。

になった。夫はCに子育てだけの家庭生活をやめて、新移民センターが主催しているイベントに参加しなさいと勧めた。台湾に来たとき、中国語や台湾語はまったく出来なかった彼女にとって、台湾の社会に馴染むまでは長い道のりだった⁸⁵。

以下の文章はCが高雄市社会局によって出版された『生命故事集』に投稿した文章（日本語訳）である。

台湾の風俗、文化が分からなくて、言葉も通じなかった当初、目の前の人、事、もの、全部新しいもので、一から勉強や適応をしないといけない。さらに、異国で周りの差別や不信感と向き合わざるをえなかった。当時の私は非常につらくて、心細かった。いつ頃この新しい生活環境に馴染むことができるのかと不安に思っていた〈中略〉やっと新しい生活に馴染んできたとき、自分が妊娠したことを知って、うれしい面もあり、心配もあった。母親になることに対する喜びと台湾の社会に完全に馴染んでいない自分がどうやって子供の面倒や教育をこなすかという不安である〈中略〉看護師の手から出産したばかりの赤ちゃんをもらったときの喜びは言葉では説明できない。これからの人生は夫だけではなく、かわいい女の子も一緒にいてくれると思っていたが、喜びは長く続かなかった。新しい挑戦をまた迎えた。新米ママの私にとって、いかに赤ちゃんの面倒をちゃんと見ることができるか全く分からなかった。夫の家族は協力してくれないし、夫も仕事にいかなければならない。実家を頼りにしたかったが、遠すぎる。何も分からない私には、家族の支援や目上の教えが全くなかった。子供が泣いたとき、知っている限りのありとあらゆる方法を使ったが、どうしても子供が泣くのを止めさせられなかった。無力で意気消沈していた私は子供を抱いて、泣くしかなかった。経験を積むとともに、子供の面倒に対して、もう怖がらなくなった。2人の女の子の母親になった私は、毎日の子育てにたくさんの時間や精神を投入した。子供が私を抱いて、「ママ、お疲れ様！ママのことが大好き大好きだ」と語ってくれたとき、どんな疲労や煩わしい気持ちも吹き飛んでしまった。

このように、Cが書いた生活適応の苦しみや出産、子育ての困難、辛い思い出、すべてはアジア花嫁に共通している経験だと思う。筆者の聞き取り調査でも、子育てでどうしようもなく、赤ちゃんと一緒に泣いたアジア花嫁が何人もいる。Cは2007年11月に新移民センターに参加してから、積極的に政府が主催している新移民のイベントに参加した。のちに、社会局によって設立されたベ

⁸⁵ Cが結婚した1997年、外国籍花嫁を対象にした生活適応クラスはまだ全高雄市に広まっていなかった。

トナム同郷会の会長に選出された（第4章第2節参照）。また、高雄市移民署の通訳ボランティアに選ばれた。週二日勤める移民署の通訳ボランティア以外に、彼女は高雄市三民区老人福祉センターに通って、「独居老人」の弁当の配達などの仕事を手伝ったりしている。

④ 子育てと教育

Cの2人の娘は学校では成績優秀で、とくに国語が優れている。小さいときから、Cは「お母さんは中国語をわからないから、あなたたちは学校で一生懸命勉強しないとだめだ。家に帰って、お母さんに聞いても、どうしようもない」と、いつも2人の娘に告げていた。2人は授業がわからないとき、いつも学校の先生や放課後の「安親班」⁸⁶の先生たちに教えてもらう。二人とも小学校で母親がベトナムから来たことでクラスの男の子に揶揄されたことはあるが、いじめはなかった。「あなたの母親は外籍新娘で、あなたはばか」と揶揄した男の子がいた。すると、「あなたの母親は台湾人なのに、あなたは私より成績が悪い、あなたは私よりばかじゃないか」と上の娘は言い返した。それ以来、クラスメートはCの母親が「外籍新娘」ということをあまり口にしなくなった。

高雄市の小学校では「母語教学」や「多元文化」という授業がある。授業の内容は各学校によって違う。ここで、母語というのは、自分の母親の言葉を指す。台湾語、客家話、ベトナム語、先住民語、インドネシア語、タイ語などの言葉が授業中で教えられる可能性があり、学校の方針、政策や生徒の親の国籍によって、自由に調整できる。Cは教師として小学校に行って、ベトナム語を教えた経験がある。娘の学校⁸⁷はベトナム語の授業が選択されていないため、娘はよく「ママはいつうちの学校に授業しに来るのか、すごく楽しみにしている」と、よくCに言った。そして、母親の多面的なボランティア活動ぶりを見てきたから、娘は恵まれていない家庭の友達の手伝いをよくしている。

⁸⁶台湾の小学校では、両親が仕事で忙しく放課後の時間に迎えに来ない生徒を対象に、放課後の指導が行われる「安親班」（親を安心させるクラス）がある。先生は学校の担任先生ではなくて、バイトとして雇われている若い先生が多い。民間経営の「安親班」のほうは、進学塾とも言える。学校の「安親班」は学校や先生によってばらつきがあり、教室内で座って、自分の本を読む先生さえいる。

⁸⁷ Cの娘の学校は高雄市の外国籍配偶者の密度が最も低い行政区である新興区にある。そのため、母語授業は、大多数の生徒が使っている台湾語の授業が多いと思う。

4. インドネシア籍 G のライフヒストリー

図 10. G の家族構成

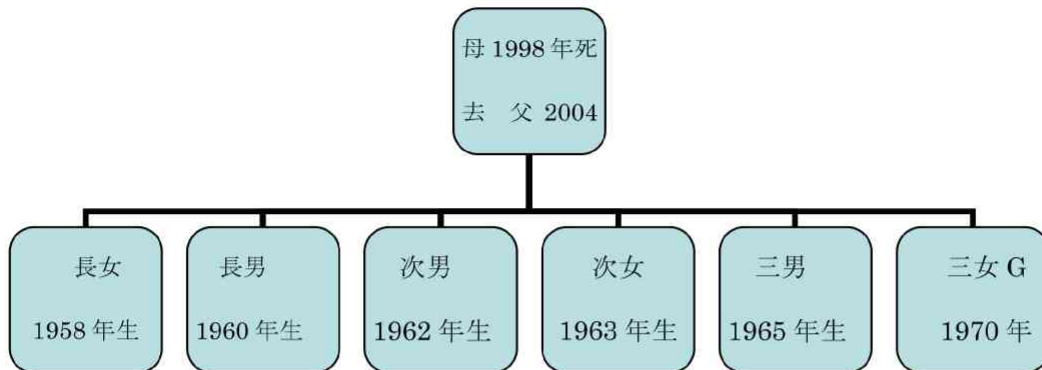
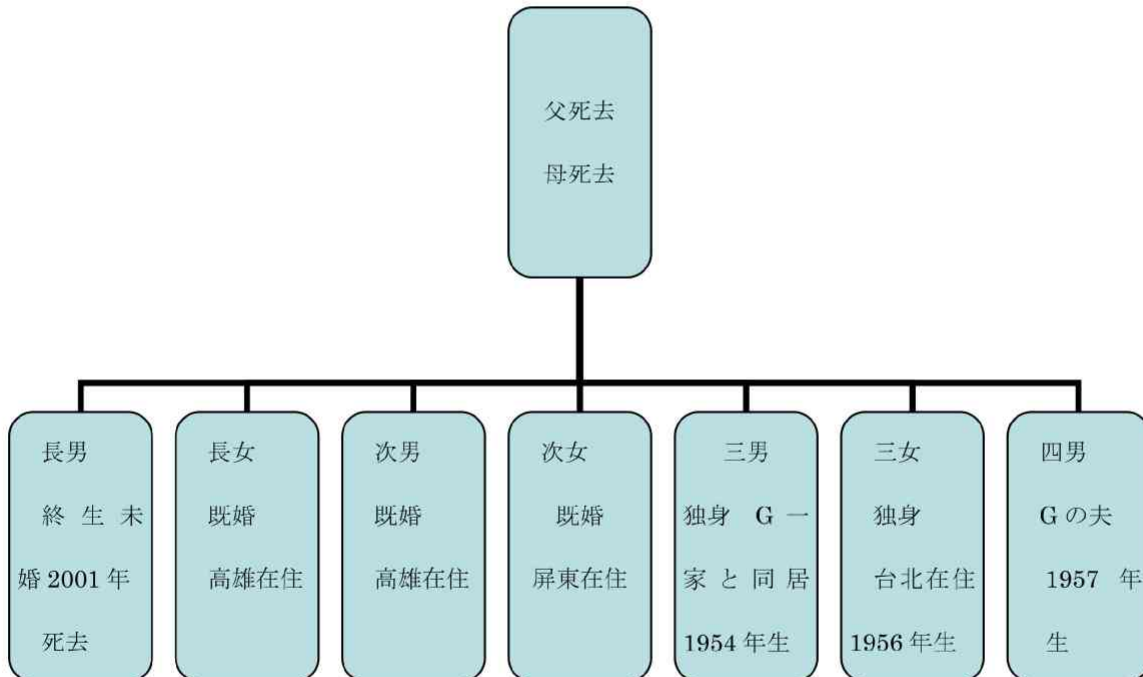


図 11. 夫の家族構成



① G の生い立ち

2008 年筆者が初めて三民区の生活適応クラスの授業現場（第 2 章第 3 節参照）を訪ねたとき、隣で座っていた G が流暢な台湾語で私に授業内容を確認した。これをきっかけとして、当日の授業は私が通訳を担当し、台湾語を使用し彼女に授業内容を説明した。G の家は筆者の実家の近くにあるため、よく近所の喫茶店で交流を交わし、食事と買い物もよくしていた。その後、G の娘がパソコンなどの問題があると、筆者はよく G の自宅を訪ね、娘に教えた。家族ぐるみで一緒に食事したこ

とが何回もある。

Gはインドネシア華人の4世だ。祖父が小さいとき、曾祖父とともに中国福建省からインドネシアの北スマトラ州東部海岸の漁村であるタンジュン・バライに移住した。Gはこの村で生まれた。生後まもなく、Gの父は都市の方が商売しやすいと考えて、一家で北スマトラ州である州都メダンに移住した。父は小さな商売から始めて、次第にココナッツ、キャッサバ、米、糖の輸出貿易を行うようになり、最後は取締役を勤めた。6人兄弟の末子のGは可愛がられて、なに不自由なく育てられた。生活は裕福で地元の大学の経営学科を卒業してから、ジャカルタの貿易会社で会計の仕事をしていた。Gは中学1年生のとき、友達の誘いで、占いに行った。当時の占い師は「あなたの縁談は海の向こうだ」とGに語った。当時Gはこの話をただの占いの話で、なんの根拠もない話と思って聞き流した。

② 国際結婚を選択した経緯

1998年、当時39才の夫と42才の義理の兄は台湾に移住したインドネシア華人の案内でインドネシアにお見合いに行った。彼の航空券、ホテル代、食事代は兄弟二人でまかなった。彼は専門的な結婚業者ではない。義理の兄はガソリンスタンドに投資して、儲けていた。夫は工務店を設立して、月に10万台湾ドル(40万円)の売り上げがある。2人とも高い収入を得ているが、学歴が高校卒で、しかも年も若くないため、相応しい結婚の相手はなかなか見つからなかった。とくに義理の兄は結婚相手に望みが高いから、紹介された相手はすでに20人を超えてしまった。義理の兄は20代の女性との結婚願望を持っていた。インドネシア華人のネットワークで、兄弟2人は数名の女性と顔を合わせたが、なかなか気に入る相手がいなかった。兄弟2人が諦めて台湾に帰る日の前夜に、Gはインドネシア華人の友達の誘いで、兄弟2人がいたカラオケ店に来た。そこにはお見合いということではなく、ほかにも何人ものインドネシアの華人の女性が来ていた。Gの夫はGに一目ぼれをして、すぐ彼女に自分は嫁さがしにインドネシアに来たと打ち明けた。翌日、夫の兄は予定通り台湾に帰っていたが、夫は台湾に帰るスケジュールを変更し、一週間インドネシアに残った。しかも、早速Gの父と会って、縁談の話をした。Gは縁談の話を聞いて、驚いた。台湾人はみんな会ってすぐに結婚するのかと夫に聞いた。そして、夫は台湾の国際結婚ブームの話を彼女の父と彼女に話した。話し合って、とりあえず、婚約をするという結果になった。もし結婚を前提とする付き合いがうまく行かないなら、そのとき婚約破棄してもいいと思って婚約したとGは思っていた。これに対して、夫はとにかくGと結婚したくて、すぐ結婚ができなくても、せめて婚約ができればと思

っていた。夫が台湾に帰ってから、2人は電話で話した。Gが喋っている閩南語と夫が喋っている台湾語はアクセントが異なったり、語彙も多少違い、2人のコミュニケーションは順調ではなかった。夫は常に電話ではコミュニケーションしにくい。実際に会った方が、話しやすいから、台湾に遊びに来てほしいとGを誘った。知り合ってから1ヶ月後、Gは夫の誘いに応じて、父とともに、14日間の台湾旅をした。チケット代を始めとする旅行費用はすべて夫が負担した。

夫と知り合う直前に、Gには付き合っている華人の男性がいた。彼と付き合ってから2、3年目、彼氏はよく水商売の場所に出入りして、浮気をし、さらに、最も許せなかったのは違法薬物に手を出したことである。彼と別れて落ち込み、環境を変えようと思っていた。一方、Gの父は台湾に好感を抱いて、娘を台湾に嫁かせることには大賛成だった。2週間の台湾旅行を通して、Gの父は夫が誠実で優しい人と判断して、娘に結婚の話に勧めたのだ。夫の両親は当時すでに他界していて、心配する舅姑問題も避けられるとGの父は考えた。

華人排斥という時代背景も関連している⁸⁸。Gによると、華人が被害者となっている強盗事件が頻繁に起きているという。G自身やGの姉も昼間に路上で強盗にあったことがある。インドネシアの大手外資会社に勤めた時、常に小型三輪タクシーを利用して、出勤していた。ある日の朝、彼女が小型三輪タクシーに乗っていた途中で、運転手が彼女にドライバーを突き付けて、「お金を出せ」と脅した。Gが財布のお金を出そうとしていたところ、運転手は彼女の指に着けていた指輪を無理やり外して奪った。その後、Gは財布のお金を全部出して、慌ててタクシーを降りた。周りには多くの小型三輪タクシーが泊まっていたが、犯人の仲間かもしれないと恐れて、乗れずに、一生懸命に逃げ出した。

Gの披露宴は台湾とインドネシア、両国とも有名ホテルで盛大に行われ、当時の様子を録画したビデオも残っている。インドネシアでは、会社の取締役であるGの父の仕事関係で、60テーブルもの招待客が参加した。90年代の台湾では中国や東南アジアにお見合いツアーに行き、アジア花嫁と結婚するブームがすでに起こっていた。アジア花嫁との結婚式は普通、家の前の路上にテントを設けて、「台湾式披露宴」(辦桌)⁸⁹を行うのは一般的だ。Gのようにホテルで披露宴を行うのは珍しい。また、娘がお金目当ての外国籍花嫁として差別されることを心配していたGの父は「結納金」(聘金)を断った。

⁸⁸ 1998年5月にジャカルタでは華人に対する暴動が起きて、多くの華人が殺害された。従来インドネシアの経済は数少ない華人のグループに握られてきたので、インドネシアでは華人に対して、友好的ではない。

⁸⁹ 辦桌は台湾語で、自宅近く前の道路を封鎖し、宴会の場にする。宴会の料理は専門業者を頼む。古風の披露宴や神仏の祭礼でよく催される。

③ 結婚生活

Gは福建出身の華僑で、元々閩南語が流暢であったが、夫が喋っている台湾語のアクセントとは異なっていて、コミュニケーションは順調とは言えない。でも、やはり閩南語を全く知らないアジア花嫁よりは早く言葉の壁を乗り越えた。また、台湾の食べ物も食べられるし、台湾社会に馴染むのは早かった。台湾に来て、1か月ですぐ妊娠していることが分かった。Gの場合は「初夜のときに、妊娠したこと」（入門喜）で、つわりがひどくて、苦労した。夫は仕事が忙しくても、できるだけGと一緒にいる時間を作る家族思いの男性だ。しかも、夫の趣味は料理で、時間さえあれば、いろいろな料理を作っている。

台湾での結婚生活は順調だが、漢字が読めないのがGの唯一の欠点だ。町中や道端では、何でも漢字の看板が立っている台湾社会では自分が外国人のような気がするという。ただ漢字を読めないという事情で、多少劣等感を抱いていると、Gは筆者に語った。そのとき、「漢字を勉強すればいいでしょう」と筆者は言ったが、Gは「子供のこと、家のこと、夫の会社のこと、とにかく忙しい。土曜日に生活適応クラスに出ることだけで精一杯だ」とどうしようもなさそうに言った。

④ 夫の家族との関係

Gの夫は7人兄弟の大家族で、舅姑は夫と結婚する前に、亡くなった。結婚した兄弟はそれぞれの家庭を持って忙しくて、普段はあまり連絡していない。とくに次男はほかの兄弟たちとの付き合いは少ない。未婚同士の長男と三男と一緒に同居していた。付き合いが頻繁なのは未婚の三女と現在同居している三男だ。

結婚生活の最初の2年間、Gは夫と2人きりで高雄の高級マンションで過ごした。2001年、三男と同居していた次男が亡くなった。Gの義理の兄（三男）の家は4階建てで、とても広い。一人でこんなに広い家に住んでいてはさびしいから、義理の兄は夫に、「一緒に住まないか、家賃なしで、水道代や電気代だけでいい」と声をかけた。そこで、夫はGを連れて、兄の家に引越しをした。それ以来、G一家は義理の兄と同居することになった。一階は駐車場として利用して、2階はG一家の空間で、3階は義理の兄のスペース、4階は先祖の仏壇が置かれている。Gがご飯を作っている場合は義理の兄は下に降りて、一緒に食べる。Gがご飯を作らない場合は義理の兄は外で食事する。義理の兄はGの2人の子供を可愛がって、休日にはよく子供を山とか遊園地とかに遊びに連れて行った。しかし、子供が大きくなるとともに、Gはそろそろ義理の兄の家を出て、自分の家を買った方がいいと考え、夫に何度もお願いをした。夫もいつまでも兄の家に住んでもしょうがないと思っ

ていたが、行動が遅い夫はなかなか本気で家を探す気がない。しかも、兄も次第に年を重ねてきた。高齢の兄を一人にさせてしまうことは非常識だと夫は考えていた。また何でも口に出す義理の姉（三女）はG一家の引越しの話には大反対だ。

義姉（三女）の話をすると、Gはかなり困ったような顔をする。舅姑がいないが、台北に住んでいる独身の義姉は世話好きで、兄弟の話にいつも口を出す。家の三階の一室は彼女専用の客室で、たまに高雄に遊びに来た。彼女が高雄に滞在した時期はGが困った時期でもある。義姉は子供のしつけ、G一家引越しの話、夫の仕事、Gのこと、何でも自分の意見を出す。「お姉さんは本当に親切で優しい人だ。しかし、人の家のことに何でも干渉するのはちょっとやりすぎだ」とGは語る。Gの一家に何でも意見を言う妹を見て、義兄はたまには見かねなくて、アドバイスをした。義姉は聞き直って、兄と喧嘩したこともある。実際筆者も義姉と話した経験がある。筆者がGの家に電話をかけたとき、その電話に出た人が義姉だった。Gがちょうどいなくて、電話を切ろうとしたところに、彼女から延々と質問をされた。筆者が一つの質問に答えると、彼女また次の質問を出した。義理の姉はGの家族外のネットワークがかなり気になるようだ。義兄もGの外での付き合いは気になっているが、そこまで詳しく追究はしない。

⑤ 子育てと教育

Gは台湾に来てから間もなく妊娠した。長女は10才で、次女は4才だ（2009年の時点）。夫は家の後を継ぐ息子の出生を望んでいるため、3人目の子供を願っていた。一家の家計を支える夫はもう若くないと思い、Gは断った。Gは子育てに専念して、外で働いた経験がない。夫から月23000元（約62000円）の生活費をもらって、特別な出費があれば、また夫と相談する。

アジア花嫁の子供が学校でいじめられるケースがたまには報道されていたから、Gは心配していた。担任の先生に聞いて、娘は学校ではいじめられたことが一切ないのを知って、安心した。Gの娘は色が白くて、外見は台湾の子供とは変わらない。2008年、筆者はGと一緒に学校帰りの長女を迎えに行った。帰りに、筆者は小学校3年生の長女と学校生活について話した。学校生活は楽しくて、いじめられることは全くないという。幼稚園の年長組に通っている次女は、外見がほかの台湾の子供とはあまり変わらない。唯一変わっているところは彼女が常に台湾語を喋っていることだ。台湾の子供たちは家では台湾語を喋っているが、外では常に中国語を喋っている。例えば、長女は生活適応クラスで筆者と話したときも中国語を喋っている。台湾語で話しているGの影響で、次女は常に台湾語で話している。

漢字も読めない、中国語も喋られないGは、最初子供の教育について非常に不安だった。しかし、子供は学校に行ってから初めて中国語を勉強したが、なんの支障もなく順調だ。学校の用事や連絡事項がある場合、長女は台湾語に訳して、Gに伝えた。しかも、学校の担任はGがインドネシアから来たことを知って、ほかの台湾人の親と比べて、とても丁寧な話をしてくれる。今まで、長女は算数の問題が分からないとき、問題を台湾語に訳して、Gに聞いた。2010年9月、小学校5年生の算数の問題が難しくなったので、長女をマンツーマンの算数の塾に通わせた。長女は週一回の算数塾だけではなく、英語の塾が週三回、ピアノの稽古が週一回、ほかの台湾の子供とはあまり変わらなくて、多忙な小学生だ。5年生の新しい担任は生徒に2年後の中学校の厳しい受験戦争の生活に適応させるために、毎日たくさんの宿題を出して、毎日テストをする。「お母さん、毎日テストで辛いから、学校に行きたくない」と長女は文句を言っていた。

5. 結婚が持続したケースのまとめ

序論と本章の初めで述べたように、アジア花嫁がホスト社会で直面している諸問題とそれを克服するための彼女らの生存戦略を明らかにすることが本論文の中心である。ここでは結婚が継続している4人のライフヒストリーを通して、彼女らが遭遇したさまざまな困難とそれに対する各自の生存戦略を議論する。

① 言語の壁

国際結婚において、多くのアジア花嫁が最初最も悩んでいたことは言語の壁である。すなわち、中国語、台湾語、客家語能力の有無は台湾生活の適応において、最も重要な役割を果たしている。アジア花嫁の中国語や台湾語の能力不足は、まず台湾人夫や家族とのコミュニケーションに支障を生じさせやすくなり、日常生活のさまざまな場面に不便を引き起こす。さらに、ホスト社会における社会参加、情報の獲得に対して、大きな壁になる。とくに、地域によって、台湾語能力は中国語能力より重視されている。たとえば、高雄市の人は大半台湾語で喋っている。国際結婚した台湾人男性の多くは労働者、市場の八百屋、肉屋をはじめとする自営業などの中間層・下層に属し、日常会話はほとんど台湾語といえよう。さらに、戦前の日本語教育を受けた世代は中国語が聞き取れない人が多い。

本節の4人は全員言語の壁にぶつかったが、ただ各々の程度の差があり、それぞれの対応も異なった。実家で広東語を話していた広東系華人出身のベトナム籍Cは華人といえども、中国語も台湾

語もできなかった。Cは4人の中で、初期の台湾生活において、最も大きな問題を抱えていた。結婚してまもなく高雄に来たCは身振り手振りではしか夫と同居している舅姑をはじめとする9人の大家族と意思疎通することができなくて、苦勞していた。舅姑との葛藤もそのときの小さな誤解から発展したものとCは話していた。幸いなことに、大家族の全員は舅姑のように、ベトナムから来たCを軽蔑し、「買ってきた花嫁」と思っているわけではなかった。兄嫁はCの境遇を同情し、高雄の生活に適応できるように、積極的に中国語や地元の生活情報を教えた。親戚も友達もいなかった初期の台湾生活において、兄嫁の親切な手助けがないと、Cは言語の壁という困難を乗り越えない。もちろん、Cも自分なりに懸命にがんばってきた。当時Cは昼間よく一人で、近所の周辺の道を歩きながら、街の名前を少しずつ暗記し、中国語を勉強した。分からないことがあれば、仕事帰りの夫と兄嫁に聞いた。またテレビを見て、中国語と台湾語を勉強していた。現在Cは高雄ベトナム同郷会理事長として、大勢の人の前で堂々として演説できる中国語能力を身に付けた。また、彼女が書いた中国語の文章は高雄市社会局によって出版された『生命物語』にも掲載されている。

4人の中で、ベトナム籍Cに次いで、カンボジア籍Kは初期の台湾生活で大きな困難に立ち向かった。潮洲系華人のカンボジア籍Kは夫との結婚が決まって、台湾のビザを待つ間に、プノンベンで中国語塾で簡単な中国語を勉強した。高雄に来てから、家の近くにある小学校の夜間「識字クラス」に参加し、簡単な中国語の会話能力を習得した。しかし、Kの舅姑は中国語を全く聞き取れなかった。意思疎通が困難な状況において、絶対的な権力を持っている姑と同居しながら、舅の介護、大家族の食事の用意、家事という重荷を背負わされたKにとって、高雄に来た最初の半年は苦痛そのものだった。ただ、普通のアジア花嫁と比較すると、潮洲語が話せるKはまだ幸運のほうだ。それは、潮洲語が台湾語と似ているため、Kは短時間で台湾語を習得することができた。皮肉なことに、舅の介護をしているうちに、台湾語をだんだんマスターしたとも言える。現場の状況を見て、舅姑が喋っている台湾語の意味を推測しながら、台湾語を習得した。また、テレビを見ながら、分からない言葉があれば、直ちにメモ帳に記録し、夫や「識字クラス」の先生に聞いた。一般のアジア花嫁が中国語の日常会話と簡単な中国語の読み書きを習得すると、中国語の学習もう持続しない。向学心の強いKは夜の合間を利用し、小学校の「識字クラス」を卒業して、中学校に進学し、地元の有名な職業高校に進学し、大学に進学しようと思っていたが、夫の反対で諦めた。長年の勉強で、カンボジア籍Kは多くのアジア花嫁が読めない中国語の新聞まで読めるようになった。

4人の中で、唯一の非華人であるタイ籍Mは海外移住労働者として、台湾の雲林県の靴工場で2年働いた。当時Mは多くの同僚とともに、工場の女子寮に住んで、簡単な英語とジェスチャーで台

湾人の同僚と意思疎通しながら、少しずつ台湾語と中国語の日常会話を習得した。そのため、結婚生活当初、夫や姑との意思疎通が順調であった。ただし、Mは中国語の読み書きができないため、病院や市役所に行く場合は台湾人の同僚や夫に頼んでいた。現在は簡単な中国語を読むことはできるようになったが、書くことは相変わらずできない。Mにとって、中国語が書けないことは日常生活に何も支障が来たさず、わざわざ学校に通う必要がないと思っている。

4人の中で、流暢な台湾語を話したインドネシア籍Gは、最も早く高雄の生活に馴染んだアジア花嫁の一人と言えよう。Gは福建系4世の華人で、実家では閩南語を話していた。Gが喋っていた閩南語は台湾語とすこし違う言葉であるが、日常生活の会話なら、全く問題ない。Gの言葉のなまりは台湾の離島にある澎湖県の人が喋っている台湾語と類似している。そのため、Gが町や市場で台湾人と喋ったら、よく澎湖出身だと勘違いされ、「外国籍花嫁」という差別的な扱いを受けたことがない。ただし、彼女は中国語の読み書きができないため、最初一人で病院や市役所に行くのは困難だった。近年大病院では常にボランティアが常駐しているため、診療申込書の記入の手伝いができるようになった。また、たとえボランティアがいない場所や施設などでも、Gは初対面の人に知らないことを聞くと、常に礼儀正しく接しているため、助けられている。工務店社長の夫と結婚したGは経済環境に恵まれて、外で働く必要がない。ただ、台湾に来てから、大学卒業という高学歴を持っているにもかかわらず、非識字者になったことに対して、Gは常に劣等感を抱いている。そのため、子育てが一段落した2010年以降、積極的に中国語を勉強している。

② 家族内の人間関係

アジア花嫁はよく家事を担い、跡取りになる子孫を生み、高齢者の介護をする安価な再生産労働者とされて、いわゆる「オール・イン・ワン」（複数の機能がそなわった）と見なされた。そのため、家庭生活において、普通の台湾人女性と平等な待遇を受けることは少ないと言えよう。とくに、仲介業者の紹介による即席結婚のケースは、恋愛感情が含まれていないため、常に「売買婚」という汚名が着せられる[李瑞金・李萍2002、江亮演・陳燕楨・黃稚純2004、何青蓉2003a]。

このような「売買婚」では、台湾人夫やその家族が支配権を持っている。また、彼らは金銭目当てだと思われるアジア花嫁に対して不信感を抱いている。4人の中で、カンボジア籍Kはまさにこのような困難と立ち向かった典型的なケースである。結婚当初Kは単なる舅の介護、家事全般だけではなく、家の隣で「ラーメン屋」を営む兄嫁から材料費をもらい、夫一家や義兄一家の食事の用意も任せられた。大家族皆それぞれの好みがあり、Kが作った料理は常に文句を言われた。当時、

姑はまだ元気で、家庭内では絶対的な権力を持って、Kのことを「買ってきた花嫁」と思い、自分や夫の介護をするための外国人介護労働者のように接するのが当然だと思っていた。夫の兄弟姉妹も同様に、Kを大家族の使用人として接していた。お正月の大家族の料理の用意に関して、義姉や兄嫁たち誰も協力せず、常にK一人に任せてしまったのである。しかし、近年Kは夫の口を借りて、大家族の食事をレストランで済ませることを提案し、大家族の使用人にならないように努めてきた。この戦略は夫の支持がないと成功できない。最初夫はKが金銭目当てで台湾に来たと思い込んで、双方の間に、信頼関係がなかった。結婚して数年後、Kの夫は父親の遺産の放棄の代わりに大金を要求した姉妹と、母親の介護に対して無関心な兄弟に失望した。夫はKに心を開き、Kのことを妻として認め始め、次第に仲良い夫婦になった。近年Kは無償で姑の介護をしているのではなく、義兄らから介護費用をもらっている。さらに、義兄弟が手当てを未納した一時期があり、Kは姑の介護をやめて、デパートの食品売り場で働くことにした。その代わりに、インドネシア人の介護労働者を雇って、姑の介護をさせることにした。赤の他人であるインドネシア人介護労働者なら、義兄弟は給料を延納や未納することができないとKは思っていた。Kは結婚当初、外国人介護・家事労働者のような待遇を強いられたが、夫との信頼関係を段々築いていくうちに、家庭内の地位を向上させることができた。

ベトナム籍Cもカンボジア籍Kと同様に、最初は大家族の家事の担い手にさせられた経験があり、またいつも舅姑の意見を従う夫に対して失望していた。舅姑の差別的な態度にもかかわらず、Cが台湾の言葉の学習、家事と育児などを懸命に頑張っているうちに、夫は次第に立場を変えてきた。長女の誕生の際、夫は母親が孫の誕生を祖先に報告しないことに対して、やや不満を感じながら我慢した。2年後、母親は相変わらず、自分の妻であるCを家族の一員として認めず、祖先に次女の誕生も報告しなかったことに対して、夫は怒りを感じ、それ以降、Cの立場に立つようになった。また、カンボジア籍Kと同様に、Cも夫の口を借り、大家族の食事はそれぞれの階で済ませようと姑に提案し、大家族の料理担当にならないように努めてきた。これをきっかけとして、舅姑と接する機会が減ってきたとともに、Cの台湾生活は楽になった。

4人の中でタイ籍Mとインドネシア籍Gは上記したような困難に遭遇したことがない。Mは結婚以来、終始核家族で過ごしてきて、夫婦の仕事で地方に住んでいた姑との同居がなかった。元々、Mは夫と結婚する前に、舅姑問題を考えたことがあり、一人息子の夫と結婚するなら、台湾人家族との付き合いが少ないし、複雑な人間関係を回避することができると予想していた。また、家族内の地位に関して、Mと夫は対等である。Mが働き、家計を分担する原因もあり、結婚する際の婚資

の問題もある。インドネシア籍 G の場合も同様の状況を持ち、結婚する前に、舅姑はすでに他界していた。家庭内の地位に関して、G が専業主婦にもかかわらず、夫は常に子育てや家事をこなした G に感謝している。

この 4 人の家庭内の地位の差異の背景には、婚資不均衡、すなわち「持参財（嫁妝）の有無」という問題が絡む。台湾とベトナムでは、花嫁の持参財である「嫁妝」と花婿が女性の親族に贈与する結納金である「聘金」という婚資の慣習がまだ存在している。こうした婚資の出費と台湾人夫がベトナム花嫁と結婚する際にかかった費用と比較してみれば、両者の差異がわかる [Mauss1990 : 54 - 60、沈倅如 2002 : 25、王宏仁・張書銘 2003 : 8]。この両者の差異は贈与交換と商品交易という違いである。「贈与交換」を通して、お互いの信頼と良い関係は作られる。贈与交換のシステムは「送る」と「受ける」の双方に、贈り物より長期的で良好な人間関係が望まれている。これに対して、台湾人夫とベトナム花嫁という国際結婚は商品の交易であり、一回きりの売買関係である。伝統的な結婚から見れば、女性側の「持参財」と男性側の婚資という贈与交換が見られる。ところが、台湾とベトナムの国際結婚では、女性側の持参財は見られなくて、男性が女性に送った結納金は返されることはないし、さらに、仲介業者に搾取される可能性もある [沈倅如 2002 : 25、王宏仁・張書銘 2003 : 8]。台湾とベトナムの国際結婚を研究した横田はも同様に婚資不均衡に焦点を当て、「夫および夫方姻族が外国籍の妻および妻方姻族に明らかな不満を抱く原因は、贈与—返済の不均衡に由来する」と指摘した [横田 2008b]。

台湾人男性とアジア花嫁の国際結婚において、持参財の欠如という理由で、アジア花嫁は「買ってきた花嫁」とされる。そして、「持参財の有無」によって、花嫁が台湾人親族と家庭の中における地位は大きく違ってくる。本節の 4 人の中で、カンボジア籍 K とベトナム籍 C は持参財の欠如で、台湾人親族の間で地位が低い。二人とも、結婚当初、外国人家事労働者のような扱いを受けたことがある。これに対して、「娘を売る」と思われたくない G の父親は G の夫が用意した婚資を断った。タイ籍 M は実家から送金してもらったことが何度もある。そのため、G と M は台湾人親族と家族の中における地位に関して、比較的に高い地位を保つことが出来る。「私は今時の外国籍花嫁とちがう」と M は常に強調している。この話の背後は、自分が「買ってきた花嫁」と違うという意味合いがある。

③ 子育てと教育

前述したように、台湾人家族がアジア花嫁に対して「跡取りになる子孫を生む」という期待が強

いため、アジア花嫁が台湾に来て、まもなく妊娠することが多い。一般の台湾人母親の第一子出産平均年数が2.6年であるのに、ベトナム籍花嫁の第一子出産平均年数は1.4年である[王宏仁 2001、李沂芝 2007]。ホスト社会の生活に完全に慣れていない、言語もマスターしていない状況で妊娠と育児に直面するアジア花嫁が多大なストレスと困難に出会うことは想像に難くない。妊娠段階の食べ物の不適應問題、出産後の「坐月子」文化の相違、新生児の世話に対する無力感、学齢期の子供の学習指導、学校のいじめ問題など、段階によって、さまざまな問題が生じてくる。

4人の中で、カンボジア籍Kは子供がいなかったため、上記した困難に遭ったことがない。K以外の3人、全てこのような困難にぶつかったことがあり、とくにベトナム籍Cは大家族と同居し、最も深刻な状態であった。結婚早々妊娠し、つわりが深刻だった時期にもかかわらず、Cは大家族の食事の用意や掃除をしないといけなかった。舅姑が結婚当初だけではなく、現在もCを大家族の一員として認めていない。結婚した当初、親孝行の夫はまだ両親の意見を逆らうことができなかった。夫は仕事で疲れたので、家事と育児の手伝いも全くしなかった。Cはさらに無力感を感じていた。幸いなことに、兄嫁を頼りにすることができ、新生児の世話などの手伝いをしてもらった。子供が学齢期に入ると、もう一つの困難が生じてくる。中国語能力が不足しているアジア花嫁は連絡簿さえ読めないため、子供の学業を指導することが困難だとされる。

当時Cはすでに一定のレベルの中国語能力を身に付けたが、学業を指導する自信が足りないため、「ママは中国語が分からないから、学校でしっかり勉強しないとだめだ」といつも娘に告げていた。二人の娘はいつも学校の先生や放課後の「安親班」の先生に教えてもらって、成績優秀である。二人とも小学校で母親がベトナムから来たことで男の子に揶揄されたことはあったが、娘は巧みに言い返した以降、クラスメイトは「外国籍花嫁」という話をしないようになった。彼女らは高雄ベトナム同郷会の理事長として活躍している母親のことを自慢していた。しかし、思春期になった長女は現在反抗期に入り、アジア花嫁に対する偏見の影響で、母親であるCに対してよく口答えをしている。一方、夫が育児に対する協力をしていないが、その代わりに、給料はすべてCに渡し、Cが家計の実権を握っている。また、夫はCの教育方針やしつけに口を出さない。夫の信頼があるから、Cは二人の娘を無事に育てきた。

同じ早期妊娠したインドネシア籍Gは妊娠初期のつわりがひどくて、苦勞していた。幸いなことに、結婚当初Gは夫と二人きりでマンションに住んでいた。Cのように大家族との人間関係によるストレスがなくて、家事労働者扱いされることもなかった。また夫は仕事が忙しくても、できるだけGと一緒にいる時間を作った。妊娠中のGが食べたいものがあれば、夫は夜中でも買ってきた。

普通アジア花嫁と結婚した男性は育児への参加度合いが低く、子育ての責任を妻一人に課す傾向がある[陳美惠 2002、李瑞金・李萍 2002、吳美菁 2004]。G の夫は平日仕事で忙しいが、休日は必ず G と子供を連れて、遊園地に行ったり、有名な舞踊団のショーを見に行ったりしている。

中国語を読めない、話せない G は最初子供の教育について、非常に不安だった。生後ずっと台湾語を喋ってきた G の娘は一般の園児と比較すると、特別だった。一般の園児は幼稚園で中国語を話している。G の娘は幼稚園に行ってから初めて中国語を話せるようになり、周囲の園児と仲よくして、馴染んでいた。長女が小学校に入って、学校の用事や連絡事項がある場合、長女は台湾語に訳して、G に伝えた。担任先生は G がインドネシアから来たことを知って、ほかの台湾人保護者と違って、台湾語で G の娘の学校の様子を話していた。G は子供の学業に対して熱心で、中国語を読めない自分は直接に子供の学業を指導することができないが、子供に塾を通わせて、良い成績を維持させている。次女が通っていた幼稚園も事前調査し、評判がよい私立幼稚園を選択したのである。2008 年ごろ新台湾の子のいじめ問題がよく報道されていたため、G は「母親がインドネシアから来たことをできるだけ友達に話さないで」と娘に話していた。近年アジア花嫁に対する差別を無くすため、高雄市の小学校では「母語教学」や「多文化授業」などの授業を増設した。2010 年、娘の「多文化授業」では、G はココナッツミルク入りカレー料理を用意した。現在台湾人がアジア花嫁に対する見方は段々変わってきた。学校で母親がインドネシアから来たことを隠さなくていい風潮になりつつある。また、G の娘は成績優秀で、困っている同級生の手伝いもする優しい子供である。そのため、G の娘は学校で母親が「外国籍花嫁」ということで差別されたことがない。

ベトナム籍 C とインドネシア籍 G と比較すると、タイ籍 M は出産⁹⁰ や子育てに関して、大きい困難に遭遇しなかったようだ。姑と同居しているアジア花嫁は妊娠期間の注意事項（姑の教え）と「坐月子」文化の相違による揉め事がよくある。M は姑と同居していなくて、このような揉め事を全部回避できた。長男が学齢期に入ると、中国語を読めない M の代わりに、夫は連絡帳の連絡事項を読んでいた。しかも、長男のとき、台湾はまだアジア花嫁問題や「新台湾の子」に注目していなくて、タイ籍母親ということで差別されたことがない。娘が小学校に入学する前年の 2001 年に、「新台湾の子が発達障害や言語の学習障害」という言論が大きな話題になり、アジア花嫁の子供に対する偏見を引き起こした（第 2 章第 1 節参照）。娘が低学年のときの担任先生はこの世論の影響を受け、中国語を読めない M やアジア花嫁の子供に対して偏見を持ち、学校の成績が悪い娘のことを発達障害と思い込んでいた。8 才まで、ずっと病気や手術で入退院を繰り返し、登校日が限られていた娘

⁹⁰長女を出産した二日後、すぐに近所の人を呼んで、自宅で麻雀をした M のエピソードから、M の結婚生活は台湾人家族に束縛されがちなアジア花嫁の日常生活と大きく違っていることが分かる。

の成績が悪いのは当然だとMは思って、先生の差別したような発言を聞き流した。その後、娘は順調に進学し、成績は中の下だが、成績以外は他の児童と変わらなかった。Mは、インドネシア籍Gやベトナム籍Cと違って、子供の学業に対して、高い関心をもっていないので、中国語を読めないことが子育てにおいて、支障を来さないと本人は思っている。

④ ホスト社会におけるネットワーク

アジア花嫁のネットワークの利用に関して、二つのネットワーク圏があり、ひとつは同胞のネットワーク、もうひとつはホスト社会である台湾の地域の人々とのネットワークである。仲介業者を通した国際結婚は、結婚前、恋愛感情をもっていないため、台湾人夫はしばしばアジア花嫁に対して不信感を抱いているとされる。そのため、アジア花嫁の家庭外の接触に不安を感じ、極端な場合は、それを禁止した夫もいた。そのため、ホスト社会におけるネットワークの不足で生活適応に支障を来す。台湾生活の初期では、ベトナム籍Cはまさにこのようなケースであった。彼女は最初夫からの全面的な支援を受けていないし、早期妊娠で生活適応クラスに参加した余裕もなく、同胞とのネットワークが出来なかった。その後、新生児の面倒や育児に対する支援も姑から受けていない。台湾人のネットワークはただ兄嫁と夫だけだった。すなわち、台湾人のネットワークの不足と同胞のネットワークの欠如という困難に置かれた。その後、積極的に中国語を学習し、育児に精力を注いでいるCの姿を見て、親の意見が第一だった夫は次第にCの立場に立つようになり、Cの味方になった。次女が小学校に入って以降、夫はCに子育てだけの家庭生活をやめて、新移民センターが主催しているイベントに参加しなさいと勧めた。彼女は新移民センターのイベントに参加して以来、家族以外のネットワークが大きく広がり、同胞とのネットワークはもちろん、地元の台湾人のネットワークにもつながり、現在は高雄市のアジア花嫁のイベントや座談会で活躍している一人になった。

Kは最初高雄に来たとき、家の近くの果物市場でカンボジア語を喋っている同胞を見て、積極的に声をかけた。異国でカンボジア語を喋る同士と出会うことが当時家事労働者のように見なされたKにとって、大きな救いであった。舅が他界し、姑が元気を失い、夫の信頼を得た以降、Kはよく家の近くに住んでいる同胞に呼んで、カンボジア料理を作ったりして、台湾人家族に対する不満を喋ったり、生活情報を交換したりして、郷愁をまぎらしている。地元の台湾人のネットワークができたのは、Kは飲食店でアルバイトを始めた以降の話である。職場と通っていた高校で、台湾人の友達ができしたが、親交を深めた友達はやはり同胞に限っている。ただ、Kはやはり台湾人のネット

ワークを通して、いろいろ助けられている。地元の学校への進学、夫の生命保険の加入などの事情は同胞にとって疎い分野である。このような情報はやはり台湾人のネットワークしか頼れない。

Mはタイの友達とともに、海外移住労働者として台湾に来たため、最初は同胞のネットワークを持っていた。2、3年後、夫とともに、台中から高雄に移住してから、タイの友達との連絡がなくなった。Mは台湾社会に馴染んで、多くの台湾人の友達ができ、自分の人生を大きく変えた。台湾人同僚の応援で、性格が温厚な夫と結婚することができた。Mが失業したとき、地元の台湾人友人の紹介で電子工場に転職することができた。息子が学校でトラブルが発生したとき、台湾人友人のコンネクションにより、解決した。Mにとって、同胞のネットワークが必要ではないため、積極的に同胞とのネットワークを求めている。

Gは終始夫の全面的な支援を受けている。さらに、彼女は流暢な閩南語を話せるため、ホスト社会に来ると、ただちに地域社会との接点があった。結婚3年目、定年した義兄との同居を始まり、夫以外の台湾人のネットワークまた増えてきた。子育てが一段落して以来、Gは生活適応クラスに参加し、夫や台湾人親族以外のネットワークを広げることができ、教会のボランティアと知り合い、地域社会との交流をさらに進行している。ただ、Gはやはり家庭のことを優先し、積極的に政府が主催しているアジア花嫁のイベントに参加していない。

⑤ 就職事情

第2章第1節の政府のアジア花嫁政策における就労権利の保障でも述べたように、台湾政府が2003年からアジア花嫁の就労制限を緩和した⁹¹にもかかわらず、彼女らは言葉、学歴、ホスト社会のネットワークが限られていて、飲食店のアルバイトなどをはじめとする給料が低い単純労働職にしか就けない。たとえば、カンボジア籍Kは自分の努力で高雄の名門商業高校を卒業したといえど、ホスト社会では学歴が相対的に低くて、就職の業種は限られている。彼女は台湾に来て、「朝食屋」（早餐店）のアルバイト、デパート売場のデモンストレーターなど給料が低いアルバイトしかつけない。彼女は収入を増えるため、毎年の旧正月の時期、店の前の「騎楼」⁹²で、仕入れした「春

⁹¹最初雇い主は政府に外国籍配偶者の就労許可を申し込む必要があった。2003年に「就業服務法」を改定し、在留許可をもつ結婚移民は自由に就労できることになった。

⁹²騎楼とは基準に沿って、道路に面する建物の一階部分に一定空間を設け、セミパブリック的な半戸外空間にする建築形式である。隣り合う建物がそれぞれに空間を設けた結果、屋根のある歩道が形成され、騎楼となる[林政霆 2009]。通行人は夏の強い日差しや急な雨を避けることができる。所有者はよくこの騎楼を屋台などの飲食業者にテナントとして貸している。カンボジアKの夫は自宅の騎楼を親戚の揚げ物屋台として貸している。

聯」⁹³を販売している。2、30年前に高校を卒業したタイ籍 M は台湾でもタイでも高学歴に属していたが、海外移住労働者として台湾に来て、やはり工場の作業員や飲食店のアルバイトしか就けない。この二人と比べて、工務店社長と結婚したインドネシア籍 G とベトナム籍 C は比較的に経済環境が恵まれて、専業主婦でいられるため、就職問題とは関係がない。

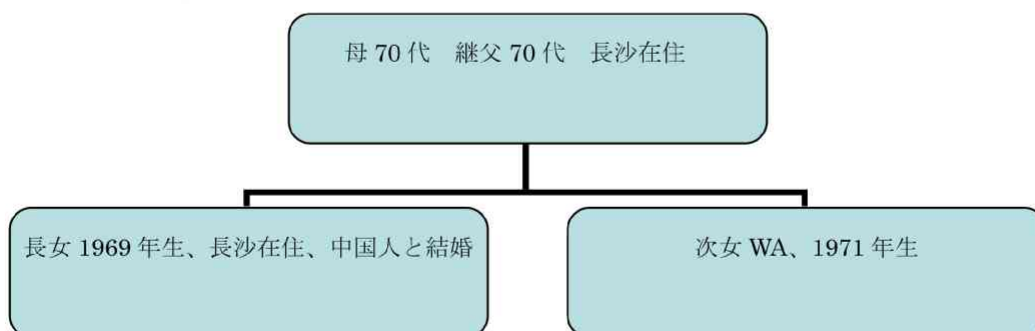
以上のように、ホスト社会での生活を始めて以降の時間軸に沿って、4 人のアジア花嫁が言葉の壁と家庭内の人間関係、子育て、ネットワーク、就職という困難に直面した際、みんなそれぞれの戦略を工夫し、乗り越えてきたことを明らかにした。

第3節 結婚が破綻したケース

本節では結婚生活が破綻した中国籍 WA とベトナム籍 CH と HA のライフヒストリーを紹介する。第1章で述べたように、台湾企業の中国およびベトナム進出とともに、国際結婚が増加した。中国籍 WA とベトナム籍 CH はまさにこのようなケースである。ベトナム籍 HA はタイ籍 M と同様に、海外移住労働のきっかけで、台湾人男性と結婚した。3 人のライフヒストリーを紹介した後で、それぞれの結婚生活が破綻するまでのプロセスと離婚をめぐる生存戦略、離婚後の自立をまとめて、分析する。

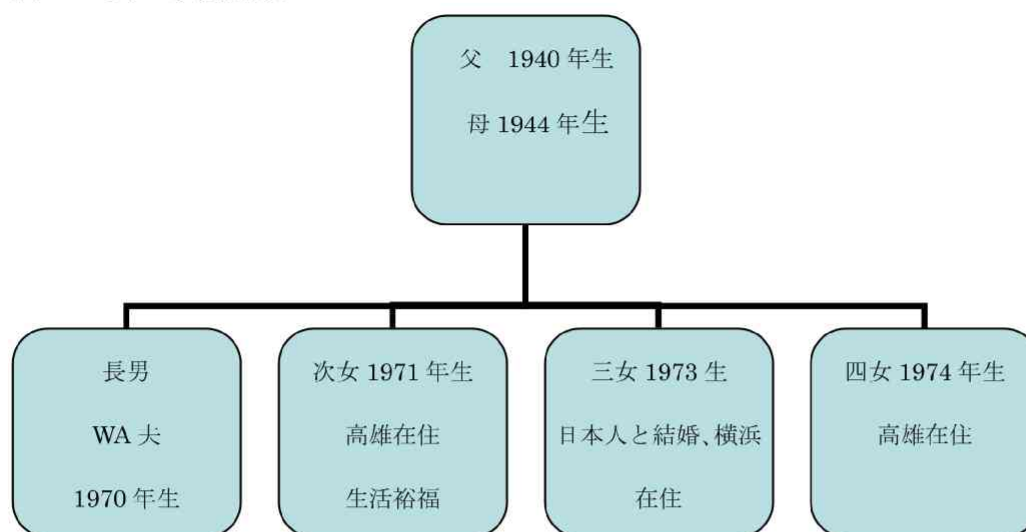
1. 中国籍 WA のライフヒストリー

図 12. WA の家族構成



⁹³漢民族では、旧暦新年の〈春節〉を迎える際に、門柱や扉などの左右に赤い紙を貼るはる習俗がある。めでたい文句が書かれている赤い紙は「春聯」と呼ぶ。

図 13. 夫の家族構成



① WA の生い立ち

WA は筆者の実家の飲食店の常連の一人で、よく筆者の母と話していた。このような関係で、筆者の聞き取り調査を快く受け入れた。WA は中国の湖南省の省都である長沙で育った。WA の実父は共産党の幹部で、地方の役員だった。3 才のとき、父が癌で入院し、家の家計はすべて会計の仕事をしている母一人が背負い、苦しかった。7 才のとき、父が病死で亡くなり、父の治療費で大きな借金を負った。10 才のとき、母は電気技術者の男性と再婚した。WA の家計は相変わらず苦しかった。一刻も早く母の負担を軽くさせるために、WA は大学進学を諦めて、専門学校に進んだ。専門学校に通うとき、通学のバス代を節約するために、毎日片道 50 分も歩いて学校に通っていた。専門学校を卒業してから、親戚の紹介で広東省の深圳で仕事を一年した。その後、WA は長沙に戻り、国家の地方試験の準備をして、見事合格し、国営の貿易会社に入社した。入社してまもなく、中国経済発展特区の広東省珠海に転勤し、よい給料をもらっていた。結婚するまで、長年この国営貿易会社で会計として勤めた。

② 国際結婚を選択した経緯

夫は製薬会社の営業担当で、出張でよく中国の珠海に行った。彼の幼馴染の台湾人男性が珠海で貿易会社を経営していた。彼の友人が行った食事会で、WA と夫が知り合った。彼は WA に一目ぼれで、付き合いを開始した。付き合った当時、夫は毎日 WA と何時間も国際電話で話した。WA に会うために、毎週土日は飛行機で台湾から珠海にやってきた。二人はよくお互いの仕事帰り、珠海の繁

華街で食事をしていた。夜遅くても、貧乏な子供たちが観光客に花を買ってと声をかけた。夫はかわいそうな子供のために、常にたくさん花束を買ってあげた。たまに、そこにいる子供全員の花束花をすべて買って、みんなを早めに仕事を終わらせた時もあった。その時、WA は夫のことを非常に優しい人と思っていた。

当時 28 歳だった WA は優しいかった夫の熱意に感動して、結婚することに同意した。しかも、自分は結婚適齢期を過ぎると思っていた⁹⁴。「夫は誠実そうな感じで、しかもちゃんと仕事があるし、私のことをすごく大事にしてくれる。私はすごくいい生活は望んでいない。ただ普通の円満な家庭を築くことができると思っていた」と WA は話した。WA の母は反対だった。娘が万が一何かあっても、家族は台湾に行けないと心配した⁹⁵。また、台湾人駐在者はよく「包二奶」（中国で愛人を囲う）と言われているから、母はさらに反対だった。同僚たちも台湾駐在者の「包二奶」文化をよく目の当たりにし、賛成していなかった。周囲の反対を押し切って、1999 年 3 月に夫と中国で結婚し、結婚登録書を提出した。長沙のレストランで、WA のの親戚を招待し、娘の結婚の知らせをする食事会を行った。夫の家族は高雄で盛大な披露宴を行う予定で、長沙の食事会に出席していなかった。中華人民共和国の成立と文化革命における「破四旧」⁹⁶運動を経て以降、従来の婚礼風習を厳禁し、質素な結婚式になった。花婿が女性の親族に贈与する結納金である「聘金」と花嫁の持参財である「嫁妝」という婚資の風習も一時期禁止されていた。WA が台湾に来て、知り合いの台湾人に「夫からいくらの聘金をもらったか」と聞かれた時、初めて結婚する際、「聘金」がもらえることを知った。

③ 結婚生活

台湾に来る居留査証を 3 ヶ月待ったので、1999 年 6 月に初めて高雄に来て、三民区の下町の様子に驚いた。台湾に来る前に、高雄の生活水準が高くて、先進国とほぼ変わらないと夫は話した。WA は完全に夫の話を信用していなかったが、高雄は台湾で 2 番目に大きい都市で、少なくとも一定の

⁹⁴中国国家人口計画出産委員会（中国国家人口計画生育委員会）が 2007 年発表した統計によると 2001 年時点で女性が結婚する平均年齢は 24.15 歳という。WA は当時すでに平均年齢より遅く結婚した。

⁹⁵ 1999 年当時の法令では、中国人はまだ自由に台湾に来ることができなかった。2011 年 6 月 28 日以降中国人の台湾への旅行が解禁された。最初は北京、上海、廈門という都市の住民に限定され、その後、天津、重慶南京、広州、杭州、成都、濟南、西安、福州和深圳も続々と解禁された。今後解禁された都市は増える予定である。

⁹⁶1949 年に、中華人民共和国の成立に伴い、封建時代の因習は根本的に改革され、自由恋愛、自主結婚と儀式の簡素化、近代化を原則とする「文明婚礼」が基本となった。さらに、1966 年文化大革命における「破四旧」（旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣）運動の影響により、結婚式は一層質素化した。経済改革の実施以降、近年、結婚式は再び豪華に変わりつつある。

レベルがあると思っていた。ところが、WA の夫が住んでいる地域は三民区の生活レベルが低いところだった。「小港空港（高雄の空港）を出て、夫の家に向かっている間に、タクシーの窓口から高雄の町や建物の様子を見て、驚いた。私はまさか夫に騙されて、こんな田舎に連れて来られた」と WA は語った。「どうしよう、どうしよう、どうやって家族と連絡がとれるのか」と WA は心の中で呟いていた。

そして、周辺環境にまだ適応していないうちに、1 か月後、妊娠に気が付いた。妊娠 3 か月の時、1999 年 9 月 19 日という縁起が良い日⁹⁷に、夫が長男という理由もあり、舅姑は今まで出した祝儀の回収をするつもりもあり、高雄のホテルで 50 卓テーブル⁹⁸の客を招待し、盛大な披露宴を行った。招待された客はすべて夫側の親族と友人であった。WA の家族は当時の法令のため、誰も出席できなかった。WA は式を終えた翌日、すぐ長沙の実家に戻った。当時夫は中国の広州で起業し、小さな会社を始め、よく高雄と広州に行ったり来たりして、自宅に留守の日が多かった。WA の母親は親戚も友達もない高雄で妊娠したばかりの娘を心配し、実家に帰らせたのである。実家で気ままな妊娠生活を過ごし、妊娠 6 ヶ月のある日の夜、夫の会社に勤めていた従姉から一本の電話が来て、夫が取引先の女性営業員と不倫しているようだと伝えた。す

ると、WA は翌朝すぐ広州に駆けつけ、夫に事情を聞いた。従姉が確実な証拠を握っているため、夫は素直に不倫を認めて、もう二度と浮気をしないと誓った。やはり結婚前、母親と友人が心配したように、台湾人駐在者がよく「愛人を囲む」（包二奶）事例がまさか自分の新婚生活で起きると WA は思わなかった。しかも、妊娠 6 ヶ月という時期でこの不倫を知った。WA はお腹の子供を中絶し、夫と離婚しようと思っていたが、胎児があまりにも大きすぎて、中絶手術はできなかった。その後、不倫の再発を防ぐため、一時期広州で夫とともに暮っていたが、妊娠 8 カ月のとき、子供の国籍のため、高雄に戻って、臨月を待っていた。

妻が出産で台湾に戻っている時期、夫は不倫相手との交際を持続していた。夫の不倫問題が結婚生活の不仲のきっかけだった。これ以外、二人の金銭観も違い、夫は貯蓄観念が全くなかった。結婚後、夫は外で遊ぶお金があるのに、WA に生活費をあまり渡さなかった。娘の幼稚園の学費も WA の貯金から捻出したものであった。結婚後の夫の態度の豹変と夫の複数の女性問題に怒りを感じた WA は夫とよく喧嘩し、最初は物を投げあつたりした。次第に、夫は WA に暴力を振るい始めた。何

⁹⁷ 9 の中国語の発音は「永久」の「久」の同じで、結婚には縁起のいい数字である。そのため、1999 年 9 月 9 日に結婚式ラッシューが起き、当日のホテルや結婚式会場は 1 年前を予約しないとできないという。そのため、1999 年 9 月 19 日という日もたくさんの「9」が入って、この日に結婚したカップルも多かった。

⁹⁸ ホテルでの披露宴、一つのテーブルは基本 10 人座りである。50 テーブルは 500 人である。

度も警察に通報に行きたかった WA は、離婚後の強制送還を恐れ、このまま一生子供と会えないことを考えて諦めた。WA はプライドが高い人間で、夫の DV について、知人や近所の知り合いには話さなかったし、また、知人に話しても、問題が解決できないと思っていた。ただ、近所の知り合いは夜の喧嘩声と音を聞き、翌日 WA の腫れた顔を見るとすぐ事情を分かり、親切に警察への通報の案内などを教えた。当初、家族の反対を押し切り夫と結婚した WA は、今さら家族に夫の DV を話す面目がなかった。夫の DV 問題に関して、彼女は一方的に殴られただけではなく、夫に殴り返したこともあった。また、夫の DV を受けた WA が翌日すぐ近所に住んでいた舅姑のところに顔を出すと、WA の腫れた顔や手に残った青あざを見て、すぐ息子の仕業だと分かった。親は何度も息子に二度とすると叱った。息子は素直に親の話を聞かないとしても、多少 WA への暴力のエスカレートを抑止した。結婚生活の 8 年間、何度も自殺しようと思っていたが、娘をやくざのような父親のもとに残すこと、娘の将来を考えると、WA はどうしても娘を一人にして、この世を去ることができなかった。

④ 台湾人家族との関係

アジア花嫁に関する先行研究[鄭雅雯 2000、呂美紅 2000、李玫臻 2002、王秀喜 2004、江亮演・陳燕禎・黃稚純 2004]において、彼女らの台湾で最も身近なネットワークは夫や夫の家族である。また、家父長制の台湾社会では「不孝有三、無後為大」という諺がある。意味は、親不孝な人には三種類があり、その中で結婚せずに子供を作らない男が一番親不孝である。長男しかも唯一の息子である WA の夫は実家において、権力が強くて、後継ぎだと期待されていた。しかし、彼は頻繁にトラブルを起こし、家族に迷惑をかけ、家族との関係が次第に不仲になった。大晦日には、実家を離れている息子が家族連れで実家に帰って、親と「団欒の食事」（団圓飯）をするのが決まりだ。家族と疎遠している夫の関係で、WA は一度も大晦日に舅姑とともに食事をしたことがなかった。1 月 2 日「結婚した娘の実家帰り」（回娘家）の日には、舅姑と結婚した義姉妹の家族とともに、ホテルで食事しただけで済ませた。

多くのアジア花嫁は嫁姑問題で悩まされている。WA が婚前、舅姑と同居しないことを結婚条件として申し込んだので、結婚生活以来一度も嫁姑問題に直面したことがない。出産後、親族が一人もいない WA のために、舅姑は退院した WA を自宅に連れ、薬膳料理を用意し、新生児の面倒も手伝った。その後、両親は息子の不倫と DV を知り、WA に対して謝ったこともある。夫以外の台湾人家族全員は WA 親子にやさしく接していて、離婚後もよい関係を保っている。年末年始、義妹はいつも

WA の娘を迎えに来て、所有する別荘に連れて遊びに行った。舅はよく孫娘の学校の送迎をしていた。しかし、高学年になった以降、舅は認知症が発症し、孫娘を送迎することができなくなった。

⑤ 離婚

2006 年、WA は念願の中華民国の国籍身分証を入手した。そこで、夫に離婚の話をした。夫は最初、離婚には同意しなかった。夫は妻に振られては面目がないと思って、最初は離婚しなかった。しかも、子供の親権を渡せないと話したら、WA も離婚を諦めると夫は思っていた。娘の親権に対して、WA は闇金経営の夫がいずれか逮捕され、その時、親権問題が自然に解決できると思い、一刻も早く夫と離婚したかった。何度もの話し合いを経て、夫はやっと離婚の話に同意した。WA はやっと長年の家庭内暴力の結婚生活から脱出することができた。離婚した 1 年目のとき、当時小学校 1 年生だった娘は夫と一緒に住んでいた。親の自覚がない夫とともに生活している娘を心配し、WA は夫の近くにアパートを探して、娘の生活を見守っていた。その後、WA の思った通り、夫が刑務所に入る前、二人は地方裁判所に行き、親権変更を申し込んだ。

⑥ 仕事

結婚後、夫は WA に生活費をあまり渡さなかったもので、彼女はパートの仕事を探し、家の近くにある「ドリンクスタンド」（泡沫紅茶）でアルバイトをしていた。「ドリンクスタンド」の店主夫婦は WA の礼儀正しい行儀と真面目な仕事ぶりに感心し、彼女の最初の高雄生活を支えていた⁹⁹。パートの仕事をしている傍ら、地方自治体が主催しているパソコン教室に通って、パソコンの基本的知識を勉強した。WA になぜパソコンを勉強したいかと聞くと、「外で買い物をしていると、店のスタッフはほとんどパソコンを使っているし、将来会社で就職するために、パソコンは最も重要な条件ではないか。今の時代、パソコンができないと、時代遅れだ」と、筆者のこの質問に不思議そうに答えた。パソコン教室に通って半年後、WA は会計の仕事を見つけた。

2009 年、小学校 4 年生の娘は同年代の子供より活発で早熟な子である。夫と離婚する前に、娘は「あなた達は離婚したほうがいい、毎日喧嘩ばかりしてもしようがない」と WA に語った。娘は初対面の人とすぐ話ができて、外向的な子供だ。WA はもともと娘の活発すぎる性格を心配していた。ある日、WA は娘と一緒に、デパートの地下街でおやつ売り場の前を通ったとき、おやつ売り場のスタッフの一人は娘に「先週、店のお兄さんと一緒に遊びに行ったでしょう」と親しみが溢れた口ぶ

⁹⁹ この「ドリンクスタンド」は実家の店の近くにあり、筆者と店主夫婦は面識した。筆者は店主夫婦と雑談をしたとき、得た情報である。

りで声をかけてきた。WA は、娘がなんと母親に内緒で、20 代後半の男性に連れられて、外で遊んだりしたのを始めて知り、驚いた。自分が仕事に行っている間に、娘が知らない人とどういふことをしていたかを全く把握できなくて、娘の安全と将来を心配している。WA の会社は忙しくて、よく残業させられた。娘一人で家にいる時間が多い。この事件をきっかけとして、WA は会計の仕事をやめて、仕事の時間を自由に決められる自営業のジューススタンドを開始した。

2009 年 8 月に、最初のアパートである「ドリンクスタンド」（泡沫紅茶）の店主夫婦によるアドバイスや技術の伝授で、家の近くの商店街で「ジューススタンド」（果汁店）を開いた。店はコインランドリー店の前の「騎楼」¹⁰⁰にある。WA の最初のバイト先である「ドリンクスタンド」も「騎楼」にあった。WA は月 5000 台湾ドル（15000 円）で大家から 2 坪ぐらいのスペースを借りている。ジューススタンドの売り場であるカウンターは半畳ほどの広さである。2009 年 8 月開業から 10 月末までの平均売り上げは 20,000 台湾ドル（6 万円）に達していない。「これから、寒くなってきた、売り上げは 2 万円を上回る見込みが小さいが、来年 4 月、5 月以降、暖かくなってくると、2 万円を上回るでしょう」と WA は語った。会計の仕事をしていたとき、給料は 2 万円で、毎月安定した収入を保っていた。しかも、ジューススタンドの営業時間は朝 10 時から夜 10 時までで、会社にいた時と比べて、かなり長時間の労働だ。今の収入は不安定で労働時間も長い、娘の面倒をよく見られるだけで十分だと WA は考えている。

⑦ 子育てと教育

アジア花嫁と結婚した男性は育児への参加度合いが低く、子育ての責任を妻一人に任ず傾向がある。WA の夫はまさにその典型的な男性であった。ただ、普段仕事で忙しい夫はたまに気が向くと、娘を外へ連れて行き、娘の言うことを全部聞き、溺愛した一面もある。娘を溺愛した夫と娘のわがままを直そうとした WA はよく喧嘩していた。幼少期以来、一人娘の要求を全て応えた元夫のせいで、娘は我が強い子として成長した。WA は娘の我がままな性格を厳しく指導しても、直せなかった。小学校 5 年生以来、担任先生に対する失礼な発言と行為で、WA はよく先生に呼び出された。気が強い娘は学校で、母親が中国籍花嫁ということはいじめを受けたことがない。ただ、台湾社会では中国人に対する偏見が長年、存在しているため、娘も中国に対して、好印象をもっていない。娘はたまに中国出身の母親に対して、失礼な発言をする。そのとき、母親が娘に、「あなたの母親は中国出身ということを忘れないで」と厳重に注意した。彼女が最も心配していることは、娘が元夫のよ

¹⁰⁰ 注 25 を参照

うに、非行の道を歩むことである。そのため、日ごろ娘を厳しく指導している。娘は学校の授業を終えてから、低収入や離婚した家族などの子供を対象にして、高雄市教育部が主催している「夜光教室」に通っている。この「夜光教室」は夜6時から8時まで開かれ、夕食の給食をすませてから、宿題の指導を行う。WAは、平日は夜8時になると、しばらく店を閉めて、学校に娘を迎えに行き、店に連れて来る。閉店まで娘と一緒に店にいる。娘に閉店の手伝いにしてもらう。土日のときは娘を店に連れて来て、一緒にジューススタンドの仕事をする。WAは台湾政府のこの教育支援政策を評価している。

⑧ 離婚後の生活

離婚後、夫とのかかわりが無い人生をスタートし、新しい人生の始まりだと思っていたWAは、数年後、再び元夫の暴力を受けて、非常に恐怖を覚えた。刑務所を出た元夫が店に来て、娘をどこかに連れて行こうとしたが、それを拒否したWAに対して、再び暴言を吐き、暴力を振るった。その後、WAは交際相手の同行で、警察に通報しに行き、元夫を傷害罪と、侮辱罪、脅迫罪で告訴した。元夫が逮捕される前に、WAの交際相手は仕事帰り、すぐ店に駆けつけ、元夫の再犯を防ぎ、WA親子を守っていた。その後、元夫はWAの告訴も含め、ほかの犯罪で再び刑務所に入った。

WAの交際相手Uは、店のミネラルウォーターを配達することをきっかけとして、WAと知り合い、交際を始めた。離婚し、13歳の一人息子と二人暮らしをしているUは元塾経営者であり、法律の常識が豊富である。元夫への告訴に関して、交際相手の協力が無いと、台湾の法律に疎いWA一人ではできなかった。人にあまり弱みを見せないWAは交際相手と出会って以来、大きな精神面の支えをもらい、元夫の暴力による精神的なダメージも交際相手の支えで、少しずつ回復してきた。

⑨ 台湾社会への適応

中国籍WAは地元の台湾人より発音がきれいな中国語を喋っているため、会話能力はもちろん問題ない。ただ、中国で通用している簡体字を学習してきたWAは、繁体字が通用している台湾社会に来た当初、多少困惑していたが、現場の状況を見ながら、意味を推測し、次第に繁体字を読めるようになった。文字が全く違う東南アジア出身のアジア花嫁と比較すれば、中国籍WAが繁体字をマスターすること自体は苦にはならない。WAは中国の珠海にいたとき、マンションに住んでいた。そのとき、マンションの近所同士は毎日顔を合わしても、挨拶しなくて、いつも冷たい顔をしていた。何年経ても、お互いに名前も職業も知らないままだった。台湾では、近所の人や同じマンショ

ンに住んでいる人はよく挨拶したり、声をかけたりする。中国籍花嫁に対する偏見があるが、周りの人々はWAに親切に接していて、台湾は生活しやすいとWAは語った。台湾での仲がよい友達には台湾人もいる、中国籍花嫁もいる。ある日、WAが書類にサインしたとき、筆者は偶然、その場到了。WAがサインした名前は筆者が知っている名前ではなかった。そこで、なぜこの名前をサインしたかと聞くと、彼女は改名したと返事した。WAの本名は二文字で、台湾に来てから、台湾人の名前がほぼ三文字を見て、三文字の名前に改名した。

2. ベトナム籍CHのライフストーリー

図 14. CHの家族構成

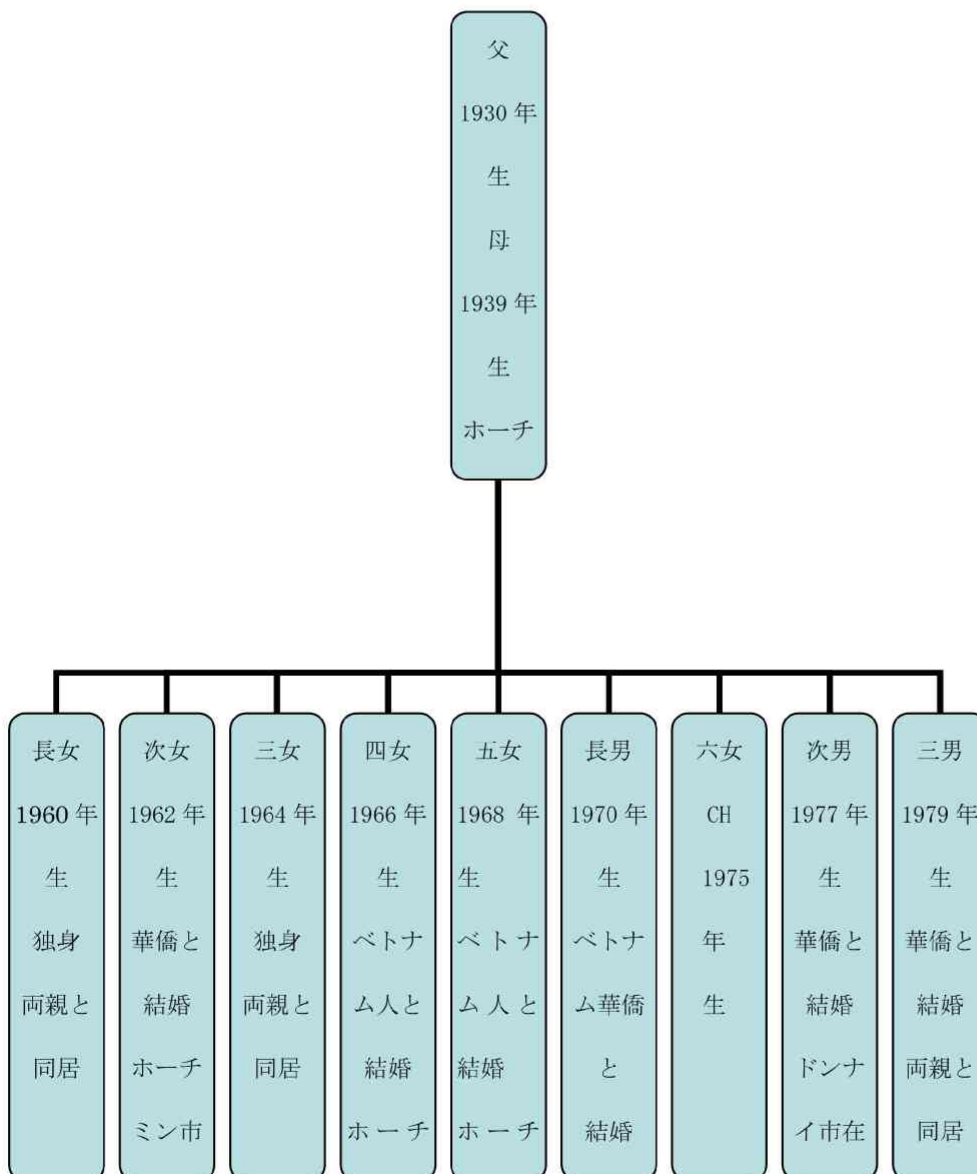
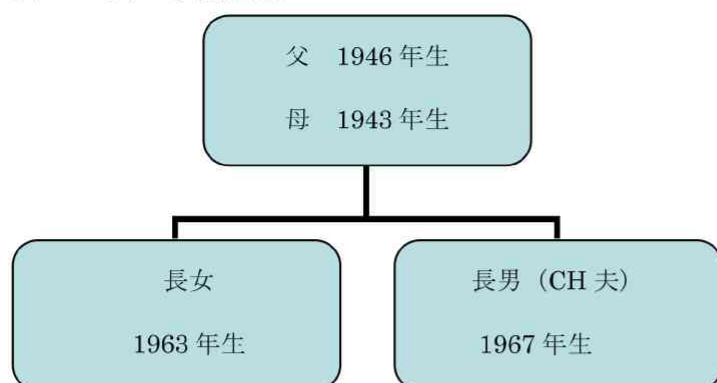


図 15. 夫の家族構成



① CH の生い立ち

2011 年に初めて CH と出会ったのはベトナム姉妹会の誕生日祝いパーティーだった。CH の中国語の発音は全くなまりがなくて、いかにも台湾人のようである。平日は通訳会社の仕事をし、時々移民署の通訳の仕事も引き受けている。筆者は何度も移民署で CH と会ったことがある。1975 年生まれの CH はベトナムのホーチミン市出身で、9 人兄弟の 7 番目である。祖父は中国広西省の客家出身で、祖母は広東省出身で、子供時代からすでに客家語、広東語、ベトナム語を話していた。祖父母は広西省で知り合って、結婚してからベトナムの北部に移住し、CH の父が生まれてから南方面に転々と移住し、最後はホーチミン市に定住した。解放前、祖父は地主で、一家は裕福な生活をしていた。解放後、華人の地位が一変し、華人は政府に弾圧される対象になった。60 年代戦争が継続していたベトナムでは、華人男性は兵役を逃れるために、中華民国の国籍を買って、中華民国のパスポートを取得した。ただ、当時のベトナムの法律では、外国人は土地と家などの不動産を持つことができないと規制されていた。そのため、一家では男性は中華民国のパスポートをもって、台湾籍に所属して、一方、女性にはベトナム籍のままで、家の財産や土地を守ることができるようにした。CH もその例である。彼女の家では父親、一人の兄、二人の弟は中華民国の国籍を持っている。その年代、中華民国は国際社会から排斥されていたため、華人を非常に優遇して、さまざまな政策を出していた。CH の話では、大金で中華民国の国籍を買う華人が多かったという。

CH は子供のころ、ベトナム政府の華人排斥政策で、華人が中国語の学習も大学への進学も禁止されていた。姉と兄は成績優秀だが、高校までしか進学できなかったという。中国語を教えた先生と中国語を勉強していた生徒が政府に見つかり、逮捕されるというケースが多くあった。CH の二人の弟は熱心に中国語を勉強した。ある時は、警察に逮捕されそうになり、高い木に登り逃れることもあった。ほかの兄弟と比べると、CH は中国語の勉強にそれほど熱心ではない。彼女は高校に

入って、一貫道¹⁰¹を信仰してから、初めてその尼僧から中国語を習得した。子供のころから多言語を駆使した CH にとって、中国語の習得は困難なことではなかった。また当時ちょうど台湾の「瓊瑤連続ドラマ」¹⁰²はベトナムでも大人気だった。CH は中国語原文の「瓊瑤小説」を愛読していたので、中国語の書く能力のよい基礎を作った。

② 国際結婚を選択した経緯

高校を卒業した CH はホーチミン市の大手台湾企業の工場に就職した。24 才の時、当時 32 才の台湾人幹部と知り合って、交際を始めた。CH の話によると、ベトナム人男性は妻に対してよく暴力を振るうし、まじめに仕事をしないという悪い印象を持っていたので、結婚に対して憧れを持っていなかった。しかし、台湾人男性はやさしくてよく働くと同僚から聞いて、台湾人男性との結婚がいいかもしれないと彼女は思っていた。しかも、CH は少女時代から、台湾ドラマに興味を持ち、台湾文化を熱愛していた。その後、半年の交際のち結婚を決めた。CH は台湾人幹部と結婚することができて、工場で働くベトナム人女性の羨望の的になった。

③ 夫家族との同居生活

1999 年、CH は結婚すると、すぐ夫とともに台湾の高雄市三民区に移住し、舅姑と同居を始め、まもなく妊娠した。妊娠 6 カ月の時、夫は上海に単身赴任をした。夫一家との同居生活は CH にとって、苦痛な 3 年間だった。3 人兄弟の夫は姉と弟がいた。夫一家は知的な人間で、CH に対して表面的にはやさしく、罵る言葉は一切使わなかった。しかし、高学歴で高収入を得ている独身の 40 代の義理の姉は CH のことを見下して、東南アジアから来た人は衛生習慣が悪いと決め付け、CH がしている家事に常に口を出していた。姑は人の前で CH のことをやさしくしているが、陰でよく CH のことをいじめたりしていた。姑は CH が作った「緑豆湯」¹⁰³に大量の水を入れた後で、またその鍋を舅の前に出して、「ほら、こんなに水っぽい緑豆湯を飲めるか。どうせ誰も飲めないから、むしろ捨てたほうがいい」と言って、CH の目の前で、全部捨てた。姑がいじめた理由は嫉妬かもしれないと、CH は語った。舅は CH のことを非常に可愛がって、彼女が作った料理やデザートをいつ

¹⁰¹一貫道は、清朝で生まれて、今台湾を中心に信仰活動が続ける宗教である。道教、仏教、儒教、キリスト教、イスラム教の教義を貫いて一つの宗教に統合するとし、「一貫道」と呼ばれている。しかし、多くの台湾人やベトナム華僑は一貫道を仏教の宗派の一つだと思っている。

¹⁰²瓊瑤は台湾の女性恋愛小説家である。彼女の小説をもとにしている恋愛ドラマは 70 年代から 90 年代まで大ブームを起していた。中華圏では、瓊瑤小説が絶大な人気を持っていた。彼女が書いた恋愛小説はよく中国語の古典を使っている。中国語の勉強にはよい参考書だと言える。

¹⁰³緑豆湯とは小豆の代わりに、緑豆を使ったお汁粉で、台湾ではおなじみのデザートである。

も完食していた。これと対照的に、舅は姑が作った料理を毎回完食していたわけではない。宗教上の理由から、CH はベジタリアンで、食べられるものが限られているから、舅はよく CH の好物を買ってきた。また、妊娠のつわりがひどくて、よく手洗いで嘔吐した CH を何回も見ただから、いつも簡単な素麺料理を用意してくれた。「舅はたぶん夫がそばにいない私のことを同情しているから、私を可愛がってくれたかもしれない」と、CH は筆者に語った。家の掃除は家族が誰もいない時にするというルールも姑が作ったものだった。家族みんなに CH の勤勉な一面を見せたくないという姑の思いだったようだ。しかし、家族みんな掃除を全て CH に任せているのを知っている。なぜならば、仏教に対して、非常に献身的な姑は毎日仏堂に通っていて、家の掃除をする時間があるはずがないからである。

妊娠 6 カ月の時、夫は中国の上海に単身赴任をした。結局、夫はずっと中国に滞在したまま、中国人女性と不倫関係を持ち、めったに家に帰って来なかった。CH は最初夫の不倫を知らなくて、夫はただ仕事で忙しくて、なかなか台湾に帰れないのだと信じていた。しかし、舅姑はすでに夫の不倫を知っていて、彼女は舅の話の中で、不意に夫の不倫を知ることになった。しかし CH は身分証明書を取得するまでは、夫の不倫を我慢して、離婚の話を控えていた。

結婚して 3 年目、CH は台湾の身分証明書を取得した。ベトナムの出生証明書では、華僑出身である「華族」、ベトナム人である「京族」などが明記されている。華僑出身の CH はこのベトナムの出生証明書を持って、中華民国僑務委員会に行って、華僑証明書を発行してもらった。当時の法令では、華僑証明書を持っている人間は元の国籍を放棄せず、すぐ中華民国籍を取得することができると定められていた。そのため、CH は現在のアジア花嫁と比べて、早めに台湾の身分証明書を入手した。

④ 離婚

2002 年、CH は台湾の身分証明書をもらうと、それまで中国に滞在していた夫に離婚の話を切り出した。離婚する前に、「もしあなたの夫が慰謝料を払えないなら、せめて一人息子の生活費ぐらいは払うべきだ。月 5000 台湾ドルを提示して」と同僚の台湾人女性が CH にアドバイスした。CH は「私達が結婚してから三年間、あなたはずっと中国にいて、一度も息子の面倒を見たことがないから、息子の親権を放棄しますか。慰謝料を払わないなら、せめて息子の生活費を払うべきでしょう」と夫に語った。すると、「あなたが親権をほしいなら、私は慰謝料も生活費も一銭も払わない。あなたが子供をほしいなら、自力で子供を育てるべきだ」と夫は返答した。一人息子を宝物のように

大切にしている CH が絶対に親権を放棄しないことをよく知っているから、夫は不倫という過ちをしても、慰謝料や子供の教育費の負担という法律上の責任は全く心配していなかった。

伝統的な風習に拘らない姑は「代々血統を繋ぐ」（傳宗接代）ということにも執着していなかったため、孫の親権について、全く口を出していなかった。そもそも、孫を望んでいる普通の姑と違って、CH の姑は子供があまり好きではないようだ。CH が高雄に嫁いでまもなくのころ、姑は「子供を産むならいいけど、私は仏堂の手伝いで忙しいから、赤ちゃんの面倒の手伝いができない」と彼女に話した。また姑は「私が亡くなったら、火葬して、遺骨を海に捨てていい。お墓なんかいらない」といつも子供に話していた。舅は息子が長年、嫁を高雄の家に放置したままのこと、台湾生活に馴染むために、一人でがんばってきた CH のことを全部分かった上で、孫のことを可愛がっていた。彼も孫の親権を諦めた。何よりも、自分の妻には逆らうことができなかったという。

離婚当日の朝、夫は CH を高雄市中正路の法律事務所に連れて行った。夫は CH が台湾語を聞き取れないと思って、法律事務所の人に「俺は『ベトナム仔』¹⁰⁴と離婚するから、彼女に『こうした書類は完全に問題がないから、サインするだけで手続きが完了する』と説明しなさい」と台湾語で話していた。法律事務所の人金儲けのために、離婚手続きや親権の帰属に関する書類の説明は一切せず、ひたすら問題ないと強調し、早くサインしなさいと CH に催促した。終始、夫と法律事務所の人との台湾語の会話を理解していた CH は非常に憤りを感じていたが、一人息子のために、全て我慢した。

⑤ 母子家庭の生活

出産を終えた後、CH は一刻も早く経済的な独立を願っていたから、新聞の求人広告を見て、外国人労働者や家事労働者を仲介する人材派遣会社に応募した。しかし3カ月も経たずに、会社は経営不振で倒産した。当時、外国籍労働者や家事労働者を仲介する市場が拡大し、前の会社で知り合った台湾人の上司は次に CH に通訳の仕事を紹介した。その人の紹介で今の会社に入った。この会社に入ってもう10年以上が経った。社長は CH のまじめな仕事ぶりに感心し、境遇を同情し、よく彼女の面倒を見た。離婚当日、社長はすぐ部下を呼んで、CH の引越しを手伝ってくれた。さらに、CH と息子を会社が持っているアパートの一室に入居させた。その結果、賃貸マンションなどとは違い、大きな出費が浮いた。その後、CH の通訳能力は業界で次第に評価され、同業のヘッドハンティングの話が何回もあった。しかし、彼女は社長への恩返しのために、全部断った。

¹⁰⁴台湾語では、人を軽蔑したとき、「仔」づけで使われている。ベトナム人のことを「ベトナム仔」と呼んで軽蔑の意味が含まれている。

CH の今までの生活は家と会社との往復をするだけで、外の生活をあまり知らなかった。経済的に非常に不安を感じていた彼女は、会社の仕事以外、「台湾式披露宴」（辦桌）の配膳のアルバイトもしていた。土曜、日曜日は高雄各地の「台湾式披露宴」の配膳のアルバイトをしていた。配膳の仕事の時、息子の面倒を見てくれる親戚や友達がいなくて、仕方なくいつも息子を仕事現場に連れて行った。当時は、よく道端に置かれていた大きなダンボールに息子を入れていたと CH が筆者に語った。一方、離婚の話が万が一ベトナムにいる家族にばれたら、親にどれだけ大きな迷惑をかけるかと毎日心配していた CH は、精神面も不安定で周りの人々とよく喧嘩したりしていた。

このストレスを発散する場所がなくて、よく一人息子にやつ当たりしていた。園児だった息子が小さなミスをしただけで、CH はすぐ怒って、息子を叩いた。当時の自分を思い出して、「私はうつ病だったかもしれない。些細なことで怒ったり、暴れたりしていたから、息子に本当に申し訳ない。あなたは今の私と知り合って、本当に良かったと思う。昔の私と知り合ったら、絶対私に声をかけたくないだろう」と筆者に語った。

離婚直後、夫の家族との連絡が途切れがちになったが、ある時、園児だった息子が病気で入院した時、病院のスタッフが誤って昔 CH が出産した時の連絡先を見て、夫の家族に連絡してしまった。これをきっかけとして、夫の家族と再び連絡を取り合うようになった。年に二、三回、CH は息子を夫の家に連れて行って、舅や姑に会わせている。しかし、CH は姑との葛藤がまだ和解していないため、夫の家に入らなかった。舅はいつも年玉や小遣いを息子に渡している。近年舅は病気で、経済的な余裕がなくなり、息子への小遣いも減少した。

⑥ 子育てと教育

一人の息子は小学校のころ、中学校の生徒にいじめられたことがあった。これをきっかけとして、CH は息子をテコンドーの稽古に行かせはじめた。「あなたのおかあさんはベトナムから来た」とクラスメイトにからかわれたり、いじめられたりしたことがあった。しかし、息子がテコンドーができるのを知っているから、クラスメイトは息子に手を出したりはしなかった。息子も次第に学校生活に馴染んできて、仲間ができた。最近は休日よく友達と一緒にバスケットボールをしている。

息子は母親がベトナム出身であることにコンプレックスを持っている。しかし母親を悲しませないように、CH の前では絶対にこの面を表に出さない。息子は母親が一人で自分を育ててきたことをよく知っているから、ほしい玩具があったとしても、決して母親にねだったりしなかった。また塾帰りの晩飯代に 100 台湾ドル（260 円）を息子に渡しても、息子はよくコンビニで一個 15 台湾ド

ル（39 円）のおでんを二つ買って、多めの出汁をいれてもらい空腹をしのいだ。そして、残りのお金をまた CH に返却した。息子は洋服を買いに連れて行っても、「お母さん、節約しなさい。私は服がいない」と息子はいつも CH に負担をかけないように気をつかった。

筆者が初めて CH の家を訪ねた時、息子はちょうどバスケットボールをして、友達と遊んでから帰ってきたところだった。息子は一見普通の小学校六年生の台湾人児童と変わらず、中国語で初対面の私に礼儀正しく挨拶した。その後、聞き取り調査の件で、CH の家に何度も電話をかけたことがあるが、CH が留守の時、電話に出た息子は「どちらさまでしょうか。母はまだ帰っていません。帰宅したら、すぐ用件を伝えます」と丁寧に対応してくれた。

先日 CH は息子を連れて、中学校の新入生の説明会に行ってきた。その後、彼女は自分の facebook で「息子を中学校の新入生の説明会に連れて行きました。何とも言えない気持ちで、息子は本当に成長した、うれしいと感じていながら、心配もある。K 君、がんばってください」というメッセージを残していた。聞き取り調査では、「今まで、一人息子のために、どんなに辛い事があっても、全部乗り切れた。もしこの子がいなかったら、今日の私はいない。息子に不自由なく生活をさせたために、今まで努力してきた」と CH は何度も強調していた。

⑦ 母国との繋がり

CH は中華民国の国籍を取得した何カ月後、かつて台湾に仕事をしに来たがっていた第二人の台湾ビザがやっと下りた。二人の弟は台湾のパスポートを持っているが、台湾に来るには、ビザが必要だ。「台湾に来てすでに 3 年目になったし、台湾の身分証明書を取得した私の影響で、第二人のビザはやっと下りたかもしれません」と彼女は語った。二人の弟とも中国語が流暢で、台北で大手の貿易会社で働いた。弟たちが取得したビザは半年に 1 回切り替えないといけないから、よく台湾とベトナムに行き来していた。当時、CH は台北と高雄の中間地である台中で二人の弟と会ったりしていた。また、離婚の話が弟に知られないように、わざわざ高雄以外のところで彼らと食事していた。それから 3、4 年後、二人の弟は次々とホーチミン市に戻り、ホーチミン市出身の華人と知り合って、結婚した。現在、上の弟はドンナ市に在住し、台湾との業務を扱っている貿易会社に勤めている。下の弟も台湾と関係のあるホーチミン市の貿易会社に勤め、両親、二人の姉、妻と大家族で生活している。CH はベトナムにいる家族に心配をさせたくなかったため、離婚後 7 年間は家族に離婚の話を伝えなかった。

⑧ 台湾人男性との交際

筆者が最初 CH の家に行った時、リビングルームに置かれている大型テレビと、インテリアも普通のアジア花嫁の家と比べて、かなり贅沢な感じを受けた。筆者は CH が通訳の仕事でいい給料をもらって、経済的に余裕があるのかと推測したが、話をよく聞いていくうちに、CH が現在、台湾人男性と付き合っていることが分かった。

2007 年、ある通訳の仕事現場で彼と知り合って、次第に交際を深めた。相手は離婚歴のある 40 代で大学卒の本省人公務員である。彼は CH が今まで大変な人生経験をして、めげずにがんばってきたことをよく知っているから、精神的にも経済的にも CH の支えになっている。今 CH が住んでいるマンションも交際相手がお金を出して買ったものである。交際相手は前妻との間にできた一人娘を母親に預かってもらっていて、普段は一人で生活をしている。彼は今、独身の生活を楽しんでいるように思えると、CH は言った。CH は彼の連れ子と仲良くできる自信が今はないので、しばらく再婚する予定がない。二人の子供が大人になって、親のことを理解できる時が来たら、再婚する予定という。

3. ベトナム籍 HA のライフヒストリー

図 16. HA の家族構成

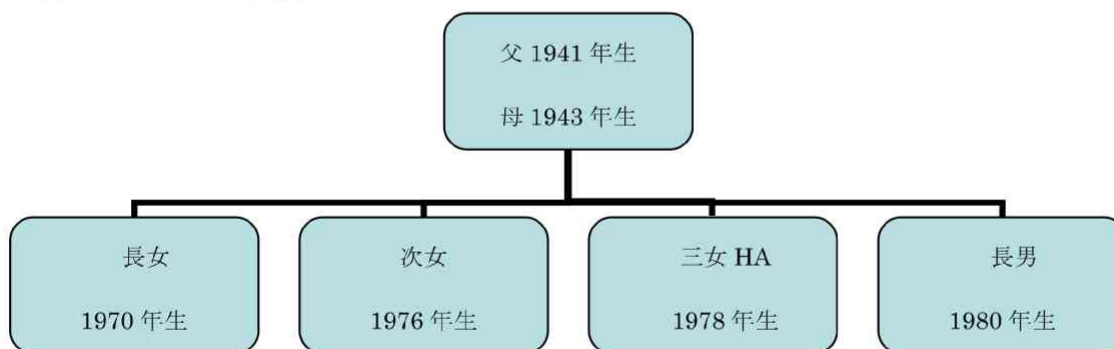


図 17. 夫の家族構成



① HA の生い立ちと国際結婚を選択した経緯

HA の夫は6年以上筆者の実家（高雄市三民区）の揚げ物屋に通う常連である。実家の店は映画館の近くにある。映画が始まる前に、観客はよく店のものを買って、映画館に持ち込んで食べながら、映画を見る。開業した2000年ごろ、客にはあまりアジア花嫁の姿が見かけられなかった。2006年ごろから、台湾人夫のバイクの後ろに乗って来る中国語籍花嫁の姿、また子供連れで来る、なまりのある中国語を喋るベトナム籍花嫁の姿が増えてきた。雇い主の息子たちの放課後のおやつを買いに来て、たどたどしい中国語で話すインドネシア籍家事労働者も見かけられるようになった。筆者がHAと始めて出会ったのは、2010年秋ごろ夫と映画を観に行く前、HAが実家の店で食べ物を選んでいるときだった。夫に何の野菜の揚げ物を食べるかと聞いたHAと夫は、普通に仲良い夫婦の感じで、会話していた。夫が店の常連なのでHAは快く筆者の聞き取り調査を引き受けてくれた。

HAの出身はベトナム北部クアンニン省ハロン市であった。HAの両親はともに学校で建築を教えている先生だった。両親は教職のかたわら、一般民家の建築、リフォームの仕事の依頼を受けて、4人兄弟を育ててきた。3人の娘とも親孝行をして、親に心配させないようにしてきた。末の弟は学校を卒業して、まじめに就職しなかった。そこで、HAの父は彼にパソコンの修理屋を開業させていた。しかし、1年も経たず、彼は店の商売道具を全部売ってしまい、家を出た。現在、両親は定年し、政府の年金をもらって、気楽な生活をしている。

HAは台湾に来る前に、9才年上の婚約者がいた。彼女は教員専門学校で学んでいるとき、学校の近くに開業している漢方の先生と知り合って、婚約した。彼女が卒業すると、すぐ結婚する予定だった。HAが卒業する前の夏休み、婚約者は帰省中のHAと会うために、片道3時間以上もかかる山道をオートバイで走っていたが、交通事故で死亡した。婚約者の家族らは息子の死をHAのせいにして、彼女のことを許せなくて、さんざん悪口を言いふらした。婚約者の墓は学校の近くにあるから、卒業した彼女は学校の近くの幼稚園で就職した。月給は90キロの米だった。あまりにも給料が安く、実家も遠いので、父親はこの仕事に反対し、実家の近くで仕事を探しなさいと何度も声をかけた。そして、彼女も婚約者の不慮の事故という悪夢から立ち直りたく、環境を変えたいと思って、親戚の紹介で海外移住労働者の仲介業者を通して、外国人家事労働者として台湾に来た。仲介業者に700ドルを支払った。台湾に来る前に、業者はHAに簡単な中国語を勉強させた。

台湾に来る最初の14ヶ月は無給で、15ヶ月目以降、初めて月8,000台湾ドル（23,000円）の給料をもらった。当時の仕事は80才の外省人女性の介護だった。高雄の三民区に来たとき、HAは中国語が全くできなかった。このやさしい女性が毎日中国語を教えたので、HAはわずか3カ月で中

国語をマスターした。当時 HA の夫はこの雇い主が住んでいるマンションで警備員として働いていた。これをきっかけとして、二人は知り合った。介護の仕事の契約期間を終えてから、HA はハロン市に戻り、台湾人男性を対象にしている国際結婚仲介業者の通訳の仕事をした。2006 年のとき、夫はベトナムへ HA に会いに来た。付き合いはこのとき始まって、お互いに好感度を増して、結婚に向けて着々と準備していた。そして、夫は自分が再婚だし、金銭的な余裕もないから、披露宴はベトナムだけでいいと HA に話し、2007 年夏ごろ式を挙げる予定が決まった。

2007 年 6 月、披露宴の 2 週間前に、夫は突然電話一本で結婚しないと HA に伝えた。突然の電話は HA にとって、人生最悪のものだった。親、家族、親族に対する面目がなくて、そして、今後自分は結婚できないし、自分の人生はどうなるかと不安が募った。その後、親戚がお見合い相手を紹介しても、お見合いの相手は HA のうわさを聞き、みんなすぐに断った。1 年後、夫は HA に電話して、もう一度やり直したいと伝えた。HA はまた結婚する直前に婚約破棄をした夫のことを許していなかった。しかし、近所の人々はみんな彼女が結婚できないと思い込んでいたし、厄病神に取りつかれている悪い女という噂は絶えず、親や親族につらい思いをさせてしまったので、彼女は意地を張って、国際結婚の道を選んで、台湾人の夫と結婚することを決意した。

披露宴はハロンだけで行われた。披露宴の費用は全部 HA のお金で、しかも、夫は婚資である「聘金」も婚約指輪も何も用意していなかった。台湾とベトナムで、結婚登録、入国審査などの手続きにかかわる諸費用もすべて HA が支払った。このように、悪い条件だったが、彼女が意地を張って、夫と結婚したのである。披露宴に出席する台湾人家族のリストを聞くと、夫はすぐ不機嫌な顔をした。夫と家族が仲悪くて、長年音信不通だったようだ。それ以来、HA は夫の家族の話を避けている。披露宴の当日、夫の家族は誰も出席していなかった。

② 結婚生活

台湾に来た初日、夫が借りているマンションの一室に入って、ごみの多さに驚いた。ベランダにも大量の食べ終わった弁当箱やペットボトルなど、ごみが散らかっていた。冷蔵庫にはかびが生えていた。まる 2 週間を費やして、やっと夫のマンションのごみを処分した。夫は国際電話ですでに、自分が住んでいるマンションの部屋はすごく汚いと言っていたが、まさかこんな酷い状態だと HA は思っていなかった。意地を張って、この国際結婚の道を選択したことに対して、初めて不安を感じた。

結婚する前には、全く予想できなかったことが次々と発生した。結婚してまもなく、夫は失業し

た。しかも、その後まじめに仕事を探していなかった。彼はカードローンがあり、仕事をして、収入の一部は地方裁判所に天引きされるという。その間、夫は HA が清掃会社で得た収入で生計を立てていた。彼は「台湾の家庭では、妻の給料は全部夫に渡すものだ」と言った。台湾の家庭で家事労働者として 2 年半の経験があったにもかかわらず、台湾の家庭事情や文化について詳しくない HA は夫に騙されてしまった。一般の台湾人女性なら、このような経験はありえない。そして、夫は HA のキャッシュカードを握って、使い放題でお金を使った。その代わりに、HA にわずか月 3,000 台湾ドル (9,000 円) のお小遣いしか渡さなかった。結婚して 1 年が経って、HA はもうこのような生活が我慢できず、夫に「今すぐキャッシュカードを返さないと、ベトナムに帰る」と言った。夫はやっとカードを返却して、改めて就職した。夫は就職しても、月 3000 台湾ドルの家計費しか出せない。月 6000 台湾ドルの家賃、水道代、電気代などの支出はすべて HA が負担した。

人から見ると、夫は HA のことをよく面倒見て、優しい人間だと思う。料理免許をもっている夫は料理人だったから、家の食事を作っていた。彼は HA と共に生活適応クラスに出たり、イベントに参加したりしていた。生活適応クラスの先生も夫のことを評価した。生活適応クラスのボランティアにとって、夫婦そろって授業やイベントに参加することは最も望まれることである。夫が台湾の社会にまだ馴染んでいない妻のことを大切にすることを最もよい証拠だとされる。HA が筆者の実家の店に来ていたとき、二人は普通の夫婦みたいな会話をしており、全く不仲の雰囲気が感じられなかった。このころ、二人は小さな喧嘩があっても、一緒に出かけていた。

③ 不倫の経緯

2011 年 2 月、筆者は毎週 HA が勤務している掃除会社が使っている高雄市公立病院の地下一階の事務室に彼女を訪ねた。今まで、ネックレスもイヤリングもしてなくて、質素な格好だった HA が急にブレスレットやネックレスをして、今までと違う雰囲気を感じた。詳しい話を聞いてみたら、なんと彼氏が出来ていた。しかも彼女より 21 才年上で、妻子持ちの相手だった。話をさかのぼると、2010 年秋以降、HA は働いていた清掃会社でチーフとして抜擢されたと同時に、高雄市の公立病院に駐在することになった。彼女の仕事はただ事務室で待機して、清掃のことを指示するだけになった。今まで清掃会社が使用していたスペースは広すぎて、病院側はその広いスペースを半分に分けて、改修する工事を始めた。これをきっかけとして、病院の電気、水道の担当者である Y と知り合った。最初 Y とは普通の友達として付き合っていたが、2011 年 1 月下旬以降急に男女の付き合いに進展した。Y が昼間病院での電気の仕事以外、帰宅してまた妻の店の手伝いをしなければなら

ないから、二人はいつも昼間病院にいたとき、同僚の目を盗んでYの車に乗って、外で食事したりした。

Yの妻も不倫していたが、Yとは離婚したくないという。離婚する話に触れると、Yの妻は自殺するという。以前Yがインドネシア籍の女性と浮気したとき、Yの妻は探偵事務所に300,000台湾ドル(900,000円)も注ぎ込んで、夫の不倫関係を調査して、最後は自殺騒動まで起こしたという。Yには二人の娘がいて、二人の娘とも大学を卒業して就職している。YはHAに「結婚はできないけど、あなたの一生の面倒を見て、ずっと一緒にいたい」と話した。YはHAを金銭的にも精神的にも支えているようだ。彼はHAに小遣いをあげるだけではなく、HAのベトナムの家族にも仕送りをしている。電気設備の担当者にもかかわらず、職歴が長い公務員であるために、Yは高い給料をもらっているようだ。「彼は本当にすごく優しい人、いつも私のことを思い、考えてくれた。彼のそばにいと、すごく心強い」とHAは言った。

④ 結婚生活が破綻した経緯

HAが夫に対して、愛情をなくしたきっかけは夫の暴力だった。一回目のとき、夫はHAに涙を流しながら、土下座をして、今後HAに暴力を振るわない、毎日1人でお風呂に入る、乱暴な話し振りを止めるなどという内容の始末書を書いた。2度目のDVを受けたとき、HAは夫に殺されそうな恐怖感に襲われた。以前、生活適応クラスの中で、DVを受けたときの対応を聞き、また会社の仲良く付き合っていた台湾人女性から教わったこともあるので、HAは翌日すぐ病院に駆け込んで、怪我の診断を受け、診断書をもらった。それをもって、警察にDVを受けたことを通報した。その日の夜HAは夫に次の話をした。「今日もう病院に行って、診断書をもらい、警察に通報した。もし、あなたがもう一度手をあげると、私は保護命令を申し込むことができると、警察の人が言った」。それ以来、夫はHAに暴力を振るったことがないが、口喧嘩で、何度も怒鳴ったことはある。しかも、夫婦の関係は完全に崩壊して、口を一切聞かず赤の他人のようになってしまった。

2011年3月の始めに、HAは筆者に妊娠しているかもしれないという不安を打ち明けた。妊娠を聞いた途端、「まさか夫の子供ではないよね」と筆者が聞いた。HAはありえないと言った。2度目のDV事件以来、夫婦関係はもう完全に崩壊していて、自分の子供ではないと夫は承知するはずだ。万が一、体面を重んじる夫が妊娠のことを知ったら、間違いなくHAに離婚を求める。台湾の身分証明書をまだ取得していないHAは、離婚されると強制帰国されてしまう。「Yはどうして奥様とは離婚できないのか。あなたと結婚すれば」と筆者はHAに話をした。彼女は無理だという。「子供を

中絶するか」と筆者が尋ねた。すると、彼女は「自分が妊娠しにくい体質だし、占い先生に私の人生には子供が一人と言われたこともあるし、万が一本当に子供ができたら、子供をおろすわけがない。もしかすると、唯一の子供かもしれない。なによりも、Yもこの子供の出生を待ち望んでいる」と語った。

話しの流れで、彼女はベトナムに帰って、出産するという最悪な状態も考えていたが、Yは身近に彼女の面倒を見ることができなくなるので反対しているという。「今悩んでもしょうがない。とりあえず、検診に行って、結果が出てからまた先のことを考えましょう」と筆者が言った。このとき、彼女は夫との同居生活でストレスが募る一方で、別居しようと考えていた。

数日後、妊娠したという結果が出て、HAと不倫相手二人とも非常にうれしかった。のちに、胎児が男という検査の結果が出て、Yはさらなる大きな喜びを感じた。自分の人生でやっと息子を抱くことができるという念願がかなったようだ。どうやって夫に知られないようにするか、夫が知った場合の対応などを真剣に考えていた。二人は夫の借金の返済と彼女の身分証明書の取得を条件にして、離婚と別居協議書を考えている（付録1参照）。

協議書を夫に渡す前に、たまたま夫は一枚の紙を彼女の前に押し出して、サインしろと言った。内容は「私は台湾の身分証明書を取るために、台湾に来た。夫が私と結婚するために、友人に借りた15万元を私は返済する。もし返済しない場合、高雄市地方裁判所の処分を受ける」などと書かれていた。この手書きの協議書の文面はすべてHAに不利なものばかりで、しかも誤字だらけだった。二人はこの協議書のことで再び大喧嘩をしたあげくに、中国語を読めないから、サインはできないとHAは強く断った。夫は怒って、その協議書を破ってごみ箱に捨てた。HAは夫が寝ている間に、その協議書の切れ端を全部拾って、仕事場で元のようにした。夫が用意した協議書を見たYはまず、友人に借金のことやその金額を確認すべきだと彼女にアドバイスをした。その後、夫の友人に借金を確認したHAは協議書を夫に出し、立会人付きで、二人はこの協議書にサインした。

結局、不倫相手Yは妻と離婚する見込みがなく、HAとの再婚は困難である。そのため、HAは夫が国籍取得に協力してくれることを条件にし、夫の借金を返済することになった。また、国籍取得後、夫との円満離婚も借金肩代わりの条件の一つである。もちろん、不倫相手であるYはHAに資金援助をしている。

⑤ 母国との繋がり

妊娠したHAは新生児の面倒や出産後の「坐月子」のため、母親を呼び寄せする際、ビザの申請

理由書を書けなかった。夫との関係はもう離婚する寸前で、夫は協力してくれなかった。HA は台湾人の友人に頼んで理由書を書いてもらった。もう離婚寸前の夫はビザ申請に協力してくれなかった。HA は台湾人の友人に頼んで理由書を書いてもらった。

2011 年 11 月末、HA が無事に息子を出産した。「坐月子」の期間に、新生児の面倒や家事の手伝いすべて母親に任せたが、ただベトナム式の「坐月子」料理を用意できなかった。中国語を喋られない母親が一人で市場に行って、食材を買ってくるができなかった。交際相手の Y は姉に頼んで、毎日「麻油鶏」、薬膳料理などを作って、HA のところに届けに行ってもらった。普通のベトナム籍花嫁が苦手な「麻油鶏」や薬膳料理を好む HA は Y の姉の手料理を絶賛した。息子に会うため、Y は妻が雇う探偵事務所の人に発覚されないように、よく宅配便のスタッフに変装し、薬膳料理を届けに来たと HA は語った。

母親のビザが切れた以降、息子を保育所に託し、HA は清掃会社の仕事をした。その後、Y の妻は夫の浮気の再犯を防ぐため、Y の金銭を厳重に管理した。Y の HA への資金援助が一時期、途切れた。HA は協議書で合意した夫の借金返済という重荷を背負い、経済的な余裕がなく、息子をハロン市の両親に託した。HA は朝 7 時から夜 9 時まで、2 つの清掃員の仕事をし、早めに息子を台湾に迎えるように頑張っている。休みは日曜日の朝だけである。2013 年の 7 月の終わりに、彼女は 4 年をかけて、念願の中華民国の国籍の取得という夢がやっと叶うことになった。また、離婚後の経済的な問題に関して、交際相手 Y は HA 親子に経済的な援助をするという。清掃員の仕事を辞め、HA に小さな麺店を始めさせ、息子の面倒もできると Y は言った。そもそも、結婚生活の 4 年間、HA は常に夫より多くの家計費を支払っている。HA は交際相手 Y が妻と離婚する見込みがないので、将来は経済的に安定している他の台湾人男性との再婚を考えている。

4. 結婚が破綻したケースのまとめ

3 人は結婚生活が破綻したため、彼女らがホスト社会で遭遇した困難は普通のアジア花嫁よりも多く、複雑である。ここでは、一般のアジア花嫁が出遭う困難をまとめるだけではなく、3 人のそれぞれの結婚生活が破綻するまでのプロセスに注目したい。そして、離婚を決意した際、ホスト社会での在留権、子供の親権などをはじめとする問題に直面し、それを克服するために、それぞれが取った生存戦略について議論する。最後は、結婚生活が破綻した後、母子家庭になった 3 人のアジア花嫁（うち一人は家庭内別居状況）がホスト社会でどのような生存戦略を使って、自立の道をたどろうとしたのかを明らかにしたい。

① 結婚が破綻するまでのプロセス

a. 言語の壁

国際結婚において、多くのアジア花嫁が最初最も悩んだことは言語の壁である。しかし、ここで取り上げる3人は一般のアジア花嫁と違って、結婚生活の当初、すでに中国語の会話能力を備えて、台湾人夫やその家族との意思疎通が順調であった。ただ、言葉の壁がないゆえに、周りの台湾人がアジア花嫁に対する非友好的な発言も同時に彼女らの心を傷つけた。さらに、言語能力は単なる会話能力だけでなく、読み書きも含んでいる。3人の中で、唯一中国語の書き・読みができなかったベトナム籍非華人のHAは外国人介護労働者として高雄の外省人を介護した間に、中国語の日常会話能力をマスターしたので、結婚後、夫とのコミュニケーションは問題がなかった。しかし、夫のDV問題で夫婦関係が不仲になった以降、母親を呼び寄せるための書類の記入を初めとする中国語の読み書き能力が必要である場合、すべて台湾人友人と交際相手に頼るしかなかった。HAはホスト社会で完全に自立するため、仕事の休憩時間を利用し、中国語の読み書きを勉強している。

中国籍WAは地元の台湾人より発音がきれいな中国語を喋っているので、会話能力はもちろん問題ない。ただ中国で通用している簡体字を学習してきたWAは、繁体字が通用している台湾社会に來た当初、すこし困惑していたが、繁体字で書かれた物を見ながら、意味を推測し、次第に繁体字を読めるようになった。文字が全く違う東南アジア出身のアジア花嫁と比較すれば、中国籍WAが繁体字をマスターすること自体はそれほど苦にはならなかった。

台湾に来る前、すでに中国語の読み書きをマスターしたベトナム籍華僑のCHは言語による支障が殆どなかったといえよう。強いて言えば、台湾語という壁に直面した。台湾語が聞き取れないベトナム籍花嫁の前で、台湾語で彼女らの悪口を言った台湾人家族が多い。CHの夫一家まさにこのような事例である。結婚した当初、台湾語が聞き取れなかったCHの前で、姑と義姉はよく台湾語で彼女の悪口を言う。また、離婚手続きをする際、夫は法律事務所のスタッフと台湾語で彼女に対する蔑視的な発言をした。CHは最初台湾語を全く聞き取れなかったが、宴席の派遣アルバイトの現場と外国人労働者の仲介会社の職場経験を積んでいくうちに、台湾語も習得した。

b. 家族内の人間関係

アジア花嫁を外国人介護・家事労働者扱いする台湾人家族が多い。とくに、仲介業者の紹介を通じた国際結婚は婚前では恋愛感情が含まれていないため、常に「売買婚」という汚名が着せられる。この3人とも婚前の交際があり、恋愛結婚と言うこともできる。しかし、アジア花嫁の出身国・文化に対する先入観や偏見により、たとえ恋愛結婚のケースにもかかわらず、家事労働者同様の扱い

を受けるアジア花嫁もいる。ベトナム籍 CH はまさにこのような事例であった。結婚してわずか7カ月後、夫の上海単身赴任の長期化で、夫が不在の台湾人家族との同居生活が始まった。終始 CH に対して偏見を抱いている姑と義姉は彼女を家事労働者と見なし、彼女の境遇を同情した舅が見えない所で、CH をいじめた。第4章で紹介する、姑と義姉から暴言を浴びせられたベトナム籍花嫁が登場する演劇の一部の内容は、彼女自身の経験を元に作成したものである。当時 CH に対して、温かい手を差し伸べたのは舅一人だった。離婚後、CH はやっと大家族との同居による圧迫感から脱出することができた。

ベトナム籍 HA と中国籍 WA は二人とも結婚当初から核家族で、嫁姑問題をはじめとする家族内の人間関係に関する揉め事を回避することができた。そもそも、中国籍 WA は嫁姑問題を避けるために、舅姑と同居しないという結婚条件を夫に申し込んだ。また、夫以外の台湾人家族はみんな WA のことにやさしく接していて、離婚後もよい関係を保っている。一方、ベトナム籍 HA の夫は何十年も父親との連絡がないし、兄弟もいない。二人は大家族と同居による複雑な人間関係の揉め事を避けることができたが、国際結婚における最も深刻な問題である夫の DV 問題に出遭った。二人が離婚を決意した一因も夫の DV 問題であるため、のちに夫の DV 問題をまとめて議論する。

c. 妊娠・出産・子育て

ホスト社会の生活にまだ完全に慣れていない状況で、早期妊娠したアジア花嫁が多大なストレスと困難に出遭う事例がよくあり、ベトナム籍 CH と中国籍 WA はまさにこのような事例である。さらに、二人とも夫の事情で、妊娠時期に普通のアジア花嫁が出遭わない困難である夫の不在と夫の不倫に直面した。国際結婚を選択し、憧れの海外生活の始まりだと思いきや、まさか家事労働者のように見なされた CH は心身とも疲労した時期に妊娠してしまった。さらに、妊娠中期のとき、唯一頼りにしていた夫は単身赴任で、上海に行ったきりだった。出産前、姑がすでに、自分が通っている仏堂の事務があり、新生児の世話などをしないと CH に明言し、義姉も赤ちゃんが嫌だと語った。CH の境遇を同情した舅がいくら彼女のことを助けようとしても、やはり男性では、赤ちゃんの面倒などは不得意だった。母国の家族に心配させない理由もあり、また大家族と同居した背景もあり、CH は HA のように、母親を呼び寄せ、新生児の世話を母親に任せることができなかった。そのため、「坐月子」期間中、CH は一人で新生児の世話をせざるを得なく、体の休養もできなかった。また、夫の長期的不在や子供嫌いの姑・義姉と同居しながら、CH はほぼ一人で子育てをしてきたとも言える。

WA の場合は広州で起業した夫が高雄に留守の日が多いため、母親は中国籍 WA を長沙の実家に帰

らせた。実家で気ままな妊娠生活を過ごしていた時、夫の不倫を知り、すぐ長沙から広州に移動したが、子供の国籍のため、2カ月後、すぐ高雄に戻り、臨月を待たないといけなかった。出産後、高雄で親族一人もいないWAのため、舅姑はWAを自宅に呼び、「坐月子」期間、新生児の面倒や薬膳料理を用意した。一方、夫は広州から高雄に戻っても、仕事の応酬を混じり、女性問題で夜遅くまで外でお酒を飲んでいて、出産後、娘に対するしつけや教育の方針の差異で、よく夫婦喧嘩した。アジア花嫁と結婚した男性は育児への参加度が低く、子育ての責任を妻一人に課す傾向がある。WAの夫はまさにその典型的な男性であった。

妊娠・出産・「坐月子」という段階で、夫の不在に直面したCHと夫の不倫に出遭ったWAと比較すると、ベトナム籍HAは相対的に恵まれていた。妊娠初期のHAは夫の言葉の暴力や自分自身の不倫が発覚するという懸念から多大な精神的なストレスを感じたが、毎回の胎児の定期検査まで付き添ってくれた不倫相手Yの支えがあり、心強かった。出産後、ベトナム式「坐月子」料理を用意できなかった以外、新生児の世話や家事の手伝いをすべてベトナムから呼び寄せた母親に任せた。そのかわり、不倫が暴露しないように、変装したYは毎日姉に作ってもらった台湾式「坐月子」料理をHAのところに送った。普通のベトナム籍花嫁が苦手な台湾式「坐月子」料理を好むHAは母親の付添とYの支えで、心身ともに休養できた。母親が帰国後、HAは息子を保育所に託し、清掃会社の仕事に復帰した。その後、Yの資金援助が一時期なかったため、HAは夫の借金返済という重荷を背負い、経済的な余裕がなくなり、息子をベトナムの両親に託した。

d. 離婚を決意した理由

多くの国際結婚が破綻した主な原因は夫をはじめとする台湾人家族のDV問題である。一般的に夫がDVを始める前に、夫婦喧嘩が続いている。夫婦喧嘩の理由は夫の不倫や、アジア花嫁の就職に対する夫の反対、妻の送金と生活費の不足などの金銭問題が多い。ここで取り上げたことはアジア花嫁の就職問題と妻の送金以外、すべて3人が離婚を決意した理由でもある。

3人の中で、最も早く離婚を決意したのはWAである。妊娠したWAは夫の不倫を知った時点で、すでに夫と離婚しようと思っていたが、胎児が大きすぎて、中絶手術はできなかった。夫の繰り返される不倫以外、二人は金銭観も価値観も全く違う。外で女遊びができる金銭があるのに、妻に生活費を渡さない夫に怒りを感じたWAは夫とよく喧嘩し、最初は物を投げあっただけで喧嘩は終わった。しかし、夫は次第に暴力を振るい始めた。離婚後の強制送還を恐れたWAは、一生子供と会えない心配から、警察へ通報に行けなかった。夫の不倫とDVで、WAは離婚を決意した。さらに、会社経営を失敗した夫が闇金、詐欺などを働く違法会社を営んでいることに気が付き、WAは夫

と離婚する決意をさらに固めた。

ベトナム籍 HA の夫は結婚早々失業し、「台湾社会では妻の収入をすべて夫に捧げるべきだ」と言い、堂々と HA の給料を全部自分のものにした。さらに、夫の借金問題が発覚した。夫の金銭問題や定職に就かないことによる夫婦喧嘩が重なるうちに、怒りを抑えきれなかった夫は、つい HA に暴力を振るった。夫に殺されそうな恐怖感に襲われた彼女は、生活適応クラスのスタッフと台湾人同僚の教で、病院に DV による傷害診断書をもらい、警察に通報した。この事件をきっかけとして、夫と離婚しようと思った。それ以来、夫は身体的な暴力を抑えたが、言葉の暴力は喧嘩のときに続き、夫婦関係は完全に崩壊した。離婚を決意したもう一つの背景は、不倫相手の子供を授かったことである。夫と離婚しようと思ったとき、彼女は会社が駐在した病院の電気担当責任者である Y との不倫が始まり、まもなく妊娠した。妊娠が確定した以降、HA と不倫相手は彼女の離婚をめぐる諸問題を考え始めた。

CH の結婚生活の破綻の最初のきっかけは夫の長期的単身赴任だったが、出産後、夫が赴任先の上海で中国人女性と不倫していることを知った時、初めて離婚しようと決めた。離婚の決意を固めたもう一つの背景は、一人息子に対する愛情がない夫一家の存在である。跡継ぎの男子の出産によるアジア花嫁は家庭内の地位の逆転や上昇はしばしば耳にする。CH の息子は兄弟がいない夫一家の跡継ぎで、重視されるべきだが、舅以外、子供嫌いの夫一家は CH の子育てを支援せず、息子に愛情がなかった。

② 離婚をめぐる生存戦略

結婚生活が破綻した際、彼女らが直面したのは夫の DV 以外、夫への DV 告訴、離婚裁判、子供の親権調停・裁判、離婚後の強制送還、台湾の在留権、離婚後の自立など、さまざまな問題であり、彼女らは段階に応じて、次々とそれらの問題に遭遇せざるを得ない。つまり、離婚を考えるアジア花嫁はホスト社会で生存するために、このような困難を克服しないといけない。

DV 告訴の段階に入り、夫と離婚すれば、国籍を取得していないアジア花嫁は離婚後の強制送還に遭い、今後一生子供に会えないかもしれない。国籍を取得したアジア花嫁は離婚後の強制送還を免れても、子供の親権と離婚後の自立問題に直面しないといけない。とくに、子供の親権に関して、裁判では経済的な条件と子供がホスト社会で育ったという背景を考慮し、親権を夫に委ねるという審判した事例が大多数である。ここでは、結婚生活が破綻した国際結婚の場合、中華民国の国籍の有無はアジア花嫁のホスト社会での在留権や子供の親権の取得に関して、極めて重要な役割を果

たしていることがわかる。また、偽装結婚を防ぐため、身分証明書の申し込みに関して、夫の同意書が必要と規定され、つまり、国籍の取得には、夫の協力が不可欠である。2007 年移民法の改正で、DV を受けたアジア花嫁は離婚後の強制送還がなくなり、例外的に居住の許可が可能になった。子供の親権、ホスト社会のよい経済的環境、子供の教育環境という背景があり、中華民国の国籍の取得を望むアジア花嫁がやはり大多数である。また、アジア花嫁の民族や国籍によって、中華民国の国籍を取得する年数も違ってくる。一般の外国人が国籍を取るには 4 年かかる。華僑はわずか 3 年で中華民国の国籍を取得できる。中国との複雑で特殊な政治事情により、中国籍配偶者は 8 年がかかる。ここで取り上げる 3 人はちょうどこの 3 タイプの事例である。

a. ベトナム籍 HA の事例

一般の外国人のベトナム籍 HA は妊娠段階で離婚すれば、台湾での滞在と息子の中華民国の国籍取得が困難になる。不倫相手 Y が HA と再婚すれば、HA の中華民国の国籍の取得、ホスト社会の在留問題と子供の国籍などを一気に解決できる。しかし、過去自分の不倫で何度も自殺未遂を起こした妻の自殺を恐れた Y は、HA と再婚できないのである。そのため、Y の資金援助をもらった HA は、夫が国籍取得に協力してくれることと国籍取得後の円満離婚を条件にし、夫の借金を肩代わりすることになった。2013 年の 7 月の終わりに、彼女は 4 年をかけて、念願の中華民国の国籍の取得という夢がやっと叶うことになる。

b. ベトナム籍 CH の事例

華僑のベトナム籍 CH は一般のアジア花嫁と違い、わずか 3 年で台湾の国籍を取得した。夫の不倫で結婚生活が破綻したため、本来、夫の不倫を告訴すれば、慰謝料と子供の教育費をもらえる可能性が高いが、しかし、不倫告訴をするための前提は国籍取得である。当時まだ国籍を取得していない CH は、離婚後の強制送還を恐れ、ずっと舅姑、義理の姉との同居生活をせざるを得なかった。国籍を取得後、CH は息子の親権を取得するため、夫が提示した慰謝料、生活費、教育費なしの離婚条件を引き受けざるを得なかった。親権裁判を起こしても、離婚直後住む場所すらない CH が勝訴する可能性が零ということをよく承知している夫は、このような離婚条件を申し出たのである。

c. 中国籍 WA の事例

中国人の WA は、一般のアジア花嫁より倍の年数をかけ、8 年で台湾の国籍を取得したのである。結婚生活における夫の不倫、DV 問題、生活費をはじめとする金銭問題に対して、WA は広州の従姉に夫の会社に入社させ、不倫を予防しようとしたり、DV による腫れた顔で、舅姑の家に現れ、夫の暴力のエスカレートを抑止したり、飲食店でアルバイトし生活費を稼いだり、それなりの予防と対

応をし、乗り越えようとした。しかし、国籍の取得年数という困難に直面した際、これは国の法律の問題で、WAは施す方法がなかった。国籍を取得したWAはすぐ夫に離婚の話をした。妻に振られて、面目がないと思っていた夫は、娘の親権を渡さないと話し、WAに離婚を放棄させようと思っていた。闇金経営の夫がいずれか逮捕され、その時、親権問題が自然に解決できると思うWAは夫と離婚した。その後、WAの思った通り、夫が刑務所に入る前、二人は地方裁判所に行き、親権変更に申し込んだ。

以上のように、ここで取り上げる3人はそれぞれの戦略を使って、強制送還を免れ、中華民国の国籍と子供の親権を取得することができ（HAは見込み）、何とか、ホスト社会で生き残ることができた。

③ 離婚後の自立

a. ホスト社会におけるネットワーク

海外移住労働者として台湾に来たベトナム籍HAは結婚して始めて生活適応クラスに参加し、同胞と出会った。しかし、出会った同胞はほぼ南部出身で、北部出身のHAとは、話があまり合わなかった。同郷のネットワークが少ないHAは、結婚後すぐに夫の紹介で清掃会社で働き、夫以外の台湾人のネットワークができた。悩みや相談すべきことがあったとき、常に台湾人同僚に頼りをしているHAは、何よりも不倫相手Yとの交際で、妊娠時期以来、精神面も物質面も支えられてきた。夫と離婚後の経済的な問題に関して、交際相手YはHA親子に経済的な援助を約束した。そもそも、結婚生活の4年間、HAはいつも夫より多くの生活費を支払ってきた。

CHは会社での仕事を始めた以降、夫の家族以外の台湾人のネットワークができた。CHは台湾人同僚と仲よく、会社で作ったネットワークを活用し、離婚による諸困難を乗り越えてきた。離婚直後、CHの境遇を同情した社長はCH親子に社員用のアパートに入居させた。大家族と同居していた圧迫感からやっと解放できたが、離婚による精神面への打撃、母子家庭で感じた経済面と子育ての不安が相まって、情緒不安定になったCHは、周りの人とよく喧嘩し、息子に八つ当たりした時期もあった。経済面の不安を減少させるため、同僚は台湾式露天宴会のアルバイトを彼女に紹介した。社長をはじめとする同僚の支援やベトナム姉妹会で知り合った同胞の励みもあり、CHは次第に離婚後の挫折から立ち上がった。その後、職場で知り合った離婚歴がある台湾人公務員との交際を深め、彼は経済面も精神面もCHを支え、CH親子に一般のアジア花嫁の母子家庭よりよい経済生活を提供している。辛い離婚経験を持つCHは同胞に同じような経験をさせないように、ベトナム同郷会の

理事として、積極的に同郷の支援活動をしている。

中国籍 WA が高雄に移住したとき、知り合った友達は近所の台湾人と近くに住んでいる中国籍花嫁だった。WA の遭遇を同情し近所の飲み物屋オーナー夫婦は彼女を雇い、親交を深めた。離婚後、ジューススタンド開店前の相談や技術伝授など、すべてこの夫婦の力を借りた。何よりも店のミネラルウォーターを配達した離婚経験がある外省人男性 U との交際以来、彼は人にあまり弱みを見せない WA を心身ともに支えてきた。とくに、刑務所を出た元夫が再び WA に対する暴力傷害事件を起こすという難関に直面したとき、交際相手 U の協力がないと、台湾の法律にうとい中国籍 WA 一人だけでは乗り越えられなかった。元夫の暴力による精神的なダメージも、交際相手の支えで少しずつ回復してきた。そのため、彼女のネットワークは地域社会の台湾人のほうが多い。

3 人のネットワークの利用を見て、やはりホスト社会で地域の台湾人のネットワークを活用することにより、3 人とも結婚生活の破綻を乗り越えてきた。とくに、交際相手の存在が大きいということがわかった。また交際相手の経済的地位により、生活レベルの安定性も違ってきた。

b. 就職事情

一般的に、アジア花嫁の言葉能力、学歴、ホスト社会のネットワークが限られていて、市場、屋台、飲食店のアルバイトなどをはじめとする給料が低い単純労働職にしか就けない。結婚生活が破綻した 3 人の中のベトナム籍 HA はまさにこのような事例であり、結婚して再び台湾に来て以来、ずっと清掃会社で働いている。これに対して、ベトナム籍 CH は一般のアジア花嫁と比較すると、例外的な存在である。華僑の彼女は台湾人並みの中国語能力を生かし、通訳と翻訳の仕事に就くことができた。長年働いた会社の社長の紹介で、2013 年 5 月以降、CH はベトナムの海外移住労働者仲介の大手会社の台湾支店の責任者になった。中国籍 WA は東南アジア出身のアジア花嫁と比べて、言語という壁が比較的に存在していないため、就職の範囲も自然に広がった。また彼女自身の努力もあった。台湾に来てから、周囲の様子を観察した WA は今後の就職のため、パソコン教室に通うことを優先し、ワードなどの基本スキルを身に付けた。そのため、彼女の思う通りに、会社に就職ができた。しかし、その後、娘の教育のために、残業が多い会社の仕事を辞め、営業時間は自分がコントロールできる自営業を開始した。

c. 母子家庭の子育て

ここで取り上げる 3 人の中で、ベトナム籍 HA の息子は小さいので、HA の事例を紹介しない。CH は息子が生まれてから、台湾人家族も母国のネットワークに頼らず、終始一人で息子を育てきたといえるが、離婚前は息子に父親が上海で働いていると、父親の不在を説明することができた。離婚

後、台湾人家族や父親との繋がりが突然中断し、幼稚園児だった息子は困惑した。学齢期になった息子は次第に、両親の離婚を理解するようになった。学校で母親がベトナム出身で、クラスメイトに揶揄されたことがあり、母親が一人で自分を育てきた苦労をよく知り、母親に心配させないように学校での不愉快な話を内緒にして、学業に対しても真面目に努力している。

これに対して、幼少期の娘を溺愛した元夫のせいで、中国籍 WA は娘の我がままな性格を厳しく指導しても、直せなかった。小学校 5 年生以来、娘の先生に対する失礼な発言と行為で、WA はよく先生に呼び出された。もちろん娘は学校で、母親が中国籍花嫁ということはいじめを受けたことがない。ただ、台湾社会では中国人に対する偏見が長年以來存在しているため、娘も中国に対して、好印象をもっていない。中国籍 WA は最も心配していることは、娘が元夫のように、非行の道を歩むことであるため、いつも娘を厳しく指導している。

以上のように、3 人のアジア花嫁の結婚生活が破綻するまでのプロセスと離婚をめぐる生存戦略および離婚後の自立をまとめた。この 3 人は結婚生活が破綻して、一般のアジア花嫁より多くの困難に遭遇してきたことが分かった。しかし、3 人は異なる生存戦略を使い、主体性を発揮し、強制送還を免れ、中華民国の国籍と子供の親権を取得することができ、何とかホスト社会で生き残ることができた。

第 4 節 まとめ

第 2 節と第 3 節で 7 人のアジア花嫁のライフヒストリーを紹介し、ホスト社会での生活を始めて以降の時間軸に沿って、彼女たちが直面したさまざまな問題を述べた。そして、いかにしてそれらの困難を克服してきたかという各々の生存戦略を議論してきた。本節では、時間軸ではなく、問題の重要性の観点から、彼女らが直面した困難とそれぞれが取った生存戦略を論じたい。

1. 夫との関係

国際結婚において、アジア花嫁の努力以外に最も重要な要素は台湾人夫の理解と協力である。これがないと、結婚生活が破綻に向かう。普通の台湾人同士の結婚の場合、結婚生活が破綻すれば、夫の不倫や DV 被害者の場合は夫を訴え、慰謝料、子供の養育費や親権を取得することができる。しかし、まだ中華民国の国籍を取得していないアジア花嫁の場合は、離婚後の本国への強制送還やホスト社会における在留権と子供の親権の放棄など、多くの困難に直面しなければならない。また、

偽装結婚の防止のために、国籍の取得には夫の同意書が必要である。つまり、中華民國の国籍を取得するまでは家庭内で夫は絶対的な権力を持ちやすい。

ベトナム籍 HA と中国籍 WA の夫が彼女らに暴力を振るった背景には、まさにこのような家庭内の力関係が原因として存在している。夫の金銭問題と DV が原因で結婚生活が破綻したベトナム籍 HA は、不倫相手の Y と再婚すれば、彼女と新生児の中華民國の国籍の取得、ホスト社会の在留問題などを一気に解決できるが、Y は妻の自殺を恐れ、離婚できない。HA が考えた方法は夫の借金を肩代わりすることにより、HA の国籍取得と円満離婚に関する夫の同意を得ることである。もちろん、彼女は現在 Y から資金援助をもらっている。結婚生活が破綻した事例のもう一人の中国籍 WA は中華民國の国籍を取得するまで、ひだすら夫の DV に耐えるのではなく、舅姑を自分の味方につけることによって、夫の暴力がエスカレートをすることを防ぐことができた。親権の取得に関して、闇金経営した夫が逮捕されると、夫が親権を手放すことを見越した WA は夫と真正面から衝突せず、離婚後も夫のすぐ近くに住み、地域のネットワークを利用し、夫の情報と娘の様子を把握することができた。その後、刑務所に収監された夫は自ら親権を手放すことになり、彼女は最も賢明な方法で子供の親権を取得した。夫の不倫で離婚したベトナム籍 CH は会社の上司と同僚の助けにより、離婚後の困難を克服してきた。

結婚生活が継続したケースでも、結婚当初から夫との関係が全員順調であるわけではなかった。結婚仲介業者の紹介により、売買婚という汚名を着せる即席結婚したカンボジア籍 K とベトナム籍 C の夫は、二人とも結婚当初は夫婦の間に信頼関係がなく、妻が大家族の使用人と見なされることを容認していた。しかし、長年献身的に父親の介護につとめ、母親の厳しい待遇に耐え、台湾社会に馴染もうと努力している K の姿に感心した夫は考えを変えた。夫は父の遺産放棄の代わりに大金を要求した自分の姉妹と、母の介護に対して無関心な兄弟を見て、次第に K のことを妻として認め、仲良く生活するようになった。一方、ベトナム籍 C の事例では、親孝行だった夫は常に舅姑の意見に従い、C の立場に立っていなかった。しかし、結婚後、両親の妻に対する差別待遇や娘の誕生を祖先に報告しないと、終始、妻と娘を大家族の一員として認めないことに怒りを感じ、夫は次第に C の立場に立つようになり、最後は家計の主導権まで C に握らせた。

2. 台湾人家族との関係

台湾人家族と同居することに伴う、複雑な人間関係による揉め事がしばしばアジア花嫁を悩ませた。また、中国・東南アジア諸国に対する偏見や婚資不均衡によるアジア花嫁の家庭内における地

位の低さは、さらに事態を悪化させた。自分の権利に敏感な中国籍 WA は舅姑と同居しないことを結婚条件として申し込み、嫁姑問題を回避することができた。逆に、同居していないゆえ、離婚後も元夫の家族とよい関係を保つことができた。タイ籍 M とインドネシア籍 G とベトナム籍 HA も同様に、結婚前、嫁姑問題が存在しないことを確認したうえで、国際結婚を選択したのである。

一方、台湾人家族との同居を避けることができなかったカンボジア籍 K とベトナム籍 C は夫との絆を徐々に築いていくうちに、家庭内における自分の地位を向上させることができた。C の事例では、台湾生活のストレスの元である嫁姑問題を解決するために、舅姑と接する場面の減少が解決策だと考え、夫の口を借り、大家族が各世帯で食事を済ませると提案した。さらに、日ごろから姑の不公平な態度を見かねた義兄夫婦の賛同があったからこそ、この生存戦略は成功した。カンボジア籍 K の場合も C と同じように、夫の信頼を得ることにより、今まで自分に押し付けられていた不公平な家事労働から少しずつ脱出することができた。

3. 子育てと教育

子供がいないカンボジア籍 K のようなアジア花嫁は少数である。早期妊娠した多数派のアジア花嫁は、ホスト社会での生活に慣れていない状況で妊娠・「坐月子」期間の食べ物の不適応や「坐月子」期間の台湾人家族の非協力、育児に対する不安、子供の学業指導など、段階によってさまざまな問題が生じてくる。ベトナム籍 CH はまさにこのような事例であり、大家族の家事労働者と見なされ、心身とも疲弊した時期に妊娠した。さらに、夫の長期間の不在や子供嫌いの姑・義姉と同居しながら、CH はほぼ一人で子育てをしてきたともいえる。一方で同じく早期妊娠したインドネシア籍 G と中国籍 WA、早期妊娠ではないタイ籍 M の 3 人は結婚当初、核家族で暮らし、大家族との同居による揉め事やストレスとは無縁な妊娠生活を過ごすことができた。また、出産・「坐月子」をめぐる困難に関して、ベトナム籍 HA のように、母国とのネットワークを利用し、ベトナムから母親を呼び寄せ、新生児の世話と家事を任せた。そして経済的な余裕がない時期は高雄の保育所に預けていた息子をベトナムの両親に託すという生存戦略で乗り越えた。

子育てをめぐる諸困難において、中国語能力が不足しているアジア花嫁にとって、子供の学業指導は最も悩まされる問題である。子供の学力は母親という役目の評価に直結し、台湾人夫が期待している「良妻賢母」を果たせば、家庭内の妻の地位の上昇にも繋がる。当時一定のレベルの中国語を身に着けたベトナム籍 C はあえて「中国語がわからない母に授業の話をたずねても無駄」、「学校にいる間に、しっかり勉強しなさい、分からないことがあればすぐに先生に聞く」という教育方針

で成績優秀な娘を育てあげた。工務店社長と結婚したインドネシア籍 G は教育熱心で、娘が通う幼稚園も事前に調査し、マンツーマンの塾に通わせ、良い成績を保つことができた。中国語能力が堪能なベトナム籍 CH も息子に進学塾に通わせ、息子の立身出世を望んでいる。ホスト社会で偏見と差別を受けた自分自身の経験もあり、母親がアジア花嫁であるがゆえに子供の行儀や成績が悪いと、ホスト社会の人々に言われたくないため、彼女らは子供の教育に非常に熱心である。一方、タイ籍 M と中国籍 WA のように、家計状況がよくないため、子供が非行の道にさえ走らなければ何でもよいと考えている事例もある。

4. 就職問題

言語能力は異文化に適応するための第一歩というだけではなく、ホスト社会で就く仕事にも大きく影響している。そもそも、夫の経済力が十分であれば、インドネシア籍 G やベトナム籍 C のように、専業主婦でいられるため就職する必要がない。アジア花嫁との結婚では、経済的地位が低い家庭がやはり多数を占め、さらに、結婚生活が破綻した場合には、アジア花嫁の就職問題が一層重要になる。一般のアジア花嫁は中国語の読み書きが不十分なので、市場、飲食店、屋台などで単純なアルバイトしかほぼできない。ベトナム籍 HA のように、中国語の読み書き能力が不十分であるため、ホスト社会に来て以降家事労働、清掃員という単純労働の職にしかつけない女性が多い。

これに対して、ベトナム籍 CH は一般のアジア花嫁と比較すると、例外的な存在である。華僑の彼女は台湾人並みの中国語能力を持ち、通訳と翻訳の仕事に就くことができた。さらに、以前の台湾人上司のネットワークを活用することにより、海外移住労働者を仲介するベトナム大手会社の台湾支店の責任者にまで出世した。一方、東南アジア出身のアジア花嫁と比較すると、中国の学歴は台湾ではまだ承認されていないにもかかわらず、中国籍 WA は言語という壁が比較的小さく、就職の範囲も自然に広がった。彼女自身の努力もあり、積極的にホスト社会の情報を収集し、台湾人のネットワークを利用し、コミュニティ大学のパソコン教室に通い、就職に必要な基本スキルを身につけ、就職することができた。

タイ籍 M・ベトナム籍 HA のような経済力が低い家庭やベトナム籍 CH・中国籍 WA のような母子家庭では、必ず就職という重大な問題に直面する。一般的に言って、タイ籍 M・ベトナム籍 HA のように、言葉の壁により、単純労働に従事するアジア花嫁が多い。ただし、ベトナム籍 CH・中国籍 WA のように、自身の努力とホスト社会のネットワークの活用により、社会的地位が高い仕事に就くことができた事例もある。

問題の重要性の観点から7人の事例を見たので、別の角度から国際結婚を見てみる。結婚継続と結婚破綻の事例を対比させると、両者の間に、①夫が妻のことを守ること、②家庭内地位における夫婦の力関係、③結婚前における台湾人夫と台湾社会への理解という点で違いが存在することが明らかになった。

結婚生活が順調の事例を見ると、4人の現在の共通点は①夫が妻のことを守ることである。最初は4人ともこのような状況ではなかったが、それぞれの努力により、現在の状況に至っている。これに対して、破綻事例のWAとCHは夫の長期的不倫、HAは夫の家計の不分担とDVで結婚生活が破綻した。②に関して、夫婦生活が円満ならば、次第に、家庭内地位における夫と妻の力関係が均衡しつつある。一方、破綻したケースにおける三人の夫とも、妻の中華民国の国籍の取得権利を握り、夫婦の地位の不均衡をもたらした。この力関係の不均衡は三人が中華民国の国籍を取得して初めて解消できた。③に関して、結婚継続事例のインドネシア籍Gは結婚前に、父親とともに台湾にきて、夫の生活状況、結婚後の生活環境、嫁姑問題の回避を確認したうえで結婚を決めた。タイ籍Mは結婚前に、台湾の工場で働き、職場と私生活における主なネットワークは台湾人で、台湾社会をある程度は理解していた。また、夫の生い立ちと生活環境を熟知してから結婚した。

これに対して、結婚破綻事例のベトナム籍HAはタイ籍Mと同様に外国人労働者として台湾に移住したにもかかわらず、仕事内容が在宅介護で外との接点が乏しくて、台湾社会に疎かった。夫との交際も夫が雇い主のマンションの警備員という関係で知り合った。結婚前に、マンションに勤務している夫の一面しか知らなかった。HAだけではなく、CHとWAも同様に、結婚前に一度も台湾に来たことがなかった。台湾生活および社会に対する理解の不足で、結婚後のギャップをもたらした。

7人に共通している点はホスト社会におけるネットワークの活用による困難の克服である。結婚生活が継続した事例におけるタイ籍Mとインドネシア籍は台湾人ネットワークを活用し、ホスト社会で直面した困難を解決した。カンボジア籍Kとベトナム籍Cは同胞のネットワークを重んじて、異国での支えを得ている。結婚破綻事例におけるネットワークの活用が一層重要な役割を果たすことが明らかになった。3人とも台湾人ネットワークとそれぞれ交際相手の活用により、就職、夫のDV、離婚をめぐるさまざまな困難を克服した。

第4章 アジア花嫁のネットワーク

前章では高雄市の7人のアジア花嫁のライフヒストリーを紹介し、アジア花嫁自身の言葉を通して、彼女たちがホスト社会でさまざまな困難に直面した際、いかなる生存戦略を使い、克服してきたかを明らかにした。本章ではアジア花嫁本人の視点から、ホスト社会における重要な生存戦略であるネットワークの展開の諸事例を分析する。具体的には、第1節ではアジア花嫁の情報交換の場を研究するために、エスニック料理店と青果卸売業者の事例を取り上げ、第2節では同胞同士のネットワークの展開を考察するために、ベトナム籍花嫁からなる団体の活動を取り上げ、第3節ではベトナム籍花嫁と台湾人との共生を促進するために作成されたベトナム籍花嫁を描いた演劇を見ていきたい。

第1節 アジア花嫁の情報交換の場

台湾各都市では、駅周辺を中心に、東南アジアから来た華人やアジア花嫁が経営に関わっているエスニック雑貨店やエスニックレストランが林立している。この他、専ら東南アジアに送金する事務を扱う外貨両外専門店などが次第にエスニック商圈を形成してきた。こうした商圈を歩くと、まるで異国の町を歩いているようで、地元の台湾人はめったにこない。このような商圈が常にアジア花嫁・海外移住労働者の情報交換の場となっている。また、各地の市場、夜市などに分散しているエスニック料理店も彼女らのネットワークを広げる最適な場である。基本的に、駅周辺を中心に展開したエスニック雑貨店やエスニックレストランが移住労働者を主な顧客として、経営者は華人が多数を占めている[黄惠麟 2011 : 118]。そして、エスニック・グループの消費空間だとされ、地元の台湾人はなかなか足を運ばない。これに対して、一般の地元の商店街に分散している「小吃店」¹⁰⁵や屋台はアジア花嫁と地元の台湾人を主な顧客として、経営者もアジア花嫁が大多数である。アジア花嫁が経営している「小吃店」は地元の商店街に溶け込んでいる。

高雄市も同様の傾向があり、高雄駅周辺を中心に、東南アジア雑貨店、「ベトナム小吃店」、「インドネシア小吃店」などからなるエスニック商圈が形成され、海外移住労働者の集まり場所で、治安が悪いというイメージがあり、地元の台湾人はなかなか足を運ばない。これに対して、高雄市の各市場・夜市に分散しているアジア花嫁が経営している「小吃店」は地元の商店街と市場に溶け込

¹⁰⁵ 「小吃」は手軽で比較的値段が安い大衆料理である。小吃店とは庶民料理を提供している店である。

んでいて、客層がエスニック・グループに限らず、地元の台湾人客も含まれている。

ホスト社会では、アジア花嫁と海外移住労働者の情報交換の場に対して、「移民区病理」(ghetto pathology) [邱淑雯 2007] という観点もある。「移民区病理」とは移民と移民の店が集中する地域を貧困と犯罪などの温床とみなす見方である。ゲットーは中世ヨーロッパ諸都市内でユダヤ人が強制的に住まされた居住地区である。現在はユダヤ人に限らず、文化、宗教、民族の違いによって、少数民族など特定の社会集団が住む地域がゲットーと呼ばれる。

これに対して、エスニック自営店を多機能的なネットワークの結節点 (network nodal points) で、移民と地元社会の両方に貢献できる発信地と考える観点もある [Light, I. and Bhachu, P 1993、田嶋 1998、邱淑雯 2007]。一般的に言って、駅周辺のエスニック商圈は海外移住労働者の消費空間で、治安が悪い異質な空間だという偏見を持っている台湾人が多く、まさに「移民区病理」というような概念が当てはまる。一方、各市場に分散している「小吃店」は地元の商店に溶け込んでいて、ネットワークの結節点という印象が強い。本節は、アジア花嫁の情報交換の場を研究すると同時に、邱が指摘した「移民区病理」とネットワークの結節点という視点も入れながら、分析していきたい。具体的には、三民区の市場にある「ベトナム小吃店」と青果卸売業者の店を例として、見ていきたい。

1. ネットワークの二つの事例

①市場にあるベトナム籍花嫁 S の「ベトナム小吃店」

ホーチミン市出身の華僑である S の店は高雄市三民区の下町の市場にある。目立たせるために、店の左側には万国旗が飾られており、アオザイの女性が描かれ、店の名前である「ベトナムのフォー」(越南河粉) が書かれた垂れ幕が飾られている。また、店の右側は「カラオケー曲 10 台湾ドル」(卡拉 OK¹⁰⁶一曲 10 元) という看板と、やや小さめな同様の「ベトナムのフォー」の垂れ幕が同列に飾られる。店の正面の調理台のガラスには「ベトナムのフォー」と大きな赤い字で書かれている。

S の夫は、2001 年、同じ市場の「愛玉ゼリー」(愛玉)¹⁰⁷売りの店主と市場の幼馴染 2 人、合計 4 人グループで一緒にベトナム見合いツアーに参加し、そこで知り合った S と結婚した。愛玉売りの店主によると、結婚ツアーの費用は一人当たり総額およそ 30 万台湾ドル (約 120 万円) だという。当時、その市場では、ベトナムとカンボジアへの見合いツアーが流行っていた。ベトナム人女性の

¹⁰⁶カラ OK とはカラオケの意味である。

¹⁰⁷ 愛玉とは台湾独特の植物で、クワ科イチジク属のつる性植物である。またその果実で作られるゼリーのデザートを指す名称でもある。

ほうが色白くて、おとなしいという仲介業者¹⁰⁸の勧めで、ベトナム・ツアーを選択したという。Sの舅はこの市場に2軒の家を持っている。一軒は自宅として、Sは舅姑、夫、義弟¹⁰⁹と一緒に生活していた。もう一軒は商売に使われていて、姑が経営していた昔ながらの「雑貨店」(百貨行)¹¹⁰だった。数年前、姑は店をやめて、店舗を美容室として賃貸していた。店舗の2階は単身の男性に貸している。近所の人の話では、息子が30万台湾ドル(約120万円)の費用をかけて結婚したSに対して、舅姑はやさしく接していて、家の近くにある小学校が開催している夜間の識字クラス(識字班)に通わせた。同じ市場では、アジア花嫁は情報交換の場である識字クラスで悪い同胞と交際することを懸念し、通わせない舅姑もいた¹¹¹。ただ、姑はSの金銭面に関して細かい。その背後には、家のお金や貴重品を全部母国に持ち帰って、台湾に戻って来ないというベトナム籍配偶者に関する否定的な新聞記事が頻繁に報道されていたからである。

結婚してまもなく、夫は平日、台北で仕事して、金曜日の夜に高雄に戻ってきて、日曜日の夜、再び台北に仕事に行くことになった。夫は平日家にいなく言葉の壁もあり、Sはよく識字班で知り合った同じ国の友達と一緒に外出していた。舅姑はこの状況を見て、外で悪いベトナム人の友達ができ、Sがどこかの男と駆け落ちしたら、大変なことになると心配していた。そこで、息子と相談し、Sを台北に呼び寄せた。台北に何か月か住んでいたが、ベトナム人の友達もいないし、夫は昼間仕事に行っているの、Sはなかなか台北の生活に慣れなかった。そして、Sは夫と話し合い、再び高雄に戻ってきた。

その後、Sは長女、長男を次々と出産し、育児で忙しい生活をしていた。長男が幼稚園に入ってから、Sは再び自分の時間に余裕ができてきた。そして以前のようにベトナム人女性の集まりに足を運ぶことが多くなった。そのとき、美容室をやっていた人が店をやめて、店舗は空きになった。そこで、姑はSに「『ベトナム小吃店』をやらないか」と勧めた。姑は外で知らないベトナム人女性と遊ぶぐらいなら、むしろ彼女に店をやらせて、自分の目の届く範囲で嫁の行動を見守りたいと考えたのである。ベトナム人の集まりを店にしてもよいと思った。

¹⁰⁸2章で取り上げた台湾とベトナム間の国際結婚数の増加の背景には、両国の間に形成された膨大な国際結婚仲介システムの存在があり、またベトナム人が従順で肌白いいという仲介業者の宣伝も関係している。

¹⁰⁹ 義弟は数年前結婚して家を出た。舅は2009年に病気で亡くなった。2012年の時点、Sは姑と小学校2年の長女と幼稚園年長組の長男とともに、この家に住んでいる。

¹¹⁰ 女性の下着、アクセサリ、日常生活用品、食品などを販売している雑貨の店である。

¹¹¹ Sの店の近くに住んでいるカンボジア籍Kの話によると、国際結婚でこの市場に来た同期の同胞は、二つのグループに分けられる。結婚生活が破綻し、水商売や不倫をしているグループと結婚生活が順調で、真面目で働いているグループである。カンボジアだけではなく、実際ベトナム籍花嫁にもいろいろある。ただ、台湾のマスメディアがアジア花嫁への報道は常同極端である。悪い報道に影響された舅姑はアジア花嫁に生活適応クラスへ通わせない。

Sは2009年「ベトナムのフォー」という店を始めた。姑はよく店の手伝いをしに来て、実家から食材を持ってきたり、店の留守番をしたりしている。しかし、調理の仕事はSしかできない。筆者が店に行った時、ちょうどSはいなかった。姑はSがもうすぐ帰ってくるから、ちょっと座って待っていてくださいと筆者に声をかけた。5分経っても、Sは帰って来なかった。そして、もう一人の常連の若いベトナム人女性がスクーターに乗って店に来た。姑はまた同じ言葉をかけて、Sはもうすぐ帰ると言った。結局三人は店の前に座って、Sのことを待っていた。待つ間に、筆者は「生春巻きと青いパパイヤサラダだけ買うから、お婆さんはできるよね」と姑に話しかけた。姑は「できるはずがない。料理は全部嫁一人で作っている」と答えた。「お嫁さんの店のスープの出汁はよく効いていて、おいしいから、いつも店に来ている」と筆者は姑に話した。「うちの料理のスープは豚骨で何時間も煮込んで、出汁を取っている。味の素なんかは入れていない」と姑は店のことを自慢している顔で喋った。

開店後まもなく、Sの店はベトナム人のネットワーク結節点になって、常にベトナム人のグループが店に出入りをしている。店は朝11時から営業して、午後3、4時ぐらいに当日仕入れの食材が完売すれば、主食などのメニューのサービスが終わる。昼間の客層は地元の台湾人やベトナム籍花嫁が多い。そして、夜6時以降、カラオケを利用するベトナム人客が集まってくると、店はエスニック・グループの空間に変身し、同胞同士の情報交換が活発になり、ベトナムの歌を歌いながら、郷愁を紛らわす憩いの場となっている。市場の元「豚肉売りの露店」（猪肉攤）の娘によると、その歌声をよく近所は耳にするが、ベトナム人の集まりはほとんど8時前に終わる。近隣からの苦情はあまり聞いたことがないという。一般の「ベトナム小吃店」は深夜まで営業し、カラオケによる騒音は近所の迷惑になる。Sは近所に迷惑をかけないように、早めに閉店する。

Sはこの市場に来て、もう10年が経っているにもかかわらず、周辺にある「台湾素食¹¹²売りの露店」（素食攤）や「肉圓¹¹³売りの露店」（肉圓攤）の台湾人オーナーたちとの付き合いは会釈程度にとどまっている。そのひとつの理由は、Sの姑が20年以上もこの市場で近所の人と顔を合わせても、挨拶をしない場合があるからである。また、もう一つの理由はこの店がこの市場で異質な存在だからである。その異質性は「ベトナム小吃店」の営業時間とエスニック性である。台湾の伝統市場は早朝6時、7時から始まって、午後1時ぐらいに終わる。Sの店の向かいにある「果物売りの露店」（水果攤）、隣の「肉圓売りの露店」などを始めとする全ての店が閉店しても、Sの店だけ営業してい

¹¹² 台湾素食とは台湾の菜食料理である。中国語の素食は菜食の意味であって、「質素な料理」ではない。素食料理は腹持ちを考量し、普通の料理より多めの油を入れ、味付けも濃目になっている。

¹¹³ 肉圓はタピオカで作られている弾力のある皮に、煮たひき肉と椎茸などの餡が入っている台湾の庶民料理である。

る。がらんとしている市場の中では、Sの店は非常に目立つことになる。エスニック性とはベトナム料理のことである。台湾人は東南アジアに対する偏見で、ベトナムの食べ物にも好感を抱いていなかった。この2つの大きな異質性にもかかわらず、「果物売りの露店」と女性服売りの露店を始めとする台湾人オーナーに聞くと、みんなSのことに対して悪いイメージを持っていないし、礼儀正しい人というコメントが出た。一方、Sの店の商売繁盛に嫉妬しているようで、Sの店に対して『ベトナム仔』が集まると、うるさい」と隣の「肉圓売りの露店」は文句を言ったことがある。Sは台湾人に対して距離を持っていて、プライベートのこと、ベトナムの実家のことをあまり喋らない。筆者の聞き取り調査に対しても、表面上は快く受けてくれたが、正直なことを話さなかったが、ただし、店の営業によい影響をもたらす話や彼女個人のことでないなら、親切に教えてくれた。

Sの店は台湾人客にも人気がある。その理由は店の食材が新鮮であり、彼女は生春巻きを作る前にも、必ず手を洗う。客からお金をもらって、再び手を洗って、次の調理作業に進む。そもそも東南アジアの料理が不衛生という偏見を持っている台湾人が多い。しかし、このSの店は衛生的で、ステンレスの調理台は常にきれいに拭かれている。筆者の意見では、この市場の中で最もきれいな店と言っても過言ではない。また、彼女は地元の台湾人顧客と東南アジア出身の顧客の好みを見極めて、料理の味付けを調整している。例えば、店の人気メニューの青いパパイヤサラダの味付けに関して、魚醤（ヌクナム）の強烈な匂いをあまり受けつけない台湾人客に対して、常に魚醤を少なめにしている。また、ベトナム同胞の心を掴むために、入手困難のベトナム製缶コーヒーなどの裏メニューを用意している。ベトナム風バケットサンドも最初は裏メニューとして提供していた。しかし、近年あるベトナム籍花嫁が夜市でベトナム風バケットサンドの屋台を出して、大変人気になった。これをきっかけとして、2012年にベトナム風バケットサンドを初めて店の壁に貼っているメニューに入れた。もちろん、Sは台湾人客も東南アジア人客に対しても、非常に礼儀正しく、愛想よく対応している。

開店して3年しか経っていないが、高雄市三民区のベトナム人ネットワークではSの店はかなり有名である。筆者は遠くに居住している「高雄市ベトナム姉妹同郷会」の会員と店でばったり会ったことがある。その時、筆者は「なんでこんな遠いところまで来たのか、どうしてこの店を知っているのか」と驚いて、彼女に声をかけた。すると、「私たちは以前からこの店に通っている。あなたこそどうしてここにいるのか」と聞かれた。「高雄市ベトナム姉妹同郷会」の会員だけではなく、店に行くたびに、常にSが同胞と親しげに会話を交わしている光景をよく見かける。また、スクーターに乗って、大量の注文品を取りに来ていたベトナム人男性移住労働者の姿を筆者は何度も見かけ

たことがある。Sの話によると、彼らが南梓加工区¹¹⁴の宿舍でパーティーをする場合、よくベトナム風バケットサンド、生春巻きを注文するという。南梓加工区がこの店に車から30分ほどの距離で、なぜ彼らがわざわざこのような遠い店を利用するのかと筆者は不思議に思い、「お店はすごく有名だなあ、南梓加工区で働く人までお店のことを知っているの」と語った。すると、Sは「彼らは（男性移住労働者の顧客）は初めて同胞の口コミを聞き、休日のとき、皆そろって来店した。それ以降、事前に注文して持ち帰る場合が多い」と語ってくれた。写真9に写っている同胞も南梓加工区で働いて、休日は必ず店に通っている常連の一人である。その日は彼女の休日で、青いパパイヤサラダを食べながら、Sとベトナム語で話していた。

高雄市に来て間もないベトナム籍花嫁を店に連れてきて、妻を同じ国の友達と知り合うチャンスを作った台湾人夫もいた。ベトナム人男性移住労働者の来店のきっかけや、台湾人夫の案内による来店した同胞が多いなどの情報は全て店の良い宣伝になるため、Sは筆者に詳しく語ってくれた。

実際に遠くに居住している高雄市ベトナム姉妹同郷会の前副会長や南梓区で働くベトナム人の海外移住労働者も常連であるため、Sの店は三民区以外でも有名で、高雄市におけるベトナム人ネットワークの結節点の一つと言っても過言ではない。ベトナム人同胞にとってSの店が提供しているものは、単なる故郷の味だけではなく、ホスト社会における生活に必要な情報交換を交換したり、互いに悩みを訴えたり、相談に乗ったりしている場所であり、Sの店はベトナム人同胞のネットワークの発信地になっている。

高雄に移住して10年以上のS自身も来て間もないベトナム籍花嫁・海外移住労働の同胞に、海外送金や地域の行政サービスを始めとするホスト社会の生活情報を提供している。彼女は直接的に問題を解決できないが、問題解決の方法や問題を解決してくれるところを同胞に教えたりしている。彼女は同胞に暖かく接していると同時に、常連の同胞もSのことに気を遣い、食事が終わったら、自主的に食器を流し台に持って行って、飲み終わったベトナム製缶コーヒーの空き缶をゴミ箱に捨てる。S自身もこの店を通して、同胞とのネットワークが形成されただけではなく、台湾人顧客の来店が増加し、台湾人に認められるようになって、自分自身に自信を持てるようになった。また、店の成功により、家庭内における自分の地位を獲得した。

② 高雄市果菜市场にある青果卸売業者のカンボジア籍花嫁Y

青果卸売業者のカンボジア籍Yの店はエスニック飲食店ではないが、三民区のカンボジア籍花嫁

¹¹⁴高雄南梓輸出加工区である。加工区には多くの外国人労働者が働いている。

の情報交換の場として、ネットワークの結節点という機能をよく発揮しているため、この事例を取り上げることにした。高雄市果菜市場は高雄市屈指の青果卸売市場で、ほぼ台湾人オーナーが経営する店舗である。市場の規模も大きく、店舗数も往来する人々も非常に多い。

1977 年生まれのカンボジア籍 Y は 1997 年に市場の果物卸売業者の夫と結婚した。当時 34 才の夫（1963 年生まれ）は果菜市場の仲間の誘いで、みんなと一緒にカンボジアに行って、仲介業者が用意した見合いツアーに参加した。夫と同行した仲間では結婚相手が華人で色白にこだわって、カンボジアの華人と結婚した人もいる。Y の夫は華人に拘らず、若くて明るい女性を希望して、20 才の「色が黒い」Y を選んだという。その背景は後に判明した。Y の夫は仕事で忙しくて、ともに仕事の分担をしてくれる結婚相手が理想だったという。

Y は高雄に来て、すぐ市場の商売の手伝いに呼ばれて、毎日市場と家の 2 カ所を往復する忙しい日々だった。もちろん中国語教室や生活適応クラスに通う時間もなかった。筆者がカンボジア籍 K（第 3 章参照）を通して、Y と知り合った当時（2009 年）、台湾に来てもう 13 年が経っても、未だに中国語を読めないことに対して、筆者は驚いている顔をした。すると、隣にいたカンボジア籍 K は「中国語を読めなくても大丈夫。お金の札を数えることができれば十分だ」¹¹⁵と笑いながら言った。中国語教室に通わなくても、毎日市場で働いているため、Y は台湾語も中国語もすぐ上達し、ただちに夫の有力な仕事パートナーになった。

この市場を通して、Y はカンボジア籍 K を始めとする多くの同胞と知り合った。店の商売が忙しくて、店で同胞とゆっくり会話を交わす時間が少ないが、彼女らはお互いの携帯電話番号を交換し、また市場以外の場所で話し合うパターンが多い。二人とも明るくて社交的な人間で、高雄に移住して間もない同胞の面倒をよく見る。K は初めて Y の店に来たとき、なまりがある中国語を話している Y の話を聴いて、すぐ Y も同じカンボジアから来たことが分かった。その時、積極的に Y に声をかけたという。そして、二人が知っている同胞をまた紹介し合ったりしている。今 Y の店で、開店前の下準備のアルバイトをしているカンボジア籍 C も K の親友の一人である。

市場の定休日のとき、Y はよく高雄市近郊にある広い家で、同胞を何人も呼んで、バーベキューをやったり、カンボジア料理を作ったりしているという。広い敷地に庭があり、さまざまな果物の木があり、立派な豪邸だったと K は筆者に語った。

店の仕事もあり、子供¹¹⁶も学校の授業があるから、Y はなかなかカンボジアに帰省する余裕がな

¹¹⁵ K の発言は、友人の Y が一般のアジア花嫁と違い、経済力に余裕があるという意味合いがある。

¹¹⁶ Y の長男は 2000 年生まれ、次女は 2002 年生まれである。Y の聞き取り調査を行った 2010 年の時点、長男は小学校 4 年生、次女は小学校 2 年生だった。

かった。そのかわりに、母国にいる母親を呼び寄せ、1 カ月ぐらい滞在させたことが何回もある。もちろん、往復の飛行機代は全部 Y が負担した。Y は高雄市にきたカンボジア籍花嫁の中では、経済的余裕を持っている一人だが、定期的にカンボジアに送金してはいないという。そもそも、彼女たちはカンボジアで家族のために新居を建てた以降、祝日と帰省する場合以外、送金していない事例が多い。また、母親が亡くなった以降、年中行事の祝儀を送らない場合も多い。さらに、送金は銀行を利用するのではなく、仲間のだれかがカンボジアに帰省するチャンスを利用し、その仲間に家族へのお金を託す場合が多い。

筆者が初めて Y と出会ったのは、2009 年 9 月、果菜市場の「中元普渡」¹¹⁷であった。K は、果菜市場の「拝拝」に行けば、無料のお菓子を貰えるから、遊びに行かないかと筆者に声をかけた。K の案内で、市場の「中元普渡」に行った。Y はこの市場では、しっかりして明るいおかみさんだという評判だ。筆者と K は Y の後ろについて市場を歩くと、あちこちから台湾語で Y に話をかけてくる台湾人の姿が絶えなかった。初対面の筆者に対して Y は気前よく親切で、食べ物や飲みものを配ってくれた。Y と市場の同業者や他の台湾人オーナーとのやり取りを見ると、彼女はすっかりこの市場に溶け込んで、ホスト社会における台湾人のネットワークも築いているようだ。そもそも、この市場は高雄市屈指の青果卸売市場で、店舗数が多くて、ほぼ台湾人オーナーの店である。長年この市場のおかみさんとして働いているため、Y が知り合う台湾人オーナーの人数の多さは言うまでもない。市場の台湾人オーナーは人手が不足したとき、よく Y の店にアルバイトをしたいカンボジア籍の友人がいるかと聞きに来る。一方、カンボジア籍同胞のだれかが仕事を探すとき、Y を通して市場の台湾人オーナーに尋ねてみる。もちろん、Y の店も同胞に働き口を提供している。Y は同胞同士の間だけではなく、地域社会の台湾人と同胞との間に、主体的に架け橋となる役割を發揮している。

2. 「ネットワークの結節点」となるアジア花嫁

移民区病理とネットワークの結節点という視点から、「ベトナム小吃店」は経済的な機能とそれ以外の機能も兼ねて、次第に同胞のネットワークの結節点となっていくと同時に、ホスト社会である台湾社会が着せる汚名も受けざるをえなくなると、邱が指摘した[邱淑雯 2007]。ベトナム籍花嫁 S の店は確かに経済的な機能と同胞の情報交換の場という機能も兼ねて、次第に三民区の有名なベ

¹¹⁷ 「普渡」は済度を意味し、祀る人のいない亡霊と呼ばれる「好兄弟」に対して共同で供え物を奉げて祭祀を行う儀礼である。旧暦 7 月 15 日は道教の「地官大帝」である「中元公」の生誕日である。中元節に行われる「普渡」は「中元普渡」と呼ばれる[笠原・植野 1995 : 102-103]。

トナム籍花嫁のネットワークの結節点となった。しかし、Sの店は「質が悪い」ベトナム人が集まる店という偏見が着せられることなく、「ネットワークの結節点」となっている。それはSの店の立地、客層、属性、台湾人に対する対応という4つの理由があるからである。

第一に、Sの店は駅周辺のエスニック商圈という異質な消費空間にあるのではなく、一般の地元の商店街にある。駅周辺のエスニック商圈は移住労働者が多く集まり、エスニック商圈の店に対して、「移民区病理」というような偏見を抱いている地元の人々が多い。これに対して、Sの店は地元の人々がよく足を運ぶ同質な消費空間にある。第二に、Sの店の客層はベトナム籍花嫁を始めとするエスニック・グループと台湾人であり、誰でも入りやすい雰囲気を出している。店が工場地域から遠いため、ベトナム籍男性労働者の来店は休日に限られている。一方、エスニック商圈の店では外国籍男性労働者が多く集まって、地元の台湾人に恐怖感を与えている。第三に、邱によると、「ベトナム小吃店」と台湾人経営の「小吃店」との属性、客層が違うから、競争がなく対立していない。ただし、店の種類が類似しすぎると、緊張関係を引き起こす場合もある〔前掲書：112〕。唯一Sの店の属性と類似している店は「肉圓売りの露店」だけである。自分の店より商売繁盛しているSの店に対して、「肉圓売りの露店」のオーナーは文句を言うのも無理ではない。ほかの飲食店が販売している食べ物はSの店とかけ離れているため、競争関係が存在していない。第四に、台湾人に対する対応について、邱の研究では、「移民区病理」という偏見を克服したベトナム人女性が経営している店は、「近くの台湾人オーナーに対して距離を持っていて、積極的ではない対応をしてきた。一般台湾人客に対して、積極的に客の心を掴んで、メニューを地元化にして努力している」という傾向がある〔前掲書：113〕。Sの店はまさにこのような事例である。ただ、彼女の店のメニューは地元化しているのではなく、顧客に合わせて、味付けを調整し、同胞には裏メニューを用意している。そして、近所と近隣の台湾人オーナーに気を遣い、カラオケ営業は早めに終了させるようにしている。

ホスト社会の多数の台湾人は「ベトナム小吃店」に多少偏見を持つことにもかかわらず、Sは近隣オーナーと住民、台湾人顧客、ベトナム人顧客、それぞれに対して、対応を上手く使い分けている。店が同胞の郷愁を紛らわす「ネットワーク結節点」となった同時に、Sは同胞の集まりによる近所への迷惑を最小限にして、ほどよい距離感の付き合いで近隣のオーナーとのトラブルを回避し、ベトナム人に対する偏見を克服してきた。一方、ベトナム人同胞にとって、Sの店は単なる故郷の味を提供する店ではなく、ホスト社会への適応を促進し、ホスト社会におけるネットワークが形成される場所でもある。S自身も店の成功を通して、同胞とのネットワークが形成されただけではな

く、ホスト社会の台湾人受け入れられたと同時に、家庭内の地位も上昇した。

続いて、カンボジア籍Yの事例の分析を見てみる。カンボジア籍Yの夫が経営している店がネットワークの結節点というよりも、むしろカンボジア籍Y本人がネットワークの結節点と言ったほうが適切である。彼女がネットワークの結節点となった主な理由は店の立地と彼女の性格である。まず、Yの店は普通の市場の店と違い、高雄市屈指の青果卸売市場にある。市場の規模に伴い、来客数と台湾人オーナーも非常に多い。Yという媒介を通して、カンボジア籍同胞同士のネットワークが拡大し、相互扶助のシステムができた以外に、同胞のネットワークと地域の台湾人のネットワークをうまく接合している。このようなネットワークの効果を十分に発揮するには、Yの性格も重要な役割を果たしている。Yは面倒見のよい性格でカンボジア籍花嫁の先輩として、常に移住して間もない同胞の手助けをして、積極的に同胞と地域社会の間に連携を作っている。さらに、夫の経済力も多少関連している。経済状況が悪いなら、生計を立てることすら困難で、人助けと同胞を自宅に招待する余裕もない。夫の経済力に余裕があるため、妻が同胞との交流に使う出費も夫は気にしていない。

以上のように、ホスト社会で成功を収めたベトナム籍Sとカンボジア籍Yは、二人ともアジア花嫁の先輩として、同胞同士の間に、さらに地域社会の台湾人と同胞をつなぐ役割を発揮し、双方のネットワークの結節点となり、アジア花嫁と地元社会の双方ともに、貢献できるキーパーソンになっている。

第2節 ベトナム籍花嫁の社会活動

高雄市に現在あるアジア花嫁団体の中では、ベトナム籍花嫁の団体の人数が最も多くて、活動が最も盛んである。そのため、本節ではベトナム籍花嫁からなる団体に焦点を当て、アジア花嫁のネットワークについて考察していきたい。当初、高雄市のベトナム籍花嫁の団体は社会局に管轄されていて、「高雄市ベトナム姉妹¹¹⁸同郷会」（高雄市越南姊妹同鄉會）という名称だった。その後、社会局から独立して、「高雄市ベトナム同郷会」（高雄市越南同鄉會）という社団法人を発足させた。本節では、この2つの団体に関する成立経緯および活動を詳しく見ていきたい。なお、成立経緯に

¹¹⁸第2章で取り上げた「美濃外国籍花嫁識字クラス」の成立以来、指導者である夏曉鵬を始めとするソーシャルワーカーはアジア花嫁を「姉妹」と呼んで、アジア花嫁同士も「姉妹」という称呼で呼び合うようになった。「ベトナム好姉妹」の意味は、ベトナムから来た仲良い女性同胞の意味である。

関して、最初は会長 C¹¹⁹の聞き取り調査に基づいたものであったが、彼女の個人的見解が多く入っているため、陳牧師¹²⁰と幹部の CH¹²¹ による説明も加えて、まとめている。最後に、高雄市ベトナム姉妹同郷会と高雄市ベトナム同郷会の活動をまとめ、評価できる点と問題点を指摘したい。

1. 高雄市ベトナム姉妹同郷会の成立経緯および活動（2007 年 11 月から 2011 年 11 月まで）

① 成立経緯

高雄市ベトナム姉妹同郷会が設立される前、ベトナム籍花嫁に対する支援活動の草分けであった陳牧師を始めとする前鎮長老教会のスタッフと教会に通っているベトナム籍花嫁たちは、同胞同士の親睦促進及び生活適応の支援という役割を果たす団体を発足したいと常に考えていた。2007 年から「高雄市キリスト教家庭協力相談センター」¹²²と陳牧師、ベトナム籍花嫁からなる同郷会準備チームによる計画および努力によって、ベトナムの「教師の日」（教師節）¹²³である 11 月 20 日に前鎮長老教会で高雄市ベトナム姉妹同郷会の成立大会を開催した（写真 11 を参照）。

2005 年から 2007 年までに、陳牧師が担当した前鎮長老教会は生活適応クラスの開催に成功し、前鎮教会は前鎮区の新移民コミュニティ・サービス拠点として選ばれた。このサービス拠点を利用しているベトナム籍花嫁の人数が多く、高雄市在住のベトナム籍花嫁の最大のネットワークとも言える。教会は中国語・台湾語学習の場を提供するだけでなく、陳牧師およびスタッフは彼女らの悩みの相談も受けて、台湾生活に適応できるよう多方面から支援をしていた。そのため、彼女らは前鎮区の新移民コミュニティ・サービス拠点である前鎮長老教会を高雄市ベトナム姉妹同郷会の拠点として選択し、陳牧師に顧問となるように依頼したのである。これは高雄市で初めてのコミュニティ・サービス拠点と連携したアジア花嫁の団体であった。団体が発足した 2007 年当初は規模がまだ小さいので、会員の中で、高雄にきた年数が最も長い H 会長と副会長 C だけが選出された。

翌年、会員数の増加とともに、幹部の選挙を実施した。得票数により、順番に会長と副会長、活動部長、会計、総務という幹部が選出された。初代の H 会長は家庭のことで、高雄市ベトナム姉妹同郷会に参加する余裕がなくなった。初代の副会長だった C は 2008 年以来毎年会長として選出されている。ただし、C 会長より組織を主導するための中国語能力およびリーダーシップなどに優れ

¹¹⁹第 3 章第 2 節で取り上げた 7 人のアジア花嫁の一人 C のことである。

¹²⁰第 2 章第 4 節に登場した陳牧師のことである。

¹²¹第 3 章第 3 節で取り上げた 7 人のアジア花嫁の一人 CH のことである。

¹²²第 2 章第 4 節を参照

¹²³「教師の日」を祝日としているベトナムでは、学生は尊敬の意を表して、先生に花束を贈ることがよく見かけられる。

たベトナム籍花嫁が何人もいた。育児が一段落し、仕事がないC会長はほかの幹部と比較すると、相対的に同郷会の業務に専念できると多くの会員たちは思って彼女を支持した。何よりも、C会長は選挙前に、自分を支持している会員だけに連絡したので、投票日や選挙のことを知らない会員も実際にいた。陳牧師の話によると、会長という肩書きで、C会長はさまざまなイベントに参加したり、地方局のテレビに出たり、番組や雑誌の取材を受けたりして、交通費や景品をもらっていた。そのため、C会長はこの肩書きを手放しにするわけにはいかないという。

C会長はリーダーシップに欠けていたが、陳牧師の指導と幹部たちの協力があつて、高雄市ベトナム姉妹同郷会の活動を軌道に乗せることができたのである。幹部たちはみんなさまざまな分野で活躍し、同胞の支援に関わっている。副会長だったAは財団法人カトリック海星国際サービスセンターの副主任として、結婚生活が破綻した同胞の支援をしている傍ら、高雄市社会局の依頼を受け、「南国姉妹情」¹²⁴（南國姉妹情）というラジオ番組を制作し司会をしている。さらに、『季刊ベトナム好姉妹』（越南好姉妹季刊）を編集している。1969年生まれのAはハノイのキン族出身で、ハノイ医学大学の医学修士号、経済大学の企業管理の修士号を修得し、ベトナム語と中国語、フランス語、英語を駆使する才女である。1998年に国際結婚をきっかけとして、高雄に移住したが、夫のDVによる傷害で何回も入院していた。子供を安全な家庭環境で育てられるようにと思って、夫と離婚した。母国にいる家族の経済援助で、高雄で自分の家と子供の親権を持つことができた。このような背景で、同胞の支援に関して、彼女は誰よりも熱心である。職場でDV被害者の同胞のカウンセリングをしているとき、彼女はいつも「経済面の独立ができると、夫の不倫や台湾人家族の使用人のような扱いを恐れなくなる」と同胞を励ましている。

活動部長だったCLは財団法人カトリック教善牧社会福利基金会のスタッフとして同胞の支援をする傍ら、ベトナム語講師やベトナム人移住労働者の通訳をしている。1980年生まれで、ホーチミン市出身のCLは2000年に国際結婚をきっかけとして、高雄鳳山に移住した。父が客家出身で、母が広東出身のCLは父親の強い華僑意識で実家ではベトナム語が禁止されていた。また、彼女を小学校の付属中国語学校に通わせていたので、彼女は幼少時代から客家語と広東語、ベトナム語、中国語を駆使し、現在は高雄市立の通信大学の英語学科に通っている。言語能力が優れているCLは高雄市のラジオ番組で多文化コーナーのラジオパーソナリティとして務める。政府機関の役人とのインタビューを通して、同胞に台湾政府の各部門の役割と福祉利用を紹介する。一方、同胞のイ

¹²⁴番組の前半はベトナム語で放送されている「ベトナム好姉妹」というコーナーで、後半はインドネシア語で放送されている「インドネシア好姉妹」というコーナーである。Aは前半の担当者である。

ンタビューを通して、台湾社会に同胞の生活適応と仕事、ベトナム文化に関するエピソードを紹介する。さらに、彼女が子供の母語教育に力を入れ、子供合唱団を発足した。この点は下で詳しく述べる。

会計だったSは広東華僑出身で、旅行代理店に勤めて、同胞に格安のチケットを提供し、会社の社長にベトナム往復のチケットを高雄市ベトナム姉妹同郷会のイベントの景品として提供してくれるように協力を求めたこともある。彼女は同郷会が成立して以来ずっと活動に参加している。

以上のように、実際に会長より組織をリードできる幹部たちが存在していた。もともと、高雄市ベトナム姉妹同郷会が成立する前に、派閥のような小さなグループがすでに存在していた。陳牧師の話によると、「ベトナム籍花嫁同士だといっても、すべて仲が良いとは限らない。教会が用意したプレゼントに対して、だれかのプレゼントは自分より良いとかと不満を漏らしていたり、また陳牧師はだれかを最賈したなどの愚痴をこぼしていたりした。団体だから、小さなグループの存在を避けることは不可能だ」という。グループ内の派閥が存在しているにも関わらず、幹部全員は困難に遭った同胞を助けようとする気持ちが一致である。また、幹部たちを始めとする多くのベトナム籍花嫁は、ホスト社会における同胞との交流の場を通して、自分の居場所を見つけることができた。

② 活動の内容

a. 親睦促進のイベント

ベトナムの建国記念日、教師の日などの祝日にイベントを主催するほかに、3ヶ月に一回の誕生日大会を行う。イベントは単なるベトナムの祝日大会ではなく、台湾の祭日の意味も取り入れている。例えば、ベトナム建国記念日というイベントの垂れ幕に、「ベトナム文化節・中秋お祝い」と書かれている。また政府のアジア花嫁政策の宣伝活動も兼ねている。誕生日大会に、国民健康保険の宣伝および説明会を兼ねた場合もある。アジア花嫁政策の広報の場として利用される良い点として、政策に不明や疑問を感じたベトナム籍花嫁はすぐ来場した役人に伝えることができた。また、中国語能力が不足しているベトナム籍花嫁は政策内容を理解できなくても、すぐ隣にいた同胞に政策の内容を教わることができる。

イベントの会場はいつも新移民センター（第2章第2節参照）の7階で行われている。アジア花嫁の団体は親睦促進のイベントとともに、ホスト社会である台湾社会に母国文化の紹介を兼ね、常に民族舞踏とエスニック料理を用意している。高雄市ベトナム姉妹同郷会も例外ではなく、毎回のイベントでは、必ずアオザイを着用し、ベトナムの扇子を使い、民族舞踊を披露する。幹部である

CH は毎回同じ民族舞踊の披露は実質的に意味がないと思った。そもそも、イベントに出席した人々はほとんど常連のベトナム籍花嫁や台湾人家族であるため、このような観衆は民族舞踊の披露にもう飽きていた。実際、筆者が 2011 年のベトナム文化祭に出席した際、来場者の一人の台湾人夫は「彼女たちは毎回同じ民族舞踊を披露している」と、ややうんざりしたような口ぶりで言っていた。しかし、ベテランの会員たちは民族舞踊の披露を好んでいる。民族舞踊を通して、台湾社会に母国の文化を紹介すると同時に、移民署など主催する組織から手当てをもらうことができるという背景がある。彼女たちの支持を得るために、C 会長は毎回同じ民族舞踊を披露することに口をはさまない。

イベントのベトナム料理に関して、第 1 節で紹介したように、ベトナム籍花嫁が経営している「小吃店」や屋台の増加とともに、台湾人はベトナム料理にも馴染みを覚えるようになったので、毎回好評である。ベトナム料理だけではなく、台湾料理も用意し、業務用の大きな鍋ごとそのままに会場まで持って来た台湾人夫もいる。会員たちが来場者にベトナム料理を振舞ったとき、彼女たちの喜びに溢れている顔が印象的だった。来場した子供たちに母親が作った料理がおいしいかと聞くと、みんな頷いて、「うん」と返事した。ベトナム料理を通して、ベトナム籍花嫁同志や台湾人夫同志との交流が盛んになった。

筆者がある台湾人夫と会話を交わした時、彼は「彼女たちは台湾に来て、友達や親戚もなく、大変だ。彼女をここに連れて、同じ国の友達ができる」と言った。会場で先輩のベトナム籍花嫁は会長や幹部たちに新しく来た同胞を紹介したりすることをよく見かけた。

筆者が何回かイベントに通ったら、参加したメンバーは常連の会員が大多数を占めていることが明らかになった。また、南部出身者の会員が多数を占めていて、北部出身の人はあまり溶け込んでいないようだった。第 3 章で取り上げた 7 人のアジア花嫁の一人である北部出身の HA は、最初イベントに出席したが、会場に来る同胞が殆んど南部出身者で話があまり合わないから、それ以降、イベントに参加しなくなったという。もともと、台湾に来たベトナム籍花嫁は南部出身者が多数を占めている。ただし、高学歴の北部出身者（A など）および中部の出身者（下で紹介する B）が例外的に活動に参加しているようだ。

b. 『季刊ベトナム好姉妹』の編集

2006 年に、高雄市キリスト教家庭協力相談センターは、ベトナム籍花嫁が高雄市のアジア花嫁の半数以上を占めることを知り、『季刊ベトナム好姉妹』を発行し、高雄市在住のベトナム籍花嫁の自宅に無料で送り届けている。編集者と翻訳者は幹部の A とキリスト教家庭協力相談センターのス

タッフのB（ベトナム中部出身）である。雑誌の内容はベトナム国内の最新ニュース、ベトナム文化の紹介、読者の投稿、移民に関連する法令の更新情報、福祉情報、台湾語学習、イベント情報などである。すべての文章はベトナム語と中国語が併用されているため、中国語の読解能力が一般的に不足しているベトナム籍花嫁にとって、ホスト社会の重要な情報源の一つである。読者の投稿コーナーはDV被害者の悩み相談が多い。編集者もその事例に対して、解決方法をコメントしている。

編集者のBは「たくさんの姉妹（ベトナム籍花嫁）がこの雑誌を通して、生活問題の解答を見つけられるだけでなく、この雑誌を中国語学習の参考書として重宝している」と筆者に語った¹²⁵。また、台湾人スタッフは「たくさんの外国籍配偶者は中国語を読めないから、どのような福祉資源を利用できるか、どのようなイベントに参加できるかを全く知らない。毎日、家に閉じこもり、外出する勇気がなかった人は、雑誌の読者投稿を読んで、自分と同じような経験を持つ同胞もたくさんいることを知り、郷愁を紛らわす方法を覚えた」と書いている¹²⁶。

日本のエスニック・メディアの研究において、先駆的役割を果たしている白水はエスニック・メディアを「当該社会に居住する人種的・民族的マイノリティの人々を主たる受け手とする定期的情報媒体」と定義した[白水 1996 : 41]。『季刊ベトナム好姉妹』とCLが司会しているラジオ番組はまさにエスニック・メディアの範疇に当てはめることができる。そして、白水はエスニック・メディアの社会的機能について、3つに分けている。第一の「集団内的機能」は、ホスト社会への適応を促進させるため、受け手の「医衣職食住」に関するニーズを満たすことである。第二の「集団間的機能」は、自グループとホスト社会に共生する様々なグループとの「架け橋」としての役割を果たすことである。第三の「社会安定機能」は、環境適応情報を流して安心を与えることにより、エスニック・コミュニティの安定に貢献し、ひいてはホスト社会の安定にも貢献することである[白水 1996 : 19-28]。

『季刊ベトナム好姉妹』は季刊誌で、CLのラジオ番組が週一回の放送であるため、直ちに天災地震などの情報を流すことは困難で、第3の「社会安定機能」に関して、速報性という点では機能していない。この点を除いて、『ベトナム好姉妹季刊』であろうとCLのラジオ番組であろうと、両方とも白水が指摘した3つの機能[速報性はないが、社会安定機能も果たしている]を発揮し、台湾社会とベトナム籍花嫁との共生において、大きな役割を果たしている。

c. 子供合唱団の活動

¹²⁵ 2013年7月11日に、『季刊ベトナム好姉妹』の調査のため、スカイプを利用し、高雄市キリスト教家庭協力相談センターに電話をかけ、編集者から得た情報である。

¹²⁶ 「讀『南國好姊妹』 外配中文學更快」聯合報 2012年6月18日より
<http://www.wretch.cc/blog/relation2008/11618903> (2013.07.20) 参照

ベトナム籍華僑の CL は自分のルーツである母国の文化を重視し、バイリンガルになることが子供の将来にとって良いことだと思い、子供にベトナム語を教えている。しかし、当時、周りの同胞の子供たちは殆どベトナム語を話せなかった。子供たちがベトナムに帰省するとき、家族との意思疎通ができるようにという願いで、彼女は 1998 年に「越範団」(越範團)¹²⁷というベトナム籍花嫁の子供合唱団を発足した。ベトナムの童謡を歌う子供どもたちはいつも「私たちは越範団です。ベトナム(越南)の「越」、模範の範、団体の団」というフレーズで観客に自己紹介。C 会長の娘や旅行代理店に勤めている幹部の S の息子もこの合唱団に参加したことがある。「越範団」は高雄市政府と社会局に評価され、高雄市だけではなく、台北の移民署のイベントにも招待され、積極的に台湾人にベトナム文化を宣伝している。ベトナム籍花嫁の子供の合唱団の活動を通し、子供たちにベトナムの文化や言語を教えると同時に、台湾社会のベトナム文化に対する認識も深まった。

d. 高雄市政府の多文化課程の講師

高雄市政府の依頼を受け、YMCA が開催している多文化課程における「ベトナム文化およびベトナム語」の講座では、幹部たちは常に講師として講壇に立って、台湾人家族やベトナムに興味を持っている台湾人にベトナム語を教えている。また、高雄市の小学校では「母語教学」(第 3 章第 2 節参照)や「多元文化」という授業で、アジア花嫁は 1 日の多文化講師として招かれている。そして、C 会長を始めとする多くの幹部は地元の小学校の「多元文化週」で一日のベトナム文化講師を務めた経験がある。ただし、だれが多文化課程の講師という機会をもらえるかということは、団体内の派閥にかかわっている。政府部門の役人たちはいつも会長を通して、講師を募集している。CH の話によると、会長と仲が良い会員たちが講師になった場合が多い。そうではない場合は、CL のように、本人がすでに宗教団体のスタッフとして長年同胞の支援をして、有名になっているケースである。YMCA を始めとする多文化言語やベトナム語講座が主催する団体のスタッフは、会長を通すのではなく直接本人と接触したのである。しかし、イベントや座談会に出席するチャンスはやはりほとんど会長にある。この「恩恵」は会長と仲がよい固定メンバーたちに与えられている場合が多いという。

e. アジア花嫁政策の座談会や新移民イベントへの出席

幹部たちは、高雄市議会が主催しているアジア花嫁のための政策座談会、移民署が主催している新移民イベントにゲストとして招待されている。この機会を通して、幹部たちは常に同胞の悩み、

¹²⁷ 「越範団」という合唱団の名前は台湾大手のコンビニで販売しているおにぎりの「御飯団」(御飯糰)の発音に因んで、名づけられた。ベトナムの中国語が「越南」で、主宰者 CL は合唱団が「ベトナム」(越南)の模範となる団体という想いを込めて、この合唱団の名前を考案した。

ニーズと政策の改善すべき点を主催者や関連部門の責任者に伝える。高雄市市議会の新移民政策の座談会で、当時副会長だった CL はアジア花嫁本人に対する教育支援とベトナムの家族のビザ延長と中国語力の上昇を求めて進言した。会長 C を始めとする幹部たちはよく公の場で、「外国籍配偶者に対する台湾社会の偏見の多くはマスメディアの否定的な報道から来たものである。外国籍配偶者に対する否定的な報道の減少を願っている」と呼び掛けている[高雄市市議会 2009 : 2307]。

2. 高雄市ベトナム同郷会の成立経緯および活動（2011 年 11 月から 2012 年 12 月まで）

① 成立経緯

高雄市で初めてアジア花嫁によって設立された社団法人は、2011 年に発足した高雄市ベトナム同郷会である。この団体の前身はすでに紹介した高雄市ベトナム姉妹同郷会である。本来ならば、社団法人を設立したら、高雄市ベトナム姉妹同郷会を存続させる意味がなくなる。高雄市ベトナム姉妹同郷会の活動は実質的に社団法人の高雄市ベトナム同郷会に全て移っている。しかし、C 会長は高雄市ベトナム姉妹同郷会を存続させれば、まだ社会局第五科から経費を貰えると考えて、幹部たちの反対を押しつけて、形式的に存続させている。

社団法人を発足させた背景を紹介する。アジア花嫁の団体がイベントを行うたびに、社会局第五科に経費を申請することができる。しかし、会員数やイベントの動員人数を問わず、すべて同じ金額の補助経費が支給されるという不合理な仕組みが存在している。高雄市ベトナム姉妹同郷会は高雄市インドネシア姉妹親睦会¹²⁸ を始めとするアジア花嫁団体より人数やイベントの回数をはるかに上回っているのに、陳牧師を始めとする幹部たちは、以前からこのような制度は不公平だと思い、会長 C を代表として、第五科の役人らに何度も交渉してみたが、「私たちは規定されているルールを守らないといけない、自分にはルールを変える権限がない」と同じ返事が繰り返された。

そこで、陳牧師が考えた解決策は社団法人を作ることである。社団法人が成立すると、高雄市社会局第五科に少額の経費を申請するのではなく、社団法人として、直接高雄市政府に現在より遥かに多額の経費を申請できると陳牧師は説明した。何よりも、陳牧師はずっと高雄市ベトナム姉妹同郷会の主体性を願っていた。「今のままでは台湾人の付属団体だ（社会局に管轄されているため）、自分達の団体ではない、主体性がない」と説明し、社団法人の成立を催促した。しかし、常に陳牧師を頼りにしていた幹部たちは、社団法人の成立に自信がなく不可能なことだと考え

¹²⁸ 2 章第 2 節の新移民センターの節を参照

ていた。そのため陳牧師はまず社団法人の見学を提案し、さらに見学先をベトナム人が理事長に就任している社団法人¹²⁹ に絞ってほしいとアドバイスした。すると、彼女たちが選んだのは、台湾で初めてベトナム籍花嫁が発足させた「雲林県ベトナム同郷權益協進会」（雲林縣越南同鄉權益協進會）¹³⁰ であった。

2011 年 2 月に見学しに行ったとき、雲林県ベトナム同郷權益協進会の理事長 CK はバス 3 台でやってきた約 200 人の高雄市ベトナム姉妹同郷会の会員およびその家族を見て驚いた。こんなに動員力が大きいのに、どうして社団法人を作らないのかと C 会長に聞いた。「このままではもったいない、政府が外国籍配偶者に配るお金の方が多い。あなたたちはちゃんと社団法人を作って申請しないと、他の団体に予算を取られてしまう。そして、自分たちの団体を設立すると、より多くの同胞を支援することができる」と理事長は C 会長を始めとする幹部たちに告げた。見学した後、C 会長を始めとする幹部たちは雲林県ベトナム同郷權益協進会の健闘ぶりとその理事長の力強い説得力を受け、社団法人の発足を決心した。会長は社団法人の申請に関する書類の作成など、知り合いのソーシャルワーカーや陳牧師の協力で完成した。2011 年 3 月に社会局に申請書を提出した。しかし、社会局は高雄市ベトナム同郷会という団体名に異議を唱え、なかなか申請を許可しなかった。

その後、陳牧師が社会局の役人と交渉し、2011 年 7 月 1 日に高雄市政府の立案許可書がやっと下りるようになった。9 月に準備大会が行われ、討論を重ねて、11 月 20 日に高雄市ベトナム同郷会是新移民センターの 7 階で成立大会を行った。当日の会員投票により、C 会長は初代の理事長に、そして CH を始めとする姉妹会幹部は監事や理事として選出された。そして、長年ベトナム籍花嫁の活動を協力してきた陳牧師は顧問に選ばれた。

高雄市ベトナム姉妹同郷会と違い、高雄市ベトナム同郷会という団体名にした理由は、ベトナム籍花嫁だけを対象にするのではなく、ベトナム人の留学生、移住労働者、商人などの同胞をより台湾社会に適応させ、一致団結させるために、この同郷会を発足させたからである。さらに、高雄市ベトナム同郷会を通して、台湾人や台湾社会にベトナム籍花嫁に対する理解を一層深めることができると期待されている。当日、入会した会員はベトナム籍花嫁だけではなく、賛助会員として台湾

¹²⁹台湾各市県では新移民の権利と利益を求めるために、成立した社団法人が少なくない。ただし、実権は必ずしもベトナム人が握っているわけではない。たとえば、高雄市の「新移民權益協会」（新移民權益協會）では、高雄市の議員たちが実質的に権限を握っている。

¹³⁰雲林県ベトナム同郷權益協進会の理事長 CK は、1999 年に国際結婚をきっかけとして、雲林県に移住した。警察の依頼を受け、ベトナム籍花嫁と移住労働者の通訳をして以来、ホスト社会における同胞が言葉の壁やネットワークの不足で、いかに不利な状況に置かれているかという現状を考え、CK は同胞の励ましで 2006 年にこの社団法人を成立させ、数多いベトナム籍花嫁やベトナム人移住労働者を支援してきた。彼女は台湾におけるベトナム人エスニック・グループ圏の中で、非常に有名な人物である。

人夫や幹部たちの台湾人の友人もいて、またインドネシア姉妹親睦会など他のアジア花嫁団体も団体会員として入会した。

社団法人が成立したら、高雄市ベトナム同郷会はより多くの同胞に貢献できようになると幹部たちは思っていた。しかし、成立して以降、理事長と幹部たちの理念が大きく分岐してきたから、幹部たちは理事長が不適任だと思い、理事長を解任したいと思っていた。社団法人が成立した当初の貢献と長年の友誼で、幹部たちは理事長の解任を諦めた。理事長と幹部たちとの葛藤で、2012年6月以降、高雄市ベトナム同郷会の活動は一気に停滞ぎみになった。

② 活動内容

高雄市ベトナム姉妹同郷会の時期から始まった親睦を促進するイベントの開催とベトナム語・多文化講師の活動、アジア花嫁政策座談会の出席、子供合唱団の活動、『季刊ベトナム好姉妹』の刊行は、高雄市ベトナム同郷会の時期でも継続している。さらに、以下のような活動が加わり、また支援する対象をベトナム籍花嫁に限らず、ベトナム人移住労働者にまで拡大した。このように、2012年6月に理事長と幹部たちとの葛藤が発生するまでは、高雄市ベトナム同郷会の活動は高雄市ベトナム姉妹同郷会の時期よりも活発であり、同胞に対する支援も拡大した。

a. 会員の出産・病気の見舞い

社団法人になって以降、幹部の提案によって、会員出産後や病気の見舞いが行われるようになった。とくに出産後の見舞いは重視されている。C理事長を始めとする同郷会の幹部たちの中で、「坐月子」期間に、台湾人家族の育児や家事に対する不協力で、辛い経験をした人が何人もいた。彼女らは台湾に来たばかりのとき、苦しい思いをしたから、同胞たちの力になりたいという気持ちが強かった。

b. ベトナム人介護労働者の仕事環境の視察

幹部たちは介護施設で働いているベトナム籍女性に面会に行って、仕事の環境を視察した。ベトナム籍花嫁だけではなく、非会員のベトナム人介護労働者の現状にも配慮するようになっている。

c. 「台湾民衆のベトナム文化学習」と「新台湾の子の母語課程」の計画案の提出

高雄市政府に「台湾民衆のベトナム文化学習」と「新台湾の子の母語課程」の二つの計画案を提出した。前者は台湾人のベトナム文化への理解を深めるために、一般人を対象に、ベトナム語、ベトナムの歴史・文化を教える講座である。後者は「新台湾の子」を対象に、ベトナムの歴史、文化、風習、童謡などの授業を用意している。これは、近年、「新台湾の子」の教育政策の一環として、

台湾政府の教育部が「母語伝承課程」という授業を打ち出した背景が存在している。ただし、計画案を提出した後、組織内の対立で完全に実施していない。また、「a. 出産・病気の見舞い」と「b. 同胞の仕事環境の視察」も組織内の対立により、2012年6月以降、実施できなくなった。

3. 高雄市ベトナム姉妹同郷会と高雄市ベトナム同郷会の活動の総括

① 肯定的な側面

a. 同胞のネットワークの拡大

同郷会が主催する親睦促進のイベントは、高雄に在住しているベトナム籍花嫁の情報交換の場所と機会を提供し、同胞のネットワークの拡大による相互扶助のシステムの形成に貢献した。

b. 台湾社会への適応の促進

『季刊ベトナム好姉妹』などのエスニック・メディアは、中国語能力が不十分である同胞に「医衣職食住」に関するニーズを満たした他、彼女らの郷愁を紛らわし、ホスト社会への適応に貢献した。ひいては、台湾社会とベトナム籍花嫁との共生においても大きな役割を果たしている。

c. ベトナム籍花嫁に対する台湾人家族の理解の促進

夫を始めとする台湾人家族は親睦イベント、ベトナム語・文化学習を通して、ベトナム文化に対する認識を深めるとともに、国際結婚同士の家族との交流を通して、お互いの悩みを話し合ったりし、解決方法を見つけられるようになった。

d. ベトナム籍花嫁に対するホスト社会の偏見の是正

新移民イベントの出席や雑誌の取材を応じた幹部たちは、常に公の場で、マスメディアが同胞に対する偏見の是正をするように呼びかけている。そして、ベトナム文化講師の活動や各分野で活躍している幹部たちの姿を通して、ホスト社会で低く見られているベトナム籍花嫁とベトナム文化に対して、より客観的な視線を抱くような台湾人が増えてきた。

e. 「新台湾の子」のアイデンティティの促進

小学校の1日多文化講師の活動を通して、今まで母親に対してコンプレックスをもっていた子供は、教壇に立っている母親の姿を見て誇りを持つようになり、幼少期から、母親の母国文化に対して、親近感を持つことができ、アイデンティティの確立に繋がることのできるようになった。

f. アジア花嫁の現行政策の改善

アジア花嫁政策に関する座談会の参加により、幹部達は同胞の代弁者となり、彼女たちのニーズ

と困難を主催者に伝え、政府部門の関係者に進言することができ、政策改善を促すことに貢献している。もちろん、主催者に進言したことがその場だけの承諾で終わることもあり、政府部門が幹部たちの意見を完全に受け入れるわけではない。しかし、幹部たちの進言により、多少なりとも現行政策の改善に繋がったことは否定できない。

g. ベトナム籍花嫁のエンパワーメントの達成

ホスト社会では常に教化されるべきグループとされているベトナム籍花嫁は以上述べた活動を通して、生徒の立場ではなく、台湾市民に教える立場に立つようになり、自己表現の舞台が与えられた。そして、会長を始めとする幹部たちがホスト社会の人々の協力を求めながら、同胞の力を合わせて、高雄市初のアジア花嫁による社団法人を立ち上げることができた功績は、ホスト社会で周辺化されやすいベトナム籍花嫁本人にとって、エンパワーメントの達成だと評価できる。

② 問題点

a. 活動参加者の偏り

ホスト社会では、一枚岩だとされやすいベトナム籍花嫁は実際に出身地とエスニック・グループ、学歴などにより、イベントに参加する意欲も影響されている。理事長をはじめとする会員たちは南部出身者が多数を占めているので、北部出身者は団体に馴染むことが困難で、次第に同胞と疎遠になり、もともと周辺化されやすいアジア花嫁グループにおいて、さらに周辺の位置に置かされていくようになった。このように、活動に参加した会員は南部出身者が多く、固定化現象がある。

b. 便宜提供の不均衡

多文化講師や新移民イベントの代表など、政府がエスニック・グループに提供する「表舞台」には常に固定した幹部たちが登場している。つまり、政府がアジア花嫁に提供している「便宜」は一部の幹部に独占されている傾向がある。この現象はベトナム籍花嫁に限らず、ほかのアジア花嫁団体にも同様な問題が存在している。

c. 組織内の葛藤による活動の停滞

当初はより多くの同胞を支援し、同胞の団結を願い、台湾社会との共生を目指す志で、理事長および幹部たちの努力により、社団法人を立ち上げることができた。しかし、理事長と幹部たちとの葛藤で、現在、高雄市ベトナム同郷会が持つ機能を十分に発揮せず、活動の低迷が起きている。

以上述べた問題をいかに改善できるか、今後アジア花嫁と台湾社会との関係を考える上で、極めて重要である。そして、たとえ組織内の葛藤や政府が提供している便宜の配分の不均衡によるさ

さまざまな問題が存在しても、高雄市ベトナム姉妹同郷会と高雄市ベトナム同郷会の活動によって、同胞のネットワークの拡大と台湾社会への適応の促進、アジア花嫁に対する偏見の是正、「新台湾の子」のアイデンティティの促進、ベトナム籍花嫁のエンパワーメントの達成などが実現したことは事実である。これらの活動の最終的な目標はただ一つ、すなわち周縁化された立場からの脱出であり、ホスト社会におけるアジア花嫁の地位の向上である。同郷会における彼女らの活動はホスト社会におけるベトナム籍花嫁の生存戦略の一つである。

第3節 ベトナム籍花嫁を描いた演劇

本節で取り上げるベトナム籍花嫁の演劇は高雄市ベトナム姉妹同郷会が実施した2011年のベトナム文化祭において、新移民センターで上演されたプログラムである。筆者が聞き取り調査のために、イベントに出席し、この興味深い演劇を見て、脚本の作者である幹部のCHと連絡し、脚本を書く動機と真意を尋ねた。

1. 脚本作成の動機・経緯

アジア花嫁の団体が母国の文化を宣伝する際には常に民族舞踊、民族衣装、エスニック料理を組み合わせてアピールしてきた。高雄市ベトナム姉妹同郷会も例外ではなく、毎回のイベントでは、必ずアオザイを着用し、ベトナムの扇子を使い、民族舞踊を披露する。幹部であるCHは毎回同じの民族舞踊を披露しても、あまり意味がないと思った¹³¹。逆に演劇の披露なら、ベトナム籍花嫁に対する台湾人の偏見をなくすために、効果が大きいし、同胞たちにも共感を得やすいと考えた。しかも、演劇は今までにはなかったプログラムなので、観客にも新鮮な感覚を持たせることができる。そもそも、イベントに出席した人々はほとんどベトナム籍花嫁と台湾人家族であるため、このイベントはホスト社会の偏見を訴え、同胞に生活適応のアドバイスを提言するには最適な機会である。CHは自身の経験や周囲の同胞に起こった実際の話をもとにして脚本を作成した。現実には脚本の内容よりも悲惨な事例もあったが、アジア花嫁に対する報道、とくに常に両極端に偏った台湾のマスメディアの扱い方に疑問を感じたCHは、極端なケースを強調せず、最もよく耳にする話を忠実に再現しようと考えた。

¹³¹ 2012年3月1日に、筆者がCHの自宅（三民区にあるマンション）で、脚本の作成の経緯などの聞き取り調査をした。自宅のリラックスした雰囲気、高雄市ベトナム姉妹同郷会のメンバー誰もいないから、彼女は姉妹会内部の話を詳しく語ってくれた。

2. 脚本の内容

物語は姑や義姉と同居しているベトナム籍花嫁 Y の日常生活を中心に描き、3つの場面に分けられている。これから紹介する登場人物の会話を通して、ベトナム籍花嫁に対する台湾人家族の差別的な言動および生活習慣の差異による摩擦の事例がよく分かる。

場面 1

最初の場面はダイニングルームである。主人公 Y は台所から料理をテーブルに運び、姑と義姉と夫に、「ごはんの用意ができた」と声をかけた。部屋からゆっくり出てきた姑は Y が作った料理を見てから、いきなり不機嫌な顔になり、「毎日よくもめちゃくちゃな料理を作るわね。こんなもん、どうやって食べろと言うの」とぶつぶつ言った。Y は困った様子で、「お母さん、すみません。私はまだ台湾の料理に慣れていないから、明日私に料理を教えてもらってもいいですか」と謝った。そして、食事の途中に、足を組んだり、音を立てたりしている主人公に対して、姑と義姉は次々と彼女の食事マナーを注意した。最後に、姑は夫に「あなたはどこでこれを買ってきたのか。全く行儀を知らない女だね。ちゃんと教えて、行儀ができるまで、恥ずかしいから外へ連れていくな。そうじゃないと、うちの面目は無くなる」と不満を言った。夫は「分かったよ、お母さん、怒らないで、彼女と話し合う」と返事した。

食事の後で、主人公が一人でテーブルを片付けて、食器を洗っているとき、義姉が彼女の後ろに歩いてきた。義姉は「お皿はもっときれいに水で流しなさい。洗剤は毒があることを知らないの。そんな洗い方だと、家族全員あなたのせいで死んでしまうわよ」と厳しく発言した。Y は涙を吞んで、「はい、分かりました、きれいに洗います」と返事した。食器洗いを済ませた Y に対して、義姉は「私の車を洗いなさい」と要求した。彼女は「私の車じゃないのに、なんで私が洗らうの」と言い返した。二人は言い争ったあげく、義姉は怒りを感じ、足をばたばたさせて、部屋の中へ走って入った。そして、姑に「おかあさん、見て。この女、なんていう態度なの。早く彼女を家から追い出してよ」と強く不満を漏らした。

場面 2

今度の場面はリビングルームの一角である。台湾の生活にまだ慣れなくて、ホームシックになった主人公は夫の同意を得て、ベトナムにいる母に電話をしようとしているところで、姑は「あなたはうちに来てから、毎月どれだけ電話代を使っていると思うの。何か大きなビジネスでもしているのか。どうしてそんなにいっぱい電話を掛けるのか」と問い質した。Y は「おかあさん、ベトナム

の母をすごく思っているから、ちょっとだけ掛けさせてくれませんか」とお願いをした。すると、姑は「うちの嫁になると、うちのルールを従うべき（嫁鶏随鶏、嫁犬随犬¹³²）だ。何を思っているの。あんたは暇すぎるから、よけいなことを考えるのよ、バケツを持って、窓と玄関をきれいに掃除しなさい」と説教した。姑の命令を従い、掃除しているYの元に、Yの一人娘は「おかあさん、公園に連れて行って。滑り台を滑りたいよ」と声をかけてきた。すると、姑は孫に向かって、「おいで、おばあちゃんが連れていってあげるわ」と声をかけた。母親と一緒に公園に行きたい孫に対して、「おかあさんはベトナム人なのよ、おかあさんと一緒に公園に行かないで。あなたは人に笑われるわよ。おばあちゃんが連れて行ってあげる」と語った。Yは怒りを禁じえず、「おかあさん、どうして子供にそんな話をするの。私だって子供の母親でしょう。私はベトナム人ですが、それがいけないことですか。ベトナム人でもあなたの嫁でしょう」と言い返した。すると、姑は指で主人公のことを指し、「くそ女、よくも私に口答えしたわね。もう家には入れてあげないからね」と暴言を吐いた。

場面 3

今度の場面は公園の一角である。姑と口喧嘩した後で、主人公は娘を連れて家を出て、公園に来た。彼女はここで姑の同伴で運動しに来たベトナム籍花嫁Mと出会った。Mは落ち込んだ主人公の様子を見て、詳しい事情を聴いた。主人公は「うちの姑は私のことをやさしくしてくれないし、毎日嫌がらせばかりを言います。子供といっしょに外へ出ることさえさせてくれない」と打ち明けた。同胞の女性は「じゃ、あなたの旦那さんは何をしているのか」と聞いた。すると、主人公は「彼は仕事に行っています。彼はうちに帰ると、ごはんを食べて寝ることしかしません」と答えた。同胞のMは「あまり落ち込まないでください。人はみんなそれぞれの性格だから。例えば、うちの旦那さんはとてもやさしいです。仕事から帰っても、子供の勉強を手伝ってくれたりします。時間があれば、家事の手伝いもしてくれます」と語った。また、Mが姑とともに公園に来たことに驚いた主人公は「へえ。あなたの姑はあなたを連れて公園に遊びに来たのですか」と聞いた。すると、Mは「姑はとてもやさしい人です。彼女は毎朝、私を市場に連れて行って一緒に食材を買います。昼は台湾料理や家事のことを教えてくれたりしています。午後は私を公園に散歩に連れて行ってくれます」と語った。すると、主人公は羨ましい目線で、「どうすれば、姑とうまくやれるのですか。どうしてあなたの姑と夫はそんなにあなたのことを可愛がってくれるのですか。教えてくださいませんか」

¹³² 「嫁鶏随鶏、嫁犬随犬」とは中国語の諺である。妻が夫に従うことのたとえである。

とMに尋ねた。Mは「私たちははるばる故郷を離れて、ここ台湾に来ました。文化の違いや、習慣の違いやいろいろあります。初めのうちは、私の姑も私のことをよく理解してくれませんでした。しかし、彼女は私に勉強のチャンスを与えました。その後、私は努力して、彼らとちゃんと話し合っ、彼らのことについて勉強しました。私のために教えてくれていると信じているから、私はずっと努力して、がんばって自分の悪い習慣を直しました。だんだん、彼らも私のことを受け入れてくれました。だから、私たちはこんなに仲良しになりました。あなたも落ち込まないでください。私たちはともに、ベトナムから来たからお互いに助け合い、励ましあいましょう。自分の幸せのために、あなたにもできると信じています。がんばってください」と語って、主人公を慰めた。主人公はMにお礼を言って、電話番号を交換した。Mは「何かあれば、いつでも電話してください」と主人公に話し、別れる挨拶をして、それぞれ帰宅した。公園での出会いの1年後、主人公Yは夫と姑、子供、公園で温かく接した同胞Mと一緒に果物を食べながら、楽しく会話をしている場面で、この演劇は終わる。

以上の脚本の内容を示したように、姑と義姉は経済発展が台湾より遅れているベトナムに対して偏見を抱き、主人公を「買ってきた花嫁」と考え、大家族の使用人として接して、家事全般を彼女一人に押し付ける。そして、東南アジアに対する不衛生という偏見の背景があり、義姉は主人公が食器洗いするとき、彼女の洗い方に対して、厳重に注意する。また、食文化の違いで、台湾料理をまだ作れない主人公が作った料理に対して、姑はさんざん文句を言う。一方、主人公を守るべき夫は日ごろ姑と義姉の差別言動を容認し、仕事が忙しくて、主人公とともに過ごす時間が少ない。さらに、姑は主人公の子育てを阻害し、子供に対して、ベトナム人の母親と出かけることは皆の笑いものになると堂々と発言した。怒りを感じた主人公は子供を連れ、公園に行った。公園で出会った同胞に悩みを打ち明け、アドバイスを求めた。結婚生活が円満な同胞は夫の協力と姑の教えや理解と自分の努力により、困難を克服したと告げ、主人公を励ました。その後、同胞のアドバイスをもらった主人公は困難を乗り越え、姑と仲良くなり、台湾人家族と幸せに暮らしをするという物語である。

3. 台湾人家族・台湾社会と同胞へのメッセージ

ベトナム籍花嫁と台湾社会との共生のために、国際結婚の当事者であるCHはこの演劇を通して、同胞と台湾人家族、台湾社会に対して、下記のメッセージを伝えたいと考えている。

① 台湾人家族・台湾社会へ

脚本の場面②で、「あなたはどこでこれ（主人公Yのこと）を買ってきたか。全く行儀を知らない女だ」、「くそ女、よくも私に口答えした、もう家には入れてあげないから」などと姑が主人公に対して失礼な発言の台詞、また、車を洗車しなかった主人公に、義姉が「早く彼女を家から追い出して。ベトナムに帰らせて」など暴言を吐いた場面はCH自身の経験である（CHは離婚する前に、日々同居した姑および義姉からの差別を受けていた）。これは、まさに台湾人のベトナム籍花嫁に対する偏見の縮図である。そして、場面②で姑の「うちの嫁になると、うちのルールを従うべき（嫁鶏随鶏、嫁犬随犬）」という言葉は多くのアジア花嫁が台湾に来たばかりのとき、だれでも姑や台湾人家族から言われた言葉である。台湾の生活習慣に従うことは当然なことだが、台湾生活にはまだ慣れていないアジア花嫁へ台湾人家族の配慮を喚起している。

子供を公園に連れて行くことに反対した姑の差別発言に対して、「おかあさん、どうして子供にそんな話をしたの。私だって子供の母親でしょう。私はベトナム人ですが、それがいけないことですか。ベトナム人でもあなたの嫁でしょう」という主人公の台詞は、嫁姑問題で苦勞したアジア花嫁全員が言いたいことであり、台湾人家族へのメッセージでもある。これに対して、公園で出会った結婚生活が順調な同胞の事例では、家事・育児に対する夫の協力と台湾文化や習慣の理解を教えた姑の存在の重要性を示している。要は、ベトナム籍花嫁の生活適応に関して、台湾人家族の協力があれば、順調な方向に向かうとCHは強調している。これも台湾人家族と台湾社会へのメッセージである。

② 同胞

台湾人の偏見だけではなく、ベトナム人女性自身も反省しないといけないというメッセージもある。ベトナムでは、足を組んで食事することはよくあり、悪い食事マナーと問題視されていない。しかし、台湾では、足を組んだり、音を立てたり食事することは教養がないとされている。この点に気が付かない多くの同胞に警告を与えるために、あえてこの内容を盛り込んだのである。さらに、場面③では、公園で出会った同胞Mが主人公の悩みに対して、「私達（ベトナム籍花嫁）は故郷を離れて台湾にやって来た。文化や習慣の違いにより、台湾人家族との誤解を引き起こした。しかし台湾人家族とよく話し合って、自分の悪い習慣を直していき、台湾人家族もついに私のことを受け入れてくれた。お互いに助け合い、励まし合いをしましょう」というアドバイスを出した。これは新しく来たベトナム籍花嫁が一日も早く台湾生活に適応できるようにと願うCHのアドバイスであ

る。

CH が書いた脚本の中で、主人公がホスト社会で遭った問題、台湾人家族との同居による揉め事、夫との信頼関係の不足、夫の育児に対する不協力、家事労働者的な扱いなどは、まさに前章で紹介したベトナム籍 C 会長、カンボジア籍 K など多くのアジア花嫁が直面した問題の集大成とも言える。このようにつらい経験をした CH が書いた脚本は十分な説得力があり、当日の観客たちから大きな拍手をもらった。観客の中にいた、演劇を見ながら気まずそうな顔をしていた台湾人夫の顔が印象的であり、おそらく自分の言動と主人公の夫が重なったことに気が付いたのかもしれない。また、この演劇は単なるホスト社会へのメッセージだけではなく、ベトナム籍花嫁自身も努力が必要であると訴えている。同胞同士の助け合いがホスト社会に適応していくために、きわめて重要な役割を果たすことを CH は強調している。演劇の中に隠されている台湾人家族・台湾社会へのメッセージであろうと同胞へのメッセージであろうと、いずれも、ベトナム籍花嫁と台湾社会との共生に役に立ち、よりよく生きるために、双方の注意を喚起するものと言える。

結論

結論に入る前に、各章の要約を述べる。序論の第1節では、研究目的と方法を紹介した。本論文の目的はアジア花嫁の生活適応に焦点を当て、台湾社会で直面している問題を明らかにすることである。そして、アジア花嫁の生存戦略の分析により、彼女たちは単なる受け身の弱者ではなく、周辺化された立場を脱出しようと懸命に頑張っている能動的な行為者であることを示したい。研究方法は文献調査と聞き取り調査、参与観察を併用した。その中で、高雄市三民区におけるアジア花嫁の聞き取り調査による研究が本論文の中心である。第2節では、日本のアジア花嫁に関する先行研究を紹介し、アジア人女性はしばしば被害者だと見なされ、彼女たち本人の主体性や声の欠如という先行研究の不十分な点を指摘した。第3節では、台湾人研究者による先行研究を、研究対象に基づき、1. アジア花嫁、2. 新台湾の子、3. 台湾人夫、4. 国際結婚仲介業者という4つの分類に分けて紹介した。従来の研究は農山漁村の地域に偏っていることがわかった。本論文は未だ十分に研究されていない都市部の国際結婚に焦点を当て、その実態の解明に努めた。

第1章「台湾におけるアジア花嫁」の第1節では、アジア花嫁に対するさまざまな呼称と定義を紹介し、彼女らが台湾社会で受けた偏見の背景を明らかにし、本論文ではアジア花嫁という言葉を選択した理由を述べた。続いて、中国と東南アジア出身のアジア花嫁に分けて、それぞれの国際結婚の歴史を紹介した。そして、統計からアジア花嫁の現状を把握した。第2節では、「プッシュ・プル理論」をもとにして、受け入れ国と送り出す国の双方の間に存在している社会的・経済的背景およびアジア花嫁の増加した諸要因を紹介した。本章ではアジア花嫁がホスト社会で周辺化された背景と事実を明らかにした。第3節では、本論文の主な調査地である高雄市に焦点を当て、高雄市の概況とアジア花嫁の現状、および主な調査地域である三民区におけるアジア花嫁の現況を紹介した。

第2章「政府の政策と公益団体の支援」では、アジア花嫁を早く台湾社会に溶け込ませるように、政府や民間団体それぞれが行った支援活動を整理した。第1節では、中央政府のアジア花嫁政策の具体的な内容と問題点を述べた。第2節では地方自治体である高雄市政府の支援体制およびアジア花嫁の支援を統括している新移民センターの成立の経緯などを述べた。第3節では高雄市政府が主催する生活適応クラスの現場と生活適応クラスの主催者から見たアジア花嫁に対する支援の問題点を述べただけではなく、主催者の改善すべ

き点を論じた。第4節では公益団体の支援活動に関して、「南洋台湾姉妹会」の活動を紹介した後、高雄市のキリスト教団体の支援活動を述べた。アジア花嫁政策の実行によって、台湾社会は確かに多くのアジア花嫁にとって、より生活しやすい社会になりつつあるが、政策宣伝の不十分で多くのアジア花嫁は自身の権利に関する現行の政策を知らなくて、その恩恵を受けることができない現状が明らかになった。

第3章「アジア花嫁のライフヒストリー」では、アジア花嫁の姿を明らかにするために、本人の語りを通して、彼女らが台湾社会で直面した困難を明らかにした。第1節では、高雄市在住の7人のアジア花嫁のプロフィールを紹介した。第2節では、結婚生活が継続している4人のライフヒストリーを詳しく取り上げた。彼女らは言語の壁と家庭内の人間関係、子育て、ネットワーク、就職という困難に直面した際、どのように乗り越えてきたかを明らかにした。第3節では、結婚が破綻した3人のライフヒストリーを詳しく取り上げた。3人の結婚生活が破綻するまでのプロセスと、離婚をめぐる生存戦略の工夫、離婚後の自立の道を明らかにした。第4節では、7人のアジア花嫁それぞれが取った生存戦略を論じた。7人のアジア花嫁の生存戦略の事例から、彼女らが単なる周辺化された弱者ではなく、自らさまざまなネットワークを使い、困難を乗り越えてきた主体性を持つ女性であることを明らかにした。

第4章「アジア花嫁のネットワーク」では、第3章と同様に、アジア花嫁本人の視点や事例から、彼女らがホスト国である台湾でどのように自分のネットワークを展開してきたかを分析した。第1節ではアジア花嫁の情報交換の場を研究するために、エスニック料理店と青果卸売業者の事例を取り上げた。第2節では同胞同士のネットワークの展開を考察するために、ベトナム籍花嫁からなる団体の活動を取り上げた。第3節ではベトナム籍花嫁と台湾社会との共生を喚起するために作成されたベトナム籍花嫁を描いた演劇を紹介した。本章で取り上げた事例と活動から、国際結婚に関して、当事者であるアジア花嫁、台湾人夫をはじめとする台湾人家族、双方の理解と努力が必要であると同時に、アジア花嫁のネットワークが彼女らの生活適応において、きわめて重要な役割を果たしていることが明らかになった。

第1節 アジア花嫁の生存戦略

1. 7人のアジア花嫁の生存戦略から見た主体性

① 結婚した動機と過程

先行研究は、多くのアジア花嫁は貧困の脱出のため、国際結婚を選択したと指摘されている[Hsia 1997: 141-148、呂美紅 2000、王宏仁 2001、陳嘉誠 2001、王秀喜 2004、吳美菁 2004、Nguyen・Tran 2010]。このような指摘は近年多様化した国際結婚の全貌を表してなくて、不十分である。実際、近年台湾と東南アジア、台湾と中国、双方の間で活発になった貿易関係と交流により、国際結婚を選択した動機は単なる経済的な要素ではなく、多様化している。まず、結婚した動機から、7人のアジア花嫁の主体性を見てみる。

7人のアジア花嫁のうち、夫と知り合った経緯によると、インドネシア籍 G、カンボジア籍 K、ベトナム籍 C は、先行研究が取り上げている台湾人男性とアジア花嫁との国際結婚、つまり結婚仲介業者の紹介による国際結婚であり、アジア花嫁の「貧困脱出」というイメージの典型的な例と見なされる。実際、カンボジア籍 K とベトナム籍 C は学歴と実家の経済力に関して、確かにこの典型的な例に当て嵌めることができる。しかし、高学歴のインドネシア籍 G は母国では裕福な家庭の生まれで、貿易会社で働いていた。たとえ結婚仲介業者の紹介で今の夫と知り合ったとしても、インドネシア籍 G は国際結婚の主導権を握っていると言える。結婚する前に、彼女は父親とともに、彼の招待に応じて、高雄での生活ぶりを見て、また結婚生活で最も悩まされる舅姑問題が存在していないことを確認した上で、結婚したのである。

台湾企業の海外進出とともに、両国の人々の交流が活発になり、増えてきたケースが中国籍 W とベトナム籍 CH の事例である。タイ籍 M とベトナム籍 HA は彼女らの台湾への移住労働をきっかけとして、台湾人男性と知り合って結婚した。この4人とも結婚前の交際を経てから、国際結婚を選択したのである。タイ籍 M は結婚後、嫁姑問題を回避することができると思い、性格温厚な台湾人男性と結婚したのである。国営貿易会社でよい仕事を持っていた中国籍 W は相手の熱意に感動し、周囲の反対を押し切って、国際結婚を選択したのである。元婚約者の不慮の事故によって地元では悪女とされたベトナム籍 HA は人生の逆転を図るため、結婚を決意したのである。ベトナム籍 CH は少女時代から台湾文化への憧れ、

また台湾人男性は女性にやさしいという話を聞いて、台湾人の幹部と結婚したのである。

以上のように、典型的な貧困脱出の目的で、夫と結婚したカンボジア籍 K、ベトナム籍 C の事例もあるが、インドネシア籍 G とタイ籍 M のように、嫁姑問題の回避を確認した上で、国際結婚の主導権を握り、自ら人生の道を選んだ女性もいる。さらに、人生の逆転を図って、国際結婚を生存戦略として使ったベトナム籍 HA のような女性もいる。7 人のアジア花嫁の中には、単なるカンボジア籍 K とベトナム籍 C のように台湾人男性に嫁として選ばれた受身的な立場の女性もいるが、タイ籍 M とインドネシア籍 G と中国籍 WA とベトナム籍 HA は、自ら相手の家庭環境・経済事情と結婚後の生活を計算し、国際結婚を選択したのである。そして、台湾文化への憧れをきっかけとして、国際結婚の道を選んだベトナム籍 CH のケースもある。このような多様化した結婚動機から、本論文が取り上げたアジア花嫁の主体性の一端が明らかになった。

② 家族構成

多くの先行研究によると、台湾生活の適応に関して、台湾人家族と同居することに伴う複雑な人間関係による揉め事が最も深刻な問題の一つである[陳李愛月 2002、李玫臻 2002、吳美菁 2004]。適応状況に関して、核家族で暮らすアジア花嫁は大家族のアジア花嫁より暮らしやすいと指摘されている[吳美菁 2004]。本論文が取り上げた 7 人のアジア花嫁は台湾で 2 番目に大きな都市である高雄市に在住している女性である。農村では、アジア花嫁は跡取りになる子孫を生み、農作業を手伝い、高齢者の介護をする安価な再生産労働者とみなされて、大家族と同居することを拒むことが難しい[顔錦珠 2001、夏曉鵬 2002]。これに対して、都市部の国際結婚では、多様化した家族構成や都市部の社会・生活環境という背景で、この 7 人のアジア花嫁は農村部のアジア花嫁よりも生存戦略を発揮する余地が大きい。

結婚当初の家族構成について、核家族で暮らすタイ籍 M と中国籍 WA、インドネシア籍 G、ベトナム籍 HA の事例を見てみる。農村なら、タイ籍 M と中国籍 WA は舅や姑と同居しなければならない。都市部という環境のおかげで、タイ籍 M と中国籍 WA は夫の親と同居しないという結婚条件を申し出ても、周りの人々に非難されず、嫁姑問題を回避することができた。ベトナム籍 HA の夫は長年親との音信不通の関係であり、また結婚前に、インドネシア籍 G の舅と姑はすでに亡くなっていたので、二人とも嫁姑問題に直面したことがない。

台湾人家族との同居を拒否できなかったカンボジア籍 K、ベトナム籍 C と CH の事例を試みる。この 3 人は結婚当初、家事労働者同様の扱いをされた。しかし、カンボジア籍 K は、夫との信頼関係を築いてからインドネシア人ヘルパーを雇い、姑の介護など無償な家事労働から脱出できた。もし、カンボジア籍 K が農村男性と結婚していれば、外国人ヘルパーの雇用という戦略を使うことができなかったであろう。そして、ベトナム籍 C も夫の信頼を得て、家庭における地位の上昇を獲得した。この戦略を成功させるためには、夫の信頼以外、2 世代住宅という背景を無視してはいけない。高雄でも、都市部であるゆえに、2 世代住宅はよく見かけられる。もちろん、農村部でも 2 世代住宅はあるが、一般的には、農村では 2 世代住宅のライフスタイルは普及していなく、ベトナム籍 CH のように、結婚後ずっと姑と義姉の不公平な扱いを受け、離婚にまで至ったケースもある。

本論文で取り上げたアジア花嫁の事例は都市部の国際結婚であるゆえに、従来から家父長制が強い農村部の国際結婚とは大きく違い、彼女たちを束縛する要素が少ないし、それぞれの生存戦略を発揮する余地が大きくなる。都市で暮らすから家族構成や生活スタイルが多様であり、必ずしも舅姑と同居するわけではない。舅姑と同居しても、2 世代住宅の影響で使用人のような家事労働から脱出できた女性もいる。このような生存戦略を農村では使うことが不可能である。ベトナム籍 CH 以外の 6 人の事例から、都市部の国際結婚は農村部の国際結婚よりも生存戦略が功を奏する可能性が大きく、主体性をより発揮しやすい環境に恵まれていることが明らかになった。

③ 離婚

台湾におけるアジア花嫁の離婚後の生活適応の研究によると、離婚後の情緒不安定と学歴の制限による経済自立の困難、経済的に弱い立場による親権の放棄など、さまざまな困難が述べられ、離婚したアジア花嫁は一般のアジア花嫁より多大な困難を抱えているという[姚舒淳 2006、陳黛羚 2011]。また、DV を受けたベトナム籍花嫁の調査をした唐と王は、彼女らが直面したのは夫の DV 以外、夫への DV 告訴、離婚裁判、子供の親権調停・裁判、離婚後の強制送還、台湾の在留権、離婚後の自立などの多くの解決困難な問題であると指摘した[唐文慧・王宏仁 2011]。実際に本論文が取り上げた結婚が破綻した 3 人のアジア花嫁の事例を見ると、ベトナム籍 CH 以外、中国籍 WA とベトナム籍 HA は、すべて上記したような困難に直面したが、みんなそれぞれ異なる生存戦略を工夫し、乗り越えてきた。

ベトナム籍 HA が使った生存戦略を見てみる。彼女は DV を受けた際、すぐに台湾人同僚のネットワークを使い、支援を求めて、警察の通報により、夫の再犯を防いだ。そして、国籍をまだ取得していないベトナム籍 HA は不倫相手の子供ができた段階で離婚すれば、台湾での滞在と子供の中華民国の国籍取得が困難になった。そのため、彼女は交際相手から資金援助をもらって、夫が国籍取得に協力してくれることと国籍取得後の円満離婚を条件にし、夫の借金を肩代わりすることになった。離婚をめぐる困難の克服に関して、交際相手の経済的かつ精神的支援が大きな役割を果たしていることがわかった。

ベトナム籍 CH が使った生存戦略を見てみる。離婚当初、CH は息子の親権のために、不倫した夫が提示した慰謝料なしの離婚条件を受け入れせざるをえなかった。しかし、彼女はホスト社会で築いてきた台湾人のネットワークを活用し、社長をはじめとする同僚の支援やベトナム姉妹会で知り合った同胞の励みもあり、次第に離婚後の挫折から立ち上がった。その後、職場で知り合った離婚歴がある台湾人公務員との交際を深め、彼は経済面も精神面も CH を支え、CH 親子に一般のアジア花嫁の母子家庭よりも良い生活を提供している。子供の親権を取得できないアジア花嫁と比較すれば、CH が親権を取得できた背景には、離婚前にすでに安定した仕事を持ち、積極的にネットワークを築いてきたことがある。

中国籍 WA の事例に関して、彼女は台湾の国籍を取得するまで、ひだすら夫の DV に耐えるのではなく、舅姑を自分の味方につけることによって、夫の暴力のエスカレートを抑止した。親権の取得に関して、闇金経営をしていた夫が逮捕されると、夫が親権を手放すことを見越した WA は夫と真正面から衝突せず、離婚後も夫のすぐ近くに住み、地域のネットワークを利用し、夫の情報と娘の様子を把握することが出来た。彼女は積極的に夫の近所でよい人間関係を作り、さまざまな困難を乗り越えた。

アジア花嫁はホスト社会では周辺化された地位に置かれている。そして、結婚生活が破綻したアジア花嫁はさらに周辺的な立場に追いやられている。しかし、本論文で取り上げた 3 人は主体性を発揮し、ホスト社会で築いた台湾人のネットワークと同胞のネットワークをうまく使い分け、強制送還を免れ、中華民国の国籍と子供の親権を取得することができ、何とかホスト社会で生き残ることができた。ホスト社会では、離婚したアジア花嫁に対して、子供に会えなかったり、母国に強制送還されたりする弱者のイメージが定着している。ところが、この 3 人はそれぞれ異なる戦略を使い、アジア花嫁に対するステレオタイプを覆したのである。

④ 子育て問題

子育て問題は二段階に分けて論じる。一つは妊娠・出産の段階であり、もう一つは子供が学齢期に入る段階である。

まず、出産前後の問題を見てみる。先行研究によると、ホスト社会での生活に慣れていない状況で早期妊娠したアジア花嫁が大多数である[王宏仁 2001、顔錦珠 2001]。本論文が取り上げたインドネシア籍 G と中国籍 WA は早期妊娠したが、核家族で暮らし、大家族との同居による揉め事やストレスとは無縁な妊娠期間を過ごすことができた。一方、出産と「坐月子」をめぐる困難に関して、ベトナム籍 HA は母国とのネットワークを利用し、ベトナムから母親を呼び寄せ、新生児の世話と家事を任せた。そして経済的な余裕がない時期は、高雄の保育所に預けていた息子をベトナムの両親に託すという生存戦略で乗り越えた。このような現象は「国境を越えた育児委託」(跨國托育)と呼ばれている[唐文慧・王宏仁 2011]。アジア花嫁と結婚した男性は経済的に余裕がなく、夫婦は共働きしないと家計の維持が困難になる。そして、ベトナムの物価は台湾よりはるかに安いので、子供を母国にいる両親に託すベトナム籍花嫁も多い。

次に、学齢期に入る段階の教育問題を見てみる。先行研究によると、中国語能力が不足しているアジア花嫁にとって、子供の学業指導は最も悩まされる問題の一つである[陳李愛月 2002、陳美惠 2002、林璣萍 2003、陳湘淇 2003、陳姿秀 2006、謝慶皇 2007、王秀喜 2004、ウシンイン 2010]。大半の先行研究は、家庭の経済的・社会的地位が新台湾の子の学力を左右していると述べている[林璣萍 2003、陳湘淇 2003、陳姿秀 2006、謝慶皇 2007]。

「新台湾の子」の学力が低いという先入観はホスト社会では定着している。それは、中国語を読めないアジア花嫁は子供の学業を指導できないという一般人の考えである。

本論文で取り上げたアジア花嫁はそれぞれの戦略を使い、困難を克服してきた。工務店社長と結婚したインドネシア籍 G は教育熱心だが、中国語を読めないから、直接学業指導ができない。しかし、娘にマンツーマンの塾に通わせ、良い成績を保つことが出来た。中国語能力が堪能なベトナム籍 CH もできるだけ息子によい学習環境を提供したく、進学塾に通わせ、息子の立身出世を望んだ。経済的な余裕がないベトナム籍 C は娘に「中国語がわからない母に授業の話をたずねても無駄」、「学校にいる間にしっかり勉強しなさい、分からないことがあればすぐに先生に聞く」という教育方針で成績優秀な娘を育てあげた。ホスト社会で偏見と差別を受けた自分自身の経験もあり、母親がアジア花嫁であるがゆえに、

子供の行儀や成績が悪いとホスト社会の人々に言われたくないため、彼女らは子供の教育に非常に熱心である。タイ籍 M と中国籍 WA のように、家計状況が良くないため、子供が非行の道にさえ走らなければ何でもよいと考えている事例もある。

子供の教育に関しては、インドネシア籍 G とベトナム籍 C、CH のように、自身の子供を成績優秀な子供に育て上げることにより、ホスト社会の台湾人からアジア花嫁および「新台湾の子」に対する先入観を払拭したいと考えている人が多い。子供の教育戦略は自分の生存戦略にも直結するので、一般的に言って家庭内の地位とホスト社会の地位の上昇をめざし、彼女らは子供の教育に非常に熱心である。ただし、タイ籍 M と中国籍 WA のように、アジア花嫁の家庭の経済力が子供の教育環境に大きく影響するので、すべてのアジア花嫁が教育熱心な訳ではない。このような研究結果は、経済力により、各家庭の教育事情も違う。

以上のように、本論文で取り上げた 7 人のアジア花嫁の中には、子育てに関する困難に直面したとき、母国のネットワークを活用して克服してきた女性もいる。ただし、家庭の経済力により教育方針が大きく変更する。子供を塾に通わすことができない場合、学校の環境をよく利用させ、学業指導の困難を乗り越えてきた女性もいる。多くのアジア花嫁は子供の教育を自らの生存戦略の一つと考え、ホスト社会での不公平な立場からの脱出を目指している。学力が高い子供を育てることにより、ホスト社会で子供の教育に無責任や無関心などのアジア花嫁に対する偏見を払拭することができる。そして、子供の立身出世により、自分の老後の生活を保障することができる。もちろん、家庭の経済が苦しく、既存の「アジア花嫁は教育に熱心ではない」というイメージに当てはまる女性もいる。7 人のアジア花嫁の中で、タイ籍 M と中国籍 WA 以外、家族構成と夫の経済力などに応じて、子育てと教育に関して異なる困難に直面しても、それぞれ異なる生存戦略を工夫し克服してきた。

2. 同胞ネットワークの活動から見た主体性

① ネットワークの結節点となったベトナム籍 S とカンボジア籍 Y の事例

先行研究によると、ベトナム籍花嫁が店を開く動機は「職場の排除」と家計の改善のための事例が多い[頼淑娟 2010、謝美玲 2012]。「職場の排除」とは、ホスト社会の職場では

雇い主の不公平な扱いや台湾人同僚のいじめである。一般のアジア花嫁は社会と家庭内の不公平な立場から脱出するために自ら起業を図り、主体性を発揮したのである。これに対しSの開店理由はほかのアジア花嫁と違い、彼女の交友関係を心配した姑が自分の目の届く範囲で嫁の行動を見守りたいと考え、所有の店舗をSに開店させたのである。ただし、この点は先行研究の事例と同じように、ほぼ自宅の近くの場所に小吃店を開業することを選択した。一般的に、台湾人家族の不信任感を避け、また子供の面倒を見るために、多くのベトナム籍花嫁は家の近くの店舗を探した。

店を成功させた背景として、店主のネットワークの活用と客に対する異なる対応、近所付き合いがよく指摘される。ベトナム籍花嫁の起業する過程に焦点を当てた頼淑娟によると、食材の仕入れ業者に対して、自ら「大量購入の値引き」戦略を考案し、近隣のオーナーとのよい人間関係を工夫してきたという。また、人件費の節約のために、店主は家族に店の業務を手伝ってもらっているケースも多い。さらに、店が忙しいとき、来店した常連の同胞もよく臨時的な無償の働き手として業務を手伝う。台湾人客とベトナム人客の好みに合わせ、味付けを調整している。最後は、ホスト社会では、東南アジア風のエスニック料理店に多少偏見を持っているが、このような偏見を払拭するために、店主は近隣台湾人オーナーに対して常に礼儀正しく対応しているという[頼淑娟 2010]。頼の研究結果と比較すれば、人件費の節約と味付けの調整、近隣台湾人オーナーとの対応に関するSの戦略とほぼ同じである。ただし、Sの店は姑の所有する店舗で、家賃という経済面の負担がない。また、姑が長年市場の中に住んでいるので、Sは姑のネットワークを利用し、開店前の準備や食材の仕入れなどの問題を克服してきた。店を成功させた背景から、ベトナム人女性はホスト社会で築いた台湾人ネットワークと同胞のネットワークを使い分け、さまざまな戦略を工夫し、ホスト社会の人々に受け入れられるように頑張っていることがわかる。

店を成功させた意義に関して、本人の家庭内と社会的地位の上昇と家計の支援、同胞のネットワークの結節点などの点がよく述べられる[邱琬雯 2007、頼淑娟 2010、謝美玲 2012]。先行研究によると、店の成功により、ベトナム人花嫁でも店主になれると証明し、「地位の逆転」を果たした[頼淑娟 2010、謝美玲 2012]。そして、家計を分担することにより、家庭内の地位の上昇にも繋がった。頼淑娟と謝美玲によると、ベトナム飲食店では、故郷の料理を食べられるだけではなく、店主と同胞の客と母語で話せられるし、ホスト社会での「相談センター」とも言える[頼淑娟 2010、謝美玲 2012]。エスニック経済を研究した王志弘は、

一般の移住労働者に対して、店主は居住権を獲得し、より多くの経済的・社会的資本を持ち、エスニック・グループのネットワークではリーダー的な位置を占めている。また、一般のアジア花嫁に対して、店主はホスト社会に馴染んでいて、経済的な優勢を持ち、同胞に集まりの場と憩の場を提供している。店は同胞ネットワークの結節点だけではなく、同胞とホスト社会との繋がりにも貢献し、同胞ネットワークと地域社会ネットワークの結節点ともなった[王志弘 2006 : 186-187、謝美玲 2012 : 26]。先行研究の結果と比較すると、S自身も店の成功を通して、ホスト社会の台湾人から評価され、家庭内の地位の上昇を果たしたと言える。ベトナム人同胞にとって、Sの店は単なる故郷の味を提供する店だけでなく、ホスト社会への適応を促進し、ホスト社会におけるネットワークの形成に貢献する。店の経営を成功させたベトナム人女性の小吃店は同胞とホスト社会との共生に大きく貢献しているとも言える。

青果卸売市場の果物屋の店主と結婚したカンボジア籍Yの事例を見てみる。Yは同胞のネットワークの結節点となった背景には、もちろん夫の店は高雄市屈指の青果卸売市場にあり、接触する人々の多さと関連があり、なによりも彼女自身の面倒見が良い性格と最も深い関連がある。最初、高雄に来たとき、中国語も台湾語も喋られなかったYは、すぐ夫に青果卸売市場に連れて行かれて、果物屋の商売を手伝っていた。彼女の明るい性格で、周囲の台湾人オーナーに可愛がられ、台湾語や商売のことをすべて教わった。そして、この市場に溶け込んで地元の台湾人のネットワークを築いた。一般の同胞と比較すると、Yは恵まれている。彼女はホスト社会に周辺化された同胞の境遇に同情し、移住して間もない同胞の手助けをしている。そして、Yは家計に困っている同胞のために自ら市場の台湾人オーナーにアルバイトのチャンスを探している。もちろん、Yの店自身も同胞を雇っている。Yを通して、カンボジア籍同胞同士のネットワークが拡大し、相互扶助のシステムができただけでなく、同胞のネットワークと地域の台湾人ネットワークをうまく接合している。このようなネットワークの効果を十分に発揮するには、Yの性格と発揮した主体性は重要な役割を果たしている。

以上のように、ホスト社会で成功を収めたベトナム籍Sとカンボジア籍Yは、二人ともアジア花嫁の先輩として同胞同士の間、さらに地域社会の台湾人と同胞をつなぐ役割を発揮し、双方のネットワークの結節点となり、アジア花嫁と地元社会の双方ともに、貢献できるキーパーソンになっている。

② ベトナム籍花嫁からなる団体の活動

第4章で高雄市ベトナム姉妹同郷会と高雄市ベトナム同郷会の活動を取り上げた。ここでは、高雄市インドネシア姉妹親睦会の活動に関する先行研究と比較しながら、ベトナム籍花嫁からなる団体の活動を通して、アジア花嫁の主体性を見ていきたい。具体的には、参加した動機と活動の現場、活動の困難という3点を論じる。

第一の参加した動機に関して、高雄市インドネシア姉妹親睦会の活動に関する先行研究によると、多くのメンバーは困難に遭った同胞を助けたい思いが強くて、また、ホスト社会で同胞との交流をしたくて参加したという。とくに、元会長はリーダーシップが強くて、多くの同胞に声をかけ、入会してもらった[顔淑婷 2010]。本論文で取り上げた高雄市ベトナム同郷会の幹部たちも同様に、新しく来た同胞に自分のような苦しい経験をさせないように、同胞の力になりたいと思って参加した事例が多い。ここで、積極的に活動に参加すること自体は主体性を発揮した行為と言える。ただし、すべてのアジア花嫁が自ら積極的に社会活動に参加するわけではない。たとえば、本論文が取り上げた高雄市在住の7人のアジア花嫁の中で、ベトナム籍CとCH二人だけが積極的に社会活動に参加している。家庭生活を重視するインドネシア籍Gはこのような活動に興味がなく、高雄市インドネシア姉妹親睦会に参加していない。

第二の活動現場に関して、インドネシア姉妹親睦会では、台湾社会にすでに馴染んでいる幹部が新しく来た同胞に生活情報を教えたり、識字クラスに関する情報を提供したりしている。そして、会員同士の会話の内容は台湾人家族にかかわる揉め事と子育て問題の相談、福祉支援の情報などである[顔淑婷 2010]。高雄市ベトナム同郷会のイベント現場でも同様に、幹部たちは新しく来た同胞に地元の生活情報を教えたり、家庭生活の悩みの相談に応じたりしている場面がよく見かけられる。積極的に同胞を助ける幹部たちであろうと、自ら団体に参加し、支援を求めに来た会員であろうと、双方とも主体性を発揮している。彼女たちのおかげで、ホスト社会におけるアジア花嫁の相互扶助のシステムが次第にできてきた。

高雄市インドネシア姉妹親睦会の活動を通して、台湾社会に対する理解を深め、ネットワークを広げ、同胞だけでなく、台湾人の知り合いも増えてきた。そして、活動参加を通して、地元社会で得た評価によって家庭内地位の上昇も果たした。さらに、台湾人家族との関係を改善した会員もいる。全体的に会員たちは台湾社会に馴染むことができ、自信を

持つようになった[顔淑婷 2010]。高雄市ベトナム同郷会の活動も同様に、幹部たちを始めとする多くのベトナム籍花嫁はホスト社会における同胞との交流の場を通して、自分の居場所を見つけることができた。そして、同胞の助け合いを通して、周辺化された自分に対して自信を持てるようになった。ただし、台湾人家族との関係の改善という点に関して、やはりそれぞれで事情が違ふ。たとえば、会長 C は活動に参加しても、舅姑との長年の葛藤に関していまだに和解していない。また、夫の DV を受けたベトナム籍花嫁はここで支援をもらい、夫と離婚した女性もいる。全体的には、社会活動の参加を通してアジア花嫁のエンパワーメントに大きく貢献している。

第三の活動の困難に関して、高雄市インドネシア姉妹親睦会では、多くの同胞は台湾人家族の反対で活動に参加できない。そして、幹部が即時に同胞のニーズに応えることが困難で、不満を漏らすメンバーが多くなり、退会する人もいる。幹部の育成が困難で、会員は後任の幹部を信用しないことが多い[顔淑婷 2010]。これ以外に、顔が指摘していない問題がある。それは、高雄市インドネシア姉妹親睦会に関して、政府がアジア花嫁に提供している「便宜」が常に固定した幹部たちに享受されている問題である。高雄市インドネシア姉妹親睦会が直面した困難に関して、高雄市ベトナム同郷会はすべて直面している。しかも、会員数と組織の規模の違いにより、高雄市ベトナム同郷会で存在している問題は高雄市インドネシア姉妹親睦会より複雑で解決しにくい。第 4 章で述べたように、政府がエスニック・グループに提供する「表舞台」の舞台には常に固定した幹部たちが登場している。活動参加者の多くはベトナム南部出身者で、ベトナム北部出身者は馴染んでいない。そして、組織内の不和による活動の停滞などのさまざまな問題が存在している。しかし、高雄市ベトナム同郷会の活動によって、同胞のネットワークの拡大と台湾社会への適応の促進、アジア花嫁に対する偏見の是正、「新台湾の子」のアイデンティティの促進、ベトナム籍花嫁のエンパワーメントの達成などが実現したことは事実である。これらの活動の最終目標はただ一つ、すなわち周縁化された立場からの脱出であり、ホスト社会における地位の向上である。同郷会における彼女らの活動はホスト社会におけるベトナム籍花嫁の生存戦略の一つとも言える。

以上のように、7 人のアジア花嫁のそれぞれ異なる生存戦略から、彼女らはただ単に夫の DV、台湾人家族の差別待遇に耐え、泣き寝入りした弱者ではなく、ホスト社会で生き残るため、主体的に生存戦略を工夫し、さまざまな困難を乗り越え、懸命に生きようとして

いることが理解できる。そして、ホスト社会におけるネットワークの展開によって成功を収めたベトナム籍Sとカンボジア籍Yの二人は同胞同士の中に、さらに地域社会の台湾人と同胞をつなぐ役割を発揮し、双方のネットワークの結節点となり、アジア花嫁とホスト社会の共生に貢献できるキーパーソンになっている。さらに、相互扶助のネットワークを達成した高雄市ベトナム同郷会の活動から、積極的に同胞を助ける幹部たちと自らホスト社会のネットワークを展開しようとするベトナム籍花嫁は、みんなそれぞれの主体性を発揮し、懸命にホスト社会で生き残ろうと頑張っていることを明らかにした。つまり、本論文で取り上げた多くのアジア花嫁は単なるホスト社会で常に描かれているような援助を待ち、「教化すべき」「立場が弱い」エスニック・グループではなく、ホスト社会で築いてきた台湾人および同胞ネットワークを巧みに使い分け、さまざまな困難を克服してきた主体性を持った女性達である。

第2節 アジア花嫁と台湾社会との共生

1. 政府に対する提言

第2章で取り上げた政府の政策内容と実行面を検討すると、政策内容に関して、「優生学的医療保健」におけるアジア花嫁に対する人権侵害、「教育文化の上昇」における教育施設の利用者の少なさ、「子育てへの協力」における「新台湾の子」への差別、「就労権利の保障」における情報伝達の不足、「人身安全の保障」と「法令制度の整備」における法律の不備、「意識啓発の実行」における即効性の欠如などという問題点が明らかになった。そして、実行面に関して、現場担当者がアジア花嫁への配慮の欠如と政策情報の伝達の不足などの問題点も存在している。これらの問題点を改善するために、現行政策の修正が望まれている。

「優生学的医療保健」について、出産前の遺伝診断検査、子宮内リング、結紮手術の経費などの手当てに関する情報をアジア花嫁に通知するが、しかし、手術の選択権はアジア花嫁本人に任せるべきである。衛生署の役人は、自宅を訪問し、避妊に関する手術を勧誘すべきではない。

「教育文化の上昇」における教育施設の利用者の少なさに関して、アジア花嫁が進学を諦める事情を調査し、上級クラスの進学制度と授業内容を検討し、より多くのアジア花嫁

が進学するような教育制度に改善すべきである。

「子育てへの協力」について、人権団体の有識者は「新台湾の子」を対象にする無料「安親班」は差別政策と批判している。しかし、ベトナム籍 C をはじめとする多くのアジア花嫁はこの政策を評価している。

「就労権利の保障」について、手紙やホームページなど、活字による広報だけではなく、口コミの方法も併用すべきである。今まで、アジア花嫁は同胞のネットワークを通して仕事を見つけている。つまり、従来の活字による広報は、中国語能力が不足している東南アジア出身のアジア花嫁にとって理解しにくい。地元のアジア花嫁の情報に対して、最も詳しい里長¹³³の人脈を使い、積極的に地域のアジア花嫁に就労権利の情報を提供すべきである。

「人身安全の保障」と「法令制度の整備」に関し、多くのアジア花嫁は DV 予防のホットライン 113 を知っている。しかし、離婚後の国籍および親権取得の困難のため、多くの被害者は国籍取得するまで、法的措置を求めることを放棄し夫の暴力に耐えるしかない。中国籍 WA はまさにこのような事例である。ベトナム籍 CH は夫の暴力という被害がないが、国籍取得するまで大家族の使用人扱いを強いられていた。そのため、DV 被害者に対して、離婚後も中華民国の国籍の取得に関する法的条件の緩和を検討すべきである。また、外国人の帰化に関して、中華民国の国籍を取得する前に、まず母国の国籍を放棄しなければならない。もし、母国の国籍を放棄し、中華民国の国籍を待っている間に夫と離婚すれば、無国籍の状況になりやすい。このような法律は改正すべきだ。

「意識啓発の実行」に関して、アジア花嫁に対する偏見は短時間では改善することは困難だが、マスメディアの力を利用し、市民の意識啓発を促すべきである。近年「台湾公共テレビ」はアジア花嫁を題材としたドラマを通して、彼女たちに対する理解と東南アジア諸国に対する台湾人の認識を深めようとしている。このようなドラマは大きな反響を呼び、アジア花嫁に対する先入観の払拭に貢献している。そのため、このようなドラマの放送は、市民の意識啓発を促すことができると考える。

実行面に関して、政府は国民が包容と受容の態度を持ち、平等に接し、異なるエスニック・グループを認めると呼びかけているのに、公的機関の現場の担当者自身がアジア花嫁に対する不当な言動を改善すべきである。実際、筆者が移民署に帰化に関するパンフレッ

¹³³台湾における行政区画の末端組織の最下級である里の長である。里長は選挙のために、常に管轄地域内の「里民」の冠婚葬祭に出席し、地域内の国際結婚の情報を熟知している。

トを収集しに行った際、移民署のスタッフは筆者がアジア花嫁だと思い、「あんたどこから来たの」とマナーが良くない聞き方をした。そのため、アジア花嫁とよく接触している公的機関の役人を対象にして、多文化教育の授業を実施すべきである。現場担当者の態度の改善により、アジア花嫁が公的機関を敬遠している状況の改善にも繋がる。

さらに、教育現場ではアジア花嫁や「新台湾の子」に対する教師自身の接し方も注意すべきである。聞き取り調査から、タイ籍 M の娘の担任は母親がタイ人であるために、M の娘に対して先入観を持ち、M の娘が発達障害で養護学校に通わせるべきなどの差別発言をしたということを聞いた。そのため、多文化教育は生徒を対象にするだけではなく、教壇に立っている教師にも受講させるべきである。「新台湾の子」に対する教師の態度も同時に、アジア花嫁と「新台湾の子」に対する台湾人生徒の接し方に大きな影響を与えている。

高雄市生活適応クラスの現場の担当者から多くのアジア花嫁とその家族は政府の福祉政策や申請できる手当を知らないという事実を聞いた。政府は福祉を提供する際、アジア花嫁の利用状況をもっと把握すべきである。たとえば、長く台湾に住んでいるアジア花嫁を雇い、定期的な家庭訪問という制度を設け、特に台湾に来てまもないアジア花嫁を対象に地元生活への支援を行うべきである。

生活適応クラスは中国籍配偶者には向いていない。それは、言語の壁がない中国籍配偶者にとって、中国語学習の授業が多い生活適応クラスは時間の無駄である。そのため、生活適応クラスは中国籍配偶者と東南アジア出身のアジア花嫁に分けて、開講すべきである。中国籍配偶者なら台湾語や客家語の授業に変えてもよい。そして、台湾に来て間もないアジア花嫁にとって、わかりやすい内容を用意すべきである。難しい法律の授業では、通訳のボランティアを付けて、プリントも多言語バージョンを用意すべきである。

2. 民間団体に対する提言

第2章で取り上げた民間団体の支援活動に関して、日ごろアジア花嫁と接触している民間団体は中央政府と地方自治体よりもアジア花嫁の実態を把握している。このような民間団体にはキリスト教団体が多く、キリスト教団体がアジア花嫁を支援する最終目的はアジア花嫁たちを改宗させることである。筆者は高雄市財団法人キリスト教会聖愛堂が実行した生活適応クラスの授業を調査した。授業の後で、筆者がキリスト教団体スタッフの授業反省会に参加した際、スタッフの「親愛なる主イエス・キリストよ。より多くの外国籍配偶

者が信者になる道を指示してください」という祈りを聞いた。また、接触した一人のベトナム籍花嫁は、スタッフの積極的な勧誘に反感を覚え、それ以来、生活適応クラスに参加しなくなった。第2章で述べたように、キリスト教長老教会の林偉聯牧師が率いる献身的な支援活動は、高雄市在住のアジア花嫁と高雄市政府の間で評価されている。しかし、ほかのキリスト教団体が生活適応クラスを主催する際、一部のスタッフは露骨な宗教勧誘でアジア花嫁の反感を買う事例もあった。そのため、今後、宗教団体がアジア花嫁を支援する際、宗教勧誘の節度に注意すべきだ。

「南洋台湾姉妹会」は長年アジア花嫁のエンパワーメントの促成に取り組み、中国語学習および、多文化講師や東南アジア言語の通訳人材の育成、演劇の活動をしている。そして、人権団体と連携し、アジア花嫁の権利と利益のために、入管法の修正デモに参加した。

「南洋台湾姉妹会」やほかの民間団体の訴えで、アジア花嫁の権利と利益は次第に改善されるようになった。このようなアジア花嫁の立場に立って、彼女たちのエンパワーメントのために展開した支援と思われるが、すべてのアジア花嫁がこのような活動を全面的評価しているとは限らない。一部のアジア花嫁は同胞をデモの道具として利用する「南洋台湾姉妹会」の活動を批判した。抗議に参加するアジア花嫁の姿を見た一部の台湾人家族は、今後自分の妻の行動をますます制限するかもしれないという懸念がある。今後、民間団体がアジア花嫁をデモに参加させる場合、一般のアジア花嫁の立場への配慮も必要である。

3. 台湾社会に対する提言

第1章でも言及したように、台湾では長く「近代化」あるいは、経済活動の発展度という基準でもって異文化を見てきた。開発途上国である東南アジア諸国や中国に対して、文化的に教養がない、物質的に衛生分野が不備だという先入観で、東南アジアと中国出身の人々を見下している風潮がある。そして、アジア花嫁に対するホスト社会の一般人の偏見は新聞メディアの報道と台湾政府の政策に大きく関連している。アジア花嫁に対する報道は常に両極端で客観性が乏しい。また、台湾のマスメディアは近年新聞報道をバラエティ番組に仕立てにしているという批判の声が絶えない。心身障害者の夫と知らず結婚したアジア花嫁による国際結婚の悲劇は、常にマスメディアの過度な報道によって全国のあらゆるところに知られている。

犯罪集団は「偽装結婚、実は売春」（假結婚、真賣淫）という犯罪手口を使い、中国籍配

偶者を不法入国させたり、ベトナム籍花嫁が同胞に呼びかけ、家族を捨てて集団売春をしたりするという報道により、アジア花嫁に対する悪いイメージが形成された。このように、少数のアジア花嫁が起こした違法行為が、メディアの報道によりアジア花嫁全体に対する悪いイメージを広げた。アジア花嫁本人だけではなく、「新台湾の子」に関する知的障害や発達障害の記事や、中国語を読めないし話せない「外国籍花嫁」は、国の将来を担っている「新台湾の子」の教育に適任できないなどの記事が次々とマスメディアで報道された。アジア花嫁や「新台湾の子」に関する加熱な報道は彼女たちに対する一般人の先入観を植え付けたとも言える。

政府はマスメディアの報道に影響を受け、国の報告書は堂々とアジア花嫁の家庭および「新台湾の子」に関して下記のような差別的な発言を書いている。「跡取りになる子供を生む責任を担わされているアジア花嫁と結婚している台湾人男性の一部は高年齢、心身障害者、社会的地位や経済的地位が低い人である。優生保健に注意しないと、その子供たちは親の心身の病気の影響のもとに、先天性欠陥か発展が遅れる予備軍になる可能性が非常に高い」と書かれている。

マスメディアの報道や国のアジア花嫁政策の影響を受け、一般の台湾人にアジア花嫁への偏見が植え付けられているともいえよう。2003年11月号の『大地地理』雑誌のアジア花嫁に対する台湾人のイメージ調査によると、台湾に来たアジア花嫁には人数制限枠を設けるべきと思う人が6割もいる。近年激増したアジア花嫁現象を懸念して、台湾の将来を憂える人は半数以上である。さらに、同調査によるとアジア花嫁を台湾人と同じように取り扱うべきではないと思う人が2割もいるという。

実際に筆者の親戚の中にも、「四肢が健全な人間だし、ちゃんと仕事を持っているなら、なぜアジア花嫁と結婚したのか」とアジア花嫁の夫に問いかける人が何人もいた。極端な場合にはアジア花嫁の夫は全て離婚経験者や知的障害者、体の不自由な者だと勝手に判断してしまう台湾人もいる。つまり、地元の台湾人女性とは結婚できないから、仕方なく開発途上国のアジア女性と結婚したというイメージが根強く定着している。

本論文で取り上げた7人のアジア花嫁のうちで、ベトナム籍 CH、C、カンボジア籍 K は台湾人に「あなたの夫はいくらかかって、あなたを買ってきたか」という質問を問いかれたことがある。中国籍 WA とインドネシア籍 G に対して、「あなたの夫はいくらの『結納金』を払ったか」という婉曲な質問があった。ベトナム籍 CH と C と『季刊ベトナム好姉

妹』の編集者であるAによると、アジア花嫁はだれでも台湾人に「あなたの夫はいくらかかって、あなたを買ってきたか」と問いかけられたことがあるという。

自身の経験により、高雄市ベトナム同郷会の会長Cを始めとする幹部たちはよく公の場で、「外国籍配偶者に対する台湾社会の偏見の多くはマスメディアの否定的な報道から来たものである。外国籍配偶者に対する否定的な報道の減少を願っている」と呼び掛けている。幹部のCによると、言葉の学習、生活習慣や文化の違いによる適応などは個人の努力次第によって克服することができる。しかし、アジア花嫁に対する偏っているマスメディアの報道や周囲の台湾人の偏見は、個人の力では解決できない。このような偏見はアジア花嫁本人だけではなく、「新台湾の子」にも影響している。この現状を改善するためには、アジア花嫁に対するマスメディアの報道の姿勢を修正すべきである。アジア花嫁に対する過度の報道を避けるべきである。

以上のように、ホスト社会ではアジア花嫁と「新台湾の子」の受け入れにおいて、多文化主義が欠如している。アジア花嫁に対する一般民衆の固定観念を改善するためには、台湾人に多文化的価値観を養うことが必要である。アジア花嫁に対する偏見は一般民衆の狭い世界観によるものである。多くの台湾人は自文化中心主義で、自分たちの狭い世界観を自覚していない。そのため、まず、一般民衆の自覚を喚起すべきである[何青蓉 2003a]。一般の台湾人は、アジア花嫁に対する従来の考えがマスメディアの報道に影響されたかどうかを自省すべきである。それだけではなく、文化の差異への理解も必要である。たとえば、新聞記事では多くのアジア花嫁の母国への送金問題を批判している。

しかし、フィリピンの伝統文化では結婚後、実家への送金行為は評価されている。台湾の社会風習では、結婚した女性は夫の家の人間になり、実家への送金行為は批判されている。文化の違いによる誤解はこのように生まれた[劉美芳 2001]。積極的に相互の文化的差異を理解し尊重すべきである。そのため、台湾人とアジア花嫁は相互の文化と立場から、物事を見て判断すべきである[何青蓉 2003a]。つまり、台湾民衆はアジア花嫁の文化の視点から、彼女たちを受け入れるべきである。たとえば、もし自分が外国人と結婚し、外国に移住し、不公平な待遇を受けると、どう思うかという仮想をすれば、アジア花嫁に対する先入観は多少緩和する。相手のことを尊重すれば、「あなたの夫はいくらかかってあなたを買ってきたか」という質問もしないと思う。異文化への理解と尊重を実践すると同時に、台湾民衆の世界観も自然と広がっていく[何青蓉 2003a : 40]。

実は台湾人はアジア花嫁に対する偏見を反省するだけではなく、台湾社会は多くのアジア花嫁に感謝すべきと考える。台湾社会に存在している高齢の親の介護問題、また農村、漁村などの地域の深刻な結婚難の問題はアジア花嫁たちの存在により解決できた。この現状をよく考えて、ホスト社会で懸命に生きているアジア花嫁に対してもっと尊重すべきである。

4. 台湾人夫と家族に対する提言

結婚をきっかけとして、台湾に移住したアジア花嫁にとって、台湾人家族の支援と理解が最も重要である。本論文で取り上げた7人のアジア花嫁の中で、タイ籍 M とベトナム籍 HA は、移住労働経験者としての経験を持ち、結婚前にすでに台湾社会にある程度馴染んでネットワークも築いていた。この二人以外、ベトナム籍 C をはじめとする5人のアジア花嫁は結婚当初、ホスト社会では台湾人家族以外のネットワークに関して何も持っていなかった。そして、本論文で取り上げたアジア花嫁および生活適応クラスの調査によると、台湾人家族との関係は彼女たちの台湾生活に最も大きな影響をもたらすという。台湾人家族の中で、国際結婚の当事者である夫の支援が最も重要である。本論文で取り上げた7人のアジア花嫁の中で、インドネシア籍 G は結婚当初から夫との信頼関係があり、結婚生活が円満である。カンボジア籍 K とベトナム籍 C は、結婚当初は夫婦関係が良くなかったが、夫を味方につけることにより、結婚生活が順調な方向に向ったと言える。

国際結婚では、もし台湾人夫が最初に予想できる揉め事を避けると、結婚生活は相対的に円満な方向に向かっていく。嫁姑問題を避けるために、夫が核家族か2世代住宅の生活スタイルを選択すれば、アジア花嫁は早めに現地の生活に馴染みやすい。また、多くのアジア花嫁は早期妊娠で生活適応に支障を来した。本論文で取り上げたベトナム籍 C と CH は早期妊娠で多大なストレスと苦労を経験した。そのため、生活に馴染んだ後で妊娠する計画が望ましい。なによりも、アジア花嫁に対する尊重が最も望まれている。アジア花嫁と結婚した台湾人男性は一般的に学歴が高くないし、自己主張が強い台湾人女性を敬遠し、古き良き女性を求めて、経済発展が台湾より遅れている東南アジア出身の女性と結婚したケースが多い。このような男性は男性優位の考えを持ち、自然にアジア花嫁に対する配慮が欠如する言動を発している。そのため、従来アジア花嫁に対して、中国語の学習を押し付けることだけではなく、台湾人男性も妻の言葉を学習すべきであるという研究者の意見

が多い[鐘重發 2003、陳亞甄 2006、陳恕烈 2007]。

実際、台湾近隣の国の韓国でも、2000 年以降、多くの韓国人男性とベトナムを始めとする開発途上国出身の女性との国際結婚が急増してきた[安貞美 2010]。多くのベトナム人女性に韓国人夫の暴力や文化の不適應などの社会問題が起きている。韓国の出入国管理事務所は「結婚移民者問題は、我が社会全体の問題になりつつある。従って、国際結婚に対する正しい認識を提供して国際結婚の副作用を最小化して、より望ましい多文化家庭が作れるように、2010 年 10 月 6 日から『国際結婚案内プログラム』¹³⁴を実施する」と発表した。2011 年 3 月 7 日から「国際結婚案内プログラム」履修が義務化になり、法務省大臣が告示した特定国家¹³⁵の国民と国際結婚を準備する内国人が「国際結婚案内プログラム」を履修しないと、結婚同居査証発給申請手続きが進められなくなった。プログラムの内容は国際結婚に関連する現地の国家制度や文化行儀と結婚査証発給手続き及び審査基準等の政府政策紹介などである¹³⁶。台湾政府もアジア花嫁と結婚する台湾人男性を対象にする「国際結婚案内プログラム」を開設すべきである。

次は台湾人家族への提言である。第 4 章で取り上げたベトナム籍花嫁の演劇について述べたように、多くの台湾人家族はアジア花嫁を「買ってきた花嫁」と見做している。カンボジア籍 K とベトナム籍 C と CH、この三人とも、大家族の使用人という待遇を受けたことがある。カンボジア籍 K の「私は家事労働者として台湾に来たのではなく、妻として台湾に来たのである」という発言があり、台湾人家族は家族の一員としてアジア花嫁を認めるべきである。そして、アジア花嫁に対する理解が望まれている。台湾の生活習慣に従うことは当然なことだが、台湾生活にはまだ慣れていないアジア花嫁に対する台湾人家族の配慮は非常に重要である。

5. アジア花嫁本人に対する提言

アジア花嫁本人は台湾に来る前に、事前に台湾文化や習慣と中国語の学習をしておく、

¹³⁴韓国法務部外国人のための電子政府 (Hi Korea) 2010 年度国際結婚案内プログラム
http://multiculture.dibrary.net/html_contents/htmls/2010_ja_JA/2010m_mp000015.html
(2013.11.24) 参照

¹³⁵対象国は中国、ベトナム、フィリピン、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、タイである。

¹³⁶韓国法務部外国人のための電子政府
http://www.hikorea.go.kr/pt/InfoDetailR_ja.pt?categoryId=21&parentId=840&catSeq=&showMenuId=815 (2013.11.24) 参照

早めに台湾生活に馴染むと考えられる。一般的に、アジア花嫁と国際結婚をしようとする台湾人家族が華僑を望んでいるのも、こうした背景が存在しているからである。つまり、文化や風習、言葉の類似的さを求めている。本論文のベトナム籍 HA は台湾の文化と生活習慣に疎かったため、結婚後「台湾では妻の収入をすべて夫に捧げるべきだ」という夫のうそに騙されていた。台湾語が流暢なインドネシア籍 G は華僑で、言葉の壁もなく中華文化にも馴染みを持っていたので、他の 6 人のアジア花嫁と比較すると、彼女は最も早く台湾生活に適応した一人である。そして、結婚する前に、インドネシア籍 G のように事前に夫の台湾生活ぶりを確認することが、結婚の破綻を防ぐ一つの方法である。中国籍 WA は結婚してから初めて台湾に来た。彼女が予想した高雄生活と実際の状況は大きく違い、このギャップが最初夫婦喧嘩の原因になった。また、ベトナム籍 HA は結婚して初めて夫の賃貸マンションの一室がまるでゴミ屋敷のようだと知り落胆した。この実情を最初から知っていたら、彼女は夫と結婚しないと言っていた。

ベトナム籍 CH をはじめとする多くのアジア花嫁は、ホスト社会で築いたネットワークの活用により、様々な困難を克服してきた。そして、ホスト社会でアジア花嫁と地元社会の双方ともに、貢献できるキーパーソンになった小吃店経営のベトナム籍 S と果物屋店主の妻であるカンボジア籍 Y の事例から、アジア花嫁の生活適応において、ネットワークがいかに重要な役割を果たしていることが明らかになった。さらに、CH の演劇でも、同胞同士の助け合いがホスト社会に適応していくために、きわめて重要だと強調している。

そのため、台湾社会に来たアジア花嫁は、積極的にホスト社会で、同胞のネットワークと台湾人ネットワークの双方を築くべきだと考える。アジア花嫁は積極的に政府が主催する新移民のイベントと生活適応クラスに参加すべきである。アジア花嫁のイベント参加に関して、台湾人家族の協力的な姿勢が求められている。一部の台湾人家族は、アジア花嫁の交遊を心配し外出にさせない。政府が主催するイベントに参加すれば、アジア花嫁の行動を心配する台湾人家族も安心できる。台湾人家族も彼女たちの生活適応のために、積極的にアジア花嫁を新移民イベントに連れていくべきである。日頃の近所付き合いを通して、地元の台湾人と台湾社会に対する理解を深めることができる。さらに、子供の学校行事を積極的に参加することである。たとえば、ベトナム籍 C、CH とインドネシア籍 G は積極的に子供の学校の多文化イベントに参加し、台湾の生徒に母国の文化を伝えることができた。学校のイベントを通して台湾生徒の両親との交流ができた。

言語能力は異文化に馴染むための第一歩というだけではなく、ホスト社会で働く仕事にも大きく影響している。そもそも、夫の経済力が十分であれば、インドネシア籍 G やベトナム籍 C のように、専業主婦でいられるため就職する必要がない。ただし、アジア花嫁は経済的地位が低い家庭にいる事例がやはり多数を占め、さらに、結婚生活が破綻した場合には、アジア花嫁の就職問題が一層重要になる。ベトナム籍 HA とタイ籍 M のように、中国語の読み書き能力が不十分であるため、ホスト社会に移住して以降単純労働の職にしか就けない女性が多い。これに対して、ベトナム籍 CH は台湾人並みの中国語能力を持ち、通訳と翻訳の仕事に就くことができ、移住労働者を仲介するベトナム大手会社の台湾支店の責任者にまで出世した。中国語の読み書き能力の上昇は単純労働から脱出する唯一の方法であるために、アジア花嫁は中国語の学習を継続すべきである。

そもそも、アジア花嫁は台湾社会に移住したことを決めたからには、中国語の読みが重要である。しかし、多くのアジア花嫁は、日常生活の会話ができると中国語の学習を中断してしまう。子供の学業指導もできない、自力で市役所や銀行に手続をすることも困難である。そのため、中国語の読み書き能力の上昇を目指すべきである。中国語の学習に関して、多くのアジア花嫁は育児や家事で忙しく、夜間学校に通う時間がない。実際、夜間学校に限らず、他の方法を工夫すれば中国語の学習ができる。インターネットを利用し、中国語を無料で学習する方法もある。多くのアジア花嫁はパソコンに疎いから、インターネットの利用に関して台湾人家族の協力が必要である。つまり、単なるアジア花嫁本人の学習意欲の向上だけではなく、周りにいる台湾人家族の積極的な支援が非常に重要である。

第 3 節 総括と今後の研究課題

本論文の目的は、アジア花嫁の生活適応の事例の分析を通して彼女らがホスト社会からしばしば偏見を受けてきた単なる受動的な弱者ではなく、生存戦略を工夫する能動的な行為者であると示すことである。そして、7 人のアジア花嫁のライフヒストリーから、彼女らが単なる夫の DV、台湾人家族の差別待遇に耐え、泣き寝入りした女性たちではなく、ホスト社会で生き残るため主体的にそれぞれの生存戦略を工夫し、さまざまな困難を乗り越え懸命に生きようとしていることを明らかにした。質的調査であるアジア花嫁のライフヒストリーだけでなく、量的調査も併用し、高雄市在住のベトナム籍花嫁 45 人の台湾生活調

査アンケートを実施した。しかし、ライフヒストリーの分析を重視して研究を進めたため、本論文ではこのアンケート調査の結果を十分に生かしていない。そのため、今後は量的調査の成果を取り入れて、質的調査の限界を補い、より深くアジア花嫁の生活適応の実態に迫っていきたい。

先行研究では母国への送金問題がよく取り上げられている[顔錦珠 2001、陳李愛月 2002、吳美菁 2004]。実際、筆者と接触した多くのアジア花嫁は、両親が活着している場合で母国の家族への送金を継続している。両親の死後、母国との繋がりが段々希薄になってくる。インドネシア籍 G とタイ籍 M は、両親が死んで以降、母国にいる家族との連絡が次第に減ってきた。他の 5 人のアジア花嫁の家族は彼女たちの台湾での生活が裕福ではないことを知っているので送金を要求していない。つまり、本論文で取り上げたアジア花嫁には母国への送金問題に関して、大きな揉め事が起きていない。アジア花嫁の生活適応の全貌を明らかにするためには、今後より多くのアジア花嫁の事例を取りあげ、この問題を深く掘り下げたい。さらに、アジア花嫁と母国との繋がりに関して、深く研究している先行研究は少ない。ベトナム籍 HA が息子をベトナムにいる両親に預けるケース以外、本論文で取り上げたアジア花嫁は母国にいる家族との連絡が頻繁ではない。母国への送金や育児支援のほかに、エスニック・ビジネスなど母国との繋がりに関する問題の解明は、今後の研究課題の新しい方向だと考える。

台湾社会全体がアジア花嫁を受容できる多文化社会に向かって変わっていくために、アジア花嫁の生活適応を中心とする研究は極めて重要であり、今後も本論文の研究成果を踏まえて、アジア花嫁と台湾社会との共生に貢献できるように研究を深めて行きたい。

参考文献

[日本語文献]

安里和晃 2008、「介護者としての外国人労働者と結婚移民」、『異文化コミュニケーション研究』20：43-77

安貞美 2010、「メディアにおける移住女性の表象——韓国・フィリピンを中心に」
千葉大学博士論文

伊藤るり・足立真理子編著 2008、『ジェンダー研究のフロンティア第2巻：国際移動と連鎖するジェンダー＞再生産のグローバル化』、株式会社作品社

今井昭夫・岩井美佐紀編 2012、『現代ベトナムを知るための60章（第2版）』明石書店

岩井美佐紀 2012、「コラム5 国際結婚——グローバル家族」、今井昭夫・岩井美佐紀編 2012：186-188

石川義孝 2007、「現代日本における性比不均衡と国際結婚」、紀平英作編 2007：127-145

飯田美郷 2009、「台湾における外国籍配偶者の言語使用意識と母語継承意識——嘉義県民雄郷居住のベトナム出身の女性を中心とした事例研究」、東海大学修士論文

伊藤潔 1993、『台湾——四百年の歴史と展望』、中公新書

ウシンイン 2010、「台湾における結婚移民女性に関する動向と支援策」、東京大学大学院教育研究科紀要 50：23-33

落合恵美子 2007、「グローバル化する家族——台湾の外国人家事労働者」、紀平英作編 2007：93-126

蔭山晶平編 1988、『アジアから来る花嫁たち——村の国際結婚』、南船北馬舎

金戸幸子 2008、「現代台湾における多文化社会の展開と＜新移民＞問題」、永野武 2008：247-293

笠原政治・植野弘子 1995、『アジア読本 台湾』、河出書房

笠間千浪 1996、「滞日外国人女性と＜ジェンダー・バイアス＞」、宮島喬・梶田孝道編 1996：165-186

河原崎やす子 1999、「アジア女性メールオーダー・ブライド論考——ジェンダー、エスニシティ、他者性」、『女性学』7：153-174.

- 紀平英作編 2007、『グローバル化時代の人文学 対話と寛容の知を求めて（下）：共生への問い』、京都大学学術出版会
- 邱淑雯 2003、「移民女性における主体性の構築——川崎市在住フィリピン人妻の社会参加」、『応用社会学研究』45：81 - 96
- 桑山紀彦、1995、『国際結婚とストレス——アジアからの花嫁と変容する日本の家族』、明石書店
- 桑山紀彦編著 1997、『ジェンダーと多文化——マイノリティを生きるものたち』、明石書店
- 桑山紀彦 1997、「十年目の節目を迎えた農村花嫁たち」、桑山紀彦編著 1997：201-230
- 厚生労働省大臣官房統計情報部編 2006、『平成 18 年度 婚姻に関する統計 人口動態統計特殊報告』、財団法人厚生統計協会
- 国連開発計画 1996、『ジェンダーと人間開発——人間開発報告書 1995』、古今書院
- 賽漢卓娜 2011、『国際移動時代の国際結婚——日本の農村に嫁いだ中国人女性』、勁草書房
- 佐竹真明・メアリー・アンジェリン・ダアノイ 2006、『フィリピン・日本国際結婚——移住と多文化共生』、めこん
- 佐藤郁哉 2002、『フィールドワークの技法』、新曜社
- 佐藤隆夫 1989、『農村と国際結婚』、日本評論社
- 澤田佳代 2008、「超少子化社会・台湾の＜男性化＞する出生力とジェンダー化された再生産連鎖——国際結婚と人口政策をめぐって」、伊藤るり・足立真理子編著 2008：68-92
- 鈴木正崇編 2007、『東アジアの近代と日本』、慶応義塾大学東アジア研究所
- 永井浩 1994、『カンボジアの苦悩』、勁草書房
- 永野武編著 2008、『日中社会学叢書グローバリゼーションと東アジア社会の新構想 2：チャイニーズネスとトランスナショナル・アイデンティティ』、明石書店
- 白水繁彦 1996、『エスニック・メディア』、明石書店
- 安富成良・スタウト梅津和子 2005、『アメリカに渡った戦争花嫁：日米国際結婚パイオニアの記録』、明石書店
- 謝億榮 2006、「＜台中結婚＞と台湾アイデンティティ——中国人配偶者が持ち込む

- 中華アイデンティティとの確執」、北九州市立大学博士論文
- 宿谷京子 1988、『アジアから来た花嫁——迎える側の論理』、明石書店
- 菅井和広 2006、「自治体が先導した昭和の国際結婚——山形県朝日町」、『月刊自治研』565：61-69
- 竹下修子 2000、『国際結婚の社会学』、学文社
- 2004、『国際結婚の諸相』、学文社
- 田嶋淳子 1998、『世界都市・東京のアジア系移住者』、学文社
- 鄭暎恵 2007、「越境する家族と文化——東アジアにおける国際結婚と日本社会の変容」、鈴木正崇編 2007：283-332
- 豊田秀樹 1998、『調査法講義』、朝倉書店
- 日暮高則 1989、『くむら>とくおれ>の国際結婚学』、情報企画
- 古田元夫 2009、『ドイモイの誕生——ベトナムにおける改革路線の形成過程』、青木書店
- 宮島喬・梶田孝道編 1996、『外国人労働者から市民へ——地域社会の視点と課題から』、有斐閣
- 森岡清美・塩原勉・本間康平編 1993、『新社会学辞典』、有斐閣
- マルセル・モース（有地享訳）1962、『贈与論』、勁草書房
- 横田祥子 2006、「<新台湾之子>の発達障害問題にみる<中国人性>継承への懸念をめぐって」、『民俗文化研究』7：127 - 139
- 2008a、「グローバル・ハイパガミー」、『異文化コミュニケーション研究』20：70 - 110
- 2008b、「台湾・中国結婚移住者をめぐる社会人類学的研究——台中県東勢鎮の事例から」、『2007年度 財団法人交流協会日台交流センター 日台研究支援事業報告書』、財団法人交流協会日台交流センター
- 柳蓮淑 2006、「外国人妻の主体性構築に関する一考察——山形県在住の韓国人妻の事例から」、『桜美林論集』33：119-133
- 林政霆 2009、「台湾騎楼の<辺街空間>における領域形成——環境行動の分析から——」、九州大学修士論文
- 若林正丈 2001、『台湾——変容し躊躇するアイデンティティ』、ちくま新書

渡辺弘之 1998、「ベトナムにおける国際結婚の動向（1）、『研究所年報（明治学院大学社会学部附属研究所）』 28：61-72

〔中国語文献〕（筆画の順で並べる）

小宮有紀子 2007、「台灣婚姻移民之語言資源：階級、性別與種族差異」、臺灣大學社會學研究所碩士論文

中國時報 1984、「嚴格審查進口新娘」3.26.5 版

王志弘 2006、「移/置認同與空間政治：桃園火車站週邊消費族裔地景研究」、『臺灣社會研究季刊』 61：149-203

王君琳 2005、「性別與國族——從女性主義觀點解讀新移民女性現象」、夏曉鵬編 2005：192-205

王宏仁 2001、「社會階層化下的婚姻移民與國內勞動市場——以越南新娘為例」、『台灣社會學研究季刊』 41：99-127

王宏仁・張書銘 2003、「商品化的台越跨國婚姻市場」、『台灣社會學』 6：177-221

王秀喜 2004、「高雄市旗津區〈越南與印尼〉外籍配偶生活適應與人際關係之研究」、臺南大學台灣文化研究所碩士論文

王春益 1998、「兩岸人民通婚之調查研究」、淡江大學中國大陸研究所碩士論文

尤思貽 2005、「台灣地區女性越南籍配偶就業問題之研究分析」、中國文化大學勞動學研究所碩士論文

田晶瑩 2004、「〈是誰在娶越南新娘？〉——男性氣魄與跨國婚姻」、中興大學行銷學系碩士論文

石承恩 2009、「東南亞籍新移民女性國家認同的形塑與建構——以台中市立五權國中補校為例」、彰化師範大學政治學研究所碩士論文

江亮演・陳燕禎・黃稚純 2004、「大陸與外籍配偶生活調適之探討」、『社區發展』內政部社區發展雜誌社 105：66-89

李沂芝 2007、「越南籍與中國大陸籍女性配偶採取避孕之相關因素探討」、成功大學護理學系碩士論文

李玫臻 2002、「外籍新娘的社會網絡與生活適應——民雄鄉的研究」、中正大學社會福利系碩士論文

- 李明堂・黃玉幸 2008、「台灣十年來東南亞外籍配偶研究趨勢分析——以全國碩博士論文為例」、2008 年台灣東南亞區域研究年度論文研討會
- 李美賢 2006、「越南〈好女性〉的文化邊界與〈越南新娘〉：〈尊嚴〉vs.〈靈魂之債〉」、『台灣東南亞學刊』3-1:37-62
- 李書華 2006、「論東南亞外籍新娘之輔導政策」、逢甲大學公共政策所碩士碩士論文
- 李瑞金・李萍 2002、「外籍新娘社會適應之研究——以越南新娘為例（臺北市政府社會局九十年年度研究報告）」、中華民國基督教女青年會協會
- 呂美紅 2000、「外籍新娘生活適應與婚姻滿意及其相關因素之研究——以台灣地區東南亞新娘為例」、中國文化大學生活應用科學研究所碩士論文
- 沈倖如 2002、『天堂之梯？——台越跨國商品化婚姻中的權力與抵抗』、清華大學社會學研究所碩士論文
- 沈倖如・王宏仁 2003、「〈融入〉或〈逃離〉？——越南新娘的在地反抗策略」、蕭新煌主編 2003:249-284
- 吳美菁 2004、「東南亞外籍配偶在台的生活適應與人際關係之研究——以南投縣為例」、南華大學公共行政與政策研究所碩士論文
- 吳美雲(釋自淳)2001、「識字教育作為一個〈賦權〉運動：以〈外籍新娘生活適應輔導班〉為例探討、世新大學社會發展研究所碩士論文
- 余政憲 2003、「外籍與大陸配偶照顧輔導措施專案報告」、內政部
- 汪素娥 2005、「外籍配偶成人基本教育教材研究——以多元文化教育觀點」、臺灣師範大學社會教育學系碩士論文
- 邱淑雯 2000、「在臺東南亞外籍新娘的識字/生活教育——同化?還是多元文化?」、『社會教育學刊』29:197-219
- 2005、『性別與移動 日本與台灣的亞州新娘』、巨流
- 2007、「〈移民區病理 vs. 網絡集結點〉的衝突與克服——以在臺越南女性的店家為例」、『教育與社會研究』13:95-120
- 邱雅青 2005、「南洋姊妹已站起來了」、『蘋果日報』「論壇版」8.1
- 何青蓉 2003a、「從多元與差異到相互的理解與認同——一項本地婦女與跨國婚姻婦女相互學習課程的初步省思」、『兩性平等教育季刊』24:106-114

- 2003b、「跨國婚姻移民教育初探——從一些思考陷阱談起」、《成人教育》75：2-10
- 林妤鎂 2006、「將識字教育視為一種賦權——以宜蘭縣東南亞新移民女性生活適應為例」、佛光人文社會學院社會教育學研究所碩士論文
- 林秀美 2001、「外籍新娘先生多有外表或經濟上缺憾百分之 64 子女有發育遲緩現象」、《民生報》、10.30
- 林若雱 1995、「南洋新娘千里姻緣」、《中國時報》17 版、11.20
- 林婉如 2005、「新移民女性就業歷程之研究」、臺北大學社會工作學系碩士論文
- 林照真 2003、「孤立的外籍媳婦勇敢的心」《中國時報》「社會綜合版 8 版」2.6
- 林璣萍 2003、「台灣新興的弱勢學生——外籍新娘子女學校適應現況之研究」、台東大學教育研究所碩士論文
- 姚舒淳 2006、「外籍配偶離婚後在台之生活適應」、輔仁大學兒童與家庭學系碩士論文
- 洪正庠 2008、「一對越南姊妹的故事——外籍配偶之生命敘事研究」、東華大學族群關係與文化研究所碩士論文
- 洪珮瑜 2011、「族群產業與網絡——以印尼商店為例」、中央大學客家社會文化研究所碩士論文
- 郭銘森 2004、「異國婚姻對我國社會與國家認同衝擊之探討：以雲林縣台西鄉為例」中正大學政治學研究所碩士論文
- 范明秋 2008、「潑到國外的水——國際婚姻中越南配偶與娘家間的跨國連結」、臺灣大學社會學研究所碩士論文
- 范婕滢 2006「我不是來生孩子的——外籍配偶生殖化形象之探討」、世新大學社會發展研究所碩士論文
- 夏曉鵬 1997、「女性身體的貿易——台灣/印尼新娘貿易的階段、族群關係與性別分析」、《東南亞區域研究通訊》2：72-83
- 2002、《流離尋岸——資本國際化下的「外籍新娘」現象》、台灣社會研究
- 2003、「東南亞籍及大陸女性配偶者議題」、《大地地理》188：72-74
- 2005、《不要叫我外籍新娘》、左岸文化
- 夏曉鵬·釋自淳 2003、「識字與女性培力——以〈外籍新娘識字班〉為例」、《台灣社會教育社會學研究》3-2：41-84

高雄市市議會 2009、『高雄市議會公報』 56：5

唐文慧・王宏仁 2011、「從〈夫枷〉到〈國枷〉——結構交織困境下的受暴越南婚移婦女」、『台灣社會學』 21：157-197

張雅祝 2005、「東南亞女性外籍配偶在台灣的生活空間研究——以基隆市外籍配偶生活適應輔導班成員為例」、臺灣師範大學地理學系碩士論文

張超盛 2005、「高雄市外籍與大陸配偶家庭資源建構之研究」、高雄市政府研究發展委員會

陳小紅 1997、「大陸地區配來臺定居居留、定居問題調查研究——兼論訂定其居住數額」、行政院大陸委員會專案研究報告

——1999、「大陸配偶來台生活狀況案例訪視」、行政院大陸委員會專案研究報告

——2000、「婚配移民——臺灣海峽兩岸聯姻之研究」、『亞洲研究』 34：35-68

陳李愛月 2002、「高雄市外籍新娘婚姻與家庭生活之研究」、中山大學中山學術研究所碩士論文

陳亞甄 2006、「外籍配偶先生的婚姻觀與婚姻生活」、慈濟大學社會工作學系碩士論文

陳姿秀 2006、「外籍配偶子女語言發展和學業成就之相關研究」、明道管理學院教學藝術研究所碩士論文

陳庭芸 2002、「澎湖地區國際婚姻調適之研究——以印尼與越南新娘為例之比較」、臺灣師範大學地理研究所碩士論文

陳美惠 2002、「彰化縣東南亞外籍新娘教養子女經驗之研究」、嘉義大學家庭教育研究所碩士論文

陳恕烈 2007、「外籍配偶生活適應與婚姻滿意之調查研究」、臺北市立教育大學課程與教學研究所碩士論文

陳淑芬 2003、「〈大陸新娘〉的擇偶、受虐與求助歷程——兼論服務提供者對〈大陸新娘〉的假設及其對服務提供的影響」、『社區發展季刊』 101：182-199

陳雪慧 2005、「我們會是一家人?!」、夏曉鵬編 2005：170-191

陳鳳凰 2005、「〈湄公河畔台灣囝仔〉背後的傲慢」、『蘋果日報』「論壇版」 7.19

陳湘淇 2003、「國小一年級外籍配偶子女在智力、語文能力及學業成就表現之研究」、臺南大學幼兒教育學系碩士論文

陳嘉誠 2001、「臺灣地區外籍新娘幸福感之探討」、高雄醫學大學醫學研究所碩士論文

- 陳蓓瑤 2007、「台南市東南亞外籍配偶生活調適之研究」、高雄師範大學地理學系碩士論文
- 陳曉琴 2008、「馬祖地區國民小學外籍配偶子女學習適應與學業成就之研究」、銘傳大學教育研究所碩士論文
- 陳靜容 2006、「大台北地區外籍配偶社會福利之研究——社會排除理論觀點的分析」、東吳大學社會學碩士論文
- 陳黛羚 2011、「新移民離婚女性單親處境之探究」、慈濟大學社會工作學系碩士論文
- 許雅惠 2004、「台灣媳婦越南情——一個質性角度的觀察」、『社區發展』內政部社區發展雜誌社 105：177-196
- 2009、「魚與熊掌——新移民婦女的社會資本分析」、『社會政策與社工學刊』13-2：1-54
- 莊玉秀 2003、「東南亞籍跨國婚姻婦女在台文化適應與其參與教育活動關係之研究」高雄師範大學成人教育研究所碩士論文
- 溫雨蓉 2006、「跨國婚姻中臺灣籍男性之婚姻品質」、慈濟大學工作學研究所碩士論文
- 黃森泉・張雯雁 2003、「外籍新娘婚姻適應與子女教養問題之探討」『社會科教育研究』281：135-169
- 黃宣範 1995、『語言、社會與族群意識——台灣語言社會學的研究』、文鶴
- 黃惠麟 2011、「劃界?跨界?——桃園縣火車站周邊印尼飲食店之探討」、暨南國際大學東南亞研究所碩士論文
- 葉孟宗 2004、「跨國婚姻家庭之外籍配偶其政治社會化與國家認同之研究」、國立中興大學國際政治研究所碩士論文
- 葉佩芸 2007、「外籍配偶國家認同之研究」、臺北教育大學教育政策與管理研究所碩士論文
- 葉淑慧 2004、「東南亞女性外籍配偶生活適應與補校學習——以竹北市中正國小補校為例」、中華大學經營管理研究所碩士論文
- 楊瑪利 2004、「台灣變貌——下一代衝擊 新台灣之子」、『天下雜誌』271：100-102
- 楊錦登 1999、「生活適應之探討」、『國教輔導』39-2：45-55
- 蔡雅玉 2000、「臺越跨國婚姻現象初探」、成功大學政治經濟研究所碩士論文
- 劉美芳 2001、「跨國婚姻中菲籍女性的生命述說」、高雄醫學大學護理學研究所碩士論

文

劉千嘉 2003、「大陸新娘的台灣經驗——一個社會學的觀點」、中山大學中山學術研究所碩士論文

廖雅婷 2003、「以多元文化觀進行外籍新娘識字方案之行動研究——以嘉義縣外籍新娘識字專班為例」、中正大學成人及繼續教育研究所碩士論文

鄭文惠 2006、「影響女性外籍配偶就業決定之因素探討——以高雄縣越南籍外籍配偶為例」、高雄應用科技大學工業工程與管理系碩士論文

鄭雅雯 2000、「南洋過臺灣——東南亞外籍新娘在臺婚姻與生活探究 以臺南市為例」、東華大學族群關係與文化研究所碩士論文

諾曼·古德曼 (Goodman, Norman) 2002、《婚姻與家庭》、(譯者：陽琪·陽琬) 桂冠出版社

趙可芳 2011、「東南亞離婚新住民女性之婚姻歷程與工作境況之研究」、暨南國際大學東南亞研究所碩士論文

蕭昭娟 2000、「國際遷移之調適研究——以彰化縣社頭鄉外籍新娘為例」、台灣師範大學地理研究所碩士論文

蕭新煌主編 2003、《台灣與東南亞——南向政策與越南新娘》、中研院亞太研究中心

薛承泰·林慧芬 2003、「臺灣家庭變遷——外籍新娘現象」、《國家政策論壇》冬季號：236-238

賴建達 2002、「國民小學實施外籍新娘識字教育之研究——以一所山區小學為例」、臺中師範學院國民教育研究所碩士論文

賴淑娟 2010、「漂洋過海來開店——越南女性賣家鄉小吃的開店經驗」、高雄師範大學性別教育研究所碩士論文

顏淑婷 2010、「新住民女性參與互助團體對家庭影響之研究——以高雄市旗津區印尼南洋姊妹支持聯誼會為例」、高雄師範大學成人教育研究所碩士論文

顏錦珠 2001、「東南亞外籍新娘在台生活經驗與適應歷程之研究」、嘉義大學家庭教育研究所碩士論文

鐘重發 2003、「台灣男性擇娶外籍配偶之生活經驗研究」、嘉義大學家庭教育研究所碩士論文

謝美玲 2012、「誰來用餐？——中壢地區越南飲食店消費選擇因素之探討」、暨南國際

大學東南亞研究所碩士論文

謝慶皇 2007、「外籍配偶子女學業成就及其相關因素探討」、臺南大學特殊教育學系碩士班碩士論文

龔宜君 2004、「跨國資本的性別政治——越南台商與在地女性的交換關係」、『台灣社會研究季刊』55：101-140

——2005、「仲介與規訓——〈越南新娘〉的誕生」、2005年東南亞區域研究年度研討會

龔宜君・張書銘 2011、「看見〈下六省〉——遷台越南農村女性的原鄉脈絡」、2011年台灣社會學年會

[インターネット文献]

内政部 2003、「内政部九十二年外籍與大陸配偶生活狀況調查報告」

<http://www.ris.gov.tw/ch4/0930617.html> (2008.10.9 参照)

内政部 2013、「民國 102 年第 14 週内政統計通報(我國 15 歲以上人口教育程度統計)」、

http://www.moi.gov.tw/stat/news_content.aspx?sn=7266&page=2 (2013.12.09 参照)

行政院經濟建設委員會編 2004、「現階段外籍與大陸配偶移入因應方案」、

<http://www.immigration.gov.tw/lp.asp?ctNode=31539&CtUnit=17110&BaseDSD=7&mp=1> (2013.12.9 参照)

行政院經濟建設委員會 2009、「台灣地區兩性婚姻趨勢分析」、

<http://www.cepd.gov.tw/m1.aspx?sNo=0011882> (2013.12.29 参照)

行政院主計處編 2003、『中華民國社會指標統計 民國 91 年』、中國統計學社

行政院主計處編 2009、『社會指標統計年報 SOCIAL INDICATORS 2009』、

<http://ebook.dgbas.gov.tw/ct.asp?xItem=33675&ctNode=5971&mp=103>
(2013.12.29 参照)

[英語文献]

Battistella, G. and A. Paganoni (eds.) 1996, *Asian Women in Migration*, Quezon City: Scalabrini Migration Center

Constable, Nicole (ed.) 2005a, *Cross-Border Marriages: Gender and Mobility*

- in Transnational Asia*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press
- Constable, Nicole 2005b, "A Tale of Two Marriages: International Matchmaking and Gendered Mobility" , in Constable 2005:166-186
- Del Rosario, Virginia O. 1994, *Lifting the Smoke Screen: Dynamics of Mail-Order Bride Migration* from the Philippines, The Hague Ph.D. Dissertation
- Fan, C. Cindy, and Youqin Huang 1998, "Waves of Rural Brides: Female Marriage Migration in China" , *Annals of the Association of American Geographers* 88: 227-251
- Mila Glodava and Richard Onizuka 1994, *Mail-Order Brides: Women for Sale*, Colorado: Alaken
- Hsia, Hsiao-Chuan 1997, *Selfing and Othering in the "Foreign Bride" Phenomenon: A Study of Class, Gender and Ethnicity in Transnational Marriage between Taiwan Men and Indonesian Women*, University of Florida, Ph.D. Dissertation
- Hung, Cam Thai 2005, "Clashing Dreams in the Vietnamese Diaspora: Highly Educated Overseas Brides and Low-Wage U.S. Husbands" , in Constable 2005: 145-165
- Ishii Yuka 1996, "Forward to a Better Life: The Situation of Asian Women Married to Japanese Men in Japan in the 1990s" , in G. Battistella and A. Paganoni (eds.) 1996: 147-164
- Jones, Gavin W. and Kamalini Ramdas (eds.) 2004, *(Un) tying the Knot: Ideal and Reality in Asian Marriage*, Singapore: Asia Research Institute, National University of Singapore
- Light, I. and Bhachu, P. (eds.) *Immigration and Entrepreneurship: Culture, Capital, and Ethnic Networks* , New Brunswick: Transaction Publishers
- Nakamatsu, T, 2003, "International Marriage through Introduction Agencies: Social and Legal Realities of 'Asian' Wives of Japanese Men" , in N. Piper and M. Roces 2003: 181-202
- Piper, N. and M. Roces (eds.) 2003, *Wife or Worker? Asian Women and Migration*,

- Lanham: Rowman and Littlefield
- Tsay Ching-lung 2004, "Marriage Migration of Women from China and Southeast Asia to Taiwan", in Gavin W. Jones and Kamalini Ramdas (eds.) 2004: 173-191
- Hong-Zen Wang and Hsin-Huang Michael Hsiao (eds.) 2009, *Cross-Border Marriages with Asian Characteristics*, Academia Sinica: Center for Asia-Pacific Area Studies
- Wang Hong-zen and Tien Ching-ying 2009, "Who Marries Vietnamese Bride? Masculinities and Cross-Border Marriages", in Hong-Zen Wang and Hsin-Huang Michael Hsiao (eds.) 2009: 13-37
- Xoan Nguyen and Xuyen Tran 2010, "Vietnamese-Taiwan Marriages", in Wen-Shan Yang and Melody Chia-Wen Lu (eds.) 2010: 157-178
- Yang Wen-Shan and Melody Chia-Wen Lu (eds.) 2010, *Asian Cross-Border Marriage Migration*, Amsterdam: Amsterdam University Press

協議書

協議書を作成した者（以下、甲と乙という）は、甲の借金返済と離婚事項を協議するために、本協議書を作成した。双方の合意による条項は下記の通りである。

第1条 甲乙双方は、乙が身分証明書を取得するまで、理由なく相手に迷惑をかけること。

第2条 今日から甲乙双方は家庭外の行為と金銭に関して、すべて独立である。すべて自己責任であり、甲乙双方とその家族とは関係させないこと。

第3条 甲は乙に対し、中華民国の国籍の申請に協力する。乙は甲が友人 A、B、C（仮名）に借りた 14 万 5 千円の債務を返済する。中華民国の国籍を取得するまで、乙は毎月の家賃、水道代、電気代などの支出を支払う。甲は月 3 千円の生活費を支払うこと。

第4条 14 万 5 千円の債務は 4 回に分割して、支払う。身分証明書の申請を提出すると、A に 4 万円を支払う。身分証明書の合格通知を取得すると、C に 1 万 5 千円を支払う。身分証明書を取得すると、B に 2 万 5 千円を支払う。離婚公正証書を取得すると、A に 6 万 5 千円を支払うこと。

第5条 条項に明記された金銭項目以外、甲は乙に対して金銭的要求をしないと保証すること。

第6条 乙が中華民国籍を取得すると、乙が台湾におけるすべての保険の受取人は無条件に乙の家族に変更すること。

第7条 もし甲が上記の条項を履行しない場合、乙が代納したすべての金銭を返済すること。

第8条 もし乙が上記の条項を履行しない場合、甲は中華民国籍の申請に協力する義務がないこと。